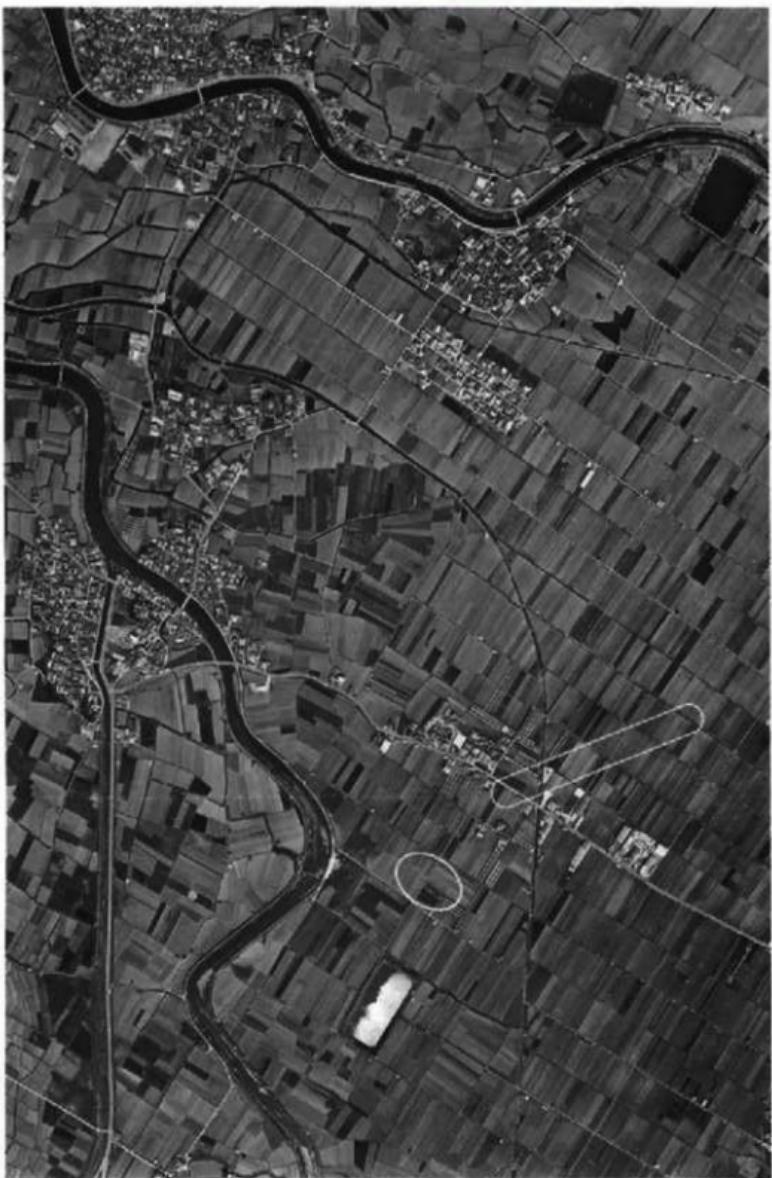


淡路・志知川沖田南遺跡

昭和62年3月

兵庫県教育委員会



遺跡の位置 (1 : 10,000)

○ 志知川冲田南遺跡 □ 雨流遺跡

例　　言

1. 本書は本州四国連絡橋公団による淡路縦貫道三原インター・エンジニアリング建設工事にかかる発掘調査の報告書である。
2. 兵庫県教育委員会は同公団から発掘調査、遺物整理及び報告書作成に要する事業の委託を受け実施した。
事業に要した費用は分布調査を除いて全て同公団が負担した。
3. 遺跡は三原郡西淡町志知川に所在するが、同一地名が町内に2ヶ所あるため小字を探り「志知川沖田南遺跡」とした。しかし、昭和58年度～昭和61年度まで実施した淡路縦貫道建設工事北進に伴う雨流遺跡の発掘調査で検出された水田跡は志知川沖田南遺跡のそれと連続していることが判明した。本来同一遺跡と思われるが関係者で種々検討した結果、あえて「志知川沖田南」遺跡名を使用した。
4. 調査は昭和53年度から昭和57年度、遺物整理は昭和59年度から昭和61年度まで実施した。
5. 土層断面の剥ぎ取りについては、奈良国立文化財研究所 秋山隆保氏に、現地で指導を受けながら実施した。その成果の一部は県立歴史博物館で保管・展示している。
6. 横原考古学研究所 石野博信氏、奈良国立文化財研究所 工藤善通氏、京都国立博物館 八賀晋氏（現三重大学）、神戸市立教育研究所 前田保夫氏には現地へ赴いて載き適切な指導と助言を得た。
7. 本遺跡はその成果の一部を『淡路・志知川沖田南遺跡—昭和55年度発掘調査報告—』『淡路・志知川沖田南遺跡Ⅱ—昭和56年度発掘調査概報—』に発表した。その後の検討の結果、概報の記載と異なる部分があるが、本書によって訂正したと諒解されたい。
8. 水田跡の面積の計測は高橋学氏に依頼して面積測定機（武藏工業K.K.製レジグラマT型1400）で小数点第4位まで算出し、第3位を四捨五入した。なお、水田1枚の面積は小畦畔で取り囲まれた内法で算出した。
9. 水田跡の平均標高は、1枚の水田を1m間隔で測りその平均値を表わしている。
10. 第8章の自然科学分析の中で、第2節、第4節及び第5節は筆者の誤解を得て『淡路・志知川沖田南遺跡Ⅱ—昭和56年度発掘調査概報—』で発表されたものを再掲した。また、第1節については兵庫県教育委員会に分析に伴う委託事業の実績報告書として提出された中間報告を掲載した。
11. 遺物の整理については、森内秀造、渡辺昇の指導の下に、和田早芳子・原香代美を中心となって行った。

12. 図版のうち遺物は、森昭氏の撮影によるもので、遺構は調査員が分担して撮影した。
13. 土器搜査に綱目を付したものは、縁及び縁状炭化物の付着を示す。
14. 繪図・付箇のうち、遺構実測は調査員・補助員が行ない、製図は和田、原、松下 勝が行った。
遺物のうち土器の実測は和田、原、友久伸子、松下が、製図については和田、原、松下が行い、木器の実測は和田、原、松下が、製図については和田、原が行った。
15. 本書の収集は和田の協力を得て、別府洋二、松下が行った。
16. 調査期間中、淡路考古学研究会、貴 益巳氏、西淡町、本四連絡橋公團淡工事事務所、中央建設株式会社、横崎建設株式会社には種々お世話をいた。記して感謝したい。

目 次

第1章 遺跡周辺の環境		
第1節 地理的環境	高橋 学	1
第2節 歴史的環境	吉誠雅仁	7
第2章 調査に至る経過及び調査組織	大村敬通	12
第3章 確認調査	吉誠	
第1節 調査の経過		15
第2節 調査の概要		17
第3節 小結		30
第4章 全面調査		
第1節 昭和54年度の調査	水口富夫	31
第2節 昭和55年度の調査	松下 勝・水口	37
第3節 昭和56年度の調査	松下	41
第4節 昭和57年度の調査	松下	46
第5章 遺構		
第1節 水田跡	松下	51
第2節 その他の遺構		61
(1)庵池状遺構	松下	61
(2)杭列	松下	63
(3)轄	松下	67
(4)しがらみ	松下	67
(5)堆積河道	水口	67
(6)水路1	水口	69
(7)水路2	別府洋二	70
第3節 足跡	別府	71
第6章 遺物		
第1節 土器	松下	75
その他の土器	水口	97
第2節 木器	水口	98

第7章 志知川沖田南遺跡の地形変化と水田開発	
——地形環境分析による——	
第1節 地形分析の視点	高橋 103
第2節 三原平野の地形面・地形帯分析	106
第3節 遺跡周辺の微地形分析	120
第4節 発掘地点における超微地形分析	124
第5節 水田の土地条件評価と水利復原	139
第8章 志知川沖田南遺跡の自然科学的分析の成果	153
第1節 志知川沖田南遺跡出土の甕棺内部及び甕棺包含土壤の全リン分析	
—中間報告—（昭和55年）	
第2節 志知川沖田南遺跡における古代水田跡の探索	鷹岡晶子 155 藤原宏志 159
第3節 志知川沖田南遺跡・水田遺構の花粉分析	松下まり子 165
第4節 渋路島・志知川沖田南遺跡の花粉分析学的研究	三好教夫・新井靖子 185
第5節 珪藻遺骸群集からみた三原平野における完新世後期の古環境の変遷	
望野 茂・間谷公範・宮本文子	193
第9章 まとめ	別府 205

挿図目次

第1図 淡路島切峰面図	63
(等高線50mごと500mの谷を粗積)		
.....	2	
第2図 地質図(横山卓雄他による) ...	2	
第3図 三原平野水系図	3	
第4図 三原平野等高線図	4	
第5図 条里型地割分布図	5	
第6図 三原平野洪水被害図	6	
第7図 周辺道路分布地図	9	
第8図 グリッド設定図	16	
第9図 収拾実測図	18	
第10図 土層断面図 (1)	20	
第11図 土層断面図 (2)	21	
第12図 土層断面図 (3)	23	
第13図 出土遺物実測図 (1)	25	
第14図 出土遺物実測図 (2)	26	
第15図 出土遺物実測図 (3)	28	
第16図 出土遺物実測図 (4)	29	
第17図 出土遺物実測図 (5)	30	
第18図 昭和54年度調査	31	
第19図 中世溝	33	
第20図 昭和54年度調査区土層断面図	35	
第21図 昭和55年度調査	37	
第22図 昭和56年度調査	41	
第23図 昭和57年度調査	46	
第24図 水田面積(上:上層 下:下層)	
.....	57	
第25図 上層水田(標高別)	59	
第26図 潟池状遺構出土(30、31、33)及び中央大畦畔出土(32、34)土器実測図		
第27図 第Ⅰ区土層断面図	64	
第28図 第Ⅰ区旧河道及び杭列実測図	65	
第29図 第Ⅱ区枝溝及びしがらみ実測図(上 部 下:下部)	68	
第30図 水路1断面図	70	
第31図 水路2断面図	70	
第32図 水田番号551における足跡の方向傾 度	71	
第33図 水田番号556における足跡の方向傾 度	72	
第34図 足跡(石膏)の最大幅と長さの相間 図(背区下層)	73	
第35図 旧河道出土土器実測図 (1)	84	
第36図 旧河道出土土器実測図 (2)	85	
第37図 旧河道出土土器実測図 (3)	86	
第38図 旧河道出土土器実測図 (4)	87	
第39図 旧河道出土土器実測図 (5)	88	
第40図 旧河道出土土器実測図 (6)	89	
第41図 旧河道出土土器実測図 (7)	90	
第42図 旧河道出土土器実測図 (8)	91	
第43図 旧河道出土土器実測図 (9)	92	
第44図 旧河道出土土器実測図 (10)	93	
第45図 旧河道出土土器実測図 (11)	94	
第46図 その他の出土土器実測図	95	
第47図 旧河道出土木器 (1)	99	
第48図 旧河道出土木器 (2)	100	
第49図 旧河道出土木器 (3)	101	
第50図 地形分類図(形態的特徴による成因 分類)	107	

第51図 三原平野地質断面図 A - A' 110	第58 n 図 ステージ IV ₁₄ 139
第52図 三原平野地質断面図 B - B' 110	第59図 中層水田超微地形分類図 142
第53 a 図 ステージ 0 (22,000年 B.P.以前) 112	第60 a 図 中層水田 I 超微地形図 143
第53 b 図 ステージ I (18,000年 B.P.頃) 113	第60 b 図 中層水田 II 超微地形図 144
第53 c 図 ステージ II (7,500年 B.P.頃) 114	第61図 中層水田水利系統図 145
第53 d 図 ステージ III (6,300年 B.P.頃) 115	第62図 上層水田超微地形分類図 146
第53 e 図 ステージ IV (2,600年 B.P.頃) 116	第63図 上層水田超微地形図 147
第54図 大阪湾及び播磨灘の海面変化曲線 (前田保夫 1980) 118	第64図 中層水田・上層水田間の堆積量 148
第55図 発達史的地形分類図 118	第65図 上層水田水利系統図 150
第56図 遺跡周辺の微地形図 (10cm等高線) 121	第66図 壱智包含土壤のサンプリング地点ならびに全リン測定値 157
第57図 志知川沖田南遺跡周辺の地形分類図 123	第67図 全リン含有量の分布図 157
第58 a 図 ステージ IV ₁ 125	第68図 ガラス・ビーズ法 159
第58 b 図 ステージ IV ₂ 127	第69図 沖田南遺跡 (Ⅲ-A北側壁) における土層断面図 160
第58 c 図 ステージ IV ₃ 128	第70図 沖田南遺跡 (Ⅲ-B・C境界東壁) における土層断面図 160
第58 d 図 ステージ IV ₄ 129	第71図 沖田南遺跡 (Ⅲ-E北側) における土層断面図 160
第58 e 図 ステージ IV ₅ 130	第72図 沖田南遺跡におけるイネ科植物生産量 (予備分析) 160
第58 f 図 ステージ IV ₆ 131	第73図 沖田南遺跡 (Ⅲ-B・C境界東壁) におけるイネ科植物生産量 161
第58 g 図 ステージ IV ₇ 132	第74図 沖田南遺跡 (Ⅲ-A北側壁) におけるイネ科植物生産量 162
第58 h 図 ステージ IV ₈ 133	第75図 沖田南遺跡 (Ⅲ-E北側) におけるイネ科植物生産量 163
第58 i 図 ステージ IV ₉ 134	第76図 志知川沖田南遺跡 IV区上層水田試料採取地点 166
第58 j 図 ステージ IV ₁₀ 135	第77図 志知川沖田南遺跡 IV区セクション壁
第58 k 図 ステージ IV ₁₁ 136	
第58 l 図 ステージ IV ₁₂ 137	
第58 m 図 ステージ IV ₁₃ 138	

面柱状試料採取地点	167	1980	199
第78図 シルト ($63 \mu\text{m}$) 以下粒子の重量比 の分布	168	第97図 Showing the geography of Mihara at about 6000 Y.B.P., Takahashi 1980	
第79図 均熱減量分 (IL) の分布	168		199
第80図 花粉・胞子総数 (粒/g) の分布	169	第98図 Showing the geography of Mihara at about 2000 Y.B.P., Takahashi 1980	
第81図 イネ科花粉数 (粒/g) の分布	169		199
第82図 オモダカ属花粉 (粒/g) の分布	170	第99図 出現珪藻顕微鏡写真	201
第83図 ヨモギ属花粉 (粒/g) の分布	170	第100図 出現珪藻顕微鏡写真	202
第84図 マツ属花粉 (粒/g) の分布	171	第101図 出現珪藻顕微鏡写真	203
第85図 木本花粉・草本花粉・シダ胞子三者 の比率	173		
第86図 花粉・胞子組成による水田各筆の区 分	174		
第87図 <i>Micryhistridium ariakense</i> TAKAHASHI (個/g) の分布	175		
第88図 N 16 S における花粉ダイアグラム	177		
第89図 N 16 N における花粉ダイアグラム	179		
第90図 N E における花粉ダイアグラム	181		
第91図 淡路島・志知川沖田南遺跡(兵庫県) の化石花粉・胞子分布図	187		
第92図 花粉顕微鏡写真	191		
第93図 花粉顕微鏡写真	192		
第94図	195		
第95図 Okita Minami III - B C	198		
第96図 Showing the geography of Mihara at about 7500-8000 Y.B.P., Takahashi			

図版目次

- カラー図版 1 第Ⅳ区上層水田
カラー図版 2 第Ⅲ区上層水田
第Ⅲ区水口をもつ水田
カラー図版 3 第Ⅲ区水田の小畦畔
第Ⅲ区中・下層水田の小畦畔
と足跡
カラー図版 4 第Ⅲ区中・下層水田足跡
カラー図版 5 第Ⅲ区溜池状遺構
第Ⅳ区大畦畔土層断面
図版 1 中・下層水田全景
図版 2 確認調査
1、A地区近景
2、B・C・D地区近景
図版 3 確認調査A地区
1、A-3 河道断面
2、A-23 土層断面
図版 4 確認調査B地区
1、B-3 土層断面
2、B-21 土層断面
図版 5 確認調査B地区
1、B-20 土層断面
2、B-27 弥生時代前期窓棺
図版 6 確認調査B地区
1、B-14 断面
2、B-21 土器出土状態
図版 7 確認調査C地区
1、C-2 土層断面
2、C-2 弥生時代前期旧河道
図版 8 1、第Ⅰ区
2、第Ⅱ区中世溝
図版 9 1、第Ⅱ区中世溝（東から）
2、第Ⅱ区畝張区旧河道内土器出土
状況（東から）
図版10 1、第Ⅳ区調査後全景（東から）
2、第Ⅳ区東壁・北壁
図版11 1、第Ⅰ区全景（南から）
2、第Ⅰ区東壁
図版12 1、第Ⅰ区杭列出土状況
2、第Ⅰ区杭列出土状況（南から）
図版13 1、第Ⅳ区杭列出土状況（西から）
2、第Ⅳ区杭列出土状況（東から）
図版14 1、第Ⅳ区杭列出土状況（西から）
2、第Ⅳ区杭列出土状況（東から）
図版15 1、橋・杭列出土状況（北から）
2、橋出土状況（南から）
図版16 1、第Ⅳ区全景（東から）
2、第Ⅳ区全景（西から）
図版17 1、第Ⅳ区南側大畦畔
2、第Ⅳ区中央大畦畔
図版18 1、第7トレンチ（南から）
2、第1トレンチ（南から）
図版19 1、第Ⅲ区水口（西から）
2、第Ⅲ区水口（東から）
図版20 1、第Ⅲ区上層水田（東から）
2、第Ⅲ区上層水田（西から）
図版21 1、第Ⅲ区上層水田（西から）
2、第Ⅲ区上層水田（東から）
図版22 1、第Ⅲ区上層水田（南から）
2、第Ⅲ区上層水田（北から）
図版23 1、第Ⅲ区上層水田（北から）

	2、第Ⅲ区上層水田（南から）	2、第Ⅲ区上層水田（足跡）
図版24	1、第Ⅲ区上層水田（北から） 2、第Ⅲ区上層水田（東から）	図版39 1、第Ⅲ区中・下層水田（東から） 2、第Ⅲ区中・下層水田（足跡）（西から）
図版25	1、第Ⅲ区上層水田（北から） 2、第Ⅲ区上層水田（南から）	図版40 土器1 図版41 土器2
図版26	1、第Ⅳ区上層水田（東から） 2、第Ⅳ区上層水田（東から）	図版42 土器3 図版43 土器4
図版27	1、第Ⅳ区上層水田（西から） 2、第Ⅳ区上層水田（東から）	図版44 土器5 図版45 土器6
図版28	1、第Ⅳ区上層水田（南から） 2、第Ⅳ区上層水田（西から）	図版46 土器7 図版47 土器8
図版29	1、第Ⅳ区上層水田（東から） 2、第Ⅳ区上層水田（南から）	図版48 土器9 図版49 土器10
図版30	1、第Ⅴ区上層水田（南から） 2、第Ⅴ区上層水田（西から）	図版50 土器11 図版51 木器1
図版31	1、第Ⅴ区南側大畦畔土器出土状況（南から） 2、第Ⅴ区中央大畦畔土器出土状況（南から）	図版52 木器2 図版53 木器3
図版32	1、第Ⅴ区中・下層水田（南から） 2、第Ⅴ区中・下層水田（北から）	
図版33	1、第Ⅴ区中・下層水田（西から） 2、第Ⅴ区中・下層水田（南から）	
図版34	1、第Ⅴ区中・下層水田（北から） 2、第Ⅴ区中・下層水田（西から）	
図版35	1、溜池状遺構（北から） 2、溜池状遺構（東から）	
図版36	1、溜池状遺構（南から） 2、溜池状遺構（北から）	
図版37	1、溜池状遺構（南から） 2、溜池状遺構（西から）	
図版38	1、第Ⅴ区上層水田（足跡）	

表 目 次

表1 上層水田計測表	54	表6 地形分析の精度と方法	104
表2 下層水田計測表	55	表7 環境変遷表	141
表3 上層水田と中・下層水田の比較	58	表8 上層水田水利系統別土地条件	149
		表9 全リン測定値	156
表4 土器観察表(1)	75	表10 主な花粉・孢子の組成率の最高値・	
表5 その他の出土土器観察表(2)	97	最低値と平均値	172

付 図 目 次

付図1 上層水田実測図	付図5 第Ⅳ区杭列・水路・枝溝及び樅実測図
付図2 中・下層水田実測図	付図6 第Ⅳ区バネルダイアグラム
付図3 池池状遺構実測図	付図7 第Ⅳ区バネルダイアグラム
付図4 第Ⅳ区杭列及び中央大畦畔実測図	

第1章 遺跡周辺の環境

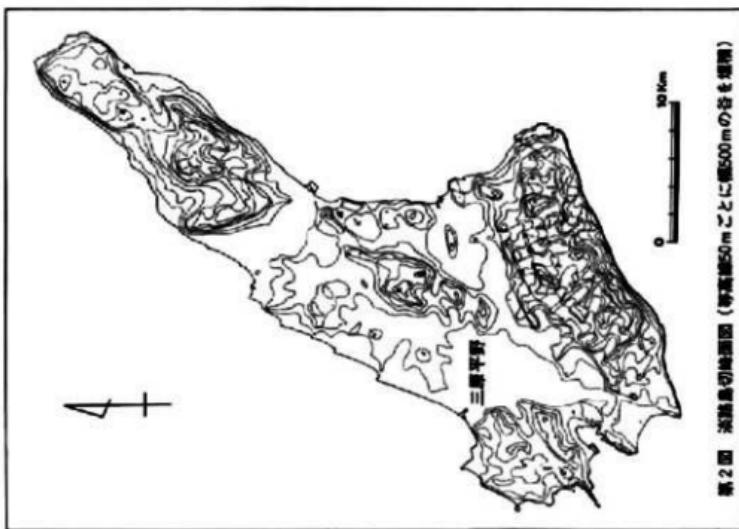
第1節 地理的環境

志知川沖田南遺跡の立地する三原平野は、明石海峡を挟んで六甲山地へ達なる津名山地（標高515m）と中央構造線に沿って東西に延びる餘鶴羽山地（標高608m）との交会部に位置しており、淡路島で最も広い面積をもつ。平野の北を限る津名山地は、領家花コウ岩質変成岩と大阪層群下部にあたる鮮新統の未固結な粘土や砂礫から構成されている（第1図参照）。当地域では年降水量が1,450mmと我が国よりやや少ないうえ、急勾配で短かな河川がほとんどであるため、それによる灌漑は容易でない。このため、津名山地を刻む衝突状谷には、多くの溜池が築造され利用されてきた。他方、平野の南と東を限る餘鶴羽山地は、白亜系和泉層群の砾岩・砂岩・頁岩の互層からなり、南に傾斜する単斜構造をなしている。この構造を反映し山体の南側は急傾斜のまま太平洋に没するが、北側斜面は山体に平行する4列の傾斜変換線を境にして、階段状に高度を低下させる（第2図参照）。三原平野には4本の主要な河川があり、北から順に倭文川、成相川、三原川、大日川と呼ばれている（第3図参照）。現在、これらは河口近くの松帆において合流し、三原川となって播磨灘へと注ぐ。一方、目を上流側に転ずると、倭文川は大阪層群からなる丘陵を主要な集水域とするが、他の河川は和泉層群の山地から流下している。

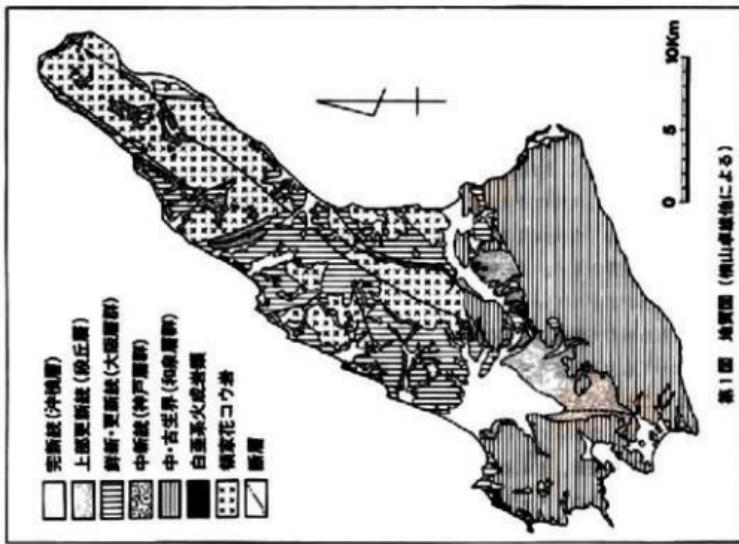
平野部の東半分には開拓を受け段丘化した畠状地群が広く展開している（第4図参照）。ここには、多数の旧河道が存在するほか淡路國分寺周辺を中心に正方位の道路や水田区画が認められる（第5図参照）。これに対し、低平な三角州部分にはN40°E方向の条里型水田が卓越している。ただし、三角州の中央部には昭和19年に旧陸軍の飛行場として造成され、第二次大戦後に再び水田に復した大規模人工改変地が広い面積を占める。また、海岸に沿って、鹿野松原と呼ばれる砂堆群があり、その陸側にはクリークが発達し新田型の水田区画が展開する、より低湿な三角州が広がっている。

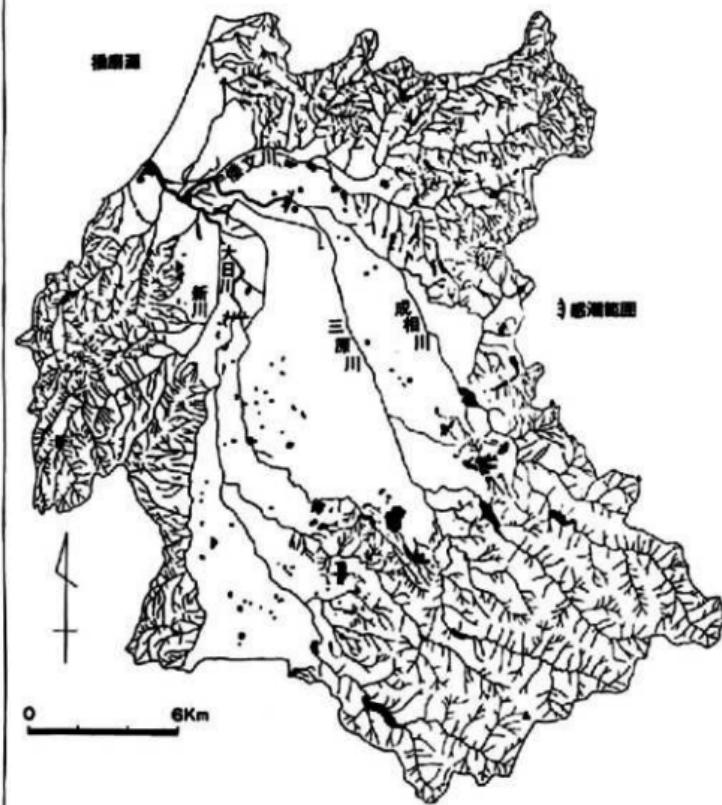
さて、当地域の平野部は「内海伝説」が存在することや、第6図に示した様にしばしば広範囲にわたって冠水の被害を受けてきたこと、あるいは倭名類聚抄や淡路國分寺文に地名が記されていないことなどから、かつて銅鏡の出土した砂堆部分を除き、先・原史遺跡の存在はほとんど期待されていなかった。しかしながら、今回報告する志知川沖田南遺跡の発掘以降、志知^{志知川}遺跡、谷町筋遺跡、^{淡路國}雨流遺跡などの遺跡が平野部から次々発見され、これらによって三原平野の先・原史時代のイメージは大きく変貌しつつある。

第2図 沖縄島地形図（等高線50mごとに標高500mの谷を塗り）



第1図 地質図（側山等級別による）

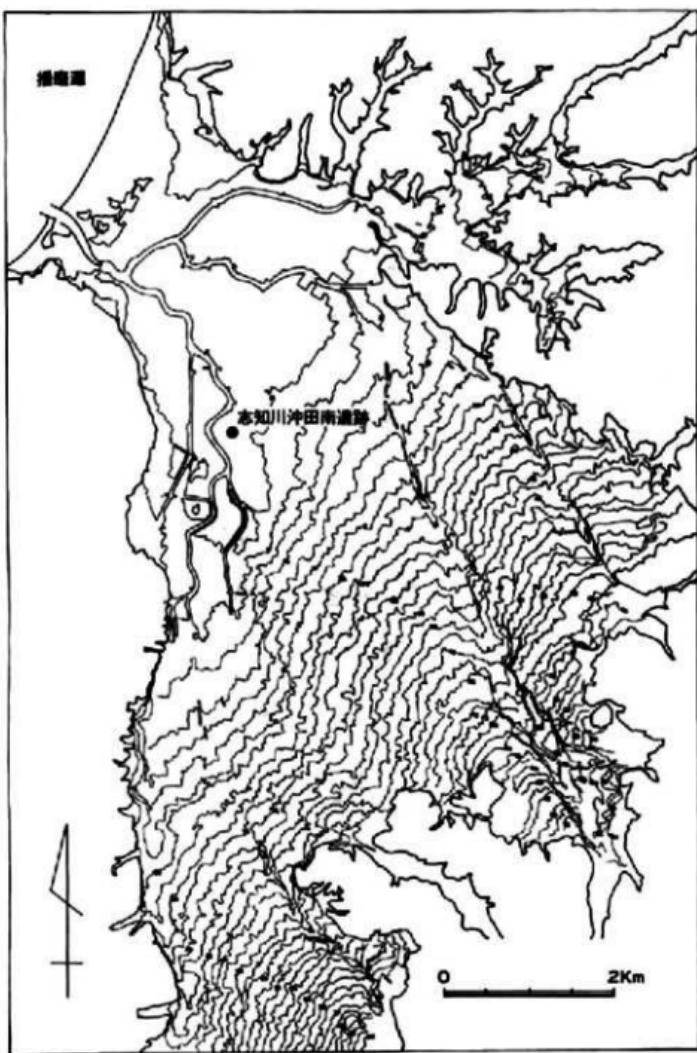




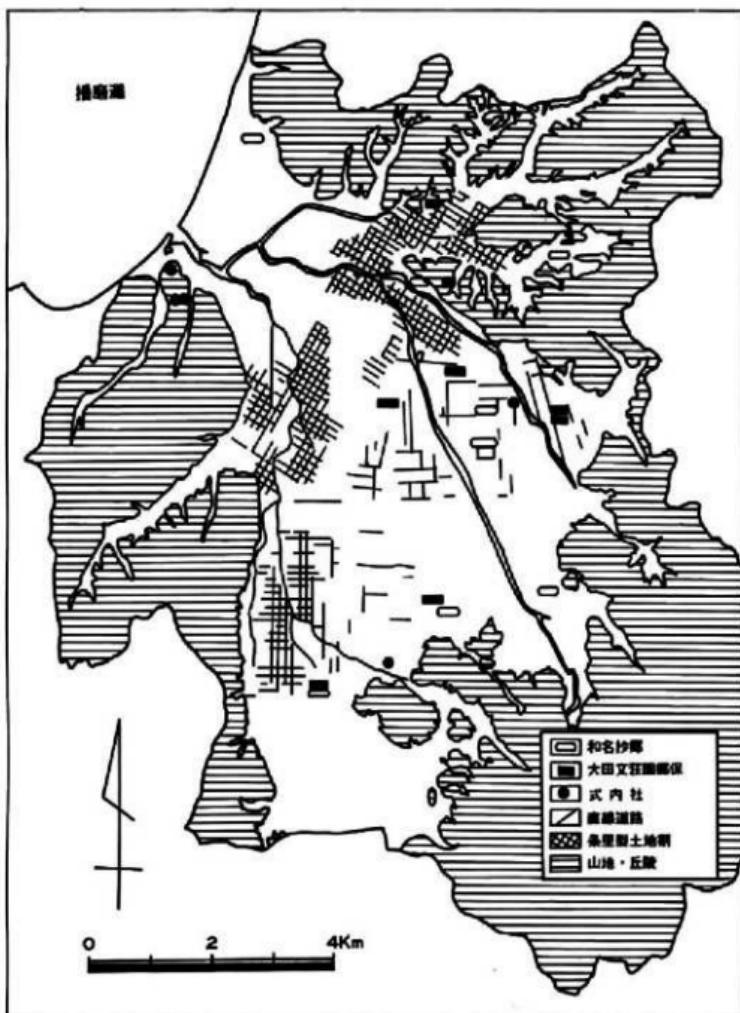
第3図 三澤平野水系図

注1 百応2年(1223年)の武藏國大治文にみられる田畠を昭和1年(1926年)のそれと比較した千葉縣の計画によれば(表1)、お庭平野、坂状地(第7章参)周辺に分布する住民の開田率は1/7~1/10であり、鎌倉時代初期にはまだ開墾されていない所がかなり広い範囲にわたり開拓していたと考えられる。千葉縣農業(1956)「土地開発と農業振興」和歌森太郎著「筑紫島の開拓」所収62~67頁。

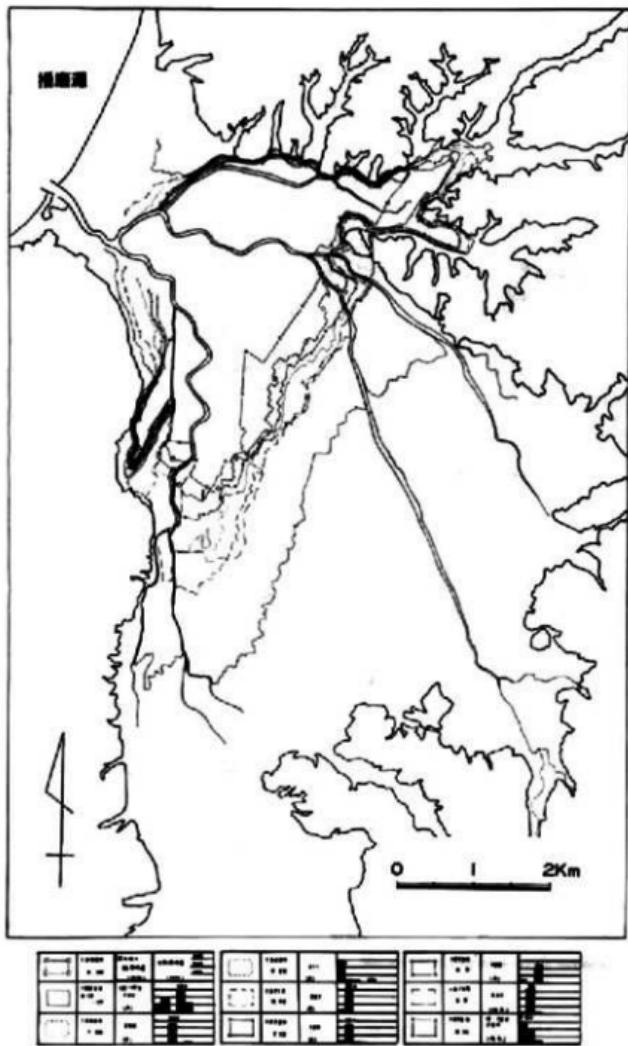
2 昭和50年撮影1/1万カラーの空中写真には、かつて飛行場となり前に水田として再開墾された所にも、各種農地圖を示す地図の指標が認められる。このことから、二度の進歩による土地改良が比較的少なかったことが判る。



第4図 三段平野等高線図



第5図 条理町地割分布図



第6圖 三原平野洪水被害図

第2節 歴史的環境

淡路島内で、考古学的手法に寄った発掘調査が実施されるようになったのは、昭和38年の洲本市下加茂岡遺跡が最初の例であり、その後武山遺跡等の調査も実施されているが、多くは洲本市域で実施されたものである。本遺跡の所在する三原平野でも過去に発掘調査が行われた例は、昭和41年に古津路遺跡の調査がある程度である。しかし昭和50年代に入ると、圃場整備に伴う調査が始まり、昭和53年からは淡路縦貫道関係の調査が開始された。また昭和60年からは、淡路国分寺の調査も行われている。このように最近になって、ようやく調査件数も増えてきているが、まだまだ県下の他地域に比べると、その件数は少ない。

しかし淡路考古学研究会をはじめとする、地元の研究者の熱心な踏査によって、三原平野内でもかなりの遺跡が知られている。ただ分布調査であり、遺跡の実態については不明な点が多い。

先土器時代の遺跡は、最近まで知られていなかったが、三原町神代で採集されていた石器の中に、ナイフ型石器が含まれていることが判り、島内にも確実に先土器時代の遺跡が存在することが明らかとなった。その他三原町長原遺跡・緑町柿坪遺跡等で有舌尖頭器が採集されており、今後三原平野を取り囲む丘陵地帯や段丘上で、こうした遺物が採集される可能性が高い。

縄文時代の遺跡は三原平野とその周辺には少なく、現在6遺跡が知られているに過ぎない。その中で緑町安住守遺跡は早期の押型文土器が圃場整備中に発見されている。また三原町南畠遺跡では多量の石器類とともに、前期に属する土器が採集されている。中期の遺跡は現在知られていない。後期の遺跡として西淡町谷町筋遺跡が上げられる。この遺跡は縄文文土器を出土し、後期中半の遺跡と思われるが、前期の遺跡が丘陵地帯等に立地するのに対し、沖積地とその縁辺に位置している。他地域と同様に、淡路においても、この時期に沖積地等の比較的低地上に進出してくる可能性が高い。晚期の遺跡は知られていない。

弥生時代になると遺跡数は増加し、特に①西淡町浜・慶野等の海岸砂堆上、②西淡町志知地知川等の沖積地内の微高地、③西淡町志知岬等の沖積地の縁辺の三地域に集中する傾向が見られる。まず①のグループの中では、西淡町北所遺跡で前期の木の葉文状の土器が採集されている。中・後期の遺跡は明らかではないが、西淡町中の御堂遺跡では九口以上、北の御堂遺跡では一口の銅鐸出土地が知られている。また西淡町古津路（西原遺跡）では銅劍14口が出土している。この他の慶野松原で銅鏡八個が採集されるなど、このグループは青銅器の出土が顕著である。②のグループは前期から始まる本遺跡のほかに兩流遺跡が知られている。兩流遺跡では最近の調査で前期の水路が検出され、この遺跡と本遺跡の東側の微高地に、かなり継続的な集落遺跡の存在が予想される。③のグループでは西淡町岬田遺跡で前期新段階の土器が出土している。中期の遺跡は明らかではないが、後期の集落の一部が西淡町谷町筋遺跡・岬田遺跡で検出

されている。鉢田遺跡では内行花文鏡が出土し、畿内の様相の土器が多い中に、瀬戸内東部の影響が見られる土器も出土している。

この他三原川・大日川の上流域の段丘上に、三原町鎌原遺跡・中原遺跡等、中・後期の遺跡が僅かに見られるが、こうした地域への遺跡の進出は、この時期から始まるものと思われる。

また三原平野の中央に、舌状に張り出した段丘上及びその辺には、現在ほとんど遺跡は知られていないが、今後中期以降の遺跡が発見される可能性は高い。

そのほか三原平野を取り囲む丘陵地帯には、銅鏡の出土地やその伝承地が多く知られている。先の中の御堂・北の御堂遺跡の他、三原町安住寺・上八太・地頭方、南淡町福井・新田南などがある。

淡路は県下の他地域と比較すると、古墳の少ない地域と言われている。三原平野でも古墳の数は少なく、後期古墳が約24基知られているに過ぎない。またいずれも保存状態は悪く、内部主体・墳形とも不明な古墳が多い。その中で現在墳形の判るものは、すべて円墳で、ただ一基陶棺を内部主体を持つものがある以外、内部主体は横穴式石室か、小型の堅穴式石室を内部主体とするものである。

これら24基の古墳は大きく見て、5グループほどにまとまり、その内西淡町志知北から三原町志知佐礼尾に至る、大日川中流域の丘陵地帯に9基ほどが存在する。佐礼尾古墳は堅穴式石室を内部主体とし、六鈴鏡・鐵器等を出土している。また最近の調査で、ハバ古墳から銅鏡・金銅製馬具・鐵器等が出土している。このグループは銅鏡を有するなど、三原平野では比較的有力なグループであろう。

大日川を遡った上流域には、南淡町賀集付近に4基の古墳が知られ、賀集西山北古墳は8m近い横穴式石室を持ち淡路最大の石室規模を持つ。この他、西山南古墳・小山古墳は横穴式石室、野田山古墳は堅穴式石室を内部主体とする古墳である。

三原川と成相川の合流点付近に4基、成相川中流域の東側丘陵上2基、上流域に5基の古墳が知られている。これらの古墳の内上流域の徳野塚村古墳は陶棺を出土した古墳として知られている。現在この成相川流域の古墳には、横穴式石室を内部主体とするものは見られない。

古墳時代の集落は、谷町筋遺跡で前期・後期の集落が、雨流遺跡で中期の集落と水田跡が検出されている。その他、鉢田遺跡と三原町志知松本遺跡で、5世紀末の須恵器が出土している。

奈良時代三原平野は「三原郡」に編入され、淡路国府が置かれる。国府の所在地については、四説があげられているが、三原町市市・十一ヶ所等にまたがる推定地が有力とされている。国分寺は三原川を挟んで対岸の、三原町八木国分に位置し、これまでの調査で、寺域の北・東限と塔・金堂が明らかになっている。

その他地方寺院として、三原町山惣庵寺・国術庵寺が知られているが、礎石等は確認されておらず、瓦が採集されているだけである。そのため官衙の可能性も残されている。



通路名	地図	通路名
1 志知川沖田南道跡	39	福守岡山寺1号墳
2 越後守御所跡	40	福守岡山寺2号墳
3 谷町筋道跡	41	荒見山古墳
4 伊田道跡	42	山所古墳
5 錦原道跡	43	人田山1号墳
6 沢原道跡	44	人田山2号墳
7 沢原道跡	45	人田山3号墳
8 大土居中瀬跡	46	上ノ木古墳
9 志知川本塗跡	47	長田山1号墳
10 伊勢の森道跡	48	長田山2号墳
11 荒見山下瀬跡	49	佐野
12 志知川南道跡	50	後原御用船定地
13 いづかい道跡	51	後原御用船定地
14 城の元道跡	52	後原御用船定地
15 岩山寺道跡	53	山登寺
16 やまとご道跡	54	山登寺
17 先祖道跡	55	通路守
18 井手の内瀬跡	56	大根引道跡
19 間所西道跡	57	宮の内瀬跡
20 美濃道跡	58	佐田下道跡
21 岩瀬井前道跡	59	大根引下道跡
22 西原尾方公原道跡	60	佐田道跡
23 鮎原(古神路)道跡	61	馬糞林川道跡
24 志知千葉乾道跡	62	郡分道跡
25 北所道跡	63	人田稻荷前道跡
26 川瀬道跡	64	竹谷築跡
27 佐田1号墳	65	佐田道跡
28 佐田2号墳	66	龍の下道跡
29 斎谷古墳	67	越毛道跡
30 斋谷山1号墳	68	西原御用船定地
31 斎谷山2号墳	69	門の上道跡
32 佐利尾古墳	70	柳平道跡
33 佐利尾1号墳	71	尻越小屋
34 佐利尾2号墳	72	余金道跡
35 背後山北古墳	73	佐山石垣
36 背後山南古墳	74	南邊寺址
37 佐田山古墳	75	佐川
38 佐田山古墳	76	志知城址
39 古岸後原	77	奥庭船頭

このほか、伊田遺跡では建物址が検出され、硯・縁軸陶器等が出土している。また谷町筋遺跡では井戸が検出され、漆が付着した須恵器・製塙土器が出土している。

窯址は、三原平野南端の丘陵山裾に、三原南部窯址群が知られ、この内三原町汁谷窯址は7世紀に操業を開始した、淡路では最も古い窯址と言われている。

また、条里制と言われる方形地割が、三原町志知・西淡町志知付近、三原町櫻列付近、三原町蟹付近等に広がっているが、これらは沖積低地に限ってみられる。それと同様この時期の散布地も、ほとんどこうした低地に限られている。

平安時代の遺跡としては、伊田遺跡で平安時代末の建物址と、土師器・瓦器・白磁・陶器と少量の須恵器が出土している。また佐礼尾窯址がこの時期に操業を開始し、皿類とともに瓦を焼成している。現在単独で位置しているが、今後付近に窯址が発見される可能性は高い。

鎌倉時代以降淡路は細川氏の支配下に入るが、三原町妻宣館がその居館と伝えられている。東西約120m、南北約250m、周囲に土塁をめぐらした館址である。そのほか三原町志知城址は沖積地の微高地に位置し、大日川を利用した堀を持つ。さらに三原川の河口には西淡町叶堂城址、西淡町湊城址が存在する。湊城址は淡路の国人源安宅氏の居館と伝えられている。

この時期の遺跡としては、谷町筋遺跡があり、溝に埋まれた建物址と白磁合子・鉄製鋸先等が出土している。

第2章 調査に至る経過及び調査組織

昭和45年7月1日、四国と本州を結ぶ本州・四国連絡橋の着工をめざし本州・四国連絡橋公団（以下、本四公団）が設立された。同公団が計画している3本のルートのなかでも、西日本と阪神経済圏を最短距離で結ぶ淡路島ルートは、淡路島という大きな経済圏を背景にもち、西日本全体の経済観点上からもとりわけ着工の意義が大きく、社会的な効果を期待された。

本四公団が設立されてから約2年後の昭和47年10月6日、本四公団神戸事務所長から埋蔵文化財分布調査依頼書（三原郡南淡町門崎一津名郡北淡町岩屋間 全長60km）が兵庫県教育長に提出された。

分布調査の依頼を受けた兵庫県教育委員会文化課では、昭和46年度の国庫補助事業によって実施した淡路全島の分布調査結果に基づき、ルート上に位置する周知の遺跡を記載したうえ、本四公団へ提出した。

それに伴い兵庫県教育委員会は、第1回目の分布調査として西淡町の三原インターチェンジ予定地内から南淡町門崎間について、淡路考古学研究会に依頼した。分布調査は岡本秘会長をはじめ、武田信一、波毛康宏、貴益己、浜岡きみ子の5氏によって、昭和47年10月31日に実施された。その結果、三原インターチェンジ予定地内の志知川沖田南遺跡をはじめとした10遺跡が確認された。この成果を受け、昭和47年11月25日付で、兵庫県教育委員会から本四公団神戸事務所長に対して遺跡の保存方法について、事前に配慮をするように回答した。さらに、昭和47年12月25日に、第2回目の分布調査が淡路考古学研究会によって、西淡町から洲本市間で行われた。引き続き第3回目の分布調査も昭和48年1月5日～6日の両日、淡路考古学研究会によって、西淡町から淡路町にかけて実施された。

以上、淡路考古学研究会による3回の分布調査の成果を受け、県教育委員会は新たに全体の分布調査を総合的に実施することにした。このため、本四公団と県教育委員会が委託契約を結び、県教育委員会からの依頼を受けた淡路考古学研究会によって、昭和48年2月4日から同年3月18日にかけて、幅31m全長60kmの調査範囲の分布調査が実施された。

実施された地域は、以下の通りである。

(1)三原郡西淡町伊加利、(2)洲本市上内膳、(3)津名郡津名町（津名インターチェンジ）、(4)津名郡北淡町（北淡インターチェンジ）、(5)津名郡東浦（東浦インターチェンジ）、(6)津名郡淡路町サセブから北西一帯、(7)三原郡西淡町齊谷の七地域である。

第1回目から第3回目の分布調査及び総合分布調査の結果、合計26ヶ所の遺跡の存在が明らかになった。この成果をもとに、昭和49年の夏、県教育委員会、淡路考古学研究会、兵庫県淡路県民局内淡路縦貫道対策室、本四公団の合同で現地立会い調査を実施した。この現地立会い

調査により、淡路縦貫道予定地内の遺跡の所在が26ヶ所であることが、再度確認されている。

昭和47年度から昭和49年度にいたる数次の分布調査で遺跡を発見され、さらに常に現地の調査を支えて頂いた淡路考古学研究会会长の岡本稔先生をはじめ、武田信一、波毛康宏、貢益己、浜岡きみ子の諸氏には、その後の発掘調査においても多大の御協力を頂いた。ここに厚くお礼を申し上げる次第である。

志知川沖田南遺跡及び志知川新池遺跡の確認調査

昭和47年10月31日に淡路考古学研究会によって、実施された第1回目の分布調査で、奈良時代の土器及び須恵器の散布地として確認された最初の遺跡である。

分布調査から昭和53年度までに、三原インターチェンジ予定地内の用地買収が終了し、埋蔵文化財確認調査を実施する際の地元協議が行われ、諸条件がすべて整ったため、昭和53年度に本四公団から県教育委員会に遺跡確認調査の依頼があった。この依頼を受けた県教育委員会では、淡路縦貫道予定地内における最初の埋蔵文化財確認調査を同年度から開始した。

調査年度及び、調査担当者は以下の通りである。

昭和53年度の調査

調査担当者 大村敬通、吉織雅仁

調査期間 昭和53年7月25日～

10月23日

調査目的 遺跡の確認及び遺跡範囲
の調査

調査範囲 三原インターチェンジ予
定地内及び本線部分、さ
らに取り付け道路の約

90,000m²

昭和54年度の調査（第1次全面調査）

調査担当者 大村敬通、水口富夫

調査期間 昭和54年10月29日～

12月24日

調査目的 53年度の確認調査にもと
づき古墳時代の河跡の全
面調査

調査範囲 約800m²

昭和55年度の調査（第2次全面調査）

調査担当者 松下勝、水口富夫

調査期間 昭和55年4月15日～

10月4日

調査目的 古墳時代の河跡及び、新
たに確認された古墳時代
の水田跡の範囲調査

調査範囲 2,340m²

昭和56年度の調査（第3次全面調査）

調査担当者 松下 勝、水口富夫

調査期間 昭和56年7月13日～

57年1月8日

調査目的 古墳時代の水田跡の全面

調査

調査範囲 4,000m²

昭和57年度の調査（第4次全面調査）

調査担当者 松下 勝、井守徳男

吉誠雅仁、別府洋二

調査期間 昭和57年4月14日～

9月18日

調査目的 古墳時代の水田跡の全面

調査

調査範囲 4,864m²

整理作業（昭和59年度から3ヶ年実施）

59年度……足跡の計測

60年度……出土遺物の実測及び写真撮影

61年度……出土遺物のトレース及び、遺構図面のトレース

なお、整理作業にあたっては、チーフ補助員の和田早芳子氏を初め、以下の補助員の方々にお世話をになった。原香代美、木村淑子、松本聰、松田恵、田内加寿代、苔口治子、岡田依理子、下山由紀、井川佳子、北村恵美、友久伸子、堀川英子。

第3章 確認調査

第1節 調査の経過

調査対象地区は大日川左岸に広がる約90,000m²に及び、全域が沖積低地にある。この広大な対象地の調査を実施するにあたっては、対象区域内を東西に横断する農道によって四分割し、北から順にA・B・C・D地区と呼称することとした。

調査区内の地形は、調査区東側の現集落の位置する付近に微高地が、ほぼ南北に伸び、その脇の一部はA地区の東端にも及んでいる。また調査で南側の新池付近にも微高地が存在し、隣はB・C地区を区切る農道付近まで及んでいる。その他D地区の河川沿いにも微高地がみられ、この微高地を取り巻くように旧河道と思われる、細長い地割りの田が認められる。これらの微高地の間に挟まれたB地区東岸からC地区西端、D地区を横断する南北の農道沿いの地域は、浅い谷状の地形となり、C地区西端が最も低くなっている。ただ調査区内の標高は約0.6m～1.7mと低く、道路の存在する可能性は薄いと予想された。

そのため調査にあたっては、約40mピッチに2m方角のグリッドを設定し、まず土層関係の把握、遺物の出土状態・量をつかむことから始め、その結果に基づき、必要に応じてトレンチ調査に切り替えることにした。ただ一部未買収地があり、調査を実施できない部分もあった。

現地での作業は昭和53年7月31日、B地区西端より開始し、A地区西へと進めていった。しかし土層が表土から極めて軟弱で、特に黒色粘土層に達すると、道具に付着した土が離れないという状況であった。それに加えて全体的に深く、黒色粘土層下からは湧水があり、調査は難行した。そこで2m方角のグリッドでの調査は黒色粘土を掘り下げ、青灰砂等を検出したところで止めた。これ以下の土層については4m方角のグリッドで行うこととし、最終的にはA-23・B-3・B-18・C-14・D-13の5ヶ所で行なった。ただD-14は当初4m方角で設定したが、表土直下の砂層からの湧水が激しく、調査が不可能になったため、途中で放棄した。

こうしたグリッドによる調査の結果C-2、A-3、B-14で旧河道と思われる土層堆積状況がみられ、内部から弥生時代前期、弥生時代後期末から古墳時代初頭の土器が出土した。そこで、河道の規模、走行方向を把握するために、巾1～2mのトレンチを、これらの地区を中心にして設定し、補足調査を行なった。その結果調査面積は約644m²となり、堆土量は約1,288m³、実働日数54日を要し、昭和53年10月18日に現地での作業は終了した。

ただ終了際に出土した壺棺については、国際キリスト教大学の輔岡助手にリン分析を依頼、本年度は壺棺内部の埋土を、昭和54年度に周辺の堆積土について実施した。

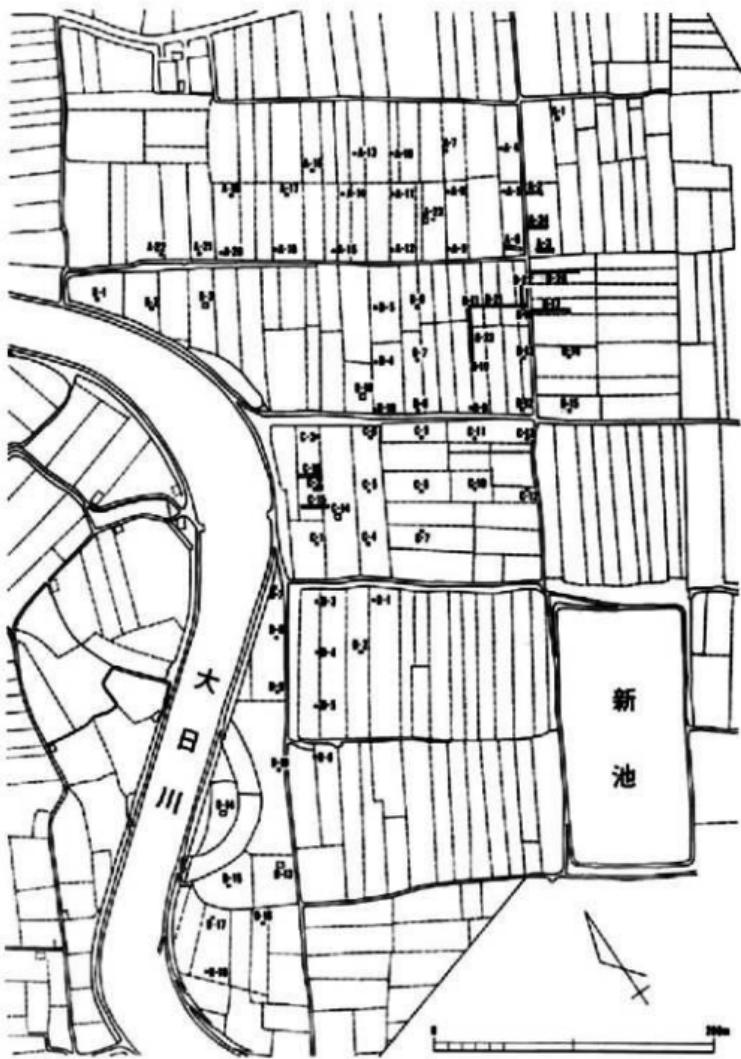


図8 図 グリッド設定図

第2節 調査の概要

1. 各地区的概要

A地区 (第8・10・11図、図版2・3)

調査区の最も北にあたる地区で、標高はA-1付近で約2.0m、A-22付近で約0.7mを測り、ほぼ東から西に傾斜する。

この地区的土層堆積状況はA-21・22を除いて、各グリッドとも基本的には大差なく、表土、客土と思われる数枚の黄褐色シルト、その下に自然堆積のシルト層が何枚かあり、黒色粘土となる。黒色粘土以下は青灰砂と灰褐色粘土、黒色粘土の互層となり、A-23では標高約-1mのところから、貝殻が出土している。

黒色粘土の上面は、A-12付近が最も高く、そこから東西に傾斜している。この黒色粘土中からは、A-9で弥生時代前期と思われる土器片が出土したが、これ以下の土層上面に遺構面を想定することは困難である。また黒色粘土も非常に軟弱であり、この土層の上面から遺構を検出することは不可能であった。

何層か見られる自然堆積のシルト層は、A-3で検出した旧河道付近が厚くなっているものと思われ、A-3では約1mの厚さとなる。逆にA-12・15付近では厚さ約40cmと薄くなり、A-18から西へまた厚くなる。これはA-3で検出した旧河道と、現大日川の影響を受けて、このシルト層が堆積したためと思われる。ただシルト層上面は東から西に傾斜し、現地とほぼ同様の傾斜となっている。このシルト層からは弥生時代後期末から古墳時代初頭以降の土器を出土し、A-7では中世の土器も出土している。

A-3では旧河道と思われる落ち込みが検出され、弥生時代末から古墳時代初頭の土器が出土している。ただこの旧河道は、両肩ともはっきりしない。特に東肩としている青灰砂、青灰色砂塵は河道内の堆積物と思われ、砂塵内からは弥生時代中期の遺物が出土している。したがって弥生時代中期以前は、もっと巾の広い旧河道であったものと思われる。西肩も灰色粘土以下ははっきりしているが、それから上は明確ではない。その上最後の肩となる暗灰色シルトは一部河道を埋めている。これは河道が氾濫した際の堆積と思われ、こうした堆積をするために、肩が不明確になるものと思われる。ただA-2ではこの河道は検出されず、おそらくA-2と3の間で東に蛇行するものと思われる。

B地区 (第8・9・10・11・12図、図版2・4・5・6)

この地区は中央に計画から除外された地区があり、そのため東西に分かれた地区である。

基本的な土層堆積状況はA地区と変化はないが、B-20からB-23トレーニチにかけて旧河道が検出され、B-1・2は、A-21・22同様、黒色粘土は検出できなかった。

B-20からB-23トレーニチにかけて検出された旧河道は、内部の青色砂から弥生時代末から

古墳時代前期初頭の土器、木器が出土した。B-23、B-14、B-20で検出した肩と結ぶと、B-14からB-20にかけて大きく蛇行する。その延長上にはA-3で検出された河道があることから、これらは1本の旧河道と思われる。ただB-23以西では各グリッドとも河道状の堆積はみられず、走行方向は不明である。

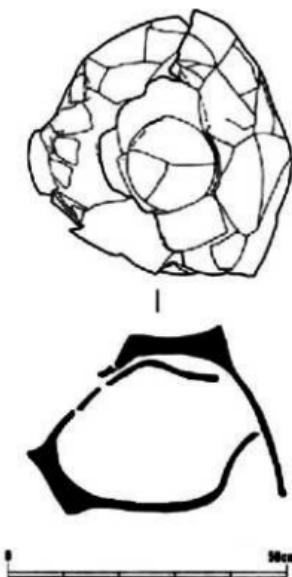
また河道の走行方向をつかむために入れたB-17トレンチで、黒色粘土層から壺棺と思われる弥生時代前期の壺が出土している。頭部から上を欠いた壺を約26°に横倒しにし、その上に、丁度底部で壺をするように、底部から最大胴付近までの破片が乗せられていた。こうした出土状態からすれば、壺棺と想定されるが、掘り方の平面プランはもとより、断面でも掘り方は確認できなかった。おそらく黒色粘土上面から掘り込まれたものと思われるが、黒色粘土の持つ軟弱性、粘着力から、掘削直後に埋め戻しが行なわれれば、全く検出することは不可能になるものと思われる。

C地区(第8・10図、図版2・7)

この地区は南から北にゆるやかに傾斜し、C-3付近が最も低く、標高約0.6mを測る。基本的な土層堆積状況はA・B区と変りはないが、C-12では黒色粘土が非常に高くなり、黒色粘土下は灰色砂礫層となっている。これは新池付近の微高地が伸びてきているものと思われる。

ここからC-2に向って黒色粘土は低くなっていくが、C-8までの間の傾斜がややきつくなり、C-8からC-2の間はゆるやかとなる。こうした傾斜は現地形と大差なく、C地区的地形はこの黒色粘土が作用しているものと思われる。

C-15からC-16の間では黒灰色粘土下に旧河道と思われる、蛇行した巾約2.5m、深さ約50cmの流路が検出された。この旧河道は東側は砂層となり、西側は灰褐色粘土となっている。内部は土層の黒灰色粘土がたぬむ形で入っており、底には自然木等の植物遺体が認められた。C-2では河道の底より浮いていたが、弥生時代前期の壺が出土している。またC-16では黒灰色粘土の上部で弥生時代中期の土器が出土した。しかし土器量は極めて少ない。



第9図 透視実測図

D地区

この地区は、南北に走る道路によって二分され、地形的にもこの道路は東西で異なる。西側の地区は微高地上にあたり、そこから段を成して東に落ちる。東側の地区はこの微高地と新池付近の微高地に挟まれた浅い谷の谷底にあたる地区である。

そのためか土層の堆積状況も東側の地区がこれまでの地区と大差ないのに対し、西側の地区では若干異なっている。特に微高地の中央にあたるD-14は耕土直下は砂層の堆積が認められ、層中からは近世以後の磁器が出土している。その他のグリッドでも耕土下に砂の多いシルト層が厚く堆積している。しかしこのシルト下は、他地区と同様にシルト、黒色粘土となる。したがってこのD地区西半の微高地は、新しい時期、おそらく近世以後に、大日川によって形成された微高地と思われる。

この他D-17・18の両グリッドでは黒色粘土あるいは黒灰色粘土はみられず、青灰色、灰褐色を呈するシルト層が厚く堆積している。D-18では、それが大日川に向って傾斜していることから、この両グリッドは大日川の旧河道内の可能性が高い。

2. 遺物

弥生時代前・中期の遺物（第13・14図、図版40・41-3）

今回の調査では弥生時代から室町時代にかけての遺物が出土しているが、弥生時代末から古墳時代初めの土器を除けば、量的には少なく、弥生時代前期の遺物も僅かに4点だけである。

1と2はB-17トレーニチから出土した壺棺の身と蓋であり、ともに大形の壺である。1は身として利用されていたものである。頸部から上を欠くが、頸部と胴部の区分には段を使用している。しかし段は不明確で一部には沈線状になるところも見受けられ、おそらく沈線の上端を押え込むような形で、段としたものと思われる。胴部外面は底部付近に刷毛目が残っているが、胴下半は縱方向、最大径付近から段付近までは横方向、頸部には縱方向の施磨きをし、底部付近には指頭圧痕が残る。内面はナデ調整、胴下半内面と段内面には粘土組の継ぎ目が残る。残存高約39.8cm、最大胴径約42.5cm。

2は壺棺の蓋に利用されていたもので、最大胴部から上を欠き、残存率は約1/6である。まず円板状の底部を作り、その外部に粘土組を貼り付けて、底部内面の粘土とともに巻き上げていったものと思われ、底部外面から胴下半の内面に及ぶ、粘土組の継ぎ目が残る。胴部外面と下半に刷毛目が残るがナデ調整、内面は刷毛調整している。ただ二次的な火を受け色調は赤変している。残存高約33.8cm、最大胴径約54.8cm。1よりも一回り大形の壺である。

3はC-2の河道からの出土で、二次的な火を受け、残りの悪いものである。器高約11.7cm、口径約15.4cmで、砂粒を多く含んだ粘土である。外面刷毛、内面ナデ調整、外反する口縁で、口唇部に刻目文をもつ。

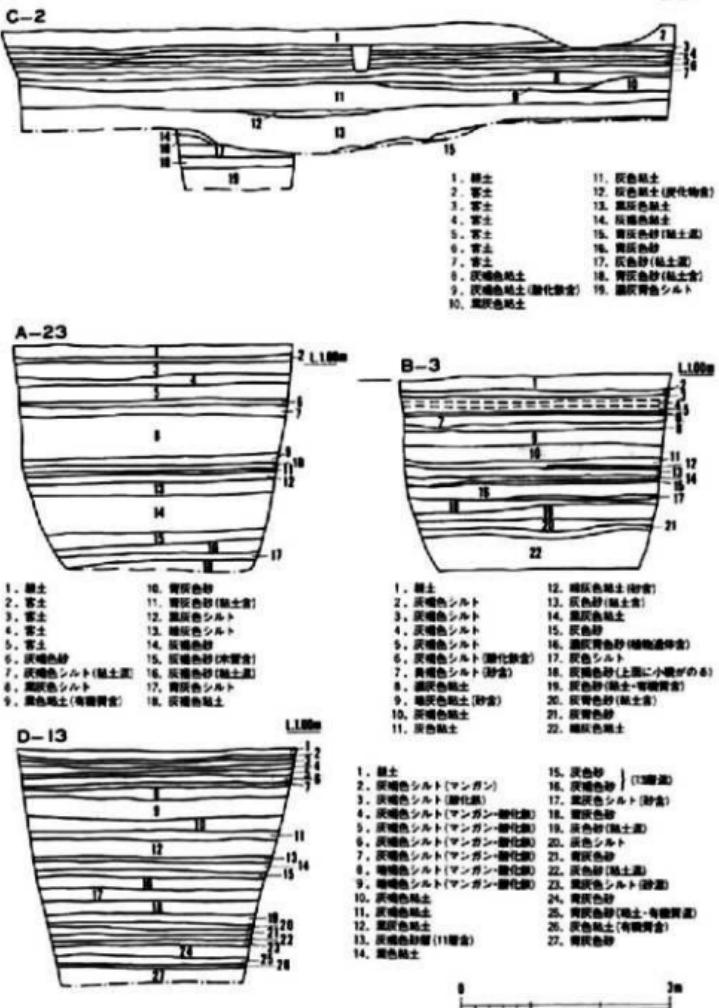
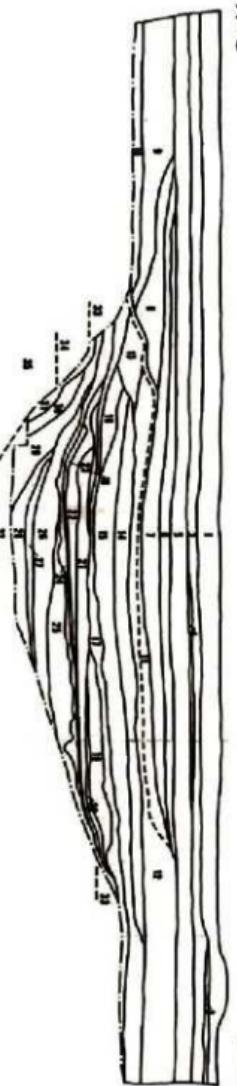


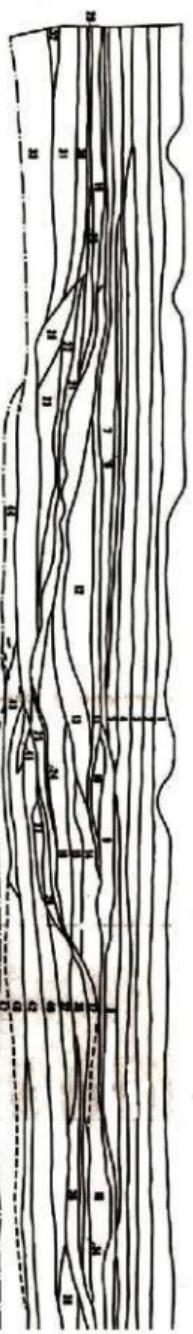
図108 土層断面図(1)

A-3



B-14, 21

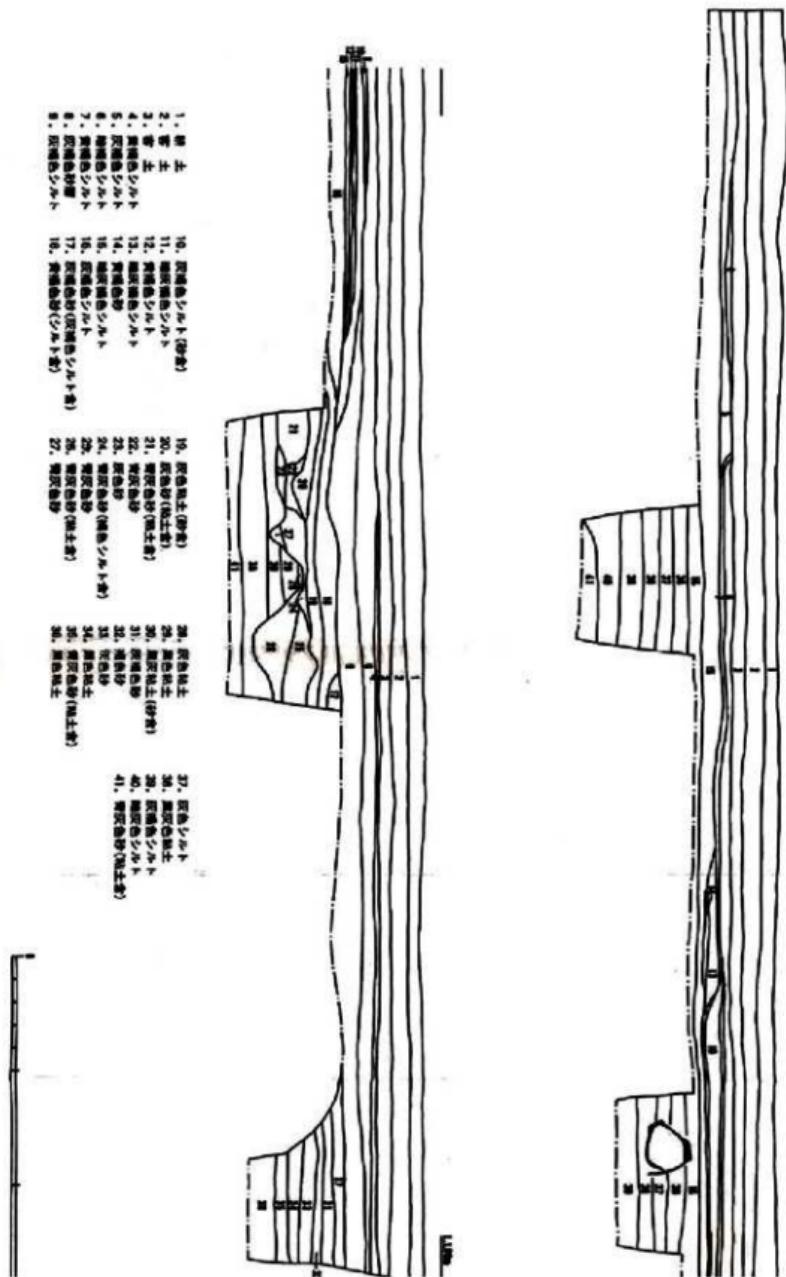
- | | | | | |
|----------------|---------------|-------------------|----------------|-----------|
| 1. 植土 | 8. 非褐色シルト | 15. 非褐色 | 22. 非褐色砂 | 29. 黄色シルト |
| 2. 落土 | 9. 非褐色砂 | 16. 非褐色シルト(非砂化) | 30. 非褐色シルト(砂化) | 31. 非褐色 |
| 3. 落土 | 10. 非褐色砂(非砂化) | 17. 非褐色土(非褐色) | 32. 非褐色土(非褐色) | 32. 非褐色 |
| 4. 落土 | 11. 非褐色砂(砂化) | 18. 非褐色下層に薄く粘土が混在 | 33. 非褐色砂 | 33. 非褐色 |
| 5. 落土 | 12. 非褐色シルト | 19. 非褐色 | 34. 非褐色土 | 34. 非褐色 |
| 6. 黄褐色シルト(砂分高) | 13. 非褐色砂(砂分高) | 20. 非褐色土 | 35. 非褐色 | 35. 非褐色 |
| 7. 黄褐色シルト(砂分高) | 14. 非褐色砂(砂分高) | 21. 非褐色 | | |



- | | | | | |
|-----------------|----------------|-------------------|----------------|----------------|
| 1. 植土 | 8. 非褐色シルト | 15. 非褐色 | 22. 非褐色砂 | 29. 黄色シルト |
| 2. 落土 | 9. 非褐色砂 | 16. 非褐色シルト(非砂化) | 30. 非褐色シルト(砂化) | 31. 非褐色 |
| 3. 落土 | 10. 非褐色砂(非砂化) | 17. 非褐色土(非褐色) | 32. 非褐色土(非褐色) | 32. 非褐色 |
| 4. 落土 | 11. 非褐色砂(砂化) | 18. 非褐色下層に薄く粘土が混在 | 33. 非褐色砂 | 33. 非褐色 |
| 5. 落土 | 12. 非褐色シルト | 19. 非褐色 | 34. 非褐色土 | 34. 非褐色 |
| 6. 黄褐色シルト | 13. 非褐色砂(砂分高) | 20. 非褐色土 | 35. 非褐色 | 35. 非褐色 |
| 7. 黄褐色シルト | 14. 非褐色砂(砂分高) | 21. 非褐色 | | |
| 8. 非褐色砂 | 15. 非褐色シルト(砂化) | 22. 非褐色砂(非砂化・粘土) | 29. 黄褐色砂 | 36. 非褐色シルト(砂化) |
| 9. 非褐色砂 | 16. 非褐色シルト | 30. 黄褐色シルト | 37. 非褐色シルト | 37. 非褐色(砂土・砂化) |
| 10. 非褐色シルト | 17. 非褐色シルト | 31. 黄褐色砂(砂化) | 38. 非褐色シルト | 38. 非褐色(砂土・砂化) |
| 11. 非褐色シルト | 18. 非褐色砂(粘土) | 32. 黄褐色砂 | 39. 非褐色シルト(砂化) | 39. 非褐色(砂土・砂化) |
| 12. 非褐色シルト(砂化) | 19. 非褐色シルト | 33. 黄褐色砂(砂土・粘土) | 40. 非褐色砂 | 40. 非褐色砂 |
| 13. 非褐色シルト(砂分高) | 20. 非褐色砂(砂化) | 34. 黄褐色シルト | 41. 非褐色砂 | 41. 非褐色砂 |
| 14. 非褐色シルト(砂分高) | 21. 非褐色砂(砂化) | 35. 黄褐色シルト | 42. 非褐色砂 | 42. 非褐色砂 |

1. 黒土
 2. 黄土
 3. 灰土
 4. 黄褐色シルト
 5. 黑褐色シルト
 6. 黑褐色シルト
 7. 黑褐色シルト
 8. 黑褐色シルト
 9. 黑褐色シルト
 10. 黑褐色シルト(砂質)
 11. 黑褐色シルト
 12. 黑褐色シルト
 13. 黑褐色シルト
 14. 黑褐色シルト
 15. 黑褐色シルト
 16. 黑褐色シルト
 17. 黑褐色シルト(灰褐色シルト質)
 18. 黑褐色シルト(砂質)

19. 黑褐色土(砂質)
 20. 黑褐色土(灰土質)
 21. 黑褐色土(灰土質)
 22. 黑褐色土
 23. 黑褐色土
 24. 黑褐色土(砂質シルト質)
 25. 黑褐色土
 26. 黑褐色土
 27. 黑褐色土
 28. 黑褐色土
 29. 黑褐色土
 30. 黑褐色土(砂質)
 31. 黑褐色土
 32. 黑褐色土
 33. 黑褐色土
 34. 黑褐色土
 35. 黑褐色土
 36. 黑褐色土
 37. 黑褐色土
 38. 黑褐色土
 39. 黑褐色土
 40. 黑褐色土
 41. 黑褐色土(砂土質)
 42. 黑褐色土
 43. 黑褐色土(砂土質)
 44. 黑褐色土
 45. 黑褐色土
 46. 黑褐色土
 47. 黑褐色土



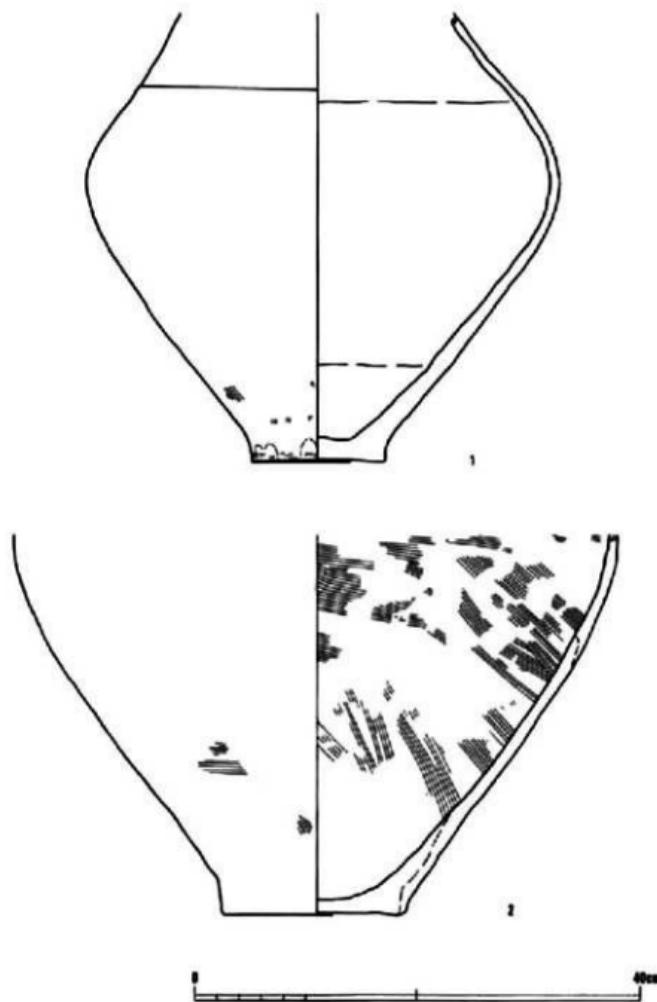
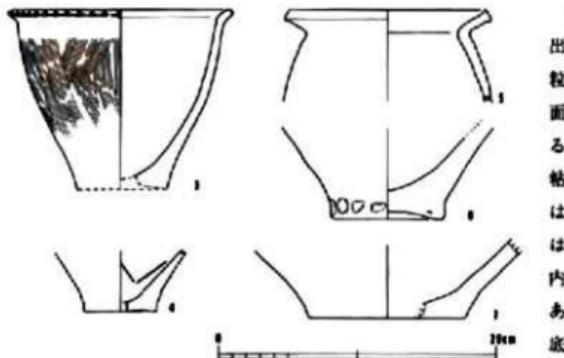


圖13圖 出土遺物實測圖(1)



第14図 出土遺物実測図(2)

4はA-9の黒色粘土出土の底部で、胎土は砂粒を多く含み粗い。内外面ともにナデ調整である。6はC-16の黒灰色粘土出土の底部で、色調は灰茶褐色を呈し、胎土は砂粒を多く含み粗い。内外面ともにナデ調整である。4・6とともに壺の底部である。

5は壺口縁で、内外面ともにナデ調整である。7

は壺の底面で、外面の調整も不明だが、内面はナデ調整である。6・7ともに弥生時代中期(IV様式)のものである。

弥生時代後期~古墳時代初期の遺物(第15~16図、図版41~42)

今回の調査では、最も多くの遺物がみられる時期であり、この遺跡が最も盛行する時期であろう。

8~10は二重口縁の壺で、11・12の胴部も壺であろう。器形は異なるが各個とも調整はほとんど変わらない。外面は粗く乱雑な刷毛調整後に、頸部を縦方向、胴部を縦か右下り方向に粗く乱雑な施磨きをする。胴部内面は刷毛ナデ調整、頸部と口縁部の内面は施磨をする。10の口縁部内面はナデとなっている。

器形は8がくの字に開いた頸部に大きく外反した口縁をもつ。9・10は直立した頸部の上端が外方に開き、9はやや外反した口縁を、10は直立した口縁をもつ。ともに口縁外面に3条二段の撚引き波状文、口唇部に刻み目を施している。大きく張った胴部をもち、底部は極めて丸底に近い平底となる。12の底部も同様で、平底から丸底への過渡期であろう。

13~16は壺で、13~15はくの字の口縁を有する。外面は叩き後、刷毛かナデで叩き目を消している。内面は13・14はナデ、15は底部付近をナデ、胴下半から上半はナデであるが、一部に刷毛が残る。14は口縁内面と刷毛調整している。

16は器形の薄い胴部に、端部を上方につまみ上げて端面とした口縁部をもつ。口縁内面はナデ、胴部外面は細い刷毛調整、胴部上半の内面には指頭圧痕が残り、下半はヘラ削りをしている。播磨・讃岐等にみられる壺といわれているものである。

17~21は鉢であるが、18は不整形上げ底の底部をもち、体部の先端をそのまま口縁としたも

のである。口縁端部は未調整であるが、端面に沈線状の深いミゾをもつ。外面は叩き後ナデ、内面は刷毛後ナデ調整している。口縁が未調整で一見擬口縁とみえること、底部、内外面の調整など13の壺の底部から胴下半に極似している。

17・19は尖底ぎみの底部をもち、体部の上端をそのまま口縁としたものである。19は端面をもち、一部沈線状のものが残る。17の口縁は未調整で、外面は施磨き、内面をナデ調整している。底部・外面の調整は、壺と極似している。

20は体部の上端を、外開きにつまみ上げて口縁としたものである。外面は粗い施磨き、内面はナデ調整。

21は、つまみ出した底部に、丸い体部からやや外反する口縁をもつ。口縁はやや内湾し、端部は丸く納められている。外面はともにナデであるが、口縁内面には一部刷毛が残る。頭部内面は施状工具を当てている。

22・23は高杯で、22の杯部は不明確な棱をもち、内外面ともヘラ磨きしている。23の脚部は外面施磨き、内面ナデ調整。筒部内面にしばり痕が残る。

24は脚付小形壺で、脚端部に4条の沈線を施し、口縁外面は施状工具によるナデで、擬凹線状効果を出している。外面の調整はていねいな施磨き、壺部内面も施磨きし、胴部内面は刷毛調整をする。壺部と脚部の接合はソケット方式で、脚部上端に細い棒状のものを差し込んだ痕跡を残している。

その他の土器

25は須恵器杯壺である。25は凹面となる口縁端面を有し、天井部と口縁部とをわけ棱は鋸さを欠く。ヘラ削りの範囲は天井部の約3/4に及ぶ。

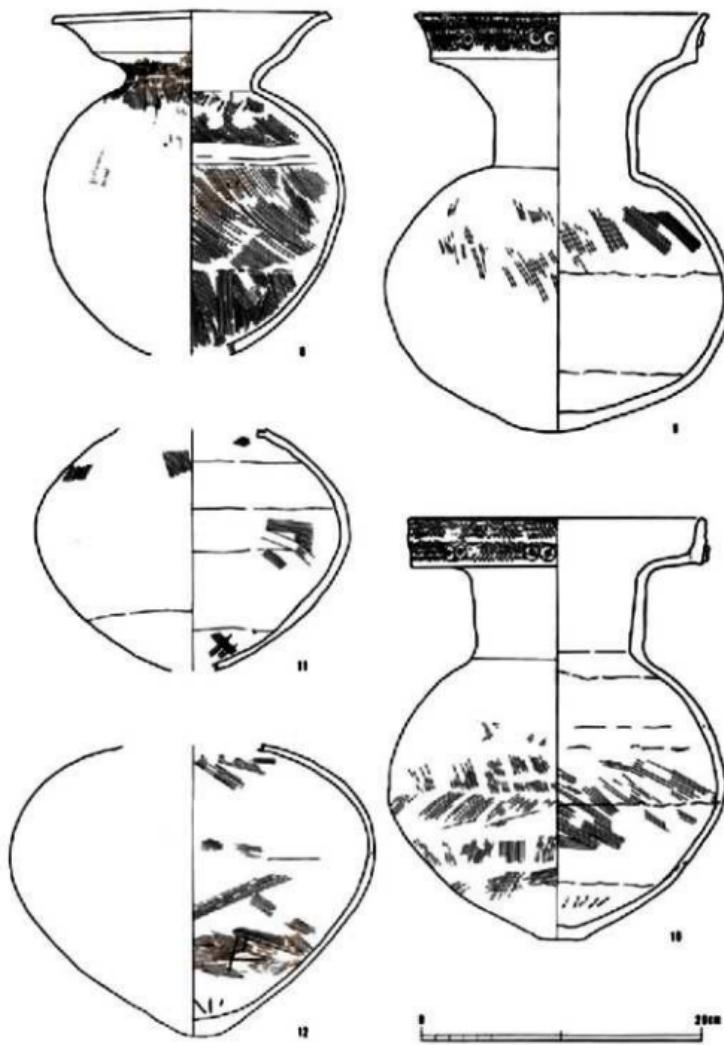
26は須恵器短脚壺の破片で、口縁端部を外に拡張し、凹面となる端面を形成している。色調はチヨコレート色を呈する。

27は土師器の無頸壺の破片であるが、残りが悪く、調整等不明である。

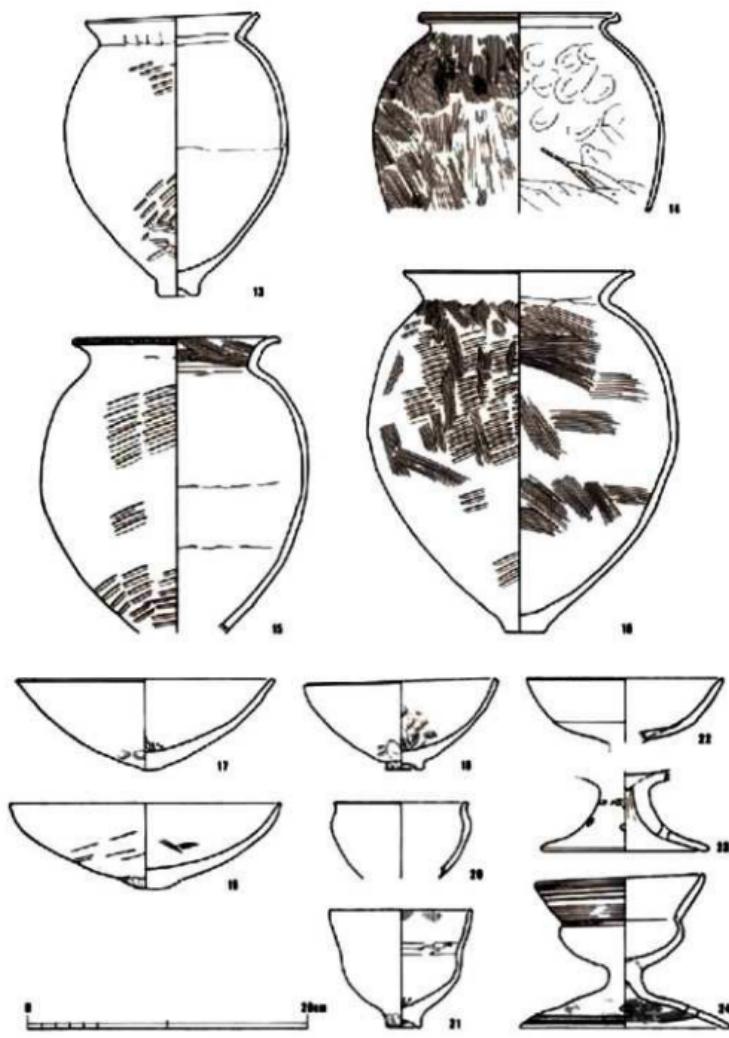
28は須恵器捏鉢の破片で、内外面ともにナデ調整。

29は土師器の土鍋の破片である。内外面ともナデ調整している。

25~27は古墳時代後期のものと考えられ、25・26は陶邑編年のTK-23に比定できるものと考えられる。28・29は中世（室町時代）に属するものと考えられる。



第150圖 出土遺物實測圖(3)



第16圖 出土遺物實測圖(4)

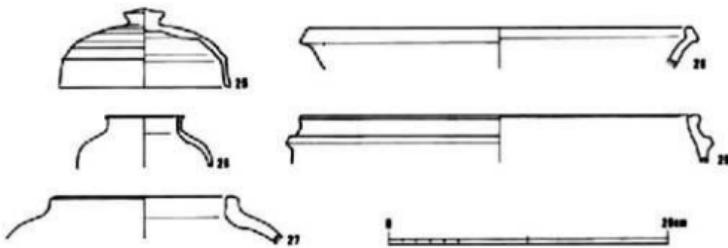


図17 出土遺物実測図(5)

第3節 小結

調査結果

- 以上が今回の調査の概略であるが、これを要約すると、
- ① 今回の調査では、遺構と判断できるものは、B-17で検出した壺棺だけであった。しかしそれも掘り方は検出できなかった。したがって壺棺と断定するには疑問も残るが、蓋をした出土状態から、壺棺と見て間違いないものと思われる。時期は土器の特徴から見て弥生時代前期中段階と思われる。
 - ② その他遺構ではないが、A-3・B-14・20-23にかけて、旧河道が検出され、内部から弥生時代後期末～古墳時代初頭の土器が多数出土した。したがってB-17、A-3からB-23にかけての地域は、第2次確認の調査も含め、何らかの調査が必要と思われる。

遺物

今回の調査では弥生時代前期・弥生時代後期末～古墳時代初頭・古墳時代後期・中世の土器が出土した。

その中で、弥生時代後期末～古墳時代初頭の土器には、一つの興味ある現象が見られる。それは鉢と、壺あるいは壺との間に見られる共通性である。先述したように底部の形状、内外面の調整方法等に、極めて似た特徴が見られ、17-19の鉢と壺の胴下半、18の鉢と13の壺胴下半の形態は極似している。また鉢の中で18・19のように未調整の口縁が擬口縁状となり、口縁端面に深い沈線状の溝を持つものがある。その他、溝は見られないが、17のように口縁が未調整で擬口縫となるものもある。こうしたことから17-19の鉢は本来壺あるいは壺の底部から胴下半として制作された物で、それに若干手を加え、鉢としたものであろう。口縁端面に見られる深い溝は壺あるいは壺として制作する際に、分割して制作した最大胴径部との接合力を高めるために、入れられたものであろう。

第4章 全面調査

第1節 昭和54年度の調査



第16図 昭和54年度調査

昭和54年10月29日(月)

県教育委員会王子分館から資材を積み込み現地へ運搬。現場事務所（2×4間）へ資材を入れる。

10月30日(火)

ベルトコンベヤなど重機類の手配と、区長室へのあいさつ。

10月31日(水)～11月2日(金)

調査前の全景写真撮影後、重機で表土掘削を行う。

11月5日(月)～11月9日(金)

重機で掘り下げた後を清掃する。

11月12日(月)～11月16日(金)

第Ⅳ区：黒色泥土を掘り下げる。両端を丸く面取りした木製枠（第49図3）出土する。

11月19日(月)～11月22日(木)

第Ⅳ区：土層断面図および撮影

第Ⅱ区：青灰色砂（旧河道内堆積）を掘り下げる。黒灰色シルトをベースにした中世溝を検出する。

11月26日(月)～11月30日(金)

第Ⅱ区：中世溝掘り下げる。清掃・撮影後、平面図作成。

12月3日(月)～12月7日(金)

第Ⅱ区：青灰色砂を掘り下げると、完形品の土器が出土はじめる。南側では、土器数個体が調査区外へ出るので、拡張区を設定して掘り進める。この段階では、旧河道と礫層・青灰色砂との関係がじゅうぶんに把握できていなかった。そのため、礫層をベースにした青色砂の堆積を溝（幅約4m）と考えて遺物を取りあげている。

12月10日(月)～12月14日(金)

第Ⅰ区：掘り下げ開始。青灰色砂掘り下げ完了。

第Ⅱ区：平面図・断面図作成。

12月17日(月)～12月21日(金)

第Ⅰ区：平面図・断面図作成。

調査終了区から埋めもどし開始する。

第Ⅱ区：東側にトレチを入れ、中世溝とその下の土層の関係を調べる。このトレチの下層の堆積状況を把握するに至り、礫層も旧河道内堆積物であることが判明する。

12月24日(月)

本年度の作業を終了し、王子分館へ資材を引きあげる。

本年度の調査は、1978年度確認調査において、トレンチ付近で検出した多量の土器を含む溝遺構、あるいはトレンチで確認した弥生時代前期の壠稟の存在から、付近に集落遺跡の出土する可能性が高いと判断して実施したものである。したがって、溝（旧河道）付近の全面調査範囲は溝（旧河道）の土器出土量の多い地点とその周間である。本年度の調査域は、第Ⅰ区・第Ⅱ区・第Ⅳ区のうちの800m²である。

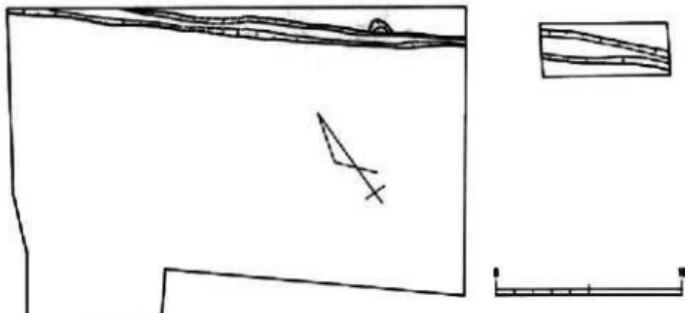
遺構

(1) 中世溝

第Ⅱ区の北側で検出した中世溝は、第Ⅱ区の東から西方向に流れる。溝は第3層（暗灰色土）を削りにして掘り込まれる。溝幅は190cm、深さ50cm。溝内の堆積は、大きく分けると上層の灰褐色極細砂層と下層の灰色砂層になる。遺物は、下層に土師器片がかなり含まれるが、圓化しいうる遺物は少ない（第46図152・157～159）。含まれる遺物から考えると、溝の存在した時期は、鎌倉時代である。

溝の下底部の灰色砂は、旧河道上面青灰色砂層までは達していない。後述の弥生時代後期から古墳時代初頭の水田遺構及びそれに伴う他の遺構廃絶以降、遺跡で時期の知れる遺構は、この中世溝まで存在しない。

この溝は、第Ⅲ区ではほぼ条里方向に沿って流れるが、第Ⅳ区では、検出していない。また、現在の条里地割の畦とも一致せず、若干北を流れる。



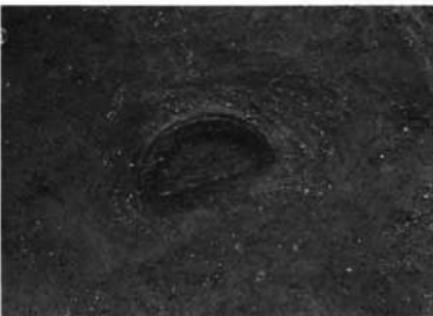
第19図 中世溝

(2) 旧河道

調査区のほぼ中央を旧河道が流れる。第Ⅰ区では西肩、第Ⅱ区では東西肩を検出した。当初、旧河道という認識をもたず、幅4m、深さ0.8mの溝として遺構を検出したため、中洲状に堆積する堆积については、一部断ち割り調査を実施したのみである。

第Ⅱ区では、礫層が広範囲に堆積する。河道の流れる方向が北東から西へ曲がる屈曲点にあたるためであろう。礫は、幅17mに亘って認められる。

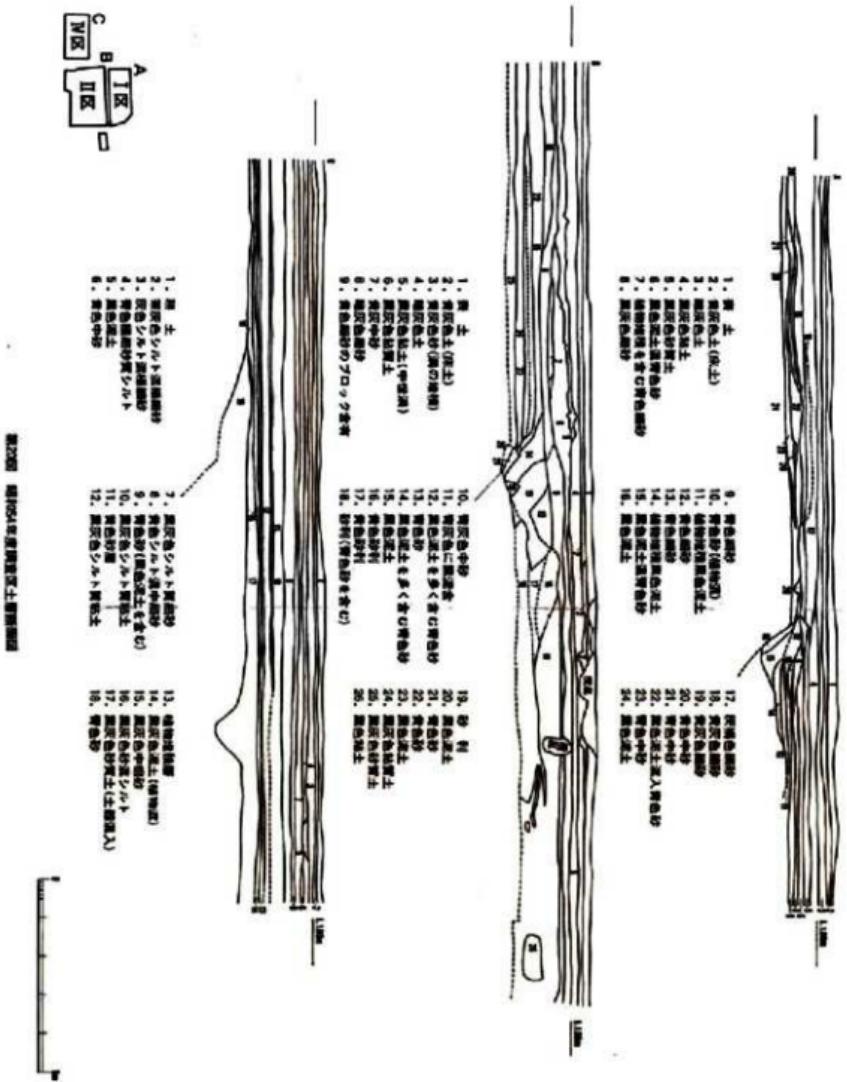
第Ⅳ区は、旧河道が認められなかった。旧河道が第Ⅳ区の南側を流れるため、旧河道の刷を形成する黒色泥土が全域にみられる。この地区では、黒色泥土を深掘りし、その土層断面を観察した（第20図C）。黒色泥土は2.5mの深さまで緩くが、その間、程度か氾濫があったようで、植物堆積層や砂層の堆積が認められる。なお、第47図の木器のうち3と5は、黒色泥土中からの出土である。



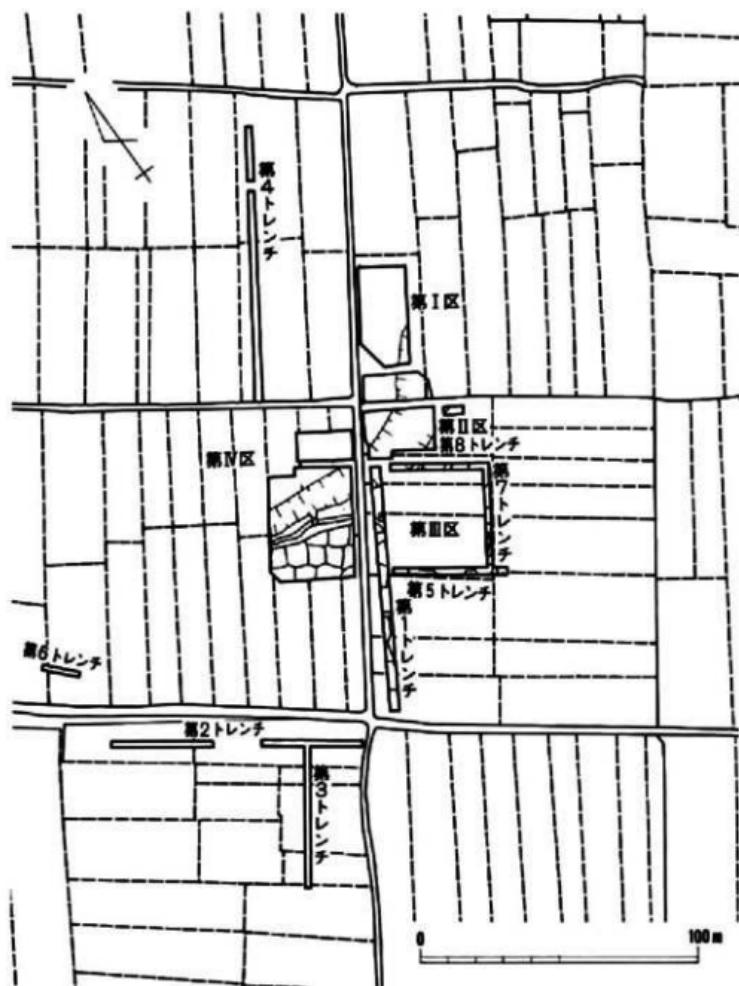
第Ⅰ区 旧河道 不明木製品出土状況



第Ⅱ区 旧河道 土器出土状況



第2節 昭和55年度の調査



第21図 昭和55年度調査

昭和55年度発掘調査経過（昭和55年4月15日～10月2日）

本年度は昨年度から実施されている旧河道の全面調査（2,800m²）の残り2,000m²の予定で第Ⅰ区・第Ⅳ区の調査に取りかかったが、第Ⅰ区で杭列を第Ⅳ区で杭列及び畦畔状の高まりを見た。水田遺構の可能性があるとして抜張区を設定し精査を行った結果、1枚の面積が50m²前後と推定される水田遺構9枚を検出した。

これがために関係者と協議のうえ、インター・チェンジ内で工事が施行されていない部分に計8本のトレーナーを設定し、水田遺構の範囲を追求した結果、第2・3・4トレーナーでは層序が乱れ、畦畔状の高まりが認められなかった。第6トレーナーでは層序が安定しているにも拘らず、畦畔状の高まりが認められなかった。

今年度の調査面積は第Ⅰ区・第Ⅳ区、各トレーナーを併せて2,340m²で調査日数は131日間であった。

昭和55年4月15日(火)

午前10時、王子分館から作業道具等を搬出して現地へ。

4月16日(水)～4月18日(金)

本四連絡橋公団洲本工事事務所を始め、各関係機関にあいさつ傍々協力を依頼する。

4月21日(月)～4月25日(金)

本年度の調査は、昨年度及び一昨年度の調査で明らかにされた旧河道の調査であるため、旧河道の上面まで重機による掘削を第Ⅰ区から開始すると共に、作業の能率化を図るべく、ベルトコンベヤーを使用するため、電機配線工事を業者に依頼する。

4月26日(土)～5月5日(日) 飛び石除去のため現地作業休止。

5月6日(火)～5月10日(土)

重機による掘削作業が終了した第Ⅰ区について人力による発掘作業開始、引き続いて第Ⅳ区の掘削作業に入る。

この頃、中国大陸から黄砂が日本海・瀬戸内海を経て飛来、終日曇天が続く。

作業員は建設会社から提供を受けているため、月曜日～金曜日までの週5日間稼働が不可能なため、2人の調査員は交代で土曜日も現地調査を行うという変則勤務とした。

5月12日(月)～5月17日(土)

第Ⅰ区：調査区に並行して東西に走る溝（中辻）を検出。

5月19日(月)～5月24日(土)

第Ⅰ区：調査区のはば中央の東壁を清掃中に灰褐色シルト層の帯状に盛り上がった遺構を確認。下端で幅70cm～80cmの広がりをもつ、水田の畦畔と思われ、平面的な広がりを求めてその検出作業に入るが、検出不能なため追求作業を断念する。

調査区の南東隅で溝の上面を検出。昨年度調査（第Ⅱ区）の際検出した、旧河道の一部と判明し、実測及び写真撮影。

5月26日(月)～5月31日(土)

先週確認した帯状の盛り上がり部分を平面的に掘り下げたところ、杭列が出土。

6月2日(月)～6月7日(土)

第Ⅰ区：杭列検出完了したので実測及び写真撮影を行う。

旧河道を検出中であるが湧水が激しく、悪戦苦闘する。

第Ⅳ区：先週重機による掘削が終了したので清掃。わずかに杭列の痕跡を見い出したために、西面の壁面を清掃し土層の層序を検討する。

6月9日(月)～6月14日(土)

第Ⅰ区：調査が完了したので埋めもどしを行う。

第Ⅳ区：旧河道の砂層を掘り下げる。中州状に堆積した砂利層直上から、いくつかの土器集積場所がみつかる。杭列は、小トレンチで土層を確認すると、杭間が盛り上っていることが確認できた。

6月23日(月)～6月28日(土)

第Ⅳ区：旧河道を砂利層まで掘り下げる。河道に対して直交して残した土層観察用の畦を清掃し、撮影する。南壁の土層を精査中に、畦畔状のたかまりを3ヶ所で見つける。土層を何度も削り直しても、水田の畦畔のように見えるため、拡張区を設定して掘り進めることにする。

6月30日(月)～7月5日(土)

第Ⅳ区：拡張区を掘り進めるが、畦畔にはあたらない。杭列に伴う、枝溝と樹の関係について土層を調べる。

枝溝と旧河適合流地点の砂層中から、なすび形鉄出土。この頃から梅雨に入り、雨の日が多くなる。

7月7日(月)～7月12日(土)

第Ⅳ区：拡張区から畦畔を検出する。畦畔は、薄い粘土で覆われているため、検出作業は比較的容易である。計7枚の水田を検出したが、一枚の面積はまだよくわからない。小雨が降り続く。

7月14日(月)～7月19日(土)

第Ⅳ区：水田検出について記者発表を行う。第Ⅳ区周囲の土層断面図を作成する。

7月21日(月)～7月26日(土)

第Ⅳ区：拡張区は第Ⅳ区の南側に設定して調査したが、水田の範囲が拡大しそうであるため、西側にも拡大して調査を行う必要が生じ、西へ10m拡張する。

7月21日(火) 神戸大学 吉良八郎先生来現。

7月28日(月)～8月2日(火)

第Ⅳ区：西側の拡張区を掘り下げる。水田域の範囲を確定するため、トレーンチ調査の必要が生じたため、本四公団と協議する。

7月28日(火) 京都国立博物館 八賀晋氏来現。

8月4日(月)～8月9日(土)

第Ⅳ区：水田畦畔の平面図作成。足跡に石膏を入れ取りあげる。

第Ⅳ区：第1トレーンチ（幅3m、長さ92m）の掘り下げを開始する。

8月6日(火) 岡山理科大 三好教夫先生来現。

8月11日(月)～8月13日(水)

第Ⅳ区：水田畦畔写真撮影。

第Ⅳ区：第1トレーンチ掘り下げる。

8月18日(月)～8月23日(土)

第Ⅳ区：第1トレーンチの水田畦畔検出。全体に畦畔のあることが判明。

第Ⅳ区：第2トレーンチを設定して掘り進めるが、湧水が激しい。第2トレーンチでは水田畦畔を確認することができない。

8月25日(月)～8月30日(土)

第Ⅳ区：第1トレーンチ平面図作成。第3トレーンチ、第4トレーンチを設定し掘り始める。

9月1日(月)～9月6日(土)

第Ⅳ区：第5トレーンチを掘り下げる。第2～4トレーンチ平面図作成。9月4日、県文化財保護審議会史跡・埋蔵部会委員視察。

9月8日(月)～9月13日(土)

第Ⅳ区：拡張区の旧河道を砂利層まで掘り下げる。台風のため大雨続く。

9月15日(月)～9月20日(土)

第Ⅳ区：第6～8トレーンチを掘り下げる。第5～8トレーンチの平面図作成。トレーンチの土層断面図作成開始。

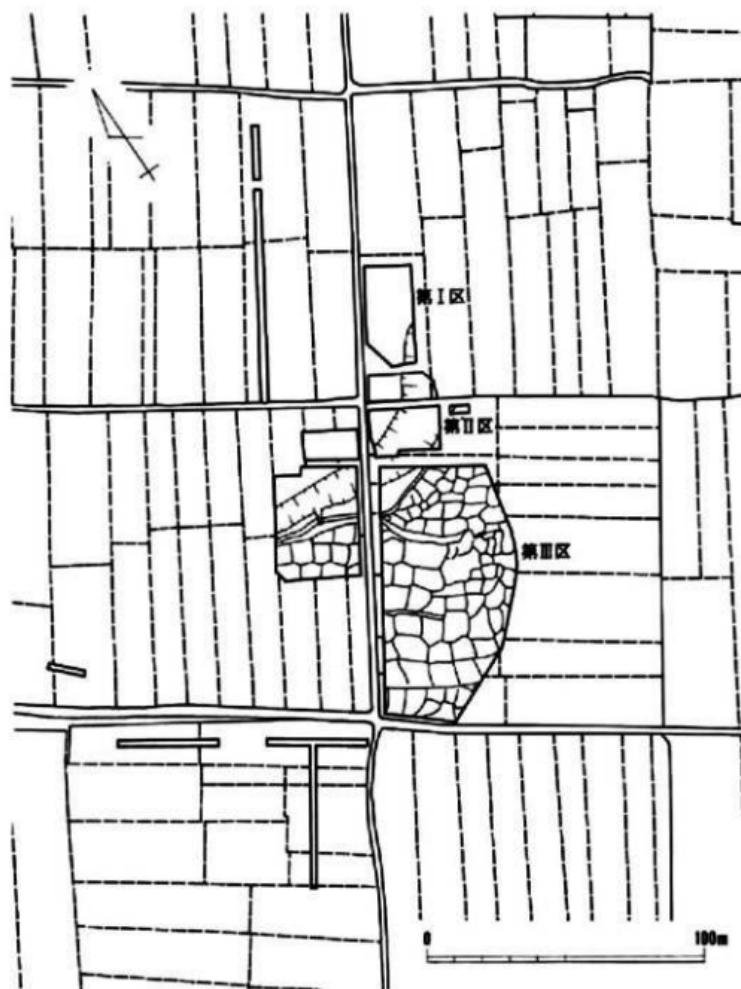
9月22日(月)～9月27日(土)

第Ⅳ区：土層断面図と写真撮影の終了したトレーンチから埋め戻しを始める。

9月29日(月)～10月2日(木)

第Ⅳ区：第Ⅳ区埋め戻し。本年度の作業終了。

第3節 昭和56年度の調査



第22図 昭和56年度調査

昭和56年度発掘調査経過（昭和56年7月13日～昭和57年1月8日）

本年度の調査は昨年度の調査で水田遺構の範囲確認を行った部分のうち第Ⅲ区の全面調査である。

調査の目的は

(1) 水田遺構の平面プランの検出

- ①水田1枚の面積と高さの検出
- ②水田区画の形態
- ③水利方法

(2) 水田遺構の時期

(3) 中・下層水田の確認

(4) 弥生時代前期の遺構面の確認

(5) 第Ⅳ区の調査範囲の確認

したが、上層水田においては水田面上層に黄白色粘土が堆積していたので、(1)の問題は比較的容易に解決した。大蛇跡内及び蓄水池状遺構から弥生時代後期～古墳時代前期の時期を決定することができた。

中・下層水田は土層断面によって確認することができたが、上層に堆積する洪砂の堆積状況によって一部不明な点を残した。

弥生時代前期の遺構面は、壇棺出土地点を中心に精査したが不明であった。

今年度の調査面積は4,000m²で調査日数は計131日間であった。

昭和56年7月13日(月)

午前9時15分、王子分館から現地へ作業道具等を搬出。

調査区周辺はインターチェンジになるため工事用の仮設道路があつたり、盛土部分があつたりして、まさに工事現場であったが、地区農民の水田があり、淡路島特有の農民車、軽自動車が通行するための農道を確保するためと調査関係者及び関連の車輌用の迂回路を設置する必要があり、本四公團と協議のうえ本日から工事に入る。

調査事務所となる、プレハブ（3間×4間）は夕刻には建ち上がり、道具類を搬入。

7月14日(火)～7月18日(土)

本年度調査区の第Ⅲ区（4,000m²）には耕土処分地がないため、本四公團と協議のうえ、来年度調査区にあたる第Ⅳ区を土置場にすることにし、延100mにわたって碎石を入れた仮設道路を敷設する。

7月20日(月)～7月25日(土)

土層確認のため、調査区の壁に沿って幅50cmのトレンチを入れる。

第Ⅴ区は昨年度トレンチ調査で畦畔の位置等を確認しているので、本年度の調査は畦畔を覆っている黄灰色粘土の上層まで、重機で掘削する。

7月27日(月)～8月1日(火)

調査区の南側から順次、上層水田の畦畔検出作業を開始。最大幅65cmの畦畔を検出する(南側大畦畔)。調査区全域の平板測量を実施。

8月3日(月)～8月8日(土) 先週と同作業。

8月6日(祝)～8月8日(土)

宮崎大学 藤原宏志助教授が来現し、プラント・オバール分析用の試料を5地点、計44点採取。

8月7日(金)

神戸大学 須野 茂先生が来現し、珪藻遺骸用のサンプルを4地点、計31本採取。

8月10日(月)～8月13日(木)

調査区を南北に20m毎に区切り、それぞれ南から北へA～D地区と呼称したが、A地区の上層水田の検出作業を終了。写真撮影後、実測図作成。

8月14日(金)～8月17日(月) 盐休み。

8月18日(火)～8月22日(土)

B地区上層水田の畦畔検出作業に入る。東側では比高差が大きいため階段状に水田を検出。一方、西側では東から西へ延びる幅50cmの軟軟状水田を検出。

8月24日(月)～8月29日(土)

B地区において足跡を発見。その検出方法について、昨年度、樋原考古学研究所 石野博信氏に問い合わせた方法を採用しながら、試行錯誤を繰り返す。

8月31日(月)～9月5日(土)

C地区上層畦畔検出作業。

9月1日(火)

樋原考古学研究所 石野博信氏、京都国立博物館 八賀 晋氏が来現され、種々ご教示を受けると共に、東京工業大学 平沢彌一郎教授も来現され(検出された足跡についてその遺存状態から)性別・老若の別などの教示や左右の足がそれぞれ違った機能を持っていることなど、説明を受け、改めて足跡を見直す。

また、地元新聞社が11月23日(日)に主催するシンポジウム「淡路びとを考える」についての打合わせを行った。

9月7日(月)～9月12日(土)

C地区上層水田の畦畔検出作業を終了するが、雨のため作業難行する。

中央大畦畔上から半蔵された變形土器を検出、周辺を清掃するが掘り方等は検出できな

かった。

9月14日(月)～9月19日(土)

B・C地区写真撮影及びC地区の実測図作成、D地区畦畔検出作業に入る。

9月21日(月)～9月26日(土)

D地区畦畔検出作業、NM04付近で黄褐色砂層の落ち込みを発見し、精査に入ると共に2方向の杭列を検出。

C地区：足跡検出作業及び実測図作成。

9月28日(月)～10月3日(土)

D地区：畦畔検出作業。

10月5日(月)～10月10日(土)

D地区大畦畔（中央）検出作業：10月9日㈮に上層水田をヘリコプターによる写真撮影を行うために調査区全域の清掃。

10月6日(火)

県文化財保護審議会史跡・埋蔵部会 錦木義昌・高井柳三郎委員現地視察。

10月9日(金)

本日、写真撮影の予定であったが、雨のため10月16日(金)に変更。

10月10日(土)

淡路考古学会のメンバーを中心に現地説明会を開催。

10月16日(金)

ヘリコプターによる航空撮影。朝方一時雨が降り、撮影時は曇天であった。

しかし、高橋一学氏から、微地形の判別には大いに役立ったことを後日お聞きした。

午後から晴れ間が見え始めたので、ヤグラによる写真撮影を行った。

10月19日(月)～10月24日(土)

溜池状遺構内の土層観察用の畦畔を取り払い、遺構内の検出作業を急ぐ。

中・下層水田の畦畔検出作業を開始。

10月26日(月)～10月31日(土)

溜池状遺構検出完了。池底から完形の菱形土器2個体を検出。また、南北に走るしがらみ6件せて検出。

中・下層水田の畦畔検出作業難行。

10月30日(金)

京都国立博物館 八賀晋氏が来現され、溜池状遺構や中・下層水田検出を中心にご教示を賜わった。

11月2日(月)～11月7日(土)

中・下層水田の畦畔検出作業。畦畔は当初、上下2面あると考えていたが、詳細に断面観察を行うと3面以上の可能性があるようである。

11月9日(月)～11月14日(土)

中・下層水田の畦畔検出作業。

11月14日(土) 町立辰美中学校1年生50名見学。

11月16日(月)～11月21日(土)

中・下層水田の畦畔検出作業及びA区足跡検出作業。

11月22日(日)～11月28日(土)

中・下層水田の畦畔検出作業。A区足跡およびたどりの跡のため、数値のみ計測し、その後石膏を入れる。

11月22日(日)

櫛原考古学研究所 石野博信氏、京都国立博物館 八賀晋氏に来現して聞き、種々ご教示を賜わった。

11月23日(月)

地元新聞社主催によるシンポジウム『淡路びとを考える——古代の水田跡調査から——』を開催。

11月30日(月)～12月5日(土)

旧河道検出作業・足跡検出作業及び石膏入れ。

本週は町立御原中学校1年生、町立辰美中学校阿那賀分校生による足跡検出作業の体験学習。

12月7日(月)～12月12日(土)

調査区全域の足跡検出作業及び石膏入れを終了し、取り上げる。

12月8日(火)

ヘリコプターによる航空撮影のち、ヤグラによる写真撮影。

12月9日(水) 町立御原中学校3年生見学。

12月14日(月)～12月17日(木)

先週検出された杭列を実測。来年度調査を実施する第Ⅱ区の土量を確認するために、一部トレンチ調査。

本週をもって、本年度の調査を終了。

12月18日(金)～12月26日(土)

埋め戻し。

昭和57年1月6日(金)～1月8日(金)

埋め戻し終了。翌年度の調査に備えて、現場事務所、電柱等を補強。

第4節 昭和57年度の調査

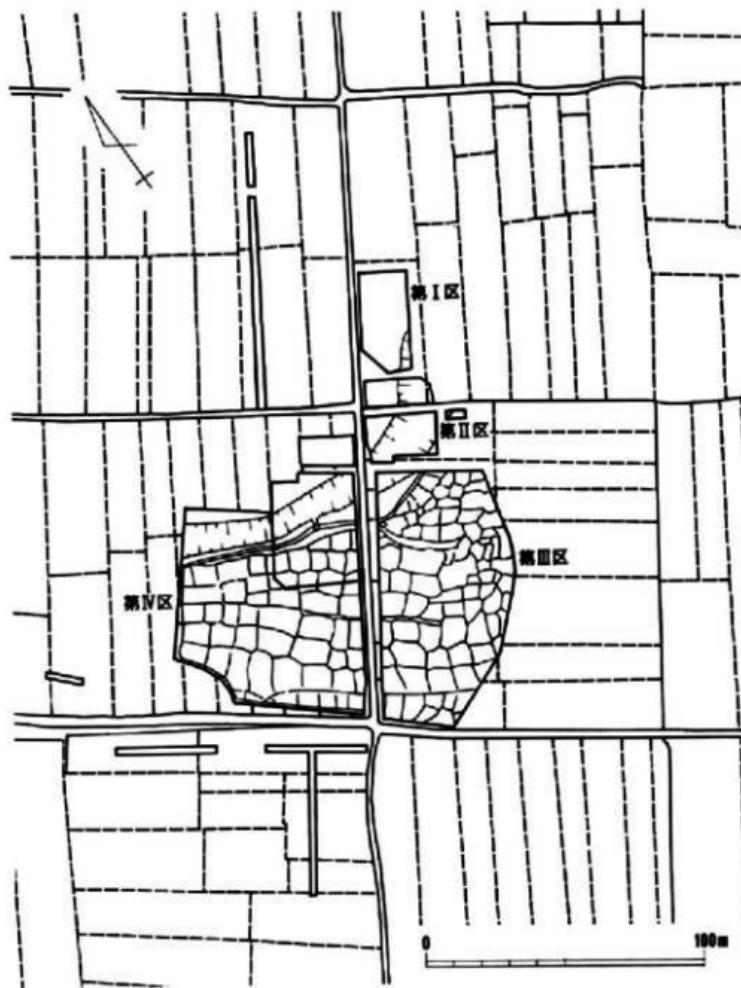


図23図 昭和57年度調査

昭和57年度発掘調査経過（昭和57年4月14日～9月18日）

本年度は志知川沖田南遺跡の調査の最終年度で第Ⅳ区の全面調査である。

調査は昨年度と同様水田遺構の検出にあつたが、中・下層水田の検出については種々検討を試みながら実施したが、満足する結果は得られなかつた。

しかし、東西に走る2本の大畦畔及び開田城の西端を確認できたことは大きな収穫であった。今年度の調査面積は4,864m²で調査日数は計136日間であった。

昭和57年4月14日(木)

強雨の中、魚住分館から現地へ。本年度の必要機具等は昨年度の現場事務所に保管しているので、カメラ類、測量機械等のみを調査員各自の車に積載して運搬。

4月15日(金)

本四公團河工事事務所へ赴き、本年度調査の打ち合わせ、後、西淡町役場で調査協力の依頼、調査現場で機械類及び作業員の提供を受ける建設会社の現場責任者等と今後の作業日程、方法を打ち合わせる。

4月16日(土)

本年度の調査範囲は、東西64m×南北76m計4,864m²であるが、その調査範囲の確認、また公團が設置した基準点から測点を調査地付近まで移動させる。

4月19日(月)～4月23日(金)

重機による盛土除去作業、排水は昨年度の調査区であった第Ⅲ区へ持ち出す。

土層観察のため、周囲の壁に沿って昨年と同様、幅50cmのトレンチを入れる。

4月26日(月)～5月1日(土) 先週と同作業。

5月3日(月)～5月8日(土)

昨年度と同様、黄灰色粘土の上層まで重機による掘削を行うためには、今回の調査区内では約3,500m³の除土が必要である。1日平均130～150m³の除土を行っているが、その作業に要する期間は約1ヶ月である。

一方、重機による掘削以外は全て人力によるわけであるが、最大長150mの地点に集土地を設定しているために、1台7mのベルトコンベア30台を搬入し、その結線作業を始める。

5月10日(月)～5月15日(土)

除土作業が完了した地区から基準杭を設置し、13日(木)から作業員25名を投入して、畦畔及び水田面の検出作業を開始。

5月17日(月)～5月22日(土)

検出作業は調査区の東側から順次西側へ向って始める。

5月24日(月)～5月29日(土)

畦畔検出作業。

5月31日(月)～6月5日(土)

中央大畦畔を検出。他の畦畔には黄灰色粘土が覆っているが、当大畦畔にはそれがないため、検出作業に時間を要す。

他方、今週から検出され始めた畦畔の平板測量を開始。

6月7日(月)～6月12日(土)

畦畔の検出作業。昨年度とはほぼ同一作業員であることから、その作業手順は順調に進み、調査区域のはば1/2検出完了。

6月14日(月)～6月19日(土)

四周および20m毎に残している土層観察用畦畔を清掃し、断面図作成。

既に検出された水田跡を写真撮影。

6月21日(月)～6月26日(土)

中央大畦畔は西へ検出するにつれ、幅も高さも小さくなり、NM22付近で消滅した。水田可耕地はこの付近から西へはなかったものと思われる。

6月22日(火)

奈良国立文化財研究所 工業普通氏に来現を依頼し、各地で検出されている水田跡の現状や現地での作業方法等にご教示を得る。そして、畠位断面の剥き取りを企画してはどうかという指導を貰わった。

6月28日(月)～7月3日(土)

上層水田の畦畔検出作業の終了に引き続いて、北東から南西に走る用水路を中心大畦畔の北に接して検出。

7月5日(月)～7月10日(土)

7日本に航空撮影するために清掃を行ったが、当日、午前中雨のため中止し、10日(土)に延期し撮影を終える。

ただ、昨年の撮影業者と本年のそれとは異ったため、合成写真等問題を残したのではないかと危惧を残す。

7月6日(火)

昨年度から種々ご教示を戴いている、京都国立博物館 八賀 譲氏が来現。

7月12日(月)～7月17日(土)

10日(土)の航空写真に引き続いて、ヤグラを組み撮影を行なう。

その後、中・下層水田の検出作業に入るため、ベルトコンベアの再配置を行なう。

7月19日(月)～7月24日(土)

上層水田の検出時に用いたのと同様、土層の層序を調査区全体での作業方法を検討するた

め壁面のトレンチを深掘する。

7月26日(月)～7月31日(土)

中層水田以下の検出作業に入るが、先週確認した上層水田のそれと、中・下層水田の土色の違いは断面観察で読みとれるが、平面的に拡張していった場合、土層がシルト層のため中層の畦畔を検出しているのか、下層のそれを検出しているのか、混乱を始めたので、5mメッシュでトレンチを設定して断面でいずれかの畦畔を確認した後、平面で検出する方法に切り換える。

8月2日(月)～8月7日(土)

中・下層水田検出作業。昨年と同様、上層水田に比して足跡は圧倒的に多く検出された。

8月9日(月)～8月13日(金)

20ライン以西は5mメッシュのトレンチ内の断面観察でも畦畔を確認することはできない。故に、中・下層水田の開発は、20ラインより以東のみであるようである。

8月17日(火)～8月21日(土)

20ラインに沿って北から南へ流れる水路2を検出。中・下層水田に伴うものであろう。

畦畔等検出作業、本週をもってほぼ終了。

8月23日(月)～8月28日(土)

8月25日(木)

ヘリコプターによる航空写真、引き続いてヤグラからの写真撮影を行った後、足跡に入れた石膏を取りあげる。

8月27日(土)

強風をもたらした台風13号のため、作業員休憩用のテント等が使用不能。

8月30日(火)～9月1日(水)

旧河道検出作業及び平面図実測作業。

9月2日(木)～9月4日(土)

調査区の埋め戻し開始。

9月6日(月)～9月8日(水)

断面の剥ぎ取り（第17区東壁、南側大畦畔を中心）のため、奈良国立文化財研究所 秋山隆保氏が来現され、指導を受ける。

9月7日(火)

本日から調査員4名のうち2名が、総貫道内の西浜町鉢田道路の確認調査のため離現。

9月13日(月)～9月18日(土)

埋め戻しを完了し、延べ5年間にわたって実施した。三原インター・チェンジ内 志知川沖田南道路の全ての調査を完了。



第5章 遺構

第1節 水田跡

昭和55年度の調査は三原川の一主流であった旧河道部分（第I区・第IV区）を調査することにあった。

両区とも、作業の能率化を図るために旧河道の羽面の上層まで重機による掘削を行なった。しかし、当初の目的である上記の旧河道の検出には支障をきたさなかったが、羽面上層から発見された杭列及び同一層もしくはその下層から検出された橋などの機能分析について正確に論及できない失態を演じた。

一方、深掘したために断面を清掃中に疑問を抱き精査の結果、水田跡の平面検出ができるることは不幸中の幸いであった。

即ち、第IV区において東西方向に約20m 2列ないし3列の杭列が検出された。何らかの性格付けもしくは位置付けを考えるために断面観察を繰り返す中で、東側断面（杭列が直交する様）で断面が山型に盛りあがり、その両端に枕がそれぞれあることから、畦を護るために枕ではないかと判断し、南側断面を改めて清掃し観察を試みた。幅20mの断面の中で同一層内では等間隔で幅30cm高さ6cmの3ヶ所の高まりを確認した。結論から先に述べると、水田番号134～136（付図1）の上層水田の南北に走る小畦畔であった。

東側断面を更に詳細に観察すると先の杭列に挟まれた畦畔の上に少し位置をずらして同様の高まりを見出した。この上層を追求して南側断面へ行くと小畦畔をもつ層と同一層であることが確認された。

そこで関係者と協議を行ない第IV区の旧河道の追跡調査を一時中断して、同区を南側と西側に一部抜張したところ上層水田を検出した。（水田番号124～127、132～136）

再度この調査結果を基に関係者と協議を重ねインター・チェンジ内に水田遺構が存在する可能性があるとして全域にトレーンチを設定し検出に努めた。

既に第IV区で工事が行なわれていた一部を除き、インター・チェンジ（90,000m²）内に第1～第8トレーンチを設定し延べ431mにわたって調査を実施した。その結果、第IV区全域及び第IV区の一部で水田跡を検出できた。

検出された水田跡以外の地域は可耕地とそれ以外の地域に分けてみると、第IV区の第6トレーンチはシルト質よりもグライ土壌に近いものであり、水田耕作に適していない地域である。第2～第4トレーンチは恐らく洪水もしくは他の理由で水田が営まれたにも拘らずその痕跡を残さなかつたものと思われる。特に第4トレーンチを設定した地区は洪水によって流失したものであ

る。

第Ⅰ区では断面観察で畦畔上の高まりを確認し、平面的な検出を試みたにも拘らず検出方法に問題があったために抽出できなかった。

従って、今回の調査で水田跡を検出し得たのは第Ⅲ区及び第Ⅳ区内の延8,800m²である。同じ決路報道が北進する約190m北から590m北まで調査されている兩流遺跡では同時代の水田遺構が発見され、水田跡として同一のものとして連続するものであることが判明した。

(1) 水田遺構の検出について

上層水田は畦畔部分の一部を除いて田面部分を黄灰色粘土が覆っており、田面は細砂あるいはシルトまじり極細砂である。従って、この黄灰色粘土を除去すると畦畔と田面が検出された。

しかし、中層水田以下の畦畔検出作業については、ほとんど同質の土層であるため、その作業は困難を極め、一部検出に失敗に終った部分もある。

断面観察によると計5面の水田遺構が認められた。2面の水田は即ち5時期をあらわす水田ではない。土層の上下関係の追跡によって5面の畦畔を確認し得た。何らかの自然的・人工的な要因で畦畔が流失した後、直ちに畦畔を補修もしくは新しく引き直したための結果である。このことは下面の畦畔と上面の畦畔がある部分で連続することから推察できる。この事実は上層の畦畔が全て失しているのではなく、元の位置に復することが可能であったことを物語っている。

今回の報告では検出し得た上下2面の水田遺構を中心に述べるが、宮崎大学 藤原宏志助教授によるプラント・オパールの分析結果からするともう一面の水田遺構が検出される筈であるとのことであるが、平面的には検出し得ていない。

(2) 上層水田

一部を除いて水田面には黄灰色粘土が堆積していた。小区画水田を区画する小畦畔は、底面の幅15cm~35cm、高さ8cm~15cmで断面がかまぼこ状を呈している。水田間のレベル差がほとんどない場合は両方の田面から土を集め盛っているが、比高差のある場合は高方側水田の高まりがほとんどの例が多い。たとえば水田53と水田54を区画する小畦畔は水田54側では高さ2cmであるのにに対し、水田53側では高さ10cmである。このことは一方的に水田53側の土を削りとっていると考えられるが、水田53側の土を水田54側に盛っている状態は少なくとも土壌断面の観察からは判断できない。同様の例は水田52と水田51、水田47と水田46あるいは水田46と水田45・水田39等においてもいえる。

畦畔と畦畔のつながりは基本的には三叉状につながっている。季節や必要に応じて水口として利用された可能性の検討も必要であろう。

上層水田の開田時には前段階の水田時に水路として利用されたであろう旧河道は既に埋没しており、旧河道に沿うように水路が開削されている。水路は北から南にむかって流れおり第Ⅲ区では幅150cm・深さ30cmあるが第Ⅳ区南西隅では幅100cm・深さ10cmになっている。水路内からの遺物はなかった。水路は埋没した旧河道と並行して流れ水田域の北限を区切っており、第Ⅲ区では小畦畔に沿って、第Ⅳ区に入ると大畦畔に沿って水路が存在する。水田71で小畦畔を斬ち割って水口がある。水田70、71のレベルと周辺水田のレベルを比較すると、水田を巡った水は70、71へ集結するためこの水口は一方的に排水のみに利用されていたのがわかる。従って、この水路の用水の取水口は調査区東方の上流であろうと推定できる。水路土断面を観察すると水田域を覆っている黄灰色粘土が埋積時には約半分埋まっていた。

畦畔の一部切って水利をよくしようとした水口は、溜池状造構の入水口と出水口の計6ヶ所を除くと計51ヶ所検出された。水がよく流れていたことを思わせる痕跡がいくつかの水口で認められる。それは水田73と水田77、水田77と水田78、水田30と水田122の水口がそれである。この3ヶ所の水口には水によってえぐられたためにその部分のみ凹んでいる。一方、水田64と水田68の畦畔部分にはこれも水によってえぐられたと思われる凹地があるにも拘らず畦畔はつながっているものもある。水田25と水田30にある水口は、調査時には黄色粘土の小塊によって閉じられていた。水田30の性格を考える上で示唆を与えてくれるものである。

また、水田68及び水田78の水田には水口がそれぞれ5ヶ所ずつあり特異な例である。

南側大畦畔に取り付く畦畔には必ず水口があり、水の流れをよくしている。

(3) 大 畦 畔

2本の東西方向にのびるもので断面台形を呈している。南側大畦畔（幅50cm・高さ30cm）は現代の農道とは並行しているが第Ⅳ区 ND 16付近から南西へむかって屈曲する。小畦畔の頂上部は平坦部をもたないが、この大畦畔の頂上部には幅30~40cmの平坦部をもつ。田面には上層水田はもちろん中・下層水田にも数多くの足跡が検出されている。足跡は小畦畔上にも一部踏み込まれているが、2本の大畦畔には痕跡すら見い出せない。南側大畦畔の機能を考える上で暗示するものである。

他方、中央大畦畔（最大幅350cm・高さ30cm）は南側大畦畔と比して幅も広いが、西へ行くにつれ、順次幅は狭くなり NK 23付近で消滅する。また、北東から伸びてきた水路は NL 20付近から急速に狭くなり、西側断面ではわずかに幅100cm・深さ10cmで上層水田の開田域の、ほぼ西端を示していることを物語っている。

一部を除いて三原川系水系によって形成されたと思われる第Ⅲ区・第Ⅳ区の地形の中で、自然堤防状態高地の縁辺部をカットして掘られた中央大畦畔は、必ずしも一直線でない。南側大畦畔と比して農作業用の農道及び水利を管理する両面性をもっていたことと思われる。

(4) 水田地図

検出された水田地図は総計も合わせて141枚ある。

小畦畔によって囲まれた水田は地形によって大きく制約されており、等高線の高低差の大きい水田は小さく、高低差の小さい水田は大きく区画されている傾向がある。地形を概観すると北東方向に位置する水田76、水田84が標高が最も高く、標高116cmを数え、北西隅の水田86が標高53cmで、その比高差約60cmを数える。

1枚の水田内の比高差は精度5cm以内で5cmを超えるものはない。ただ、畦畔を検出する際黄灰色粘土のみを除去すればよいという先入観があったために、水田64、水田69および水田117については3枚もしくは2枚に分かれる可能性がある。上層の堆積物に何らかの理由で黄灰色粘土がなかったか、畦畔を取り除いて1枚の水田にした可能性もある。

中央大畦畔より北方に存在する水田はより南方に存在する水田とは10~20cmの比高差があり、且つ中央大畦畔との比高差は5cm~15cmあり、通常この大畦畔を越して水は流れない。

水田の区画は等高線の密なところ程小さく、粗なところ程大きい。例えば水田40・47・54・

表1 上層水田計測表

No.	面積(m ²)	平均高さ(cm)									
1	(2.55)	—	37	38.81	84.06	73	13.47	97.55	109	(49.39)	57.50
2	(49.31)	79.03	38	25.12	89.25	74	24.31	107.75	110	41.30	61.07
3	154.59	81.55	39	20.44	93.99	75	46.99	115.29	111	40.77	64.12
4	(38.59)	82.88	40	(26.26)	106.67	76	(23.32)	116.41	112	45.22	64.45
5	27.99	84.74	41	(17.89)	74.01	77	35.16	92.82	113	119.49	65.76
6	20.70	86.64	42	51.68	76.24	78	23.38	103.28	114	92.37	64.97
7	(28.19)	83.82	43	70.26	78.59	79	20.97	109.45	115	49.87	70.52
8	(11.27)	88.80	44	112.98	83.19	80	(29.18)	114.85	116	(33.83)	73.15
9	(31.85)	88.66	45	11.80	87.60	81	29.17	100.83	117	(86.66)	88.81
10	(55.11)	79.53	46	22.69	92.05	82	(19.10)	105.58	118	60.09	65.59
11	79.39	82.75	47	6.89	101.60	83	(28.94)	109.84	119	43.98	70.70
12	71.74	87.38	48	(55.78)	74.37	84	(18.40)	116.77	120	32.70	67.98
13	(64.91)	89.30	49	130.50	76.35	85	(17.57)	101.25	121	64.78	68.33
14	(2.68)	—	50	11.88	80.50	86	(62.20)	53.83	122	90.55	68.28
15	(28.96)	94.36	51	21.08	88.63	87	(66.18)	54.92	123	(45.63)	72.03
16	(20.37)	78.16	52	11.84	93.98	88	(103.12)	60.34	124	55.92	72.44
17	91.42	77.53	53	13.29	90.88	89	(9.70)	87.34	125	46.25	70.94
18	50.28	85.34	54	6.90	100.33	90	118.36	60.62	126	64.81	69.17
19	52.10	86.85	55	(26.71)	109.72	91	(2.38)	63.36	127	(35.94)	72.28
20	44.50	90.68	56	(0.32)	—	92	(32.79)	64.34	128	(23.00)	54.49
21	(14.12)	100.04	57	16.88	98.97	93	(0.65)	66.78	129	63.25	61.40
22	(25.31)	78.83	58	(35.90)	108.15	94	(36.89)	67.03	130	78.86	68.21
23	65.87	77.31	59	5.65	94.32	95	(31.32)	71.39	131	37.57	72.61
24	65.98	77.69	60	13.63	106.80	96	(21.22)	73.97	132	56.77	74.03
25	83.76	82.57	61	(12.27)	73.52	97	(22.44)	74.65	133	(47.57)	72.17
26	69.07	89.73	62	(1.74)	—	98	110.15	62.10	134	(27.63)	72.44
27	31.72	95.96	63	17.82	87.75	99	27.01	68.54	135	(29.82)	71.14
28	(17.10)	105.68	64	116.43	101.60	100	57.52	74.36	136	(22.68)	71.90
29	(14.47)	102.83	65	34.87	108.84	101	(15.02)	76.69	137	(16.78)	58.84
30	(60.68)	78.56	66	(41.97)	113.37	102	(70.77)	57.53	138	—	—
31	(64.13)	77.08	67	16.78	88.16	103	73.42	59.63	139	—	—
32	55.65	78.37	68	17.98	92.17	104	62.97	61.35	140	—	—
33	37.63	79.58	69	103.21	108.21	105	101.55	63.09	141	—	—
34	34.68	86.29	70	17.27	84.35	106	107.84	64.97	—	—	—
35	35.49	89.85	71	14.17	85.44	107	32.50	69.53	—	—	—
36	41.02	98.54	72	5.38	96.65	108	(29.57)	73.71	—	—	—

58と水田39・46・53・57とでは畦畔を挟んで10cm以上の高低差がある。

今回、検出された水田遺構の最大面積は、水田49の130.50m²で、最小面積は水田47の6.89m²で、1枚の水田面積を算出できた79枚の平均面積は49.6m²で決して大きくない。

ところで、一枚の水田内に5ヶ所の水口をもつ水田68・78は今後の検討課題として、調査区のほぼ中央で検出された水田30は、幅80cm~100cm、長さ50mを測るが、東端に水口を持っていたが、検出時にはその部分を粘土で閉じられていた。水田122側に4ヶ所そして水田114側に1ヶ所の水口をもっている。しかも、水田122・114側の畦畔の外側に草本性植物を畦畔に沿わせて漏水防止を図っていた。地形的には谷底状で比較的大きな区画を形成することができるにも拘らず、延べ50mにわたって水路状遺構を保っている。機能的には水路として利用し、その後役目が終了した後、東端の水口を閉め他と同様水田として再利用したことが推察できる。

(5) 中・下層水田

中・下層水田の耕土はシルト・シルト質粘土あるいは板状砂であり、上層水田の耕土とはほぼ同質の土層であるため、畦畔検出作業は困難をきわめた。作業の能率化及び慎重を期すために5mメッシュで幅20cmのトレッセを入れ、断面観察を繰り返しながら作業を行った。

図示した畦畔は大部分が中層のものであるが、一部下層の畦畔も併せて同時に検出したことは否めない。

NMラインを境にしてより以北は自然堤防状の高地であるため、未だ開拓されていないよう

表2 下層水田計測表

No.	面積(m ²)	平均標高(cm)	No.	面積(m ²)	平均標高(cm)	No.	面積(m ²)	平均標高(cm)
501	—	—	526	—	—	551	56.96	63.18
502	(49.55)	69.89	527	59.72	77.86	552	(14.68)	65.32
503	(54.92)	70.35	528	—	—	553	—	—
504	(27.08)	71.10	529	—	—	554	34.14	60.06
505	26.03	72.86	530	20.06	90.80	555	(26.82)	63.81
506	(29.11)	75.59	531	21.69	90.03	556	—	—
507	(5.61)	70.12	532	6.13	98.24	557	—	—
508	—	—	533	13.37	88.18	558	—	—
509	(32.36)	76.58	534	5.86	97.21	559	(54.04)	63.63
510	(51.41)	68.47	535	—	—	560	(33.71)	63.41
511	80.60	71.23	536	—	—	561	—	—
512	87.48	76.37	537	(17.51)	85.95	562	67.15	55.34
513	—	—	538	12.04	89.20	563	—	—
514	—	—	539	12.22	95.18	564	—	—
515	(89.36)	69.73	540	—	—	565	58.96	57.27
516	49.28	76.06	541	3.94	96.18	566	46.05	—
517	(50.37)	81.24	542	11.38	102.10	567	59.85	58.22
518	—	—	543	(5.74)	104.83	568	—	—
519	—	—	544	23.85	—	569	—	—
520	125.47	72.06	545	(35.54)	52.39	570	—	—
521	81.43	77.55	546	(35.41)	58.79	571	—	—
522	—	—	547	(33.11)	61.75	572	—	—
523	—	—	548	(20.96)	63.16	573	—	—
524	30.62	94.36	549	(21.33)	64.16	574	—	—
525	—	—	550	—	—	575	—	—

である。

畦畔は上層水田のそれとほぼ同様の位置に引かれているが、部分的に消失しているものや区画を大きくとっているものがある。基本的には中・下層水田の畦畔を上層水田の畦畔が踏襲したといった方が適切であることはいうまでもない。

20ライン上に南北に走る幅約80cm・深さ約10cmの溝が検出された。この溝付近以東にわずかな畦畔の痕跡を残すが、より以西ではまったく検出されていない。中・下層水田の開田域の西端を示すものであり、排水を主にした溝であろう。この溝は中央部分で途切れているが、砂の堆積が多く、洪水等により流失してしまっている。

南側大畦畔は上層水田のそれとほぼ同規模のものであるが、中央大畦畔は前述したように南端を杭によって保護された畦畔で第Ⅳ区の旧河道に直交するものである。また、溜池状遺構はこの大畦畔を一部を切断して構築されている。

水田面積の全容が知れるものは計24枚あり、最大のものは水田520の125.47m²で、最小のものは水田541の3.91m²で、平均面積は40.37m²であるが上層水田のそれと比してほとんど差はない。ここで注意すべきは歟歟の役割を果している上層水田30が下層水田にはないことであろう。

水口は8ヶ所検出されたが、上層水田では南側大畦畔に取りつく小畦畔には全てにわたって水口が認められたが、第Ⅳ区のそれには認められること、及び水田527の北側の水口は一本の畦畔の一部を切って作ったものではなく、東及び西からのびる畦畔を一部交差させ水口を作っていることが上層水田のそれとは違う。また、大畦畔の上には一点もない足跡が小畦畔の上には多數認められることも注意すべきであろう。

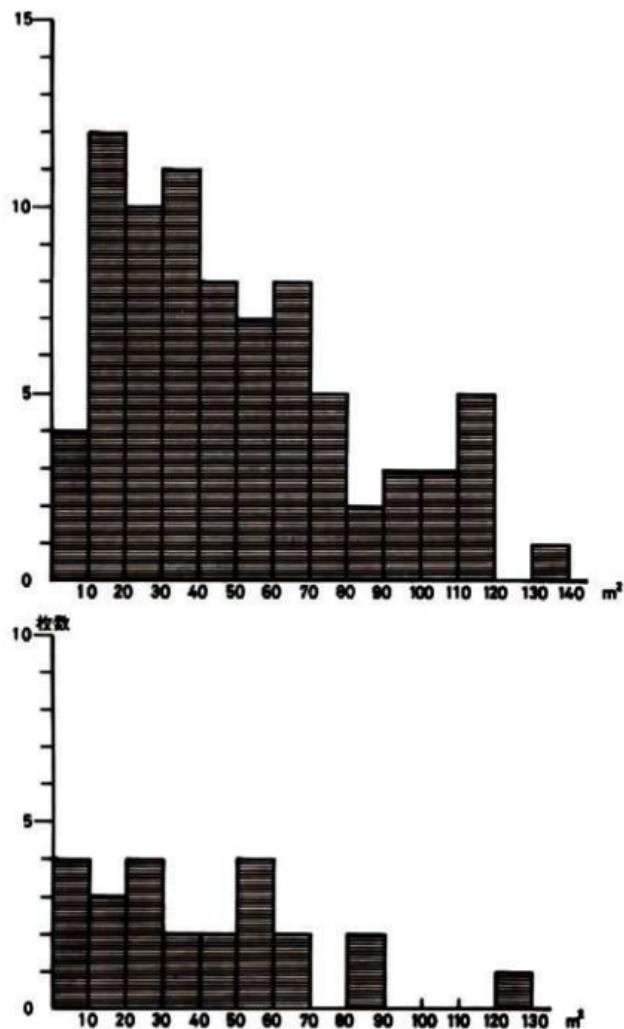
注

- 1 昭和61年度及び昭和62年度にわたって実施された西法町開田遺跡では弥生時代前期にさかのほる水田跡を含めて志知川沖田南遺跡と同時間の水田遺構が検出されたという教示を小川良太・長谷川眞の両氏から得た。

(6) 小 結

今回の調査で水田遺構の検出面積は1haにも満たないものであるが、東西に走る2本の大畦畔に挟まれた区画の中は、水利及び地形に即して構築された小畦畔によって不定形小区画水田が群在する。

検出された3本の大畦畔は北側大畦畔と中央大畦畔の距離は約70mあり、中央大畦畔と南側大畦畔との距離は約50mある。中・下層水田の北側大畦畔と中央大畦畔には杭列によって保護されているが、南側大畦畔の下には杭列は存在しなかった。このことは後述する5面の水田とも関連すると思われる。①当初、開田されたときは南側大畦畔を必要としなかった。②大畦畔はあったが杭列による保護を必要としなかった。③この地区まで開田されていなかった。のい



第24図 水田面積（上：上層 下：中・下層）

それかが想定されるが、いずれにしても上層水田が開田された時期には中央大畦畔も杭列による保護を必要としなかったことは事実である。

南側大畦畔を抜んで水田へ水を配る水利系統が異なっていたこと、現代の農道と同一方向にあることなども考え併せて小畦畔とは違った意図で南側大畦畔が構築された可能性が大きい。

三原用水系の旧河道を利用することによって開田され始めた水田は、自然堤防状微高地の縁辺部を利用して中央大畦畔が構築されたが、旧河道が埋積していくなかで新たに水を確保する必要があるため人工の水路を開削し、導入することによって開田地域も拡張されていった。

前述したように小畦畔によって区画された水田跡は断面観察によると5面の水田跡が確認された。

しかし、この5面の水田跡はマクロな意味で述べるならば、5時期の時期差を表わすものではない。極端な例を挙げれば、瞬時の洪水によって埋没した水田は、小畦畔がからうじて残っていればそれをもとにもう一度新たに引き直している。完全に埋没した水田は新たに引き直したものであろうし、埋没していない水田はそのままである。水利系統が変わらなければ水田は放棄されなかつた結果として5面の水田跡が確認されたのである。南側・中央大畦畔は上・下2層の大畦畔しか断面観察では読みとることができなかつた。

表3は上層水田と中・下層の水田面積と標高とを比較したものである。

中・下層水田は水田面積や標高を計測し得たのは計44枚ある。そのうち上層水田と比較し得たのは29枚である。

面積を見てみるとほぼ同じところに上・下の水田の畦畔が引かれており大きな差はない。

表3 上層水田と中・下層水田の比較

	水田No.	面積(m ²)	標高(m)	水田No.	面積(m ²)	標高(m)	水田No.	面積(m ²)	標高(m)
上	2	(49.31)	75.42	46	22.89	88.45	97	(22.44)	74.65
中・下	502	(49.55)	66.29	531	21.69	86.43	549	(21.35)	64.16
上	3	(54.59)	77.95	47	6.89	98.00	100	57.52	74.36
中・下	503	(54.92)	66.75	532	6.13	94.64	551	56.96	63.18
上	5	27.09	81.14	52	11.84	90.38	101	(15.02)	76.69
中・下	505	26.03	69.26	538	12.04	85.60	552	(14.68)	65.32
上	9	(31.85)	85.06	53	13.29	87.28	107	32.80	69.53
中・下	509	(32.36)	72.98	533	13.37	84.58	554	34.14	60.06
上	10	(55.11)	75.93	54	6.90	96.73	108	(29.57)	73.71
中・下	510	(51.41)	64.87	534	5.86	93.61	555	(26.82)	63.81
上	11	29.39	79.15	57	16.88	95.37	116	(33.83)	73.15
中・下	511	80.60	67.63	539-541	16.16	92.08	560	(33.71)	63.41
上	12	71.74	83.78	60	13.63	102.20	121	64.78	68.33
中・下	512	67.48	72.72	542	11.38	98.50	562	67.15	55.34
上	18	50.28	81.74	91-92	(35.17)	63.85	124	55.92	72.44
中・下	516	49.28	72.45	545	(35.54)	52.39	565	58.96	57.27
上	25	83.76	78.97	94	(36.89)	67.03	125	46.25	70.94
中・下	521	81.43	73.95	546	(35.41)	58.79	566	46.05	—
上	27	31.72	92.36	95	(29.68)	71.39	126	64.81	69.17
中・下	524	30.62	90.76	547	(33.11)	81.75	567	59.85	58.22
上	39	20.44	90.39	96	(21.22)	73.97	134	(27.63)	72.44
中・下	530	20.06	87.20	548	(20.96)	63.16	572	(18.77)	—



图25 上层水田(局部)

一方、比高差をみてみると、水田124と水田565では15.17cmあり最大である。標高が85cm以上ある上層水田と直下にある水田との比高は概して小さい。

図25は上層水田を5cm毎の比高差を色分けで表したものであるが、北東隅が最も高く南西隅が最も低い。中央大畦畔を挟んだ水田面の比高差は北側の方が20cm以上比高差がある。

また、東側にある標高86cm~90cmの位置にある水田跡はその西側に比して10cm以上の比高差をもっているものがある。

溜池状遺構は、この遺構が開田された当初からあったものではないことは前述した。その機能については水量調節あるいは保溫用でないかとも述べた。

ただ、池底部に検出された「しがらみ」の機能については不明な部分もある。

高橋学氏の指摘によるとこの遺構を通して配水される水田が多いこと¹⁾、草本性植物がしがらみから検出されていることなどから、乙益重隆氏が述べておられる「置養」に相当するものではないかと考えられる。

なお、水田64及び水田69は調査時の検出過程で畦畔を無視して、それぞれ1枚とした可能性がある。

注

1 高橋 学「志知川沖田南遺跡の地形環境」、「淡路・志知川沖田南遺跡」、兵庫県教育委員会 昭和57年9月

2 乙益重隆「古代水田跡考」、「篠山盆地古跡記念 古文化論文」昭和55年10月

第2節 その他の遺構

(1) 溝池状遺構

長辺8.8m、短辺0.8~1.32mの梢円形の凹地である。この遺構の池底部は2ヶ所あり、南側は1.70m×1.50m深さは北側のそれよりも約20cm浅い、北側は2.42m×1.60mで深さは90cmである。遺構内には2方向の杭列が検出された。

一方の杭列は、遺構の北側斜面に沿って東西方向に2~3列あり、その間隔は5cm~10cmである。杭は自然木をそのまま使用し、先端部のみを尖らしているものと、矢板状のものがあるが前者が圧倒的に多い。杭の径は5~10cmであるが、中央大畦畔の下部の杭列と続いていること、底部付近には別方向の杭列があることなどからこの杭列は溜池状遺構と何ら関係のない杭列である。

他方の杭列は、東側の入水口から両側の出水口に向かって、ほぼ直線的に延び、地山である黒色泥土に打ちこまれている。また、打ち込まれた杭に横木及び加工痕が認められないが、70×40cmのマツが杭列に沿って置かれている。杭と横木との間に草本性植物が埋めこまれており、

しがらみの機能を果したものであろう。

ただ、後述するように、この溜池状遺構には、入水口が北側と東側にそれぞれあるが、2方向の入水口としがらみの前後関係は不明である。畦畔上の盛土によって囲まれた周囲には水口が6ヶ所認められる。入水口は先述したように2ヶ所、出水口は南側と西側にそれぞれ2ヶ所ずつある。ただ南側の出水口付近から東側にかけて砂の堆積が厚く、出水口が1ヶ所であった可能性もある。というのは、NM 03付近から NM 02付近にかけて砂の堆積が認められた。すなわち、北東から南西にかけて溜池状遺構内に流れ込む水とは無関係に水の流れがあったようである。このために南側の出水口の検出を困難した。

入水口と出水口の比高差は5cm~20cmあり土層観察によると、水は東から西への流れが北からのそれよりも多いことが指摘できる。

この溜池状遺構の面積は34.83m²で、容積は1.46m³ある。したがって、この遺構の貯水能力は約1.5tである。機能としては通常溜池と称されるものより極めて小さく、湯水期にじゅうぶんな水が貯水されていたとは考えられないが、水景調節用とか保温用等が考えられる。

また、自然堤防上末端の直下に掘られている関係からか、湯水は決して多くないが、湯水期においても少しある。

〔遺物〕

遺構内からは核のほかに土器が出土している。土器は2個の完形品及び口縁部の破片である。図26~30は池底の杭に沿うような形で出土し、同31は東側の入水口付近から出土したものである。

32は中央大畦畔から出土した。

30. 瘤突形に近い胴部をもち底部は平底である。口縁部外面は刷毛目調整を行ない、胴部は左下がりの叩き整形ののち、刷毛目で調整しており、下半部は煤付着の跡もあるが叩き目はよく消されている。外面の煤は頸部及び底部付近を除いて付着する。

内面は4条の粘土質の接合縫が認められ、端部は刷毛目で他はナデ仕上げである。底部付近に煤状炭化物が付着している。

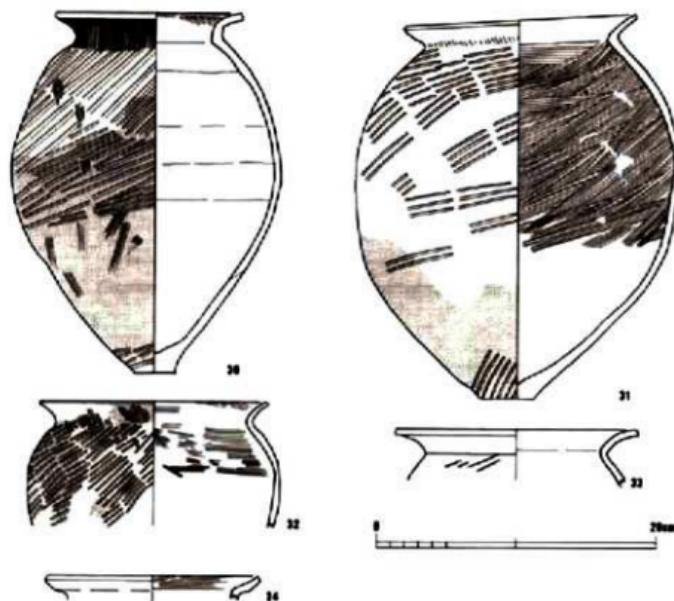
31. 球形に近いが全体的には胴長の器高をもつ。外面は2~3の分割成形であることが叩き目の方向で確認できる。叩き目の幅は2mm~3mmでナデによって下半部は消されている。下半部に煤の付着著しい。

内面は口縁部内外をナデで、頭部以下胴部中位よりやや下までを刷毛で、それ以下はナデによって仕上げられている。

32. 中央大畦畔上から半截された状態で出土した壺形土器である。底部はわずかに平底の痕跡を残している。胴部上半はほぼ水平に近い叩き目を残し、下半は刷毛目調整され、煤が付着している。内面はナデ仕上げである。

33. 31と同様の形態をもつ變形土器である。外面は左下がりの叩き目で成形し、口縁部内外面及び内面肩部付近まで刷毛目調整。

34. 口縁部中央部で接をもつ。



第26図 潟池状遺構出土（30, 31, 32）及び中央大畦跡出土（33, 34）土器実測図

(2) 杖 列

第Ⅰ区・第Ⅲ区及び第Ⅳ区でそれぞれ杖列が検出された。

第Ⅰ区で検出された杖列は調査区のはば中央付近、長辺に直交するかのように検出された。この調査区では旧河道は調査区の南東隅で右岸の一隅しか検出されていないため杖列との関係は判明していない。

東西方向に直線状に並ぶ矢板群は、杖列の内側、即ち、北側の東半部では転用材と思われる最方幅20cm、長さ2.1mの板材などが1—2列に及んで敷かれている。

水田面の検出にはおよんでいないが、断面観察及び第Ⅳ区の断面観察の情況から推して畦跡を保護していることは明らかである。

また、いずれの畦畔も幅80cm~100cm、高さ10cm~25cm程度の形状をもつものである。

しかし、第Ⅳ区で検出された水田跡を契機にインターチェンジ内にトレンチ（図21）を設定し、検出を試みた結果、旧河道の左岸側では、畦畔の確認できたが、右岸側では後世の氾濫で土壁が攪乱して検出不能でその痕跡すらもとどめていなかった。

第Ⅰ区の杭列の検出時の頭頂は標高30cm前後、第Ⅳ区のそれは20cm前後である。第Ⅰ区と第Ⅳ区の畦畔の比高差は20cmあり、同時に存在した可能性は十分考えられる。

第Ⅲ区・第Ⅳ区で検出された杭列は第Ⅲ区では2列、第Ⅳ区では3列存在する。杭列の間隔は5cm~20cmであるが、幅は20cm~100cmあり、NM15付近以西で1200cm以上ある。

第Ⅰ区の杭列と同様畦畔の裾部に打ち込まれていること、畦畔の両側を保護していることなど共通しているが、16ラインより以西では検出されていない。

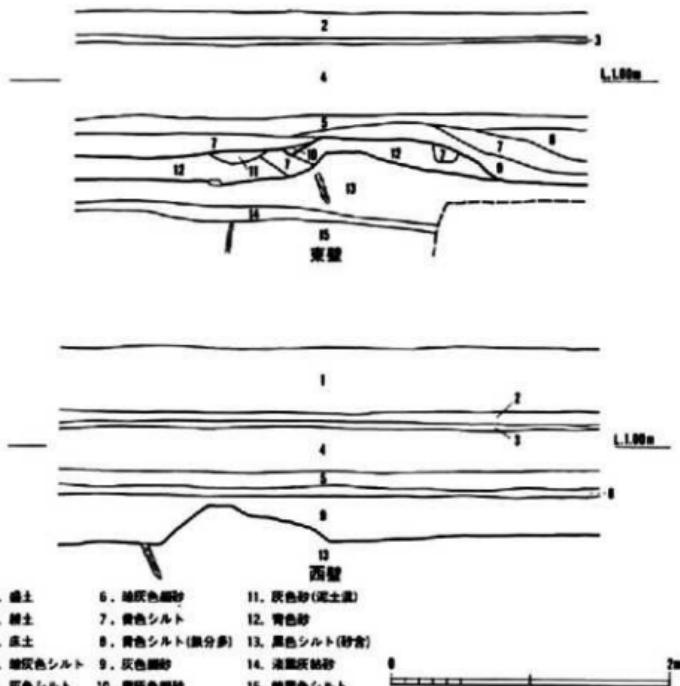
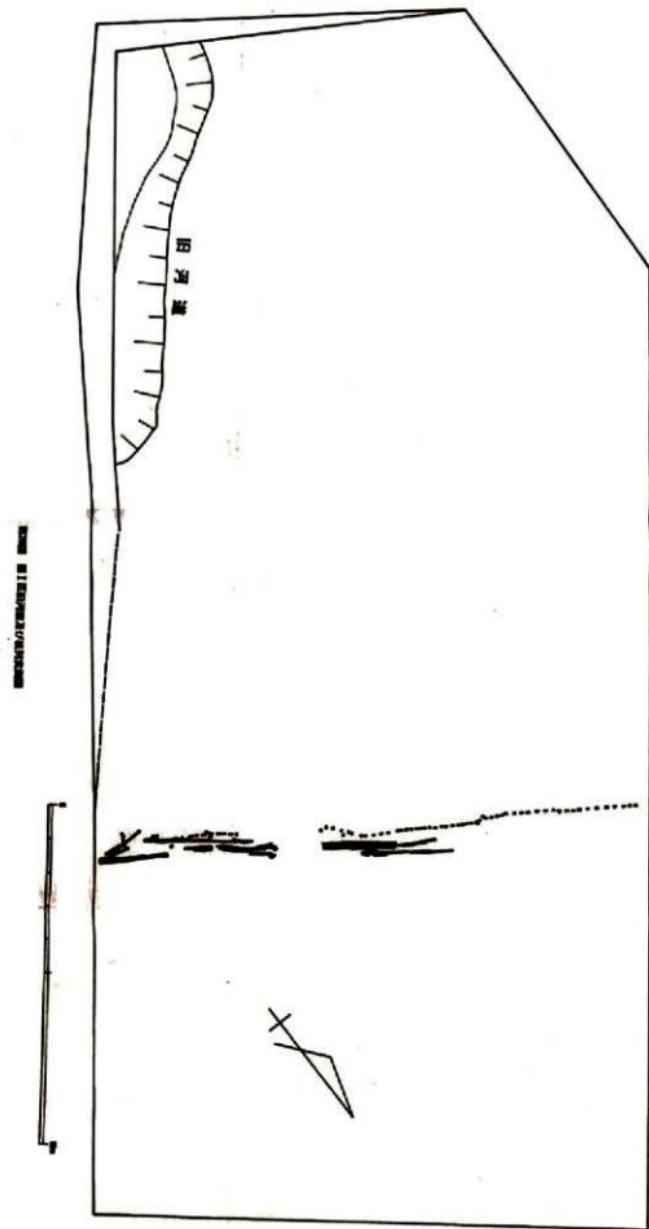


図27図 第Ⅰ区土層断面図



(3) 橋

第Ⅲ区の北西隅から第Ⅳ区の北西隅に向って旧河道が検出されているが、この旧河道に並行して水路も併せて検出された。旧河道から水路には1ヶ所の取水路が発見されている。検出時には幅1.5m~1.7m、長さ3.4mの取水路である。

橋は取水路の入口から1.7mの所にあり、取水路からやや東にずれている。これは本来取水路は上層で検出されるべきものであるにも拘らずより下層で発見されたためである。

橋はマツ材の一枚板を加工しており、重機によって一部破損しているが、幅70cm、長さ120cm以上で厚さ4~6cmもある。橋の中央部は両端に比して3~5cm削られている。

橋は水平に設置されたものではなく、取水口側の方が約10cm高い。これは水量調節あるいは満潮時に海水が上流まで侵入してくるが、塩水と淡水との比重の違いによって海水がより下方を流れりいわゆる「塩水楔」を利用して塩水の侵入防止等が考えられる。

橋と上層水田との比高差は約40cmであることから上層水田の開田時には利用されていない。

(4) しがらみ

取水路入口から2m入った下部で検出された。径5cm~15cmの丸太材の先端を削り、束ねにそわすような形で青灰色粘土に打ち込んでいる。杭の長さは平均1m以上あり、上部の健近くまで及ぶものもあるが頭頂は全て標高0m以下である。斜めに打ち込まれた杭に、横木を置き草本性植物を埋め込み、水漏れを防止している。

橋脚・橋などの木製品はこのしがらみの下部で発見された。

(5) 旧河道

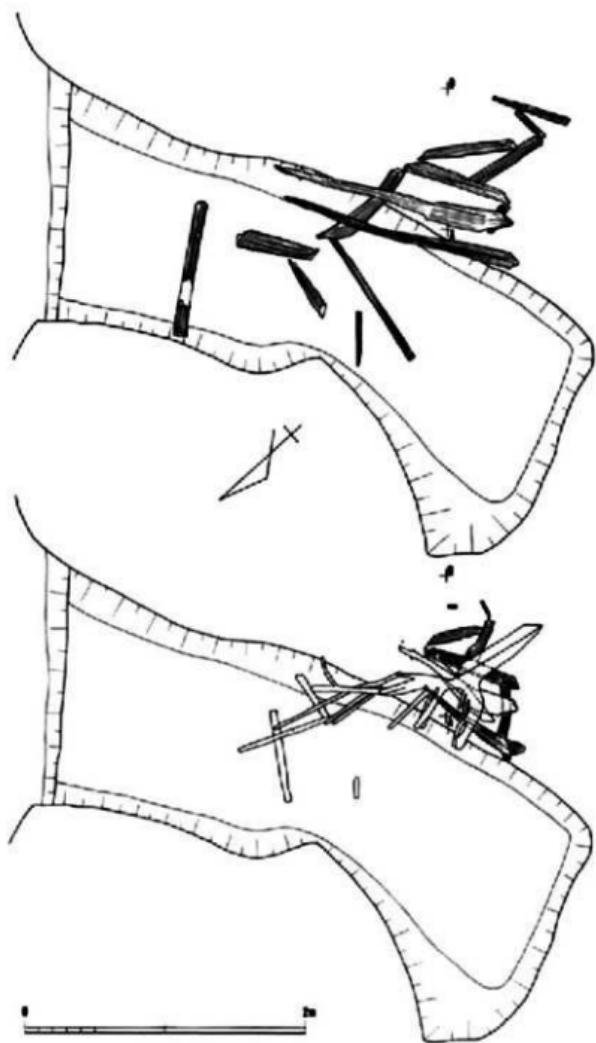
旧河道は、遺跡の北東から西へ向って流れる。河道の幅は9~17mの範囲にある。

この河道については、三原川の旧流域にあたるとされており、河筋もおおむねその推定域を流れることから、旧三原川であったことはまちがいないと考えられる。

旧河道は、遺跡においては、Ⅰ区の東南隅・Ⅲ区の北東隅、Ⅳ区の北側で検出している。ちょうど、Ⅲ区の北東隅あたりを境にして流路方向を変更している。今回の調査で検出した水田域は、この河道の左岸においてのみである。

この旧河道は、黒色泥土（黒色シルト）をベースにしている。黒色泥土は、遺跡をふくむ周辺部一帯に堆積する土層である。黒色泥土は、1979年Ⅳ区の調査で、深さ2.5mほど深掘りを行っている（第20図C）。それによれば、黒色泥土は、単一な土層堆積ではなく、堆積する間に、幾度かの氾濫を受けているとみられる。第47図の3や5は、この砂層中から出土したものである。

旧河道内に堆積する疊層は、河道が遺跡内で急激に堆積した層と考えられる。疊層を形成す



第29図 精智区性溝及びしがらみ穿洞圖（上：上部 下：下部）

る輝は、およそ5~6cm以内の小輝で、ほとんどこの大きさのもので占められる。輝の堆積量は、地点によって異なるが、いくつかの土層断面によって観察すると、幅4~10mの範囲にある。その厚さは、激しい湧水のため最深部まで掘り下げていないが、1.3m以上あることは確実である。輝層は、旧河道の中央部に堆積することから、中洲状に堆積していると考えられる。

輝層の頂部の高さは、旧河道の肩部とほぼ同じである。輝層の堆積後、両岸の流れによって削り取られた結果とみなせば、この状況がよく理解できる。輝層中から出土する遺物は、土器だけである。土器は、いずれもローリングを受け、表面の摩耗が著しい。この層の出土遺物は第36図52・54に示す。土器の出土量が少ないとさることながら、土器が小破片でなおかつローリングを受けていることは、この土器が、かなり遠方から流されてきたことを明らかにしている。

輝層の上に堆積する砂層は、旧河道の両岸を流れる。ほとんど単一な土層である。砂層中には、多量の土器が含まれている。土器はほとんど摩耗していないし、一個体単位で出土する例が多い。つまり、完品ないしそれに近い状態で流されてきて、その場所で土圧によって壊れたと考えられる状態である。このことから判断すれば、集落は至近距離にあると考えてさしつかえないであろう。

旧河道砂層中から出土した土器（第35図～第45図）は、水田跡蓄池状遺構や大畦畔出土土器と時期差をもたないと考えられる。

注

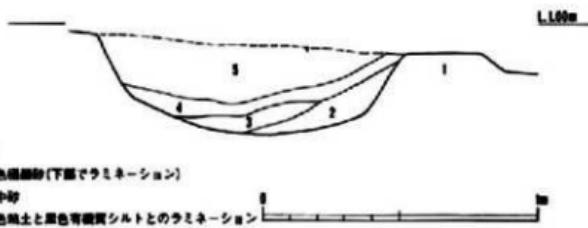
1 高橋学「志知川沖田南遺跡の地形環境」「淡路・志知川沖田南遺跡」、I 1980

2 旧河道は、1978年、1979年の調査では幅4mの溝と考えていた。すなわち、河道の両岸に堆積する青灰色砂を溝としてとらえたためである。1979年調査の溝は同時にII区東のトレンチで左岸の肩を検出し、それ以後、旧河道という呼称を使用している。

(6) 水 路 1

上層水田に伴う水路が、ほぼ旧河道左岸に沿うように流れる。

II区では、水田畦畔の西北に沿って幅150cm、深さ30cmの水路がある。地形や水路底の標高から考えると、水は西方向に流れていることが推測できる。また、この水路の畦畔には、水口が一ヶ所設置されている（水田71）。水利系統図（第7章第5節第65図）によれば水田71は、付近の水田水利の末端部にあたるため、この水口は、排水機能だけに用いられたことがわかる。しかし、この水路が、排水だけのために掘削されたとは考えにくいので、取水用水口もあったはずである。おそらく、取水用水口は、調査区外の上流にあたるとみなされる。II区水路内の遺物はない。

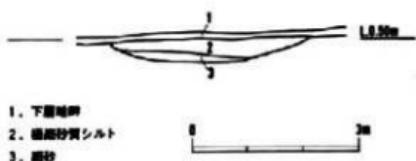


第30図 水路1断面図

(7) 水路2

水路2は畠区の西端をほぼ南北に流れる溝である。下層水田面の足跡検出に際して、足跡を埋めているのと同様の細砂が帯状にひろく堆積しており、当初足跡が集中しているものと考えていた。実際に砂を取り除くと、ほぼ直線に伸びる幅約80cm、深さ約10cmの溝であることが判明した。但し足跡も相当集中して残っており、踏み抜かれて輪郭のはっきりしない箇所もある。

水路2は土層的に見て、水田番号544の北を限る南側大畦畔より古いことがわかつており、この部分の大畦畔は後につくり足された可能性が高い。また水路2は下層水田の南北方向の畦間に平行して走ることや、水路2以西では小畦畔が全く確認されなかったことからこの面における水田域の西限を示すものと考えられる。



第31図 水路2断面図

第3節 足跡

調査、検出された水田面を丁寧に削ると、砂の溜った凹みが点々と現れる。その砂を鏟やスプーン・刷毛、時には水流を利用して取り除くと、古代人の足跡が残されている。志知川沖田南遺跡の上層・下層の水田面には合計4189の足跡が検出された。調査に際しては時間的な制約もあったため、個々の足跡の観察を詳細には行えず、検出された足跡すべてを完掘し、略測の後石膏を流し込んで取り上げた。

上層水田で検出された足跡は合計116個（その内人間のものと判断したものは64個）あり、シルト混極細砂の水田面に比較的浅く残り、粗砂が入っていた。足跡の分布は限られており、中央大畦畔に沿った水田と中央大畦畔東端から南への幅約20mの範囲にのみ見られる。南側大畦畔以南では見つかっていない。人間のものと判断される足跡を、東京工業大学教授（現在放送大学教授）平沢彌一郎氏に実見して頂いたところ、「男性150～160cm：20～25才、女性140～150cm：20～25才、子供120cm：5～10才の3人位であろう。特に、女性は足の指先に重心がかかっていることから、荷物を持っていたために、前屈みの姿勢をとっていたのであろう」と言う御教授を得た。足跡の配列に規則性を見出すことはできない。

下層水田面に残された足跡は、暗灰色シルト質極細砂の面で検出され、黄灰色中砂あるいは、灰色細砂によって埋められている。黄灰色中砂によって充填された足跡は、調査区の南側、つ



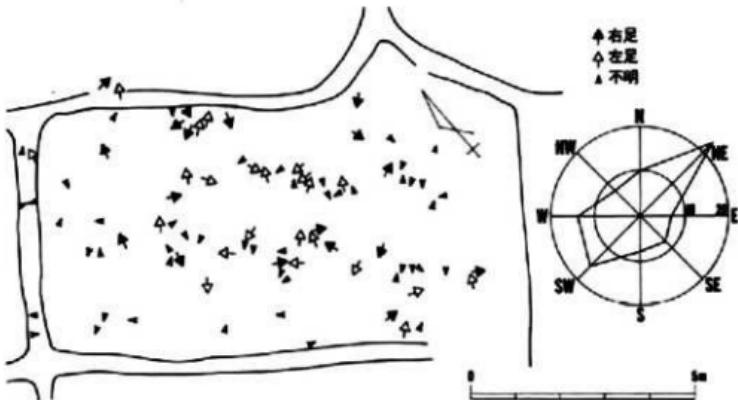
第32図 水田番号551における足跡の方向頻度

より微地形的に低い範囲に集中している。切り合間から見て黄灰色中砂のものが新しい。足跡は水田全面に見られるわけではなく、密度の濃淡がある。それは、高い位置にある水田には全く見られず、水路の周辺に多く見られることから、微地形の差による田面の状態の違いや、洪水砂の流れ方によって左右されたと考えられる。足跡の中には小畦畔を踏み抜いているものもあるが、その多くは比較的小型のものに限られる。

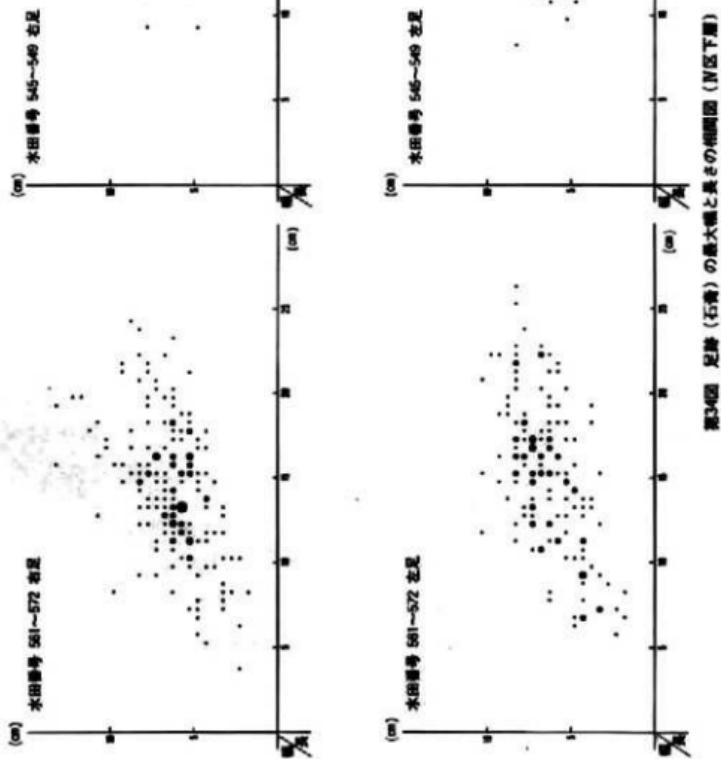
今回足跡として調査したものの中には人間の足跡以外のものも含まれている。水田511番周辺では農耕具痕と考えられるものが約300個ある。長さが15cm前後の三日月形を呈しており、深さは平均して5~6cmで10cmを越えるものはない。角度は地表面に対して垂直のものと約45°の角度をもつものがある。また、水田551と552間の畦畔の両側に不定形の非常に深い穴が錯綜しており、当初農耕具による小畦畔の補修を考えていたが、中で曲がりくねっており、もぐらや木の根などの生痕とした方がよかろう。

下層水田面で人間のものと判断した足跡は約1500個あり、内右足が714個、左足が654個ある。足跡の多くは親指、土踏まずが確認できる程度であるが、中には指一つ一つが確認できるものもある。足跡の特徴は、蒸足であり、指の間、特に親指が離れていること、踵が細いこと、爪先側が深くもぐり込んでいることなどが挙げられる。

水田面に足跡が残るためには、水を含んで土壤が柔らかい時に人々が歩き、その後或いはその状態を保ったまま乾いた後に、多量の土砂を運び込む氾濫に遭うという条件が必要である。この条件に見合うのは春から秋にかけての時期であろう。つまり水田に水を張っており、或い



第33図 水田番号556における足跡の方向頻度

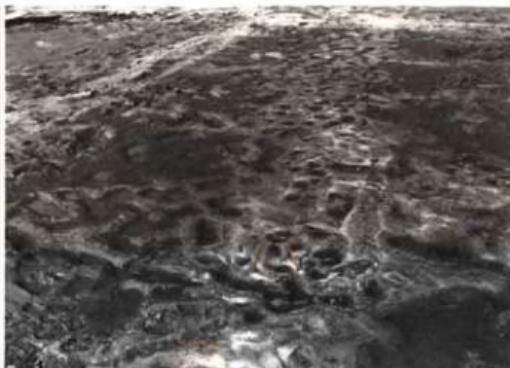


は降雨が多く、また氾濫をもたらす集中豪雨や台風がこの時期に多いからである。しかしながら更に詳しい季節を決定するには資料が不足しており、また人々が具体的にどの様な農作業を行っていたのかを導き出すには、同一人物の足跡もほとんど辿れず、規則性を見出せない場合、ただ分布状況や方向性からでは不可能である。

足跡は「人間の意志が直接はたらいたのではないが、偶然に人間の行為が大地にとどめたもの」であって（準遺構）として扱われてきた。ところが今や、低湿地や水田址の調査ではあたりまえの存在になっており、足跡の資料化や足跡を通じて何がわかるかを探索している状況にある。

注

- 1 稲作は上層水田全域に広がっているわけではないので、偶然この範囲の足跡のみ残された可能性がある。
- 2 高橋学による「埋め残しの谷」にあたり、数センチ単位で何箇もの水田が存在する。調査では別の面を抽出した可能性が高い。
- 3 農作業であるなら、打ち込んだ後テコを応用して振りおこすため、もっと不整形になるのではとも思われるが、ここでは一応農耕貝塚としておく。



第6章 遺物

第1節 土器

水田跡の調査では、遺物の出土がみられないのが通例である。当遺跡においても水田面からは遺物は出土していない。遺物の大半は旧河道からの出土であるが、東西に走る大畦畔及び溜池状遺構から若干出土している。

旧河道から出土した土器は、弥生時代中期のものを含むが少量でしかも細片である。また磨耗度も激しい。一方、水田が經營されていたと思われる時期の土器は完形品が多い。

溜池状遺構から出土した土器は前述したところであるが、南側大畦畔上から出土した土器は器種不明である。

中央大畦畔から出土した土器は、溜池状遺構のすぐ西で、一個体の土器を平敷するような状態で出土した。しかし、精査したにもかかわらず、掘り方等は検出できなかった。土器は内面にはヘラ削りを施し、報長の肩部をもつ変形土器である。

表4 土器觀察表(1)

号	種	法	量	出土地	形	態	技	法	備	考
35	壺	口径	20.0	第Ⅳ区 旧河道	ほぼ直立する頸部から大きく外反する口縁部	口縁部上方へつまみあける 肩部は球形	口縁部内外面ナデ	頸部内面 外表面刷毛目調整	護岐系	
36	壺	口径	12.0	第Ⅳ区 旧河道	外反する口縁部をもち	端部はそのままおさめる 肩部は大きく張り	外表面方向のヘラ磨き			
		器高	(26.3)		竹管による刺突文	その上下にヘラ状工具による刺突文及び口縁端面に同じくヘラ状工具による刺突文	内面刷毛目調整			
37	壺	口径	17.3	第Ⅳ区 旧河道	外反する頸部から	さらに口縁部を外反させたもの	外表面方向のヘラ磨き			
		器高	(6.8)		口縁部外面は繊維波状文をめぐらし	内面横方向のヘラ磨き				
					2個1組の円形浮文を貼付している					
					肩部外面に1条の凸帯					
38	壺	口径	19.0	第Ⅳ区 旧河道	ほぼ直立する頸部から大きく外反する口縁部	口縁部上方へつまみあける	内外面とも横ナデ	頸部端面に指頭压痕 角閃石立つ	護岐系	
39	壺	口径	15.8	第Ⅳ区 旧河道	ほぼ直立する頸部から大きく外反する口縁部		外表面口縁部ナデ			
40	壺	口径	15.8	第Ⅳ区 旧河道	口縁部は大きく曲折する		頸部刷毛目調整			
		器高	(4.6)				口縁部内外面横ナデ			
		器高	(5.0)				強制横方向の刷毛目調整			
41	壺	口径	16.1	第Ⅳ区 旧河道	ほぼ直立する頸部から大きく外反する口縁部	内外面とも一部擦付着	口縁部内外面横ナデ			

番号	法 量	出土地	形 素	技 法	備 考	
42	壺 口径(13.0) 器高(5.0)	第Ⅰ区 旧河道	口縁部は大きく外反する	内外面とも横ナデ 削制部界に指圧圧痕		
43	壺 口径 16.5 器高 (5.6)	第Ⅳ区 旧河道	頸部から屈曲して外方へ開き 再び屈曲して斜め上方に立ちあがる 二重口縁 口縁部に4条の擬凹縦文	内外面とも横ナデ		
44	壺 口径 19.5 器高 (6.2)	第Ⅳ区 旧河道	筒状の頸部から屈曲して外方へ開き 再び屈曲して斜め上方に立ちあがる 二重口縁 口縁部に3条の擬凹縦文	口縁部内外面横ナデ 頸部上半纏方向の刷毛目調整		
45	壺 口径 16.0 器高 (1.6)	第Ⅰ区 旧河道	大きく外反する口縁部 口縁部に 4条の擬凹縦文及び円形浮文	内外面とも横ナデ		
46	壺 口径 (9.8) 器高 (3.5)	第Ⅴ区 旧河道	外上方へ開き 頸部は内湾する	内外面とも横ナデ		
47	壺 口径(16.5) 器高 (5.0)	第Ⅴ区 旧河道	4本の棒状工具による波状文	内外面とも横ナデ		
48	甕 口径 (9.6) 器高 (6.5) 胴径 —	第Ⅴ区 旧河道	大きく外反する口縁部 外面手づくね的	外面粘土組の接合痕4条 内面ナデ		
49	壺 城壺 壺	口径 (5.5) 器高 (6.3)	第Ⅳ区 旧河道	内湾ぎみの口縁部 削部はやや扁平	内外面とも横ナデ	
50	壺	口径(20.8) 器高 (1.8)	第Ⅳ区 旧河道	大きく外反する口縁部 2金の擬凹縦の上に円形浮文	内外面とも横ナデ	
51	壺	口径(20.8) 器高 (3.3)	第Ⅳ区 旧河道	大きく外反する口縁部 竹管文	不明	
52	壺	口径 — 器高 (9.2)	第Ⅳ区 旧河道	大きく外反する壺形土器の頸部 2本の凸帯文	内面粘土組の接合痕1条残るほか不明	弥生時代中期
53	壺	口径(19.8) 器高 (6.0)	第Ⅳ区 旧河道	「く」の字状に屈曲して外反しながら大きく聞く口縁	内外面とも横ナデ	
54	壺	口径(15.1) 器高 (5.1)	第Ⅳ区 旧河道	4条の浅い凹縦文	ナデか	弥生時代中期後半
55	壺	口径 — 器高(19.1)	第Ⅳ区 旧河道	球形の削部 やや突出させた平底	外面叩き目の上から刷毛目調整(上半) ヘラ磨き(下半) 内面刷毛目調整	
56	壺	口径(15.7) 器高 (4.9)	第Ⅳ区 旧河道	大きく外反する口縁部	内外面とも横ナデ	外面に 長5.5mm 幅3mm の擦圧痕
57	壺	口径 15.5 器高 (8.7) 胴径 —	第Ⅳ区 旧河道	「く」の字形に外反する口縁部 縫長の削部 口縁端部削目	口縁部内外面刷毛目調整 削部外側左下がりの粗い叩き目 頸部中位に粘土組の接合痕 内面横ナデ	
58	壺	口径(10.2) 器高(13.9)	第Ⅳ区 旧河道	口縁端部やや内湾する 球形に近い削部 削部下半一部煤付着	口縁部内外面刷毛目調整 削部外面上半部刷毛目調整 下半部ナデ 内面刷毛目調整	
59	壺	口径(14.9) 器高 (7.1)	第Ⅳ区 旧河道	口縁部は大きく外反する	内外面とも刷毛目調整か	

番	器	法	量	出土地	形	態	技	法	備	考
60	鉢	口径	一 器高	第Ⅴ区 旧河道	矧い脚台をもつ鉢形土器		外面叩き目見えるが不明			
61	鉢	口径(28.2)	器高(5.0)	第Ⅴ区 旧河道	杯部外面に明瞭な棱をもつ		口縁端部横ナデ 口縁部内外面ヘラ磨き 杯部外面下半刷毛目調整			
62	鉢	口径 8.0	器高 7.1	第Ⅴ区 旧河道	屈曲して外反する		外面左下がりの叩き目 端部内外面横ナデ 内面ヘラ磨き			
63	鉢	口径(20.5)	器高(4.2)	旧河道	屈曲して上方へ立ちあがり 再び 屈曲して外反する		端部は横ナデ 内外面ともヘラ磨き			
64	鉢	口径(14.8)	器高(5.9)	第Ⅴ区 旧河道	屈曲して上方へ立ちあがり 中位 付近から再び屈曲外反する 内面 に棱をもつ		外面上半部横ナデ 内面ヘラ磨き			
65	鉢	口径 21.7	器高 11.8	旧河道	内湾する底部から屈曲して棱をつ くり外反する 中実の脚柱に内湾する脚台部をも ち4個の内孔を穿つ		外面ヘラ磨き 脚上部にヘ ラ压痕 杯部内面ヘラ磨き			
66	鉢	口径(14.8)	器高 5.6	第Ⅴ区 旧河道	屈曲して上方へ立ちあがり再び屈 曲して外反する		内外面ともナデ 外面下半部はナデの上から ヘラ磨き			
67	鉢	口径(13.3)	器高(4.5)	第Ⅴ区 旧河道	直口 口縁部は擬口縁部の感		外面粗いナデ 内面ナデの上から刷毛目調整			
68	鉢	口径 18.7	器高 7.9	第Ⅴ区 旧河道	内湾する脚部中位からやや上で外 反する。		外面左下がりの叩き目 そ の上を軽くナデ仕上げ 内 面刷毛目調整後 ナデ仕上 げ			
69	鉢	口径 13.8	器高 8.0	第Ⅴ区 旧河道	ゆるやかに外反し 再び屈曲して 段をつくり立ちあがる		外面横方向の細かく てい ねいなヘラ磨き 内面ナデの上から部分的に ヘラ磨き 屈曲部に指頭压 根がめぐる			
70	鉢	口径 17.0	器高 7.8	第Ⅴ区 旧河道	頭部でゆるやかに屈曲して外反す る 平底		口縁部内外面横ナデ 外面 はほとんど未調整 内面横ナデ 下半部にヘラ 状工具による押さえ			
71	鉢	口径(15.6)	器高 6.5	第Ⅴ区 旧河道	直口 端部に面をつくる 平底		外面左下がりの叩き目 内面刷毛目調整			
72	鉢	口径 15.3	器高 5.8	第Ⅴ区 旧河道	内湾する脚部 小さな脚台をもつ 直口 端部に面をつくる		外面下半部のみナデ 内面刷毛目調整			
73	鉢	口径 16.5	器高 6.25	第Ⅴ区 旧河道	内湾する脚部 端部に面をもち直 口 平底		外面左下がりの叩き目 下 半部ヘラ压痕 内面刷毛状 工具によるナデ			
74	鉢	口径(12.9)	器高(3.8)	第Ⅴ区 旧河道	内湾する脚部 直口		外面不明 内面ヘラ磨き			
75	鉢	口径(10.5)	器高 4.15	第Ⅴ区 旧河道	頭部でやや外反する 平底		内外面とも指によるナデか か			
76	鉢	口径(18.3)	器高 4.4	第Ⅴ区 旧河道	内湾する脚部 平底 端部にわざ かに面をつくる		外面ナデ調整か 底部指に よる押さえ 内面ヘラ磨きか			

割	器	法	量	出土地	形	堅	技	法	備	考
77	鉢	口径(18.0) 器高 7.15		第Ⅳ区 旧河道	内溝する胴部 底部中央が凹む平底 端部にわずかに面をつくる 内面上部に縦付着		外面下部に指頭圧痕が残る ほか不明			
78	鉢	口径(19.2) 器高 8.25		第Ⅳ区 旧河道	内溝する胴部 直口 平底 外面	底部付近に縦付着	内外面ともナデ			
79	鉢	口径 16.7 器高 8.5		第Ⅳ区 旧河道	内溝する胴部 直口 平底		外面左下がりの叩き目 内面ナデか		底部に 粗張あり 中央にわ ら状織 維痕	
80	鉢	口径(17.4) 器高 7.25		第Ⅳ区 旧河道	内溝する胴部 端部に面をつくる		内外面ともヘラ磨き			
81	鉢	口径 16.4 器高 6.8		第Ⅳ区 旧河道	内溝する胴部 平底		外面ナデ 底部付近指によ る整形 内面ヘラ磨き			
82	鉢	口径(14.2) 器高 7.1		第Ⅳ区 旧河道	端部でゆるやかに屈曲して外反す る 平底		外面左下がりの叩き目 内面ナデか			
83	鉢	口径(16.0) 器高 7.1		第Ⅳ区 旧河道	内溝し端部は内方へ立ちあがる 平底 外面下半部に黒斑 内外面に縦付 着		外面左下がりの叩き目			
84	鉢	口径 15.3 器高 6.2		第Ⅰ区 旧河道	内溝し端部に面をつくる 平底 外面全体に縦付着		外面刷毛目調整 内面ナデ			
85	鉢	口径(13.6) 器高 (4.5)		第Ⅳ区 旧河道	内溝する胴部 平底		外面左下がりの叩き目 上半部ナデの痕跡 内面刷毛目調整			
86	鉢	口径 14.5 器高 6.3		第Ⅳ区 旧河道	直口		内外面ともヘラ磨き			
87	鉢	口径 14.3 器高 7.6		第Ⅳ区 旧河道	内溝する胴部 直口		内外面ともヘラ磨き			
88	鉢	口径 11.3 器高 6.6		第Ⅳ区 旧河道	直口 平底		外面ナデ 内面刷毛目調整			
89	鉢	口径 13.4 器高 5.7		第Ⅳ区 旧河道	内溝する胴部 端部面をつくる 平底		外面ヘラによる圧痕がみら れる ナデ 内面ナデの上から粗いヘラ 磨き			
90	鉢	口径 14.2 器高 6.1		第Ⅳ区 旧河道	内溝する胴部 直口		内外面ともナデ			
91	鉢	口径(12.5) 器高 6.1		第Ⅳ区 旧河道	直口		外面左下がりの叩き目 上半部はナデ 内面刷毛目調整			
92	鉢	口径 13.3 器高 6.9		第Ⅳ区 旧河道	直口		外面叩き目の上からナデ 内面放射状にヘラ状工具で 暗文をつくる			
93	鉢	口径 13.0 器高 5.6		第Ⅳ区 旧河道	直口		内外面ともナデ			
94	鉢	口径 12.2 器高 6.1		第Ⅳ区 旧河道	直口 端部にわずかに面をつくる		外面左下がりの叩き目 内面ナデ			
95	鉢	口径(12.0) 器高 5.5		第Ⅳ区 旧河道	直口 平底		外面左下がりの叩き目 内面ナデ			

番号	器形	法量	出土地	形態	技法	備考
96	鉢	口径 11.2 器高 5.1	第Ⅳ区 田河遺	外反する口縁 底部中央が凹む平底	外面ナデ 内面刷毛目調整	
97	甕	口径 14.8 器高 25.1 胴径 20.2	第Ⅱ区 田河遺	瓶長の胴部に外反し端部は丸くおさめる 端部に刻目を施す 平底 外面底部を除いて環状炭化物付着	外面左下がりの叩き目の上から刷毛目調整 内面刷毛目調整及びナデ外面に4条 内面に3条の粘土縦の接合痕	
98	甕	口径 15.9 器高 25.0 胴径 20.1	第Ⅱ区 田河遺	瓶長の胴部 口縁部は外反し 瓶部は丸くおさめる 瓶部には部分的に刻目 外面底部を除いて環状炭化物付着	外面左下がりの叩き目 2分割による整形 内面ヘラ状工具によるナデ 外面に1条 内面に1条の粘土縦の接合痕	
99	甕	口径 16.0 器高 23.7 胴径 20.4	第Ⅳ区 田河遺	瓶長の胴部 外反する口縁部 外面中央部環付着	外面左下がりの叩き目 内面刷毛目調整	
100	甕	口径(13.5) 器高 23.7 胴径 19.6	第Ⅱ区 田河遺	瓶長の胴部 短く外反する口縁部 外面肩部から底部にかけて環付着 内面底部付近に環状炭化物付着	内外面ともナデか 内面に1条の粘土縦の接合痕	
101	甕	口径(14.1) 器高 19.4 胴径 17.1	第Ⅳ区 田河遺	瓶長の胴部 短く外反する口縁部 肩やや張る	外面左下がりの叩き目 内面ナデ	
102	甕	口径 14.0 器高 21.1 胴径 17.6	第Ⅱ区 田河遺	瓶長の胴部で胴部最大径中位よりやや下 外面胴部中位に環状炭化物付着著しい	外面左下がりの叩き目の後ナデ 内面指で整形後 ヘラ状工具によるナデ 土器断面に2条の粘土縦の接合痕	
103	甕	口径 14.0 器高 23.0 胴径 19.5	第Ⅳ区 田河遺	胴部中位に最大径をもつ瓶長の胴部 中位よりやや上に焼成後と思われる穿孔 胴部中位のやや下から約5mmの厚い環状炭化物付着	外面左下がりの叩き目 内面ナデ 外面中位を中心として2分割 外面上に1条ずつの粘土縦の接合痕	
104	甕	口径 14.7 器高 24.0 胴径 20.4	第Ⅳ区 田河遺	胴部中位に最大径をもつ瓶長の胴部 内外面胴部直下を除いて環付着 外面下半部二次焼成のため表面剥落	口縁部内外面ナデ 外面中位から上半にかけて左下がり気味の叩き目及び下半部は左下がりの叩き目 内面ナデによる整形後 刷毛目調整か	
105	甕	口径(16.3) 器高 22.0 胴径 18.3	第Ⅱ区 田河遺	瘤突型に近い胴部 口縁部刻目	外面左下がりの叩き目 下半近くでヘラ状工具によって叩き目が消されている 内面ヘラ削り 外面に3条 内面に1条の粘土縦の接合痕	
106	甕	口径 14.9 器高 22.3 胴径 19.9	第Ⅱ区 田河遺	胴部中央で最大径をもつやや球形に近い胴部 口縁部は「く」の字状に外反する 外面底部と内面口縁部を除いて環状炭化物付着	外面胴部上半は右下がりの叩き目 その上から左下がりの叩き目 中位から下半にかけて左下がりの短い叩き目 内面板状工具によるナデ	

號	類	法 量	出土地	形 態	技 法	備 考
107	甕	口径 14.5 器高 21.2 胴径 19.9	第Ⅳ区 旧河道	ほぼ球形に近い胴部 口縁部刷目 外面部底付近 脇部の一部を除き 煤付着 内面部底付近炭化物付着	外面部よりやや上で左下 がりの印き目方向を異にする 口縁部直下で粘土紐の接合 痕	
108	甕	口径(14.5) 器高 22.7 胴径 20.1	第Ⅳ区 旧河道	ほぼ球形に近い胴部 口縁部直下 107と同様 脇部付近及び底部付 近煤付着なし	外面部印き目は胴上半部で2 回 また下半の方向と違う 特に脇部付近は刷毛も しくはナデによって 印き 目が消されている	
109	甕	口径 17.0 器高 27.9 胴径 20.4	第Ⅳ区 旧河道	丸味をもち 且つ脇部の胴部 内面部底付近炭化物付着	外面部左下がりの印き目上 から刷毛目調整 底部指圧による整形 内面部刷毛目調整 脇部と口縁部別個につくり 接合 内面に1条の粘土紐の接合 痕	
110	甕	口径(14.8) 器高 23.6 胴径 20.3	第Ⅳ区 旧河道	砲弾型に近い胴部 外面部底付近で煤付着	外面部左下がりの印き目 内面ナデ調整	
111	甕	口径 17.8 器高(24.8) 胴径 21.6	第Ⅳ区 旧河道	あまり肩を張らず 全体に丸味を もつ砲弾型に近い胴部 口縁部は 「く」の字状に外反し 端部に刻 目をもつ 脇部を除いて煤付着 特に底部上 半部は刺離 内面部底付近は媒状炭化物付着	外面部左下がりの印き目 脇部付近は刷毛目調整 内面部底付近は刷毛目調整 脇部以下は刷毛の後ナデ	
112	甕	口径 15.3 器高 25.3 胴径 21.1	第Ⅳ区 旧河道	最大径が胴部ほぼ中位 球形に近 い胴部をもち 口縁部は外反する 端部には刻目を有する 刻部中位 まで煤付着なし 内面部底付近で媒状炭化物付着	外面部左下がりの印き目 胴部中位から下は刷毛目調整 外面上には1条の粘土紐の接合 痕があり 印き目の方向 が違う 内面ナデ	
113	甕	口径 14.7 器高(13.4) 胴径 18.9	第Ⅳ区 旧河道	肩が張らず丸味をもつ砲弾型に近 い胴部 口縁部は「く」の字状に 外反し 端部に刻目をもつ 外面 煤付着	外面部縁部ナデ 脇部左下 がりの印き目 その上を刷 毛目調整 外面部端部に1条 内面部 に2条の粘土紐の接合痕	
114	甕	口径(15.2) 器高(13.2) 胴径(18.6)	第Ⅳ区 旧河道	113とほぼ同形態 脇部上半部を 除いて煤付着	口縁部内外面ナデ 外面部左下がりの印き目 そ の上を刷毛目調整 内面部刷毛工具によるナデ 脇部内面1条の粘土紐の接 合痕	
115	甕	口径(14.7) 器高 23.6 胴径 20.3	第Ⅳ区 旧河道	ほぼ球形に近い胴部 印き目は胴 部下半部で2分割 脇部直下から 下半にかけて媒状炭化物付着 底部内面炭化物付着	外面部左下がりの印き目 内面部刷毛目調整	

序 號	法 量	出土地	形 態	技 法	備 考
116	甕 口徑 14.3 器高 22.8 胴径 20.4	第Ⅳ区 旧河道	最大径は胴部中位付近にあるが全 体に丸味。胴部中位より上で叩き 目 2分割。その部分から底部にかけて 焦付着 口縁部には割目を有するが全周しない 内面胴部下半に瘤状炭化物付着	外面左下がりの叩き目 部 分的にナデによって消して いる 内面ナデ	
117	甕 口徑(16.7) 器高(19.4) 胴径(19.1)	第Ⅳ区 旧河道	肩部が張らず砲弾型に近い胴部をもつ	口縁部内外面ナデ 外面左 下がりの叩き目 胴部下半 は刷毛目調整で叩き目を消 している 内面刷毛目調整	
118	甕 口徑(14.2) 器高(18.7) 胴径(17.8)	第Ⅳ区 旧河道	最大径は胴部中位よりやや下 口縁部は「く」の字状に外反する 外面頭部を除いて焼付着	外面左下がりの叩き目 口 縁部はナデ仕上げで指頭が 残る 内面口縁部付近は一部刷毛 目を残すがほかはナデ	
119	甕 口徑 — 器高(19.5) 胴径(20.0)	第Ⅳ区 旧河道	球形に近い胴部をもつ	外面左下がりの叩き目 そ の上を刷毛目調整 内面刷毛目及び指頭による ナデ 胴部内面に 1条の粘 土紐の接合痕	
120	甕 口徑 — 器高(19.2) 胴径(22.6)	第Ⅳ区 旧河道	やや球形に近い胴部 中位から下半にかけて焼付着 底部内面に瘤状炭化物付着	外面左下がりの叩き目 中 位付近で分割 内面刷毛状 工具によるナデ	
121	甕 口徑(13.5) 器高 23.6 胴径 20.7	第Ⅳ区 旧河道	胴部最大径が中位よりやや下 肩部付近に焼成後と思われる穿孔 底部外へラ状工具による 1条の 沈線 外面頭部の一部を除き及び内面底 部付近に焼付着	外面左下がりの叩き目 口 縁部内外面及び内面ナデ 外面胴部下位で粘土紐の接 合痕が 1条 これを境にして 2分割	
122	甕 口徑 16.4 器高 24.6 胴径 22.2	第Ⅳ区 旧河道	球形に近い胴部 口縁部に一部割 目 突出しないが平底 外面肩部下から底部にかけて焼付 着 内面底部付近瘤状炭化物付着	外面肩部及び肩部付近に刷 毛目調整 内面刷毛状工具によるナデ 肩部付近に工具痕が残る 口縁部内面に 2条の粘土紐 の接合痕	
123	甕 口徑 14.8 器高 24.0 胴径 20.3	第Ⅳ区 旧河道	中位よりやや上に最大径をもつ砲 弾型に近い胴部 頭部付近の外面内面胴部を中心にして 焼付着	外面左下がりの叩き目 肩部に刷毛目調整 内面ナデ	
124	甕 口徑 15.0 器高 25.0 胴径 19.9	第Ⅳ区 旧河道	中位付近で最大径をもつ砲弾型の 胴部 口縁部に割目 外面部付近を除いて及び内面底 部付近瘤状炭化物付着	外面左下がりの叩き目 内 面ラウンド工具によるナデ 工具痕口縁部に残る 内面 3条の粘土紐の接合痕 最 下端内面の接合痕で 2分割 指頭圧痕各所に残る	
125	甕 口徑 13.2 器高 21.1 胴径 17.7	第Ⅳ区 旧河道	やや球形に近い胴部をもつ 胴部よりや高位で 2分割 口縁 部端部で明瞭な面をつくる 附近 底部を除いて焼付着	外面左下がりの叩き目 口 縁部は刷毛目調整 胴部肩 部直下で部分的に刷毛目調 整 内面刷毛目調整 胴部 中央部不明	

鷹	器	注	量	出土地	形	態	技	法	備	考
126	甕	口径 13.2 器高 20.9 胴径 17.2		第Ⅱ区 旧河道	ほぼ球形に近い胴部 口縁部はヘラ状工具による削目 胴部中位よりやや上から下半及び 内面底部付近に煤状炭化物付着		外面左下がりの叩き目 部分的にナデ及び刷毛目調整 内面櫛状工具によるナデ 下半部で工具痕 内外面に 各1・2条の粘土紐の接合痕			
127	甕	口径 15.6 器高 (11.8) 胴径 20.6		第Ⅱ区 旧河道	砲弾型に近い胴部		外側口縁部から頭部にかけて 刷毛目調整 脇部左下がりの叩 き目 内面刷毛目調整			
128	甕	口径 (15.8) 器高 (9.8) 胴径 —		第Ⅱ区 旧河道	砲弾型の胴部 口縁端部削目 外側胴部以下焼付着		外側口縁部から頭部に刷毛 目調整 脇部左下がりの叩 き目 口縁部内面刷毛目調整 脇 部以下ナデ 内面1条の粘 土紐の接合痕		脇部付 近に擦 圧痕	
129	甕	口径 16.0 器高 (10.5) 胴径 (20.8)		第Ⅱ区 旧河道	球形に近い胴部 外面一部焼付着		外側口縁部刷毛目及びナデ 調整 脇部左下がりの叩 き目 内面ナデか			
130	甕	口径 (14.3) 器高 (9.0) 胴径 —		第Ⅱ区 旧河道	球形に近い胴部 口縁部に端面を もたない		外側右下がりの叩き目 口 縁部内外面及び胴部内面刷 毛目調整			
131	甕	口径 (13.6) 器高 25.9 胴径 (21.2)		第Ⅱ区 旧河道	やや球形に近い胴部 胴部中位及 び下半で分割 胴部中央部及び内面下半部で煤状 炭化物付着		外側左下がりの叩き目 内面ナデ			
132	甕	口径 11.3 器高 (10.0) 胴径 (13.9)		第Ⅱ区 旧河道	球形に近い胴部 胴部下半に一部 焼付着		外側左下がりの叩き目 一 部右下がりの叩き目が認め られる 下半部は刷毛目調 整 口縁部内外及び内面ナデ			
133	甕	口径 — 器高 (13.8) 胴径 (19.8)		第Ⅱ区 旧河道	砲弾型に近い胴部 下半部から底 部にかけて一部焼付着		外側左下がりの叩き目を刷 毛目調整 内面刷毛目調整			
134	甕	口径 — 器高 (4.6) 胴径 (17.0)		第Ⅱ区 旧河道	砲弾型に近い胴部 内外面とも煤 状炭化物付着		外側叩き目ナデ仕上げ 下 半部は更に刷毛目調整 内 面刷毛状工具によるナデ 底面内外面ナデ			
135	甕	口径 — 器高 (15.4) 胴径 (15.8)		第Ⅱ区 旧河道	ほぼ球形に近い胴部		外側左下がりの叩き目 内面ナデ 底部にヘラ圧痕 内面に2条の粘土紐の接合 痕			
136	甕	口径 (21.1) 器高 (5.6) 胴径 —		第Ⅱ区 旧河道	口縁部半ばで突出してゆるやかな 段をつくる 脇部は強く張る		口縁部内外面ナデ そのほか不明			
137	甕	口径 (15.2) 器高 (6.3) 胴径 —		第Ⅱ区 旧河道	短く外反する口縁 138に比して ややゆるやかに脇部張る 脇部に1条の浅い沈線		外側刷毛目調整 脇部内面に指頭圧痕 他の整形土器に比して器壁 薄い		讀崎系	

號	器 形	法 量	出土地	形 態	技 法	備 考
138	甕	口径(15.2) 器高(4.8) 胴径一	第Ⅱ区 旧河道	唇く外反する口縁 肩く肩部が張る る胴部 端部に1条の浅い沈線	口縁部内外面横ナデ 器壁は薄い 外面腹方向の刷毛目調整 胴部内面に指頭圧痕	讃岐系
139	甕	口径 10.8 器高 15.6 胴径 14.9	第Ⅱ区 旧河道	胴部下半部に最大径をもつ 「く」の字形に立ちあがり気味の 口縁部はわずかに端面をつくる	左および水平方向の叩き目 を刷毛目調整 内面ナデ 脇部内面下半に 1条の粘土柱の接合痕	
140	甕	口径一 器高(12.7) 胴径一	第Ⅱ区 旧河道	やや鐘錶型に近い胴部 丸底に近 い底部 2分割 外面とも端一部付着	外面左下がりの叩き目 内面刷毛状工具によるナデ	
141	甕	口径一 器高(10.2) 胴径(10.9)	第Ⅱ区 旧河道	球形に近い小形の土器 外面底部 付近に端付着	外面胴部上半部ナデ 下半 部は左下がりの叩き目 内面ヘラ状工具によるナデ 指頭圧痕	
142	甕	口径 14.9 器高 15.2 胴径 15.2	第Ⅱ区 旧河道	球形の胴部 口縁部と胴部最大径 がほぼ同じ 頭部の一部を除いて楕状炭化物付 着	外面右下がりもしくは水平 に近い叩き目を刷毛目調整 を行ないヘラ削き 内面底 部を除いてヘラ削り	
143	甕	口径 16.5 器高(7.1) 胴径一	第Ⅱ区 旧河道	鐘錶型に近い胴部 頭部の一部を 除いて端付着	外面とも刷毛目調整 外面左下がりの叩き目の上 をナデ状工具によるナデ 仕上げ 内面ナデ 1条の粘土柱の 接合痕	
144	甕	口径 11.9 器高(6.1) 胴径一	第Ⅱ区 旧河道	やや球形に近い胴部	外面刷毛目調整 口縁部内外面ナデ 内面ヘラ削り	
145	甕	口径 13.3 器高 13.9 胴径 14.3	第Ⅱ区 旧河道	口縁部は外上方へ聞く 底部は平 底の痕跡をもつ丸底 最大径は胴 部中位 頭部の一部を除いて外面端付着	外面左下がりの叩き目 胴部中位から下半にかけて 右下がりの叩き目 内面ヘラ削り	
146	甕	口径(16.2) 器高(5.7) 胴径一	第Ⅰ区 杭列下	鐘錶型に近い胴部 口縁端部上下 に肥厚 3条の浅い凹線	口縁部内外面横ナデ 外面刷毛目調整 内面刷毛状工具によるナデ	
147	甕	口径(13.6) 器高(5.5) 胴径一	第Ⅱ区 旧河道	鐘録型に近い胴部 口縁部外反す る	口縁部内外面指頭によるナ デ 指頭残る 外面左下がりの叩き目 頭 部以下ナデ	
148	甕	口径(17.2) 器高(3.8) 胴径一	第Ⅱ区 杭列	外反する口縁部 端部下方わずか に肥厚	外面ともナデ 外面口縁部に指頭残る	
149	甕	口径(16.2) 器高(13.2) 胴径一	第Ⅱ区 旧河道	頭部以下胴部が大きく張る 口縁部端部下方に肥厚 外面一部 端付着	外面とも刷毛目調整	
150	甕	口径一 器高(3.5) 胴径一	第Ⅱ区 旧河道	底部に穿孔	外面底部付近叩き目 内面ナデ	

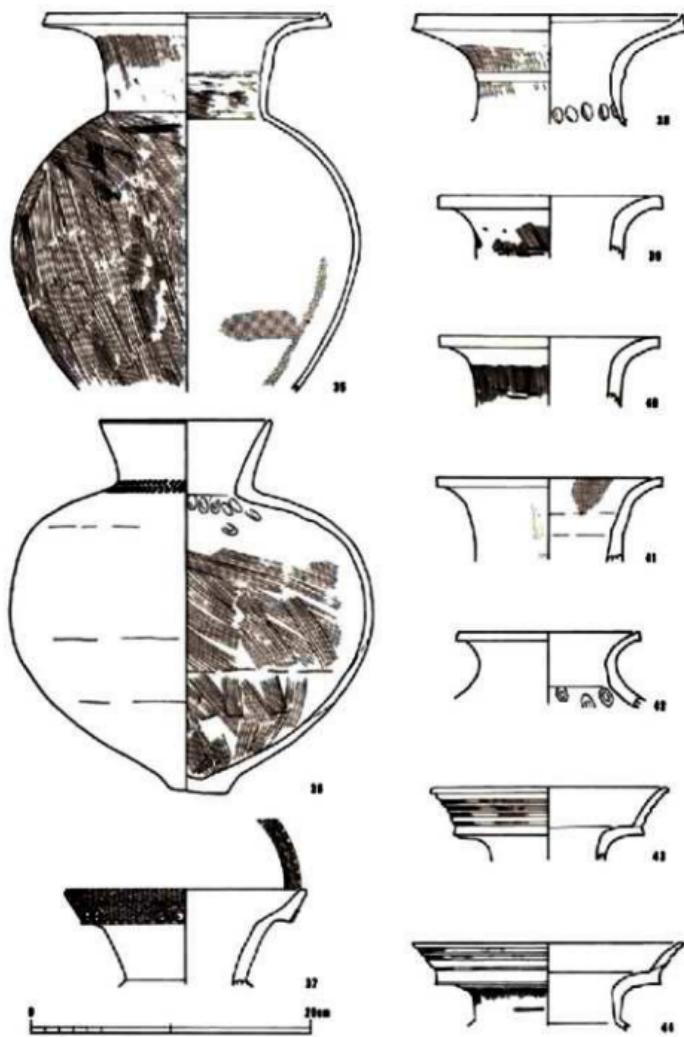


图36图 旧河遗址出土土器复原图(1)

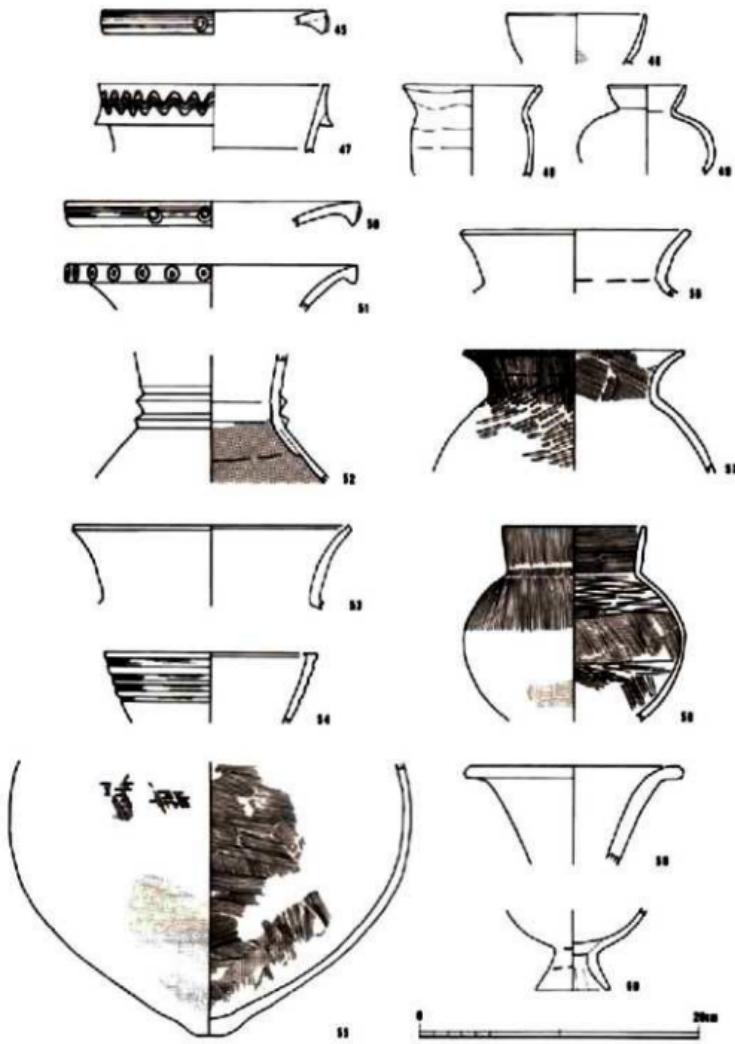
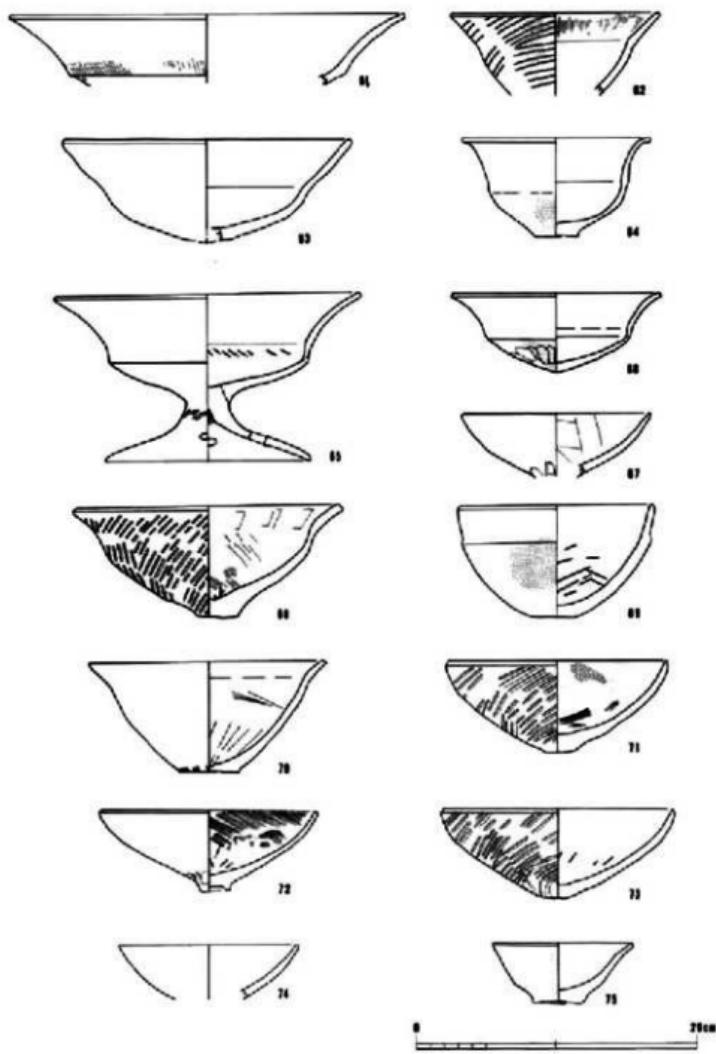


图36(2) 旧河道出土土器残片图 (2)



第37图 旧河遗址出土器物实测图（3）

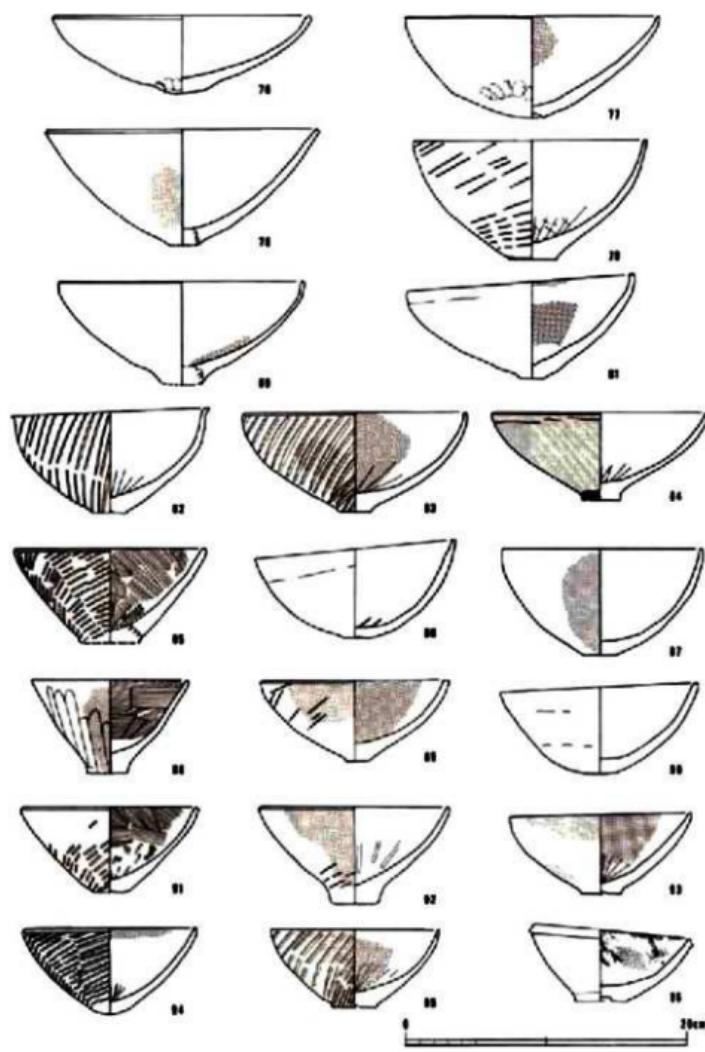
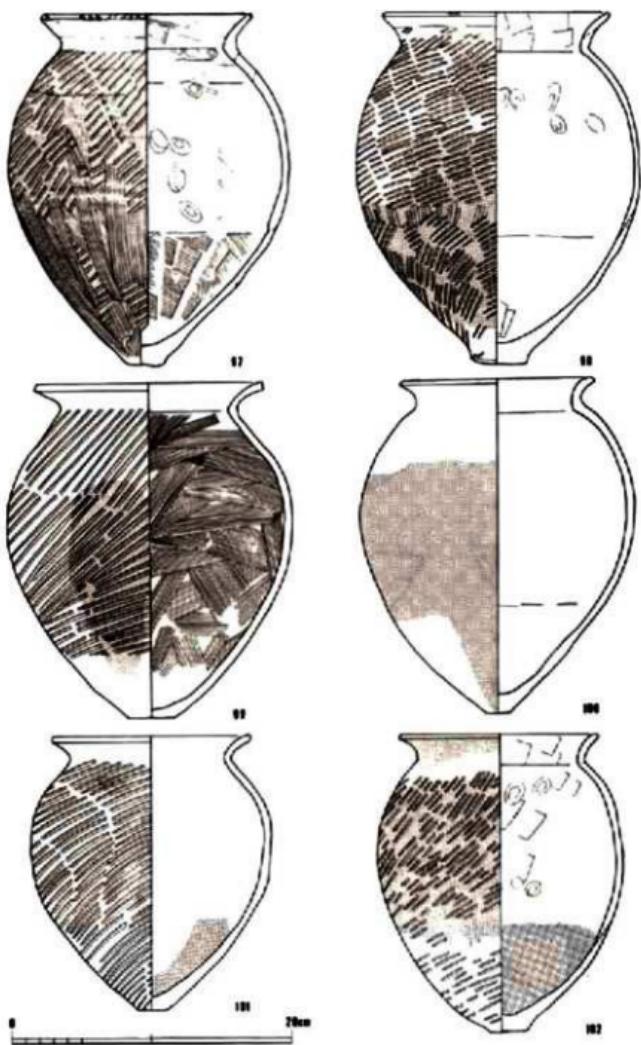
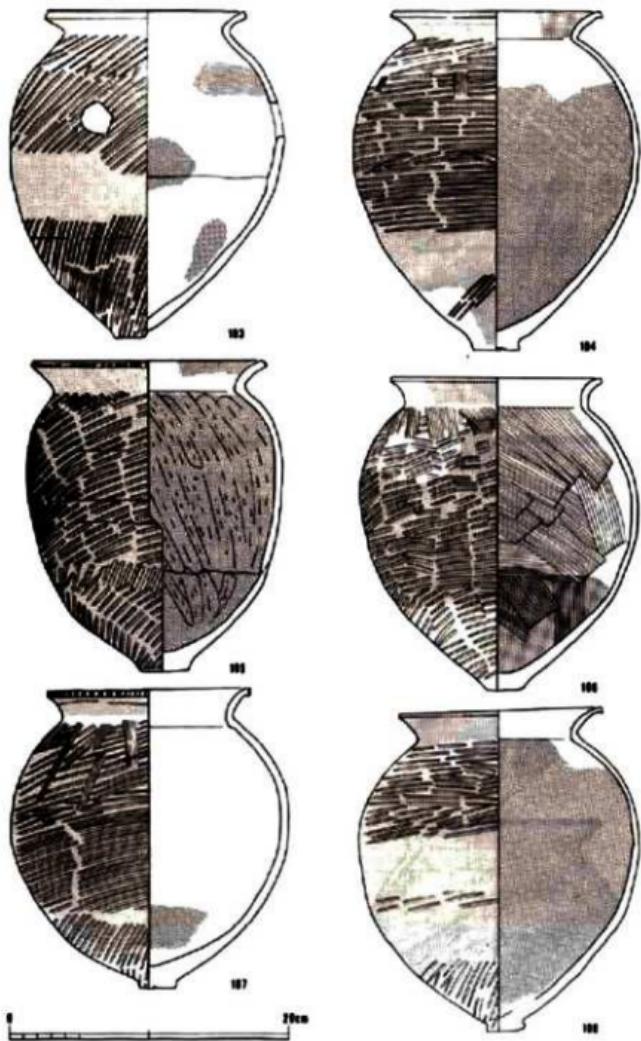


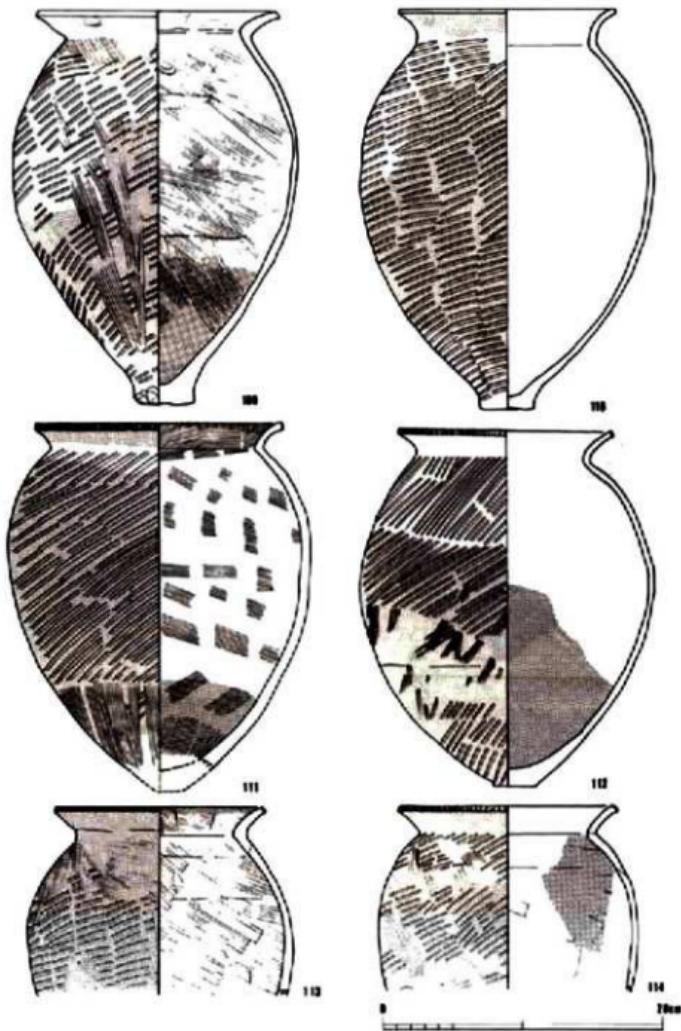
图38(4) 旧河遗址出土陶器实测图(4)



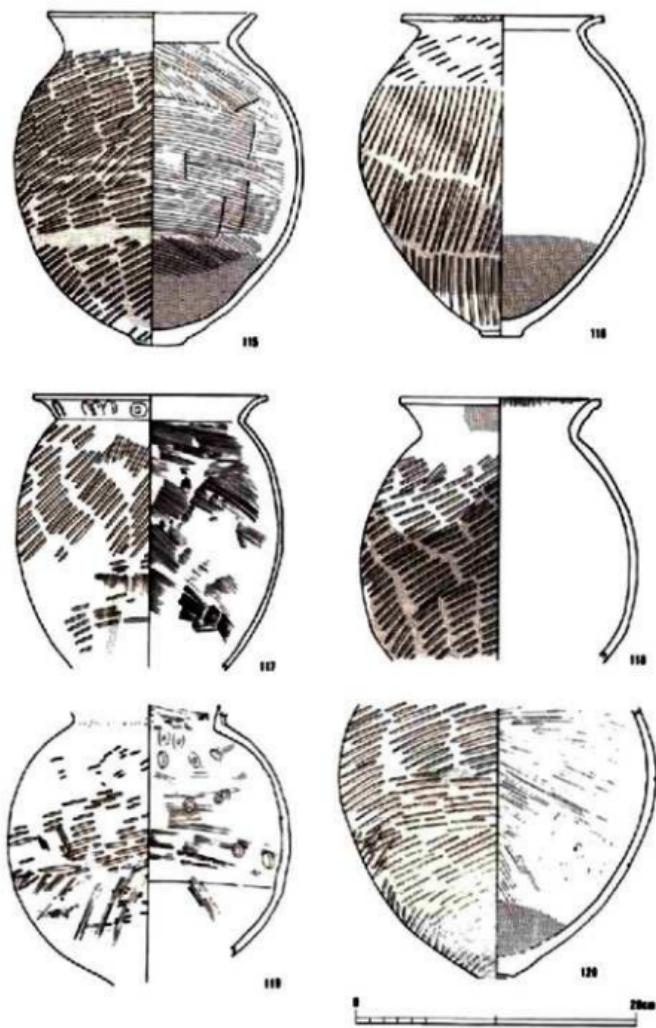
第39圖 旧河道出土土器實測圖（5）



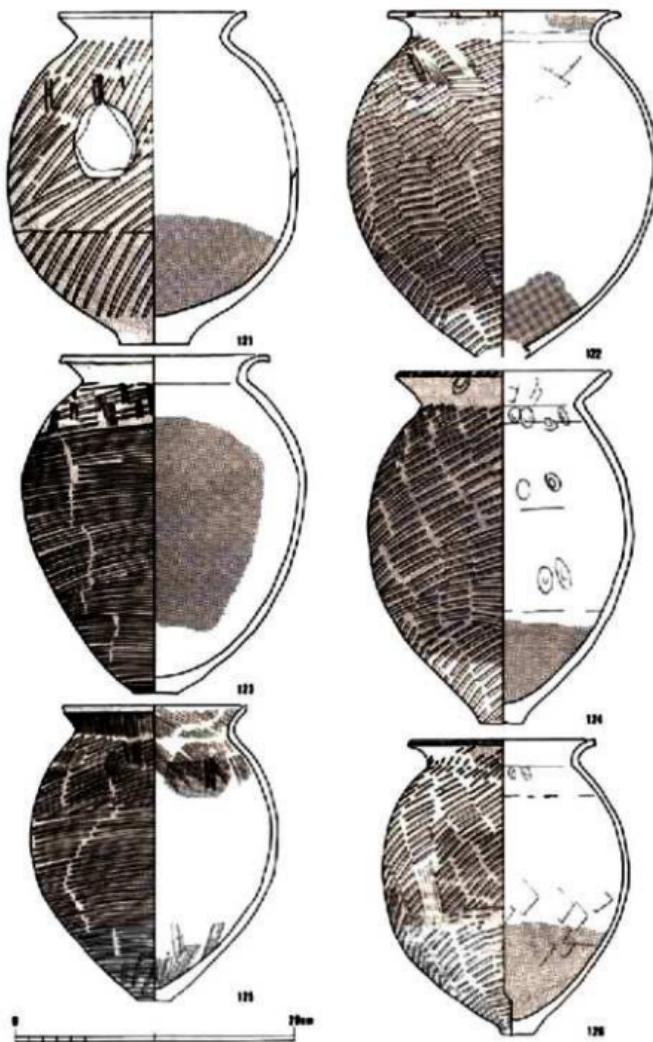
第40圖 旧河道出土土器實測圖（6）



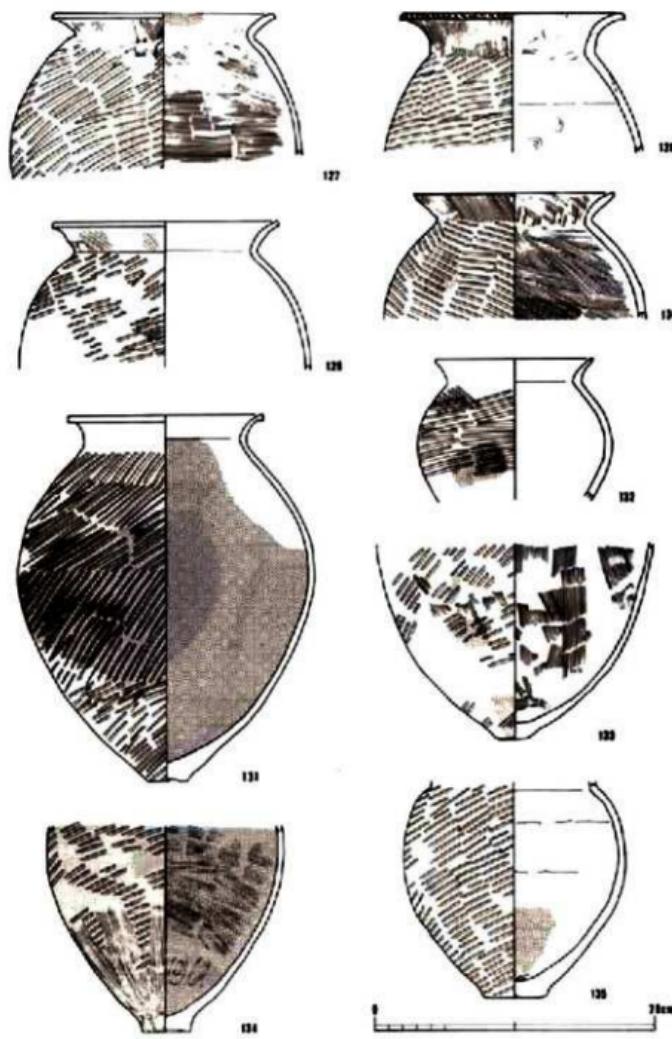
第41図 旧河道出土土器実測図（7）



第42圖 旧河道出土土器実測図（B）



第43圖 旧河遺出土器質測圖（9）



第44圖 旧河道出土土器實測圖 (10)

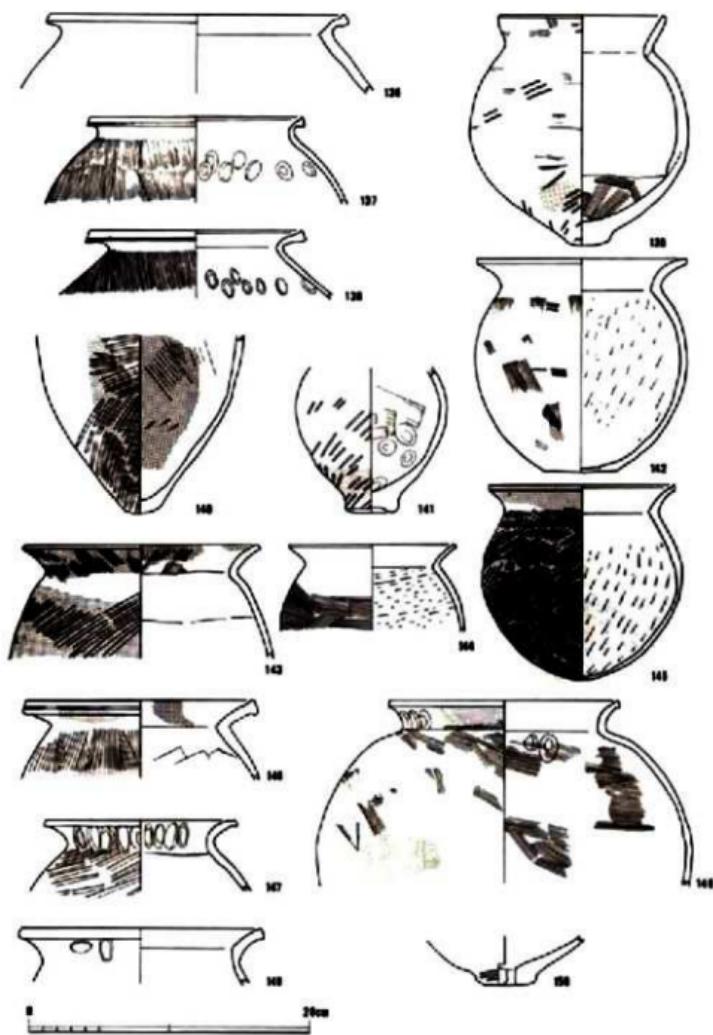


图45图 旧河道出土土器实测图 (11)

小 緒

志知川沖田南遺跡から出土した土器のうち、一部の弥生時代前・中期及び中世に所属する土器を除くと、同一の時期の所産と考えられる。

しかし、これらの土器は当初、古墳時代前期と考えていた。それは変形土器についてみてみると、弥生時代後期に多く採用されている叩き目技法をもっており、プロポーションからも同時期に比定することができるものが多い。一方、内面にはヘラ削りを施したもの、丸底に近いもの、淡路島内では「庄内型變」の出土例が皆無であることから「庄内型變」は採用されなかつたと判断して、古墳時代にも引き続いて前代の特徴をもつ変形土器が使用されたと理解した。

また、長頸壺形土器が欠落していることや二重口縁をもつ壺形土器が存在することなどもその根拠とした。

しかし、小形丸底壺形土器や小型器台形土器が出土していないことは事実である。

かつて、北淡路地域の土器についてその概説¹¹を述べたことがあるが、全て採集資料であり多くは語れなかった。その際淡路島のものと特殊性、地域性について述べると共に、播磨側の資料と比較してみた結果、古墳時代前期とするのが妥当ではないかとも述べた。

また、発掘調査の資料として洲本市下内膳遺跡があり、志知川沖田南遺跡と同時期の遺物が出土している。

最近、播磨とは別に淡路と至近距離にある阿波・紀伊の集落跡における土器の実態が解明しつつある。今一度志知川沖田南遺跡の時期を再考する必要がある。

例えば、変形土器をみてみると、紀伊では「庄内型變」は搬入品としてあるようであるが、その技法を全て採用せずに前代の技法を踏襲している部分もある。この地域の弥生時代後期における変形土器には口縁部に刻み目をもつものがあるが、古墳時代前期にはほぼ姿を消していたり、丸底に近い底部と共に平底も共存している。外面の叩き目技法は変形の際残しているもの、刷毛目調整や内面ヘラ削りによって器壁を薄く仕上げるなど多様である。

志知川沖田南遺跡の変形土器において、より後出のものと思われる142、145は平底と叩き目を刷毛目調整している142と細筋の叩き目を残しながら丸底の145とはいずれも内面はヘラ削りを施し、ほぼ同じ器高と胴径をもつ。

讃岐系と称した変形土器（137、138）は、いずれも地場の胎土で製作されたものではなく、四国からの搬入品である。

一方、35の壺形土器は筒状の頭部と球形の胴部をもつが、岩崎直也氏が提唱した矢野式土器と酷似している。ただ、内面にヘラ削り手法を用いていない点が異っており、より古相を示しているのであろうか。

阿波地方でも当該時期の土器幅年に取り組まれているが、二重口縁をもつ壺形土器と35と同様の壺形土器とが共存するが、後者が圧倒的に多い。

変形土器は諸岐系と称したものが大半で、弥生時代以来の伝統的な叩き目を有するものは皆無に近い。弥生時代後期のプロポーションをもつものには叩き目は認められても刷毛目調整によってついで消されている場合が多い。

またこの種の変形土器は弥生時代後期後半まで、古墳時代前期には姿を消している。

周辺地域の実態は微妙である。

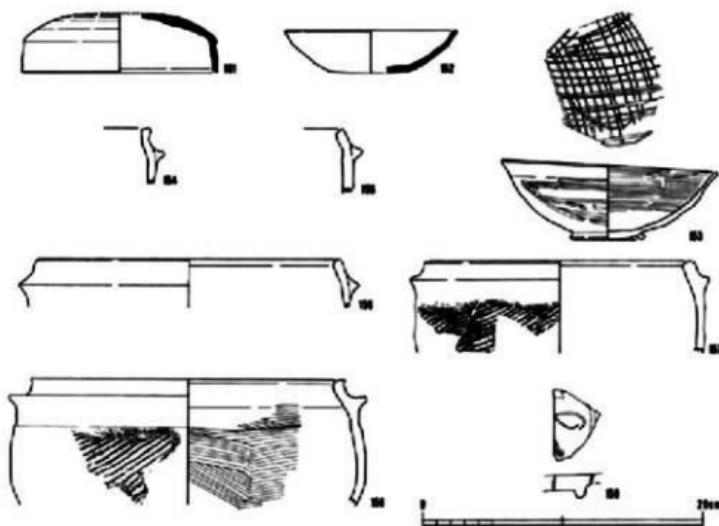
このように見てみると、志知川沖田南遺跡出土土器の時期を決定するのは非常に困難である。旧河道出土遺物を同一時期と見なすのか、それとも時期差があるのかによっても帰結が違ってくる。

一方、溜池状遺構から出土した変形土器を取り上げても若干の型式差はあるようであるが、一括遺物である。

淡路での土器編年のはじめはもちろん周辺地域（特に紀伊・阿波）の編年が確立するまで時期を決定することは保留し、ここでは、弥生時代後期後半から古墳時代前期としておきたい。

注

- 1 兵庫県教育委員会「淡路・志知川沖田南遺跡一昭和55年度発掘調査報告」昭和55年11月
- 2 兵庫県教育委員会「淡路・志知川沖田南遺跡二昭和56年度発掘調査報告」昭和57年9月
- 3 同本巻・広岡俊二・松下勝「下内膳遺跡の遺物」『兵庫考古』9 昭和55年5月
- 4 下内膳遺跡発掘調査団「下内膳遺跡発掘ニュース」1~3 昭和52年12月・昭和53年3月
- 5 神戸市教育委員会「下内膳遺跡」昭和53年7月
- 6 出土遺物については神戸市教育委員会・山上雅史氏のご好意により、実見させて戴いた。記して謝意を表します。
- 7 和歌山県教育委員会「峰神地区遺跡発掘調査報告書」昭和59年3月
- 8 和歌山県教育委員会・大野左千夫氏、和歌山県文化財研究会上井孝之氏らには野田・櫛塚地区遺跡、船岡山遺跡出土土器の実見をはじめ、数々の教示を得た。記して感謝します。
- 9 岩崎直也「四国系土器群の露出」「大阪文化誌」17 昭和59年3月
- 10 徳島県教育委員会「黒谷川郡瀬戸原地況会資料」昭和61年1月
- 11 徳島県教育委員会「黒谷川郡瀬戸原地況会資料」昭和61年3月
- 12 徳島県教育委員会・菅原康夫・早瀬隆人氏及び徳島市教育委員会・瀬山雄一・一山 長氏等には船頭・鶴吹遺跡をはじめ主な遺跡の遺物を実見する機会を与えて戴き、且つ数々の教示を得た。記して感謝します。
- 13 なお、諸岐系土器と称したまま本文では使用している。上記例氏らのご教示によると古野川右岸と左岸とでは、その歴史に微妙な差があるとのことであり、氏等の提唱を待って訂正したいと考えている。



第46図 その他の出土土器実測図

番	器種	法 量	出土地	形 態	技 法
151	蓋 (須恵器)	口径(13.8) 器高(4.2)	第Ⅲ区 攤乱地	いくぶん外開きの口縁部 天井部欠損 口縁部内面は内傾する面をもつ	上半部ヘラ削り 立ちあがり部内面は横ナデ
152	瓶 (須恵器)	口径 12.1 器高 (3.0)	第Ⅲ区 中世溝	内湾気味に外上方に立ちあがる体部	内外面とも横ナデ 底部糸切り
153	瓶 (瓦器)	口径 15.2 器高 5.3	第Ⅲ区 灰色粘土	口縁部は平面椎円形 内面は径5.3cmの外開き貼り付け 高台	口縁部外側は横ナデ 内面・外面とも横位の暗文 見込部は格子暗文
154	羽釜 (土師器)	—	第Ⅲ区 灰色粘土	内傾する口縁部	内外面とも横ナデ 154は 外面に平行条線タタキ
155	羽釜 (土師器)	—	第Ⅲ区 灰色粘土	内傾する口縁部	内外面とも横ナデ 154は 外面に平行条線タタキ
156	羽釜 (土師器)	口径(21.2)	第Ⅲ区 灰色粘土	内傾する口縁部	内外面とも横ナデ
157	羽釜 (土師器)	口径(18.4)	第Ⅲ区 中世溝	内傾する口縁部 わずかに内湾する体部	内外面とも横ナデ 体部外面に平行条線タタキ
158	羽釜 (土師器)	口径(22.4)	第Ⅲ区 中世溝	内傾する口縁部 内湾する体部	内外面とも横ナデ 体部外面に平行条線タタキ
159	瓶 (青磁)	—	第Ⅲ区 中世溝	底部の破片	内面に側花文の餘割あり

表5 その他の出土土器相対表 (2)

第2節 木 器

横槌（第47図1）

第IV区旧河道青灰色砂中から出土した。全長34.3cm、敲打部長19.1cm、柄部長15.2cm。

横槌の出土した地点は、付近から多くの土器が出土している。土器からみれば、弥生時代末期から古墳時代前期の時期を与えることができるだろう。

敲打部は、先端を丸く仕上げ、先端部を垂直方向にも使用している。先端部の摩耗は著しい。敲打部は断面椭円形を呈しており、その短径は7.1cm、長径は9.1cmを測る。敲打部の長辺方向は、一面に、かなりはっきりとして凹部がみとめられ、その使用に際しては、一定方向に敲かれたことがわかる。すなわち、横槌は、使用目的によって、敲打面を使い分けているわけである。

柄部は、敲打部との接続部位を一部欠損しているが、その全様は復元可能である。断面は、いくぶん扁平な円形を呈し、ちょうど敲打部の凹部と同一方向に扁平となっている。また、柄部の断面は、握った時に指が巻き込む位置に、凹部ができている。

木取りは、芯をわずかにはずした辺部を使う。

なすび形鎌（第47図2）

この鎌は、第IV区しがらみ遺構が、旧河道と接する地点から出土した。全長59.4cm。

鎌は、上端の着柄部に別材の柄をくくり付けて使用したもので、踏鎌である。足踏み突起下部には、柄を装着する際に使用した繩の痕跡と思われる二段の凹みがみられる。着柄部にも、もう一ヶ所、繩でくくり付けていたはずであるが、その痕跡はない。

柄がとり付けられる側は、全体に扁平であるのに対し、反対側の面の端部は、面取りがなされ、丸みを帯びる。先端部に鉄製工具を装着したような痕跡はない。

着柄部の幅2.2cm、厚さ1.3cm。最大身幅12.5cm、厚さ1.0cm。足踏み突起幅11.0cm、厚さ1.4cm。

丸棒1（第47図3）

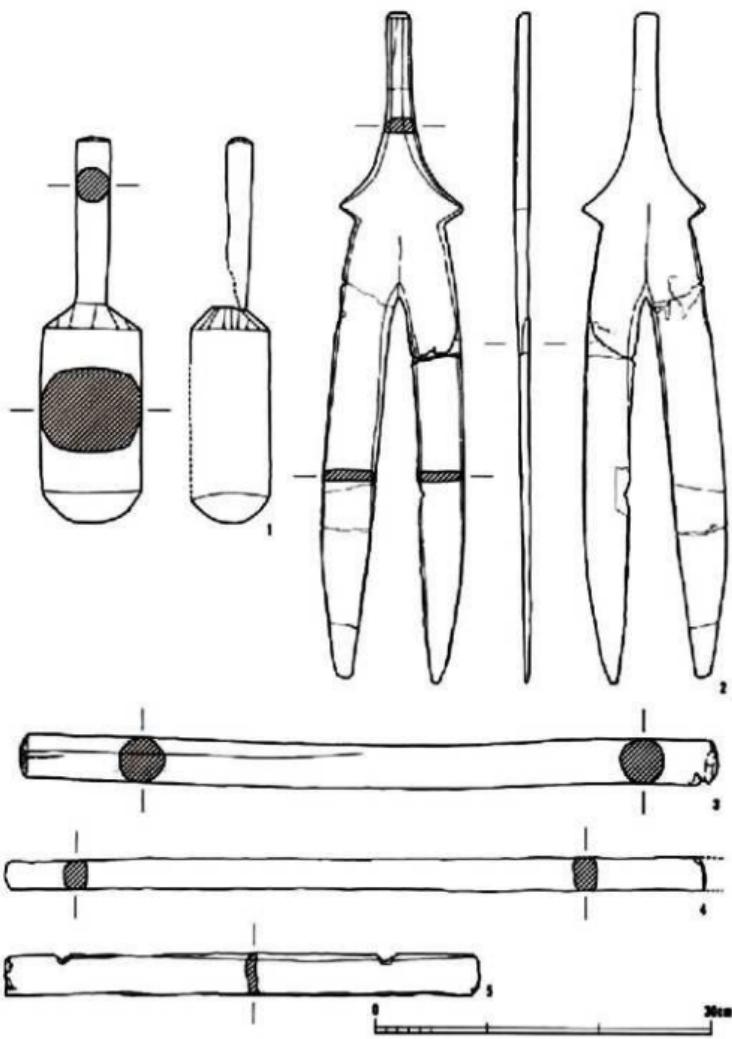
第IV区黒色泥土の砂層から出土した。自然木の枝材をそのまま利用したもので、両端を加工する。全長62.7cm、径4.0cm。

丸棒2（第47図4）

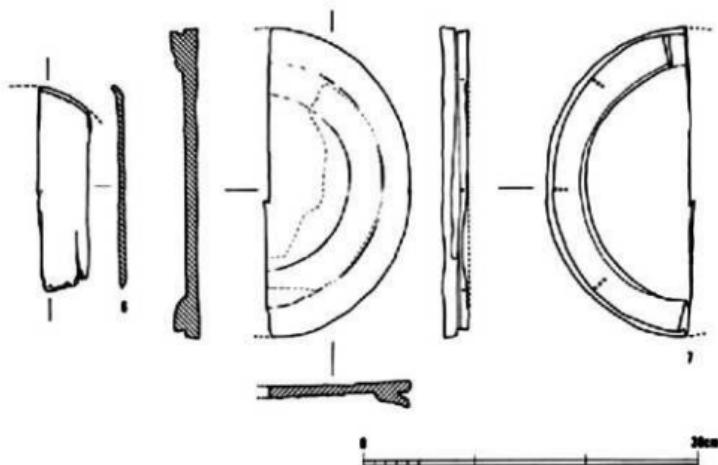
第IV区旧河道青灰色砂層から出土した。自然木の枝材を利用する点は丸棒1と共に通するが、両端辺を削っているため、断面は椭円形をなす。片端は加工痕が残るが、もう一方は、折れている。残存長62.5cm、短径2.0cm、長径3.0cm。

えぐりのある板材（第47図5）

第IV区黒色泥土中の砂層から出土した。板目材を使用し、片辺にV字形のえぐりが2ヶ所入る。端面は、一端のみが残る。現存長42.7cm、幅3.6cm、厚さ0.8cm。えぐり部の先端間は28.6cm。



第47图 旧河道出土木器 (1)



第48図 旧河道出土木器（2）

木盤（第48図6）

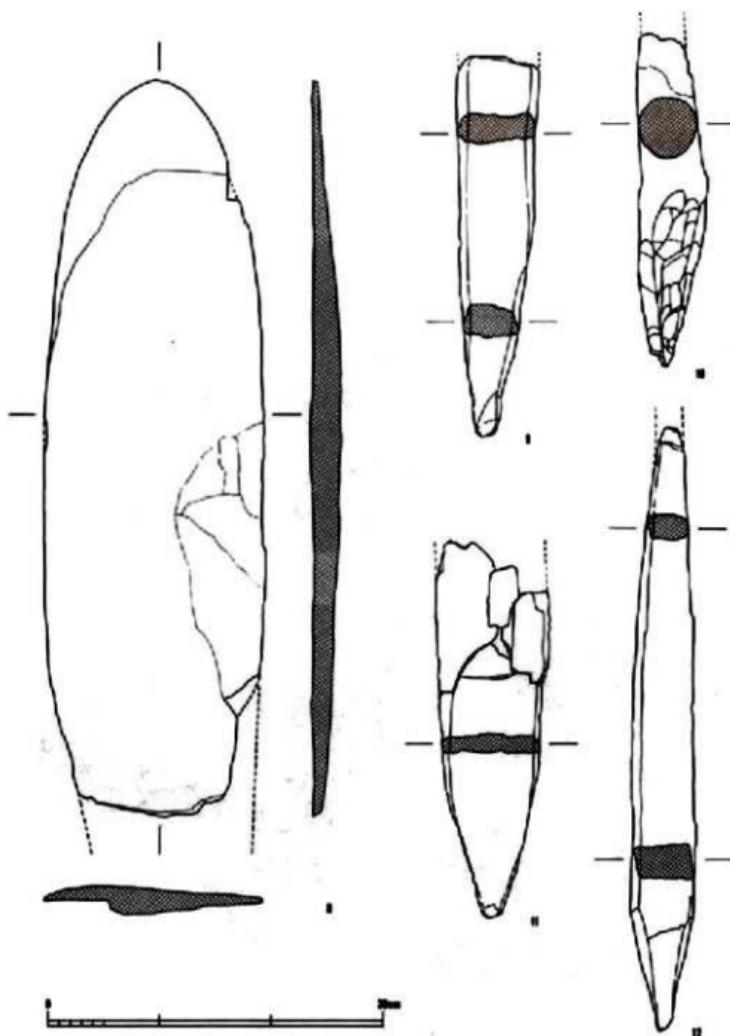
第Ⅳ区旧河道青灰色砂層中からの出土。一部だけしか残っていないが、短い縁部が外方に開く。推定する直徑は20cm。柾目板を使用したものである。

不明木製品（第48図7）

第Ⅱ区旧河道青灰色砂層直上から出土した。残存部は、約半分で、直徑27.5cm。内面は、外周から0.5cm内側に幅2.5cm、厚さ1.0cmの縁帯を割り出している。外周とこの縁帯の間に側板がとり付いたと思われ、木釘穴が4ヶ所ほど等間隔にならぶ。縁帯は、やや外開きに立つ。縁帯にとり付く側板は、脚のように下方に下がると考えられる。外面には、二条の同心円切り込みがあるが、用途は、よくわからない。また外面には赤色顔料が一部付着する。

用途不明木製品（第49図8）

第Ⅳ区旧河道青灰色砂層から出土した。扁平な板材で、先端部を薄く仕上げ、周囲を丸く加工する。残存長78.2cm。断面の形状から推察すると、全長85cmほどになり、対称形をなしていたと思われる。中心部の最大厚は、3.2cm、最大幅27.5cmを測る。なお、表面に、直径3cmほどの円孔が点在するが、いずれも貫通しておらず、本来、使用にあたって用いられた孔とは考えられない。



第49圖 旧河道出土木器 (3)

杭 (第49図 9-12)

第Ⅳ区大畦畔に伴う杭列の杭を4点図示した。杭の形状は、板状あるいは棒状に加工したもの、自然木をそのまま利用したものがある。

杭1(9)は、幅8.8cm、厚さ3.0cmの板材の先端部を加工したものである。先端部の加工は、片側からの削りを主体とし、もう一方からは、端部から8cmほどの部位以下にわずかに調整痕が残る。

杭2(10)は、直径5.2cmの自然木を加工したもので、端部は、三方から粗く削り、尖らせている。

杭3(11)は、杭1より、さらに扁平で薄い板材を、同じように、両側から、先端部を加工し、尖らせている。板材の幅は10.2cm、厚さ1.3cm。

杭4(12)は、角材(6.0×3.5cm)を利用したものである。厚みのある材を使用するため、先端は、三方から削り、尖らせている。



第Ⅳ区 丸棒1 出土状況



第Ⅳ区 旧河道 ナスピ形體 出土状況

第7章 志知川沖田南遺跡の 地形変化と水田開発

——地形環境分析による——

高 橋 學

(立命館大学・地理)

第1節 地形環境分析の視点

過去において人間が行なってきた土地利用や開発について考察を加えようとした場合、あらかじめ対象とした時代の自然環境を復原しておく必要がある。特に、時代が現在から過去に遡るにしたがい、人間の生活と自然環境との関係はより密であったと考えられるし、また自然環境そのものも現在と異なっていたはずである。したがって、このような視点はより重要度をますことになる。しかしながら、従来の考古学や歴史学あるいは歴史地理学の研究の多くは、この点に関する検討が充分でない。すなわち、過去の自然環境が現在のそれとあたかも同じであったかのように漠然と思いこんでいたり、現在の地表面の状態を示しているにすぎない地形分類図や土地条件図をもちいて、過去の聚落立地や土地利用などについて考察が加えられていたのである。

他方、人類出現以降の自然環境について取りあつかってきた第四紀地質学や地形学などの分野からのアプローチはどうであろうか。既存の研究成果についてふりかえってみると、最も精度が高い場合であっても、せいぜい縄文海進といった現象が認識できる10³年オーダーにすぎなかつたことが判る。したがって、この場合においても、先史時代末以降の自然環境の変化について充分な検討がなされたことは言いがたいのである。

たしかに、先史時代末以降には、第四紀全体を見た時のように大規模な自然環境の変化が認められるわけではない。しかしながら、米を生活の主要な糧とし、低平な平野に居住してきた我々の祖先にとっては、50cmあるいは1mといった極めてわずかな地形の変化も重大な意味があったに違いない。河川の氾濫に対する安全性、水田の土壌生産性、水利灌漑システムなど、さまざまな点でわずかな地形変化も無視しえないのである。

それでは、かかる問題にどのようにアプローチすれば良いのであろうか。これに対し、筆者の考えを簡単にまとめたのが第6表である。すなわち、既存の土地条件図や地形分類図で分類単位としてあつかわれてきた地形には、河川の氾濫によって形成されたような微細なものから、何千回、何万回といった河川の氾濫によって形成された地形の集合体まで、本来同一の分類基準で論ずることのできないものが混在していたと考えられるのである。そこで、これらを地形

調査範囲	調査単位	ベースマップ	等高線間隔	空中写真	地質データ	その他のデータ	成 果	考 古 調 查
1:10万から 1:2.5万	地形図 地盤地形	1:2.5万 ~	2.5m ~	1/2万 ~	1/2万 ~	地質図 土壌図 柱状図	10 ⁴ 年 10 ³ 年 オーダーの 地形変遷史	(表面調査)
1:1万	地形図 地盤地形	1:1万	1m	1/1万	1/1万	柱状図 土壤図	10 ³ 年 オーダーの 地形変遷史	(表面調査)
50mm	地形図 地盤地形	1:1万	1m	—	1/1万	柱状図 土壤図	10 ³ 年 オーダーの 地形変遷史	(表面調査)
10mm以下	地形図 地盤地形	1:2,500	10mm	—	1/5,000 ~	柱状図 土壤図 断面図	10 ² 年 周辺における 既発掘資料	電磁探査 (グリッドV-T レンチ調査)
以上	地形図 地盤地形	1:2,500	以上	数センチ	1/1,000 以上	詳細な 地盤地質 断面図 地盤分布 地図	花崗岩との 連携実測図 地図	本調査 (全面実測)

表6 地形分析の精度と方法

の規模により4段階に整理し、それぞれの精度に対応する分析方法、あるいはそこから得られる結果がどのようなものかについて検討してみたのである。4段階に整理したなかで最も精度が高い地形分析で認識されるのが「超微地形」と仮称される地形である。超微地形は一回の洪水に対応して形成された最小単位の地形であり、その規模は小さく、1/2,500より大縮尺の地図上で

なければ表現がむずかしい。また、土砂堆積により形成されたものの場合、側方への層相変化がかなり著しくみられるのが特徴である。この超微地形が数回程度集まつたものが「微地形」であり、現地表面に存在する場合は1/2万程度、地表下2m程度までに埋没しているものは1/5,000~1/1万程度以上の空中写真判読等で検出することができる。微地形は通常、集落、畑、水田といった土地利用の差として比較的容易に判別しうる。微地形の例としては自然堤防、ポイントバーなどの地形が挙げられる。また、微地形の集合体であり、繩文海進といったような數千年オーダーの環境変化に対応して形成されるのが「地形帯」で、その代表的なものとしては三角州や扇状地がある。さらに、「地形面」はいくつかの地形帯から構成された、数万年オーダーの環境変化に対応して形成された地形で、その典型的な例としては段丘や氾濫原(沖積面)がある。

それぞれの段階における地形の検討は、「超微地形分析」、「微地形分析」、「地形帯分析」、「地形面分析」と呼ばれ、各々密接な関係がある。そうして、これらの総称が「地形環境分析」と言うことになる。

さて、考古学の発掘調査の精度と地形分析は表6に示したような関係にあると考えられる。すなわち、いわゆる分布調査と地形面・地形帯分析とがほぼ対応するであろう。発掘報告書等に記載された地質学や地形学の成果をみると、ほとんどがこの精度に属しており、「微地形分析」と称している場合であっても実質的に、そこまで論究されている場合は極めて少ないと言わざるを得ない。ある地点における発掘成果とこのレベルでの地質・地形調査から得られた結果には精度に明白なギャップが存在するものの、その認識が充分でないために、互いに異和感を持ったり誤解が生じたりしているようである。それを解決するためには、次に挙げる微地形分析や超微地形分析が試みられねばならない。微地形分析によって現地表面およびその下に埋没した微地形の存在が明らかになるため、これを考慮してグリッドやトレントの密度、位置、方向などが決定される。そうして、確認調査の実施に伴い、地層の観察や遺物の出土状態の検討を行ない、出土遺物の編年により得られた年代観と統合し、 10^3 年オーダー程度の微地形変化と、特徴的な時代における土地利用状態の推定が試みられる。これによって、限られた範囲でしか得られなかった発掘データをある程度の広がりの中に位置づけることが可能となる。

さて、遺跡の発掘本調査の際に実施されるのが超微地形分析である。超微地形分析では最初に旧表土層の認定が行なわれる。旧表土層が河川の氾濫堆積物や火山灰などによって埋積され、次の表土が形成されるまでを1ステージとし、それを考察の基本単位とする。この基本単位が、氾濫堆積物の場合には、雁廻や層相等の詳細な観察によって、土砂の供給方向や營力の大きさ等を知ることができる。また氾濫ごとの地形や土地条件の変化を復原することも可能である。さらにこの結果は、発掘により明らかにされた土地利用と統合され、それぞれの時期における土地評価の状況を知ることもできるであろう。

従来、このような微細な地形には名称があたえられていないものが多く、今後の検討が必要

であるが、今回の報告ではこれらの地形を総称し「超微地形」と呼び、個々のものに関しては仮称を使用する。

以上述べたような視点に立ち志知川沖田南遺跡の地形分析を行なっていく。手順としては第2節で三原平野全体を対象に地形面・地形帯の両分析を行ない、第3節では遺跡周辺の微地形分析を実施した結果について述べる。さらに第4節においては発掘調査域の超微地形分析の結果について検討し、第5節で検出された4ステージの水田について土地条件評価や水利系統の復原を試みたい。

第2節 三原平野の地形面・地形帯分析

現地表を構成する地形

地形面・地形帯分析を行なう手はじめとして、1万分の1、2万分の1、4万分の1の空中写真判読を行なった。これによって作成された予察図は、すでに第1章でもふれた各種の資料による検討や、現地における確認を経て、第50図に示した形態的特徴による地形の成因分類図（以下地形分類図と略す）となった。

これによれば、三原平野は12の地形単位と3つの人工改変地に分類された。12の地形単位の分類精度は、2地形面、5地形帯、2微地形および地形面より精度の低い山地、丘陵、開拓谷である。このうち、主要な9地形単位について、次にその特徴を述べる。

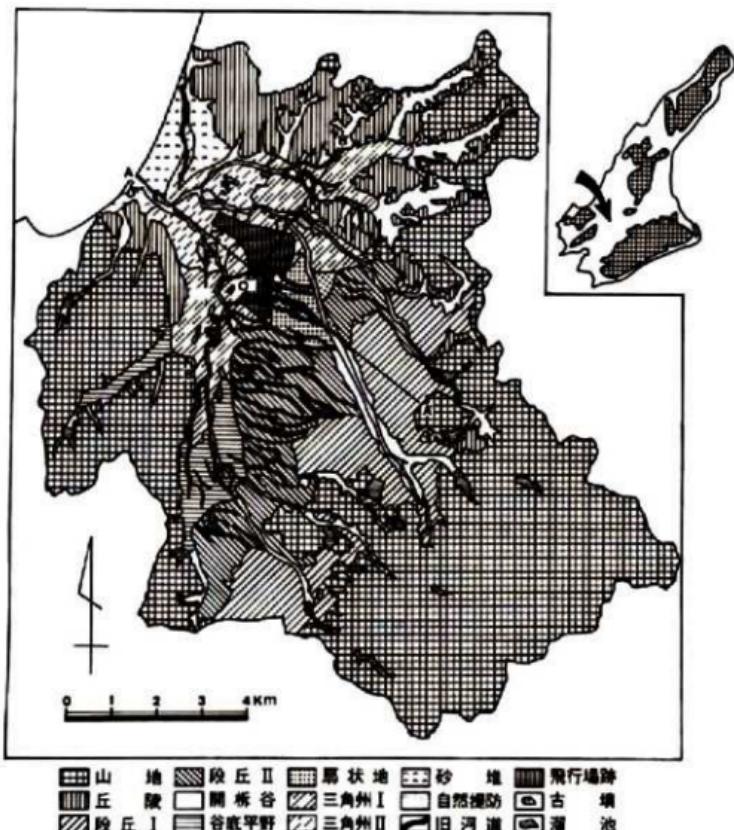
〔段丘I〕

この面は、堆積面の残る地形としては最も古い時代に属するもので、分布高さは成相川流域で標高60～35m、三原川流域では標高100～35m、大日川においては標高90～45mである。ただし倭文川流域には、認められない。この面は現河道に沿う側だけが明瞭な崖をなし、現河床との比高は約10mが測られる。また、30～35%というように、地形面としては最も急な傾斜をしており、段丘IIの下に埋没してゆくため、その末端は明瞭でない。これを構成するのは、巨礫から粗砂にわたる非常に淘汰の悪い砂岩の亜角礫・亜円礫である。砂礫層の層厚は、現河床に大阪珊瑚群が露出していることから判断して、この地形面と現河床の比高である10mを越えるものではないと思われる。

上記の点から考えて、この段丘面は、かつて形成された広義の氾濫原のうち、扇状地帯をなす部分が河川の下削作用によって段丘化したものと判断される。これの表面は、ゆるやかな起伏を持っているが、それは扇状地形成當時の微地形として復原できるほど明瞭なものではない。

〔段丘II〕

この地形面は、段丘Iと同様に倭文川以外の流域に発達している。分布高さは成相川流域で標高55～10m、三原川流域では標高50～5m、大日川流域においては標高50～20mである。段



第50図 地形分類図（形態的特徴による成因分類）

○ 志知川沖田南遺跡

丘Ⅰが成相川流域で最も発達が良いのに対して、段丘Ⅱは三原川流域において特に広く分布する。また、段丘Ⅰと同様に現河道に沿って明瞭な崖をなすものの、下流側の境界は一部を除いてあまりはっきりしない。平均傾斜は15~18%であり、現河床の勾配が12.5~15%を示すため、下流に向かって5mから2.5mへと徐々に比高を減少していく。構成物質は砂岩の巨礫から粗砂にわたる淘汰の悪い重角砾・亜円礫である。この面には、段丘Ⅰが埋没していく地点を頂点として、北西ないし西北西方向へ向かう網状パターンをなす旧河道が認められる。旧河道の部分は、周囲より1~2mほど低い凹地をなしており、暗灰色有機質シルトや灰シルトなどの細粒物質から構成されている。この堆積物中には、始良Tn火山灰が10cmの厚さで挟在する。段丘本端付近では、この凹地の下流側に堰を築き溜池として利用されているところが、しばしば見受けられる。灌漑用の井戸の多くも、ここに分布する。また、古くからの聚落は、この凹地で囲まれた紡錘状の微高地にのみ立地する。

以上の点から考えて、段丘Ⅱは段丘Ⅰと似た過程をたどって形成された地形面と思われる。なおこの面上には、谷底平野における条里型の土地割と同一方向の直線道路が断片的ながら続いている。

【谷底平野】

谷底平野は、三原川の形成した段丘Ⅱと山地とに挟まれた大日川流域、そして大日川の支流をなす新川の谷にのみ分布する。ここには自然堤防や旧河道が散在しており、比較的よく縮まった砂シルト層から構成されている。三角州Ⅰとは1.5~3m程度の崖をもって境されており、狹義の氾濫原として形成されたものが、わずかに段丘化した地形であるとみなされる。ここには正方位をなした条里型の土地割が認められる。

【崩状地】

崩状地は、三原川流域のみに分布する。これは、段丘Ⅱを刻む谷が広がる標高30m付近を崩頂として形成されたものである。その構成物質は段丘Ⅰ、段丘Ⅱと類似するが、わずかに縮まりが良くない。平均傾斜は10%程度である。現河道沿いは、周辺に比べて少し高くなっているが、河床それ自体は、これを1.5~2mほど削みこんでいる。また、明瞭な旧河道が西北西に向かって延びており、それに沿って人工の堤防状の微高地が断続的に連なっている。この微高地上には、それぞれに「社日神」が祭られていたり、開墾を禁ずる言い伝えがある。旧河道は、段丘Ⅱのそれとは異なり、下流の三角州Ⅰに連続し、大日川の現在の流路に合流するようになる。

【三角州Ⅰ】

ほとんど起伏のない平坦な地形であり、倭文川流域を含め、全流域に広がる。旧河道は、それらの現流路に沿うものと、崩状地から連続するものとが認められる。また、自然堤防は現流路に沿って分布する。この三角州Ⅰの表層部には、有機物を多量に含んだ黒色シルト(黒泥)が卓

越する。しかし、扇状地末端付近においては、礫層が伏在する所もある。三角州Ⅰには、1945年に旧陸軍の飛行場を造成するために大規模な改変が加えられた地区を除き、全域にわたってN 40°E 方向の条里型土地割が分布する。志知川沖田南道路はこの地形帯に属している。

〔三角州Ⅱ〕

極めて低湿で、わずかな降水によっても冠水する平坦な地形である。旧河道は砂堆の間を海へと続くものを除き明瞭でない。自然堤防は、集落が立地する場所となつたため、常に人工的な保護が加えられてきた結果、現在も微高地として存在しているといえる。三角州Ⅱには、三角州Ⅰでみられた有機質シルトは認められず、青灰色の粗砂ないしシルトが卓越している。ここには条里型の土地割が認められず、水路の発達した新田型の土地割が広がっている。

〔砂堆〕

砂堆は、大きく2列に、細かく見ると3列に分けられる。内側のものは、大阪層群から洗い出されたチャートや結晶片岩等の細礫を含む暗黄灰褐色の粗砂ないしは中砂で構成されており、その形態的特徴によって北から南に成長した砂嘴であると判断される。中・外列の砂堆は、三原川の河口付近において人工改変が著しいことと、風成砂によって覆われていることのために、外観では1列をなすように思われる。また、1列目ほどにはその性質が明らかでない。ただし、2列目の砂堆から祭祀用と思われる、弥生時代の銅劍が十数振りが発見されており、この頃までには、人間の居住できるような状態になったものと考えられる。

三原平野の層序

次に既存のボーリング資料を収集整理することで三原平野の内部構造について検討を加えてみたい。

第51図は、三原川に沿う方向の代表的な地質縦断面(A-A')である。山地を構成する和泉層群は、急角度で大阪層群の下に潜りこんでいる。大阪層群は、山麓部で50°以上の急傾斜をしており、これを切る活断層の存在が推定される。低地部の地下に伏在する大阪層群は、粘土・シルトの卓越する部分(Oc)と砂・礫によって構成される部分(Og)とに分けられる。Ocは35%ほどの傾斜をもつて平野の中央部に向かって落ち込み、現河口付近において急角度に盛り上がっている。露頭で観察される地層の傾きからも、平野中央部にN-S方向の向斜軸、そして河口付近に同方向の背斜軸が存在することが推定される。

段丘Ⅰ、Ⅱを構成する砂礫層は、大阪層群をほぼ全面的に覆うように堆積している。それは、山地側に厚く、低地側に薄いといった傾向を示すのではなく、10~20mのはば一様な厚さで堆積している。河口付近において、大阪層群の突出部が存在するにも関わらず、それを越えて海側にも砂礫層(Pfg)が認められることから、この砂礫層堆積時に、三原平野は大阪層群によって完全に閉じられた盆地でなかったと判断される。

段丘Ⅲとして区分した地形面が段丘化した後、大日川流域の谷底低地においては、砂礫を主

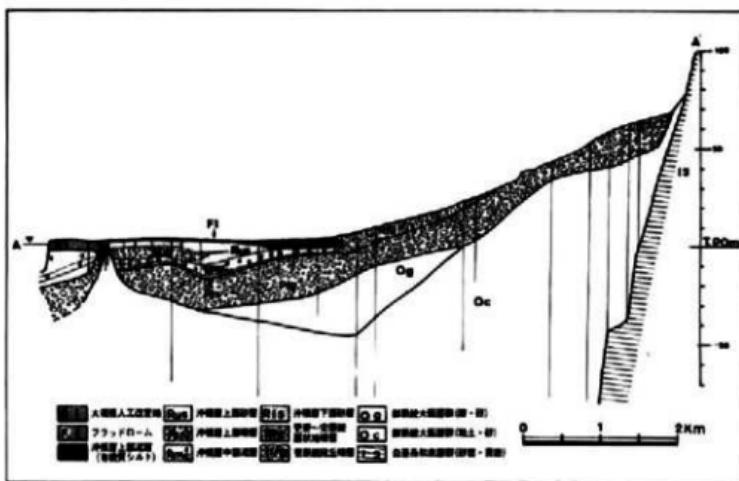


図51 三原平野地質断面図 A-A'

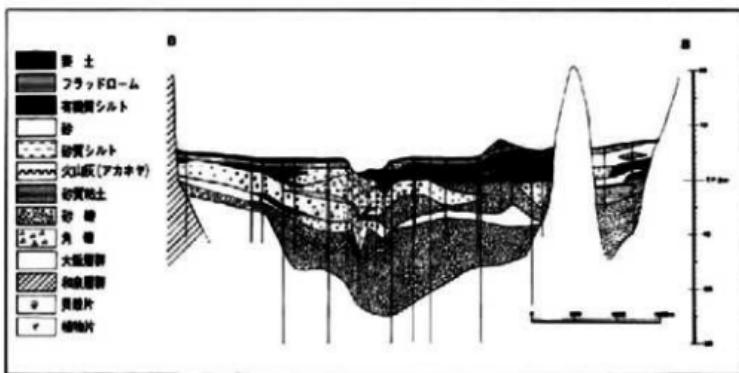


図52 三原平野地質断面図 B-B'

とする堆積が継続的に行なわれてきた。他方、平野の北西部においては、有機物を含む灰色砂層 (Rls) が堆積し、ついで海棲の貝を含む青灰ないし暗灰色シルト・粘土 (Rmc) が堆積した。層状地の末端付近では、砂疊層とシルト・粘土層とのインターフィンガーがみられるこ

とから、環境の変化が頻繁におこったものと考えられる。

平野の中央部では、海成層が有機物に富むシルト（Rup）によって覆われている。また三角州Ⅱの部分は、暗青灰色のシルト混り砂層（Rus）によって構成される。大阪層群の突出部の内側に堆積している砂礫層（Rug）は、ボーリング資料が現流路沿いにしか存在していないため、河川によってもたらされたものか、砂堆を構成する堆積物であるかは明らかでない。

そして、最後に暗黄灰色のフラッドロームが堆積する。他方、海岸沿いの一部では、人工改変によって陸化した部分もみられる。

第52図は三原川に直交する代表的な地質断面図である。大阪層群と和泉層群を割む谷は、-10m付近まで砂礫層によって充填されている。これは広義の沖積層基底礫層であり、段丘Ⅰ、段丘Ⅱ、扇状地を形成している礫層の集合体である。この沖積層基底礫層を割む谷は、広義の沖積層によって埋積されてゆくが、それには地域差が認められる。つまり南西部の、おもに大日川の影響を受けた部分では、植物片や貝殻片に富む砂層が卓越するが、三原川（成相川をふくむ）の流域ではレンズ状の砂礫層が認められる。また、大阪層群の張り出しによって他と隔てられた倭文川流域では植物片をふくむ砂質粘土が堆積している。T.P. 0 m付近にはガラス質火山灰が堆積している。これは広域火山灰のアカホヤであることが鉱物学的にも確認されており、その噴出は6,400年 B.P.頃と考えられている。そして、この火山灰降下直後に海成層の堆積する範囲が最大に達した。T.P. 0 m～+5 mには植物遺体を多量に含むシルト層が分布しているが、三角州Ⅱの部分や扇状地の部分などには、ほとんど存在していない。

¹⁴C年代測定の結果、T.P.-75cmより2,740±85年 B.P. (N-4152)、-68cmでは2,540±80年 B.P. (N-4151)、-60cmにおいて2,680±85年 B.P. (N-4150) の各年代が得られている。

発掘現場で観察できるのは、この層より上部の地層である。またこの層の中には畿内Ⅰ・Ⅱ様式の土器などが挿在しており、弥生時代前期から中期頃にも、堆積がすんでいたものと思われる。そして最後に河川の氾濫によってフラッドロームが堆積し、その表面は耕土として利用されている。今回、報告する水田跡は、このフラッドロームの堆積が幾度か繰り返す間際に営まれたものである。

最終氷期以降における三原平野の地形発達史

地形面・地形帯分析によって得られた結果に基づいて、三原平野の最終氷期以降における古地理を復原し、その変遷をたどってみたい。

ステージ0 (22,000年 B.P.以前)

段丘Ⅰは扇状地として形成された地形面であるが、指標に欠けるため、その形成時期については、大阪層群の堆積以後で段丘Ⅱの形成以前としか言えない。

第53-a図に示したように、段丘Ⅰが開析され、その開析谷の広がる地点を頂点として、下流側に新しく形成された扇状地が段丘Ⅱである。地形面上に残る旧河道の分布からみると、現在

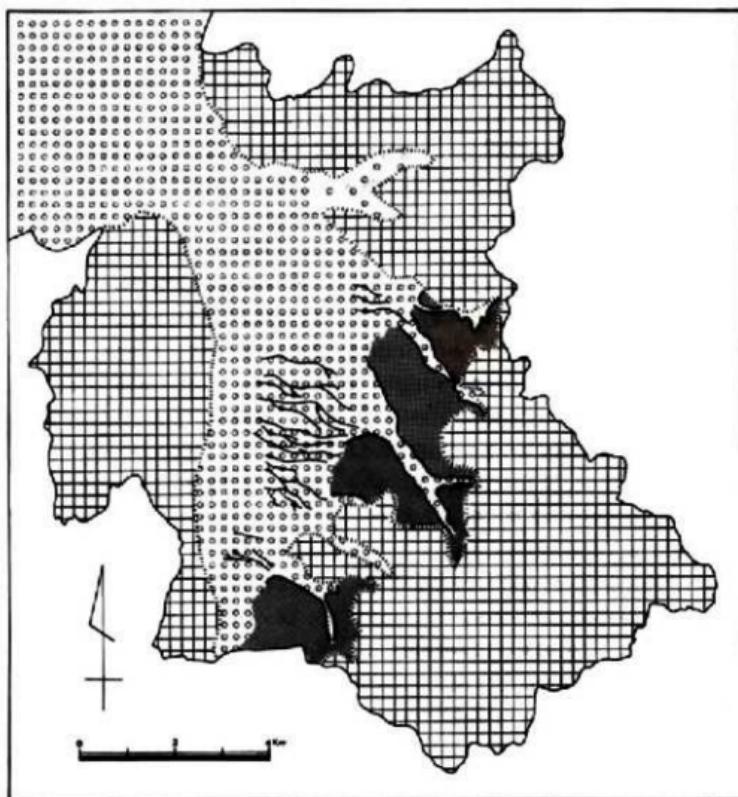
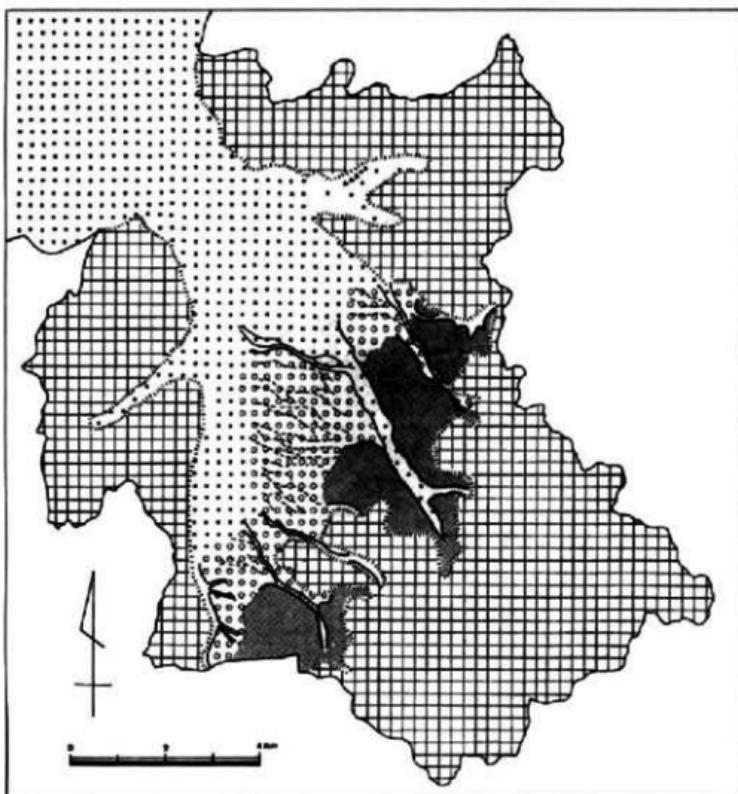


図53-a 図 ステージ0 (22,000年B.P.以前)

海域	砂礫Ⅱ	鹿
シルト	砂礫Ⅰ	貝
有機質シルト	山地 丘陵	Y 植物片
砂	河 道	
砂礫Ⅰ	旧河道	



第53b図 ステージI (18,000年B.P.頃)

の北西流する流路とは異なり、この面の形成当時には、河川は西の方向に流れる傾向が強かったと思われる。三原川は、段丘Ⅰを刻む谷の広がっている円行寺橋付近から難波・大屋所の集落が立地する西の方向に流下し、現在の大日川の流路へと繋がっていたものと考えられる。つまり、合流点より下流部において、大日川の現流路は、かつて三原川の本流をなしていたことになる。他方集水域が、大阪層群と花コウ岩質変成岩より構成されている倭文川流域では、粗粒な岩質があまり作られず、礫を混じえた砂が堆積していた。

この地形面上には、姶良Tn火山灰が堆積した。そのうちのほとんどは、侵食作用や土壤化

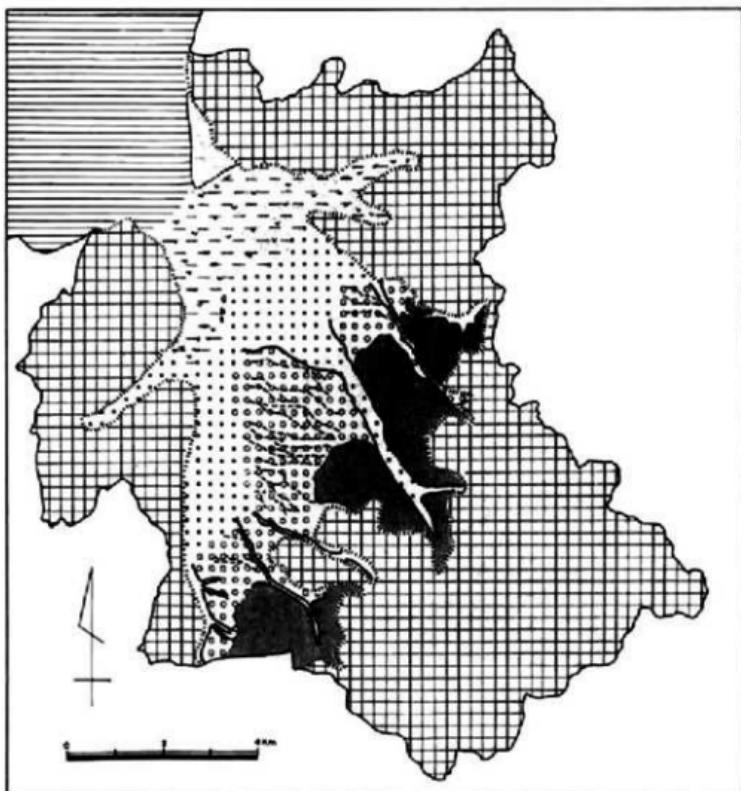


図53c 圖 ステージⅡ (7,500年 B.P. 境)

作用により確認できなくなっているが、旧河道の凹地部分では、堆積物として地表下およそ1mのところに保存されている。このような火山灰の存在から推定して、段丘Ⅱが扇状地として形成されたのは、約22,000年より以前であるといえよう。おそらく、これはウルム氷期極相へ向かう時期にあたる。当時の海水準は現在より遙かに低く、瀬戸内海は陸地を成していたものと考えられる。

ステージⅠ (18,000年 B.P. 境)

第53b図は最終氷期最盛期頃の三原平野である。扇状地として形成された段丘Ⅰは、すでに

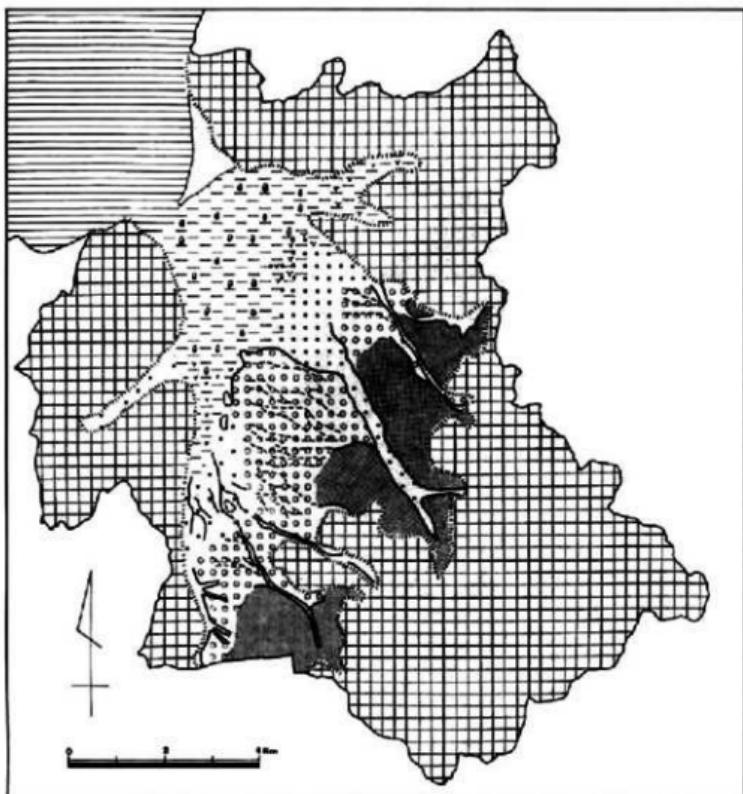


図53d 図 ステージⅢ (6,300年 B.P.頃)

かなり以前に段丘化していた。また同様に扇状地として、段丘Ⅰの前面に形成された段丘Ⅱも、始良 Ta 火山灰の降下する22,000年 B.P.頃には形成を終えていた。そして、その開析谷にも扇状地を形成して砂礫層が堆積していたのである。当時、海水準は現在より100~140m低位にあったといわれ、現在の瀬戸内海域は未だほとんど陸地であった。

ステージⅣ (7,500年 B.P.頃)

第53c図は、気候の温暖化によって海面が急速に上昇し、海域が現在とは同じになった時の状態である。この時、ボーリングコアサンプルにイオウの黄色粉が認められることや、海権

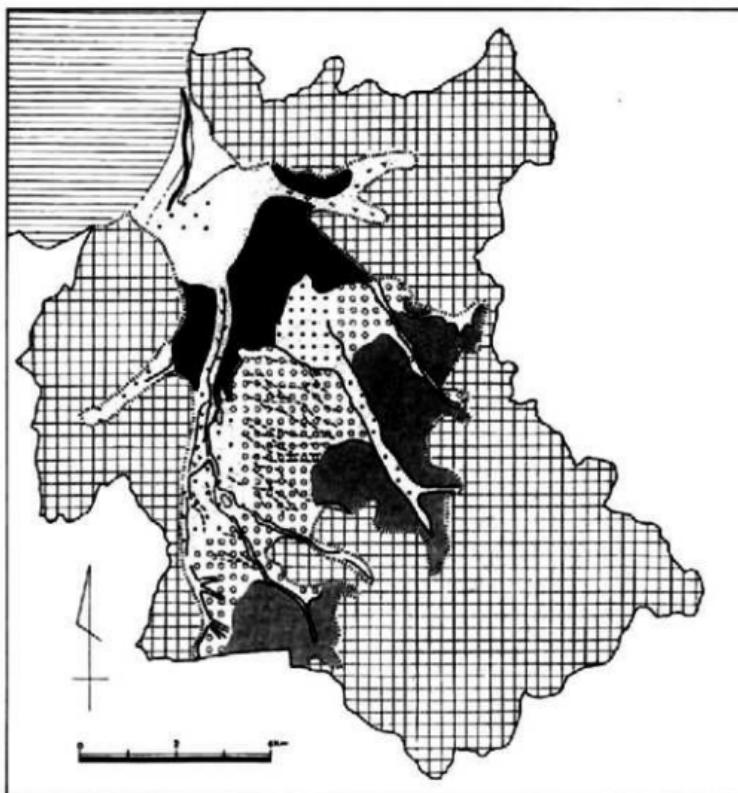


図53d 図 ステージIV (2,600年 B.P.頃)

双べん毛類の化石が発見されることから、海面は-13m付近まで達していたものと思われる。これは前田保夫氏の大坂湾における海水準変動曲線（第54図参照）から考えて、7,500年 B.P.頃にあたるであろう。内列砂堆は沿岸流によって北から南に形成されはじめていた。また、砂堆の内側には植物片をまじえたシルト質砂の堆積する状態であった。大日川や倭文川流域では著しい堆積が認められないけれども、三原川は、その流路にそって砂礫を堆積させていた。

ステージⅤ (6,300年 B.P.頃)

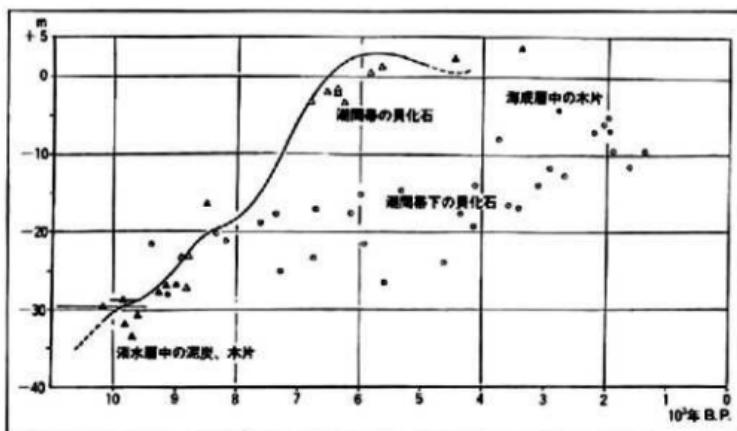
第53d図は、さらに海面が上昇し、それにともなって三原平野の約半分がカキやハイガイな

どの様な内湾となった状態である。三原川の流路ぞいには島嶼状に砂礫層がのび、堆積からと
りこされた部分は interdistributary bay として、有機質に富む砂質シルトが堆積していた。
一方、大日川ぞいでは、現海面より 2~3 m 上昇した海面に対応する、地形面が形成されていた。
アカホヤ火山灰が降下した 6,400 年 B.P. 墳には、海面は現在と同じか、わずかに高い位置
にあった。海域の最も拡大したのは、それより幾分遅れたことが海成層の分布から考えられる。

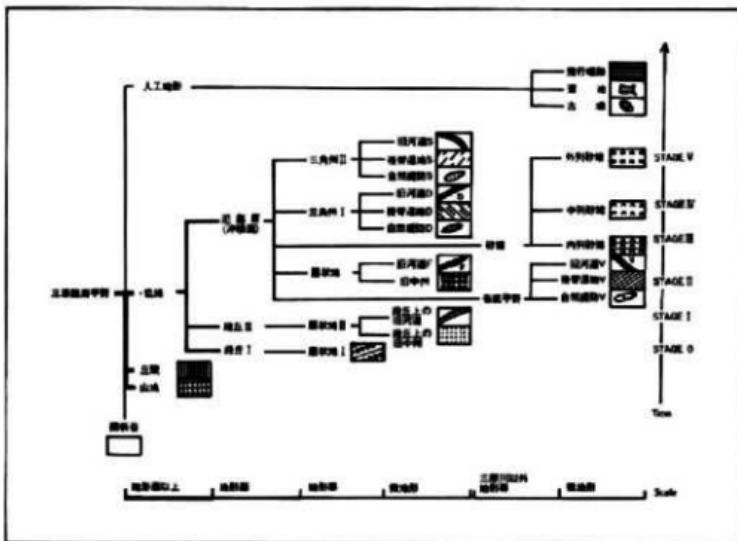
ステージ M (2,600 年 B.P. 墳)

第 53-a 図は、6,300 年 B.P. 墳に最高に達した海水準は低下し、河口での砂堆の形成もすむ
ため、かっての内湾がラグーン状になった状態を示している。海水準の低下に対して三原川は
相変わらず灘を送流させていたが、大日川は充分な堆植物を供給できず、さきの高海水準に対
して形成された地形面は、わずかに段丘化した。また成相川流域では、海域が最大に拡張した
時よりも、有機質シルトの堆積する範囲が拡大していた。河口付近では中列砂堆が形成をお
えていたにもかかわらず、内列砂堆との間に瀬の出入りする流路が存在し、中ノ御堂近くで海と
結ばれていたため、潮汐の影響をうけて、有機質シルトは堆積しなかった。そのため、この層
の堆積は平野の中央部に限られていた。また、神戸大学の熊野茂氏らにケイソウ分析の結果に
よれば、その堆積環境は淡水域であったと考えられている。ところが、この地層は現海面下 60cm
あたりから堆積を始めている。このことから、少なくとも、この地層の堆積しはじめる時点に
海面は現在より幾分低位にあったことを示している。志知川沖田南遺跡の発掘現場において、
弥生時代前・中期の土器を出土し、古墳時代前期の旧河道によって刻まれている有機質シ
ルト層は、まさに、この地層である。発掘現場の地層断面には、無数の生痕が認められること
から、この層の堆積時には、ここに多数のボーリング・オーガニズムが生活していたことがわ
かる。この地層は、古墳時代前期以降の河川氾濫によってもたらされたフラットドームによっ
て埋積をうけて、現在みられるような地形が形成された。

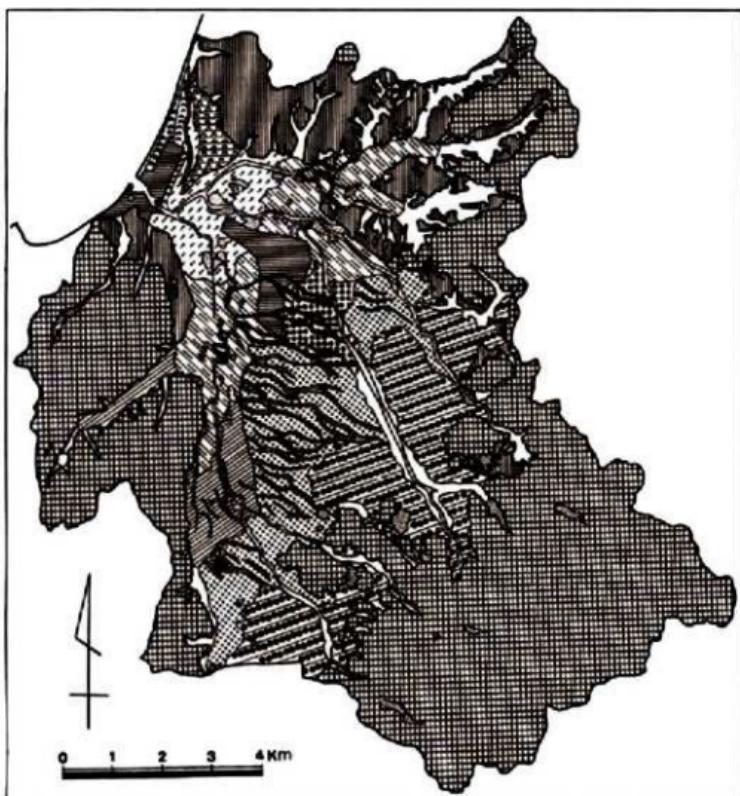
以上のように、現在、我々の目前に広がっている三原平野は、さまざまな時代に形成された
地形が重合し、バッヂ状をなしているのである。このため、たとえば同じ旧河道といった形態
をもつ地形であっても、段丘目のところに展開するものと、三角州 I のものとでは全く形成さ
れた時期が異なっている。前者は約 22,000 年前頃の始良 Tn 火山灰降下時には、河川としての
機能を失っていたのにに対し、後者は、約 6,400 年前の縄文海進最盛時以降に形成され、消滅
したものなのである。これらの地形を同じカテゴリーに分類しておくことは、遺跡の立地環境
を考察する際、好ましいことではない。この点を考慮するならば、地形の分類にあたっては、
その形成時期も、指標とされねばならない。また、すでに述べたように、従来さまざまな精度
で認識され、それぞれに異なった名称があたえられてきた地形名称の混乱を整理し明示する必
要がある。このような新しい視点から作成されたのが第 55-b 図の発達的地形分類図である。こ
の図は従来の地形分類図が、現地表面において形態的に特徴ある地形に名称を与えるためのも



第54図 大阪湾および播磨灘の海面変化曲線
(前田保夫 1980)



第55a図 発進史的地形分類図の凡例



第55b図 発達史的地形分類図

のにすぎなかったのに対し、地形面・地形帯分析の結果復原された 10^3 年オーダーの地形発達史に基づき、地形を分類したものである。すなわち従来の地形分類図が、地形発達史を編むためのひとつの資料にすぎなかったのに対し、発達史的地形分類図は、地形発達史のまとめを表現したものと言えよう。

第3節 遺跡周辺の微地形分析

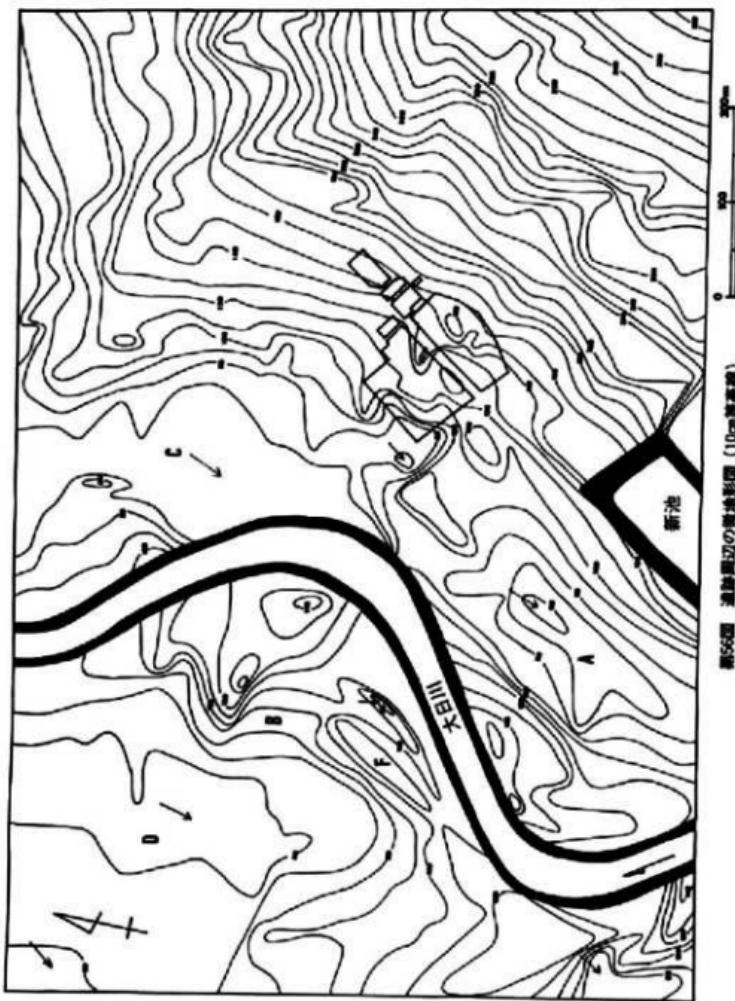
微地形分析では地形帯の構成要素としてしか注目されなかった自然堤防、後背湿地といった微地形に焦点をあてる。地形帯分析までの段階では、微地形のうち現地表面の土地利用や土地区画に影響を及ぼしている大規模なもののみが取り上げられるのが一般的である。たとえば、三角州帯の場合、顯著な自然堤防や旧河道以外は後背湿地として一括されてしまうことが多かったため、しばしば埋没自然堤防上に立地した集落遺跡や墓が確認調査もなされないまま見逃されてしまっていた。あるいは、発掘調査の際に予期せぬ発見として処理されてきた。しかしながら、微地形分析を実施すれば、現地表面下2m程度までに埋没している遺跡の存在をあらかじめ推測することが可能である。また、集落の広がりを可能性として示すことができるものである。このためには、微地形図(10cm等高線程度)の読図と1/5,000以上の大縮尺空中写真判読が、有力な手法としてあげられる。

微地形図の作成と読図

志知川沖田南遺跡は、本四架橋に伴う遺跡工事の事前調査の際に発見されたものであるため、発掘地点およびその周辺は、水田一筆ごとに標高を測定した詳細な工事用地形実測図がすでに作成されていた。そこで、これを用い、切り土・盛り土の最も少ないと考えられる水田中央部分の標高を基準にして割り込み法で10cm等高線図を作成した。

第56図は、こうして出きあがった発掘現場周辺の微地形図である。遺跡の立地する三角州Ⅰは、10³年スケールの古地理復原でみたように内湾→淡水性湿地と変化し、その上にフラットドロームの堆積した地形であり、一見、非常に平坦である。しかし、10cmオーダーという細かな等高線でこの地形を表わすと、かなり複雑な様相を示す。この微起伏は、その形成過程から考えて、有機質シルトの上面が示す地形とフラットドロームの堆積状態によって決定されていると思われる。今回、発見された水田は南東から北西に向かう幅300m程の浅い谷に位置しており、この谷の右岸(北側)には、旧三原川によって形成されたと考えられる微高地が存在している。この微高地は居住地として、この付近で最も通した場所となっており、水田を経営した集落が発見される可能性が高い所である。一方、西部の微起伏は大日川によって形成されたものと判断される。A地点およびB地点の地は、現在の土地割に影響をおよぼしており、かなり最近まで大日川の流路であったと思われる。C・D・E地点の凹地も大日川の旧流路と考えられるが、現在の土地割に影響をおよぼしていない。発掘によって発見された旧河道はC地点の旧河道に合流していたと思われる。また微高地は溢流堆積により形成された自然堤防ばかりでなく、F地点のように破堤堆積によって形成されたと思われる地形も認められる。

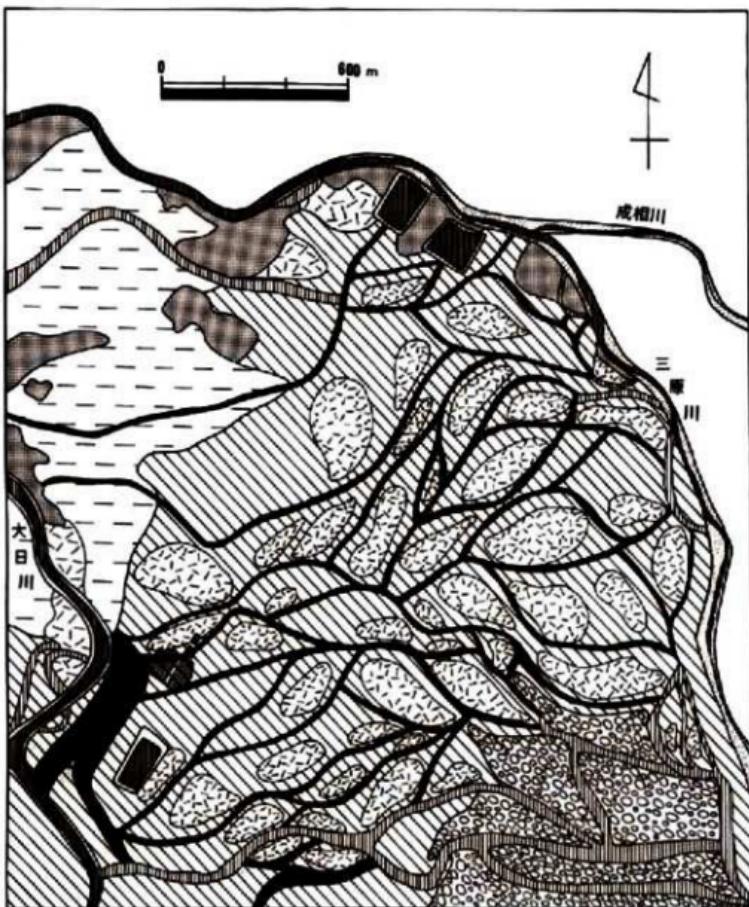
第564図 滝野瀬川の断面図(10cm等高線)



大縮尺空中写真的判読

第57図は1974年に撮影された1/5,000のモノクロ空中写真を判読し、作成した微地形分類図である。この図は第55 b 図の発達史的地形分類図で三角州Ⅰ帯と分類されたうち、三原川と大日川とに挟まれた範囲にある。地形帯分析によれば、三角州Ⅰ帯には数条の旧河道Dと点在する自然堤防Dが認められる他は、ほとんどを後背湿地と大規模人工改変地である飛行場跡が占めていた。このうち飛行場跡は、比較的人工改変の程度が軽く、微地形区分することも可能である。そこで、微地形分析を行なうと、地形帯分析で自然堤防Dと分類されたのは、現在集落が立地するような大規模なものに限られており、後背湿地Dとされた所にも多数の自然堤防をみいだすことができる。この条里型土地剖を乱すことのない自然堤防はほとんど埋没しており、土地剖を乱すことなく極わずかに現地表面の起伏に表われているにすぎないが、1/5,000のモノクロ空中写真では、トーンの差からその存在を知ることができる。すなわち自然堤防が埋没している所では、相対的に粗粒な物質から構成されているため水はけが良好となり、空中写真には淡く写るのである。これに対し、水はけが不良となる埋没旧河道の部分では濃い色調として表現される。なお、埋没自然堤防や埋没旧河道のうちこのようにして1/5,000空中写真で検出されるものは、現地表面下およそ2 m以浅に埋没したものであることが従来の経験から判明している。

さて、長軸が西に向く埋没自然堤防が多いことや、西流する埋没旧河道が顯著に認められることから三角州Ⅰ帯のこの部分は、段丘Ⅱ面肩状地帯の場合と同様に主に西流する三原川によって形成されたことが判る。また、埋没旧河道は網状流に似た状態をなしており、しばしば流路が変更したものと思われる。このことはすでに述べたボーリングデータの解析結果と矛盾しない。また、志知川沖田南遺跡で検出された流路は、後に詳述するように弥生時代末～古墳時代初頭頃の三原川であった。この流路が土砂の堆積によって消滅した後の古墳時代中期頃には、流路はすぐ北側に変更していたことが1985年度に兵庫県教育委員会の手で実施された兩流遺跡の発掘調査で判明している。また、第57図の南端に位置する旧河道は条里型土地剖を乱し、小字名にも影響していることから、比較的新しいものと考えられる。なお、三原川が現在の位置をとるようになった時期を示す最も古い資料としては、三原町公民館所蔵の天保年間(1830～1844年)の船図がある。



第57図 本知川沖田南道路周辺の微地形分類図

第4節 発掘地点における超微地形分析

発掘地点付近は、淡水性湿地（ステージIV）が度重なる河川の氾濫によって徐々に陸化した所である。志知川沖田南遺跡の埋没水田が開発された時、三原川は発掘地点の近くで大日川に合流していた。そのため、ここに堆積物には三原川の運搬してきたものと大日川のものが存在すると推定される。付図1・2は発掘地点における地層のパネルダイアグラムであるが、注目されるのはここで認められる地層のすべてが、河成堆積物であることである。

一般に河成堆積物には湖成堆積物や海成堆積物と異なったいくつかの特徴がある。すなわち、第1に、河成堆積物は河川の氾濫に伴って供給されるため、一晩あるいは数日といった比較的短い期間に堆積したものが基本単位をなす。第2に、一度に供給される範囲は比較的狭いことがあげられる。言い換えれば、湖成・海成堆積物は比較的広範囲に齊一的に堆積したものであるのに対し、河成堆積物は狭い範囲に激変的に堆積したものである。このため、河成堆積物の場合年間何cmといったような平均堆積速度の計算は、ほとんど意味を持たない。また、堆積物の主供給方向にあたる部分では、比較的粗粒な物質が早く堆積するのに対して、それからはずれた部分では、堆積が全くなかったり、極端に細粒物質が堆積するだけといったように、側方への変化が著しい。そこで、地層の広がりを平面的に求めたり、地層の厚さ、堆積物の粒度あるいは堆積構造を詳細に調べることによって、その堆積物の供給方向、すなわち氾濫の方向を決定することが可能である。また、ある地域でおこった氾濫の回数をおおよそ求めることもできる。

以上のような観点から、志知川沖田南遺跡の一枚一枚の地層について検討を行ない、古地理の復原を試みた。（表7参照）

ステージM₁（第58a図） この有機物に富む黒色シルトは、三原平野の中央部に広く分布するもので、ケイソウ分析の結果から淡水性湿地に堆積したものであることが判明している。この層の下部に挟在する植物遺体層から2,540±80年B.P.、その5cm下の灰色シルト質細砂層中に含まれていた木片から2,680±80年B.P.、植物遺体層の6cm上方の黒色シルト層から2,740±85年B.P.の¹⁴C年代測定値が得られている。また途中に挟在する灰色中砂層の中には、縄文時代晩期～弥生時代中期初頭の土器片が含まれている。この段階では、まだ著しい河川の影響は受けていない。

ステージM₂（第58b図） Ⅲ区北端に旧三原川と思われる河川が流入し、河道にあたる部分では黒色シルトが侵食された。それに対して、河道ぞいには青灰色粗・中砂を主体とする堆積があり、陸化が開始する。また、このころⅢ区西端にも河川が認められるが、周囲の状況からみてこれは旧大日川であろうと思われる。

ステージM₃（第58c図） 青灰色粗・中砂の一部が河川の側方侵食によって抉られ、黒色

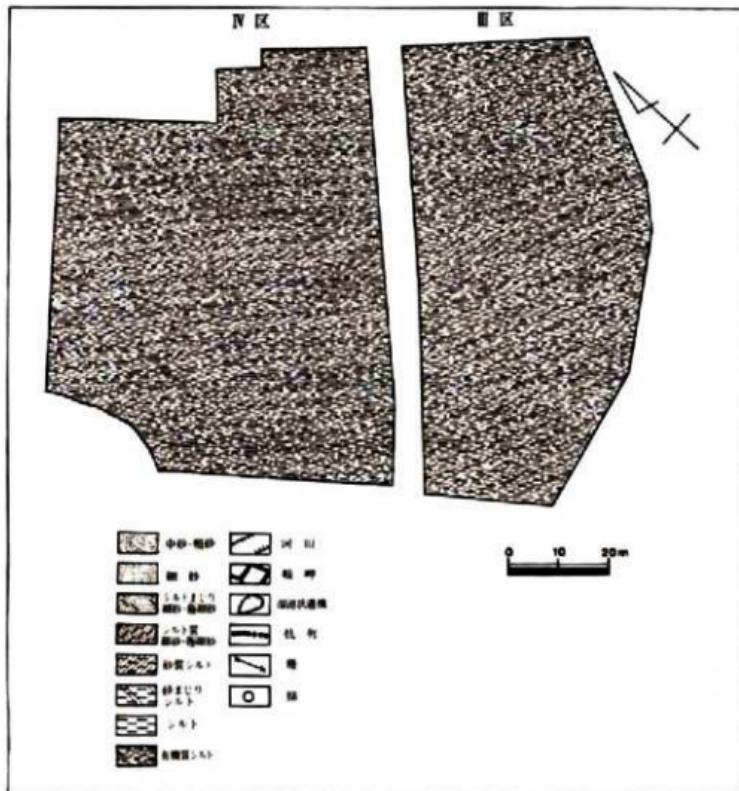


図58a 図 ステージIV

シルトが再び表面に現われる。また河道の一部では埋積も始まっている。それに対して青灰色粗・中砂の背後には浅い凹地が形成されている。以上のことから考えると、河川はかなり不安定な状態であったと思われる。このステージで最も重要なことは、河道沿いに水路と2列の柵、青灰色粗中砂の末端部分に2列（部分的には1列）の杭列が作られていることである。これらは水田開発に伴うものと考えられるものの、この層からはイネのプラントオバールは、ほとんど出現しない¹¹⁾。それに対し、花粉分析の結果によれば、約12%の栽培種のイネの花粉が出現している¹²⁾。また、土地は過湿であり、水田を営むにしても用水の必要はないと考えられる。これ

らのことから、発掘地点に隣接する上流部では、すでに水田が開発されており、そのための排水施設とそこへ至る通路を確保するために打たれた杭列ではないかと想像される。今後の慎重な検討が必要である。

ステージM₄（第58d図） Ⅲ区の南半部に黄灰色中・細砂が堆積し、その前面には灰色シルトが堆積する。そして、中央部は堆積から取り残されて浅い凹地状をなすようになる。このため自然堤防状高地と後背湿地の区別が明瞭となり、後に開発される水田の土地条件に大きな影響を持つことになる。河川沿いにあった水路と橋はこの段階で埋没してしまう。なお、橋の所からは古墳時代前期の變形土器が出土している。

ステージM₅（第58e図） 河川沿いの自然堤防状微高地を中心に堆積が進み、地盤は全体に高くなる。堆積の中心が異なっているため、ステージM₄で形成された自然堤防微高地のうち低い部分は後背湿地になった。後背湿地のうちでも最も低い場所となっている中央部では、早ければこの段階に畦畔を持つ下層水田が開発された可能性がある。Ⅳ区ではステージM₁からここまで、ほとんど土砂の堆積がおこっていない。

ステージM₆（第58f図） 中央部を除き暗灰色シルト質細砂が堆積する。これには、河川沿いに東から西に向けて供給されたものと東壁の中央付近から西方にかけて堆積した2つの系統のものがある。堆積から取り残された中央部には下層水田が營まれていた。この段階までにⅣ区西端に存在した旧大日川の河道は埋没され、消滅している。

ステージM₇（第58g図） 堆積から取り残された凹地部に東から西へ向けて黄灰色中砂が堆積する。そのため、この凹地部に存在していた下層水田は埋没してしまう。また、河川沿いの自然堤防状微高地は、河川の侵食によって大きく抉られている。これまでⅣ区を中心に土砂が堆積していたが、この頃からⅢ区が主体をなすようになった。

ステージM₈（第58h図） 前ステージで黄灰色中砂が堆積した中央部の凹地は、未だ相対的に低い場所となっており、再び土砂の供給を受けた。これによって、この部分は周囲とはほぼ同じ高さになることができた。

ステージM₉（第58i図） 河道沿いの自然堤防状微高地の部分とⅣ区の南西部とを除き、2本の大畦畔と小畦畔群によって区画された水田が開発された。Ⅳ区で検出された北東—南西方向の水路を越えて下流側には水田の存在が確かめられておらず、南側大畦畔もこの水路付近で向きを変えている。これらのことからこの水路が当時の開発フロントであったと推定される。この水田には、小さな蓄水池が伴っており、Ⅲ区中央大畦畔の中からは古墳時代前期の變形土器も出土している。また、無数の人間の足跡や耕作痕が残されていた。この水田を中層水田Ⅰと呼ぶことにする。

ステージM₁₀（第58j図） Ⅳ区を中心にシルト質細砂・極細砂などの堆積があり、中層水田Ⅰの一部が埋積されてしまった。この堆積はすみやかにおこったのか、中層水田Ⅰ面上には

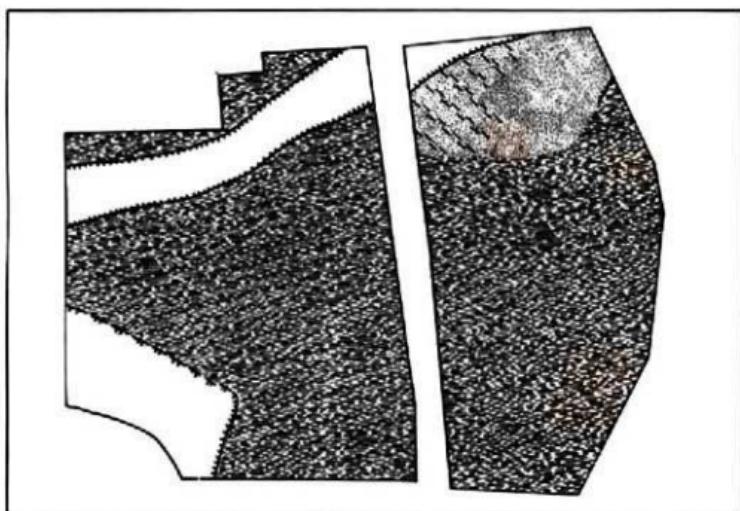
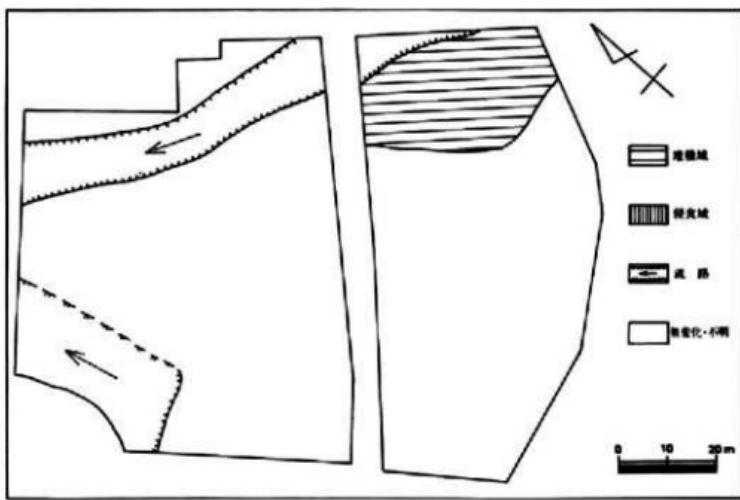


図58b 圖 ステージN₂

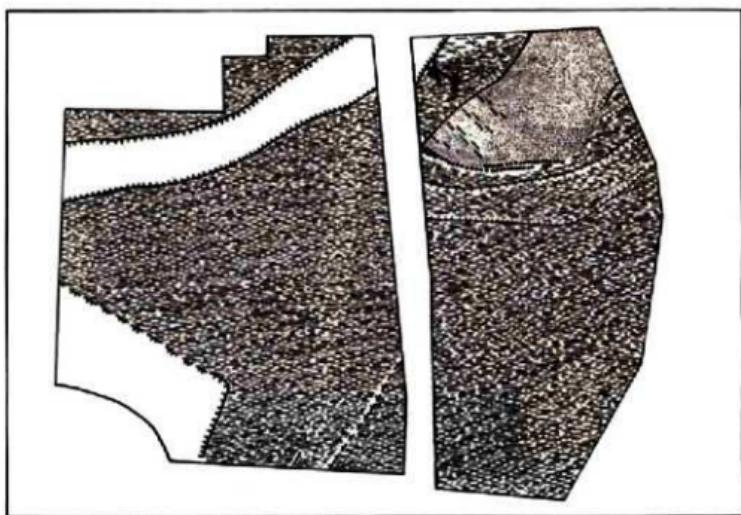
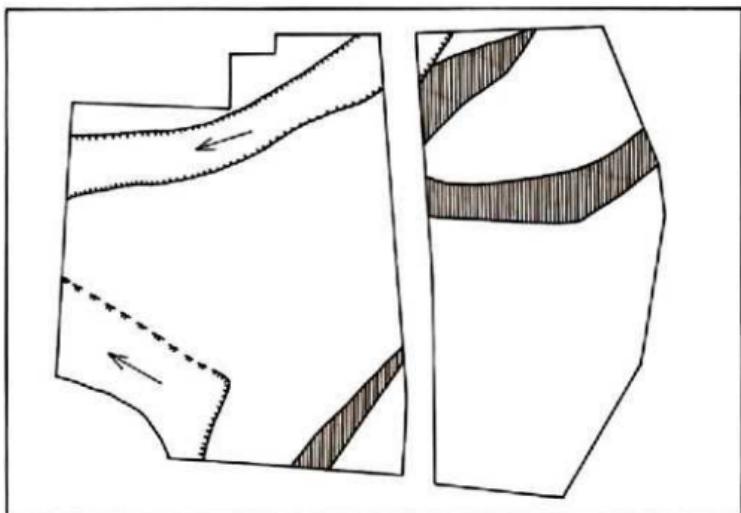
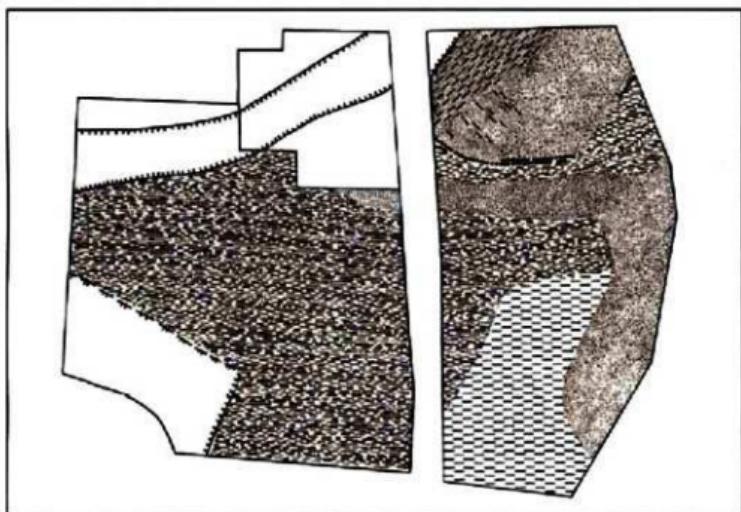
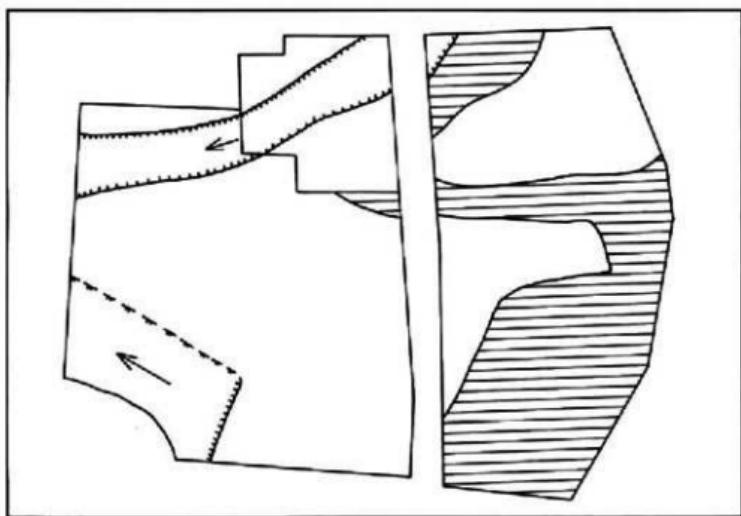
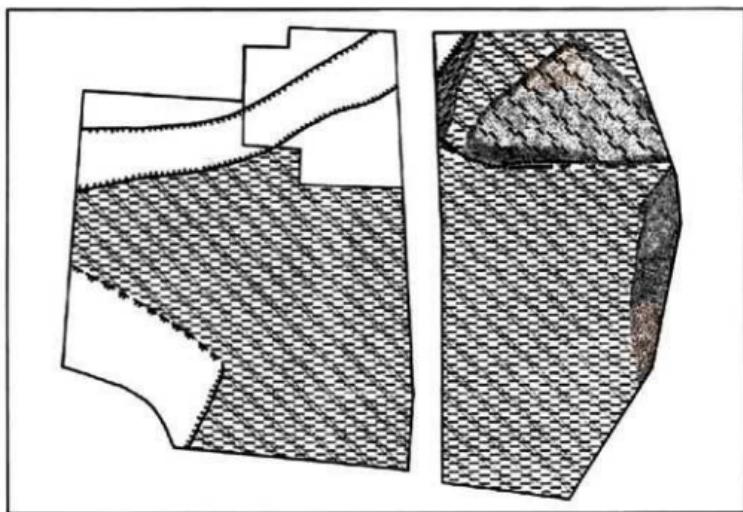
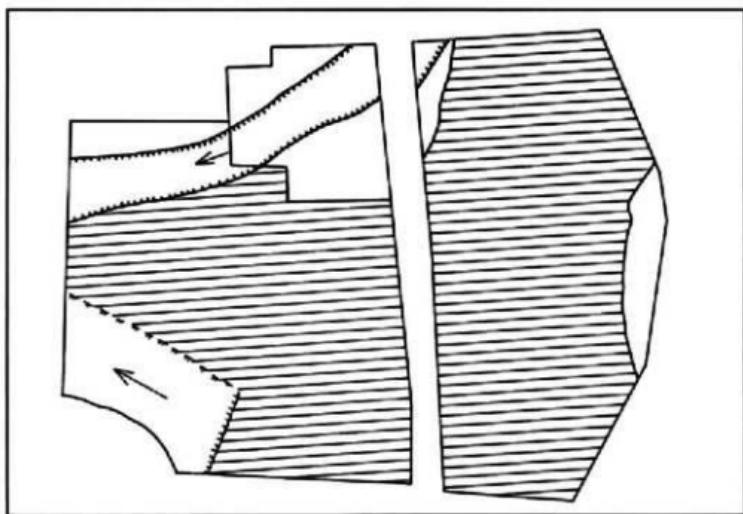


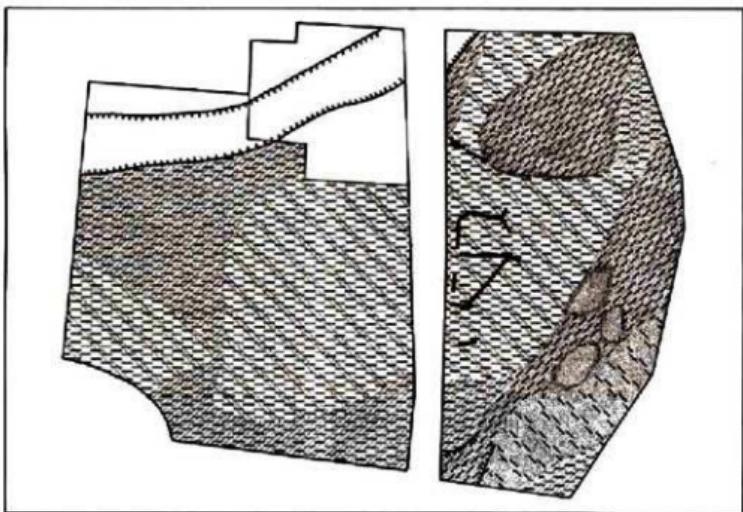
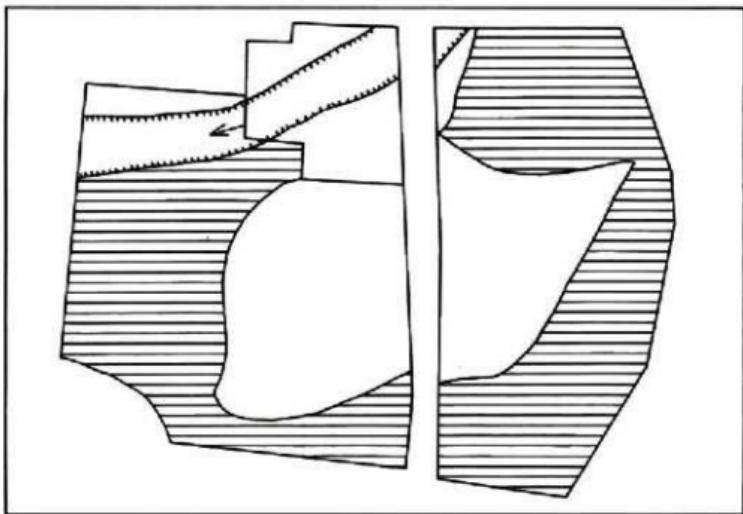
図56c 圖 ステージN₃



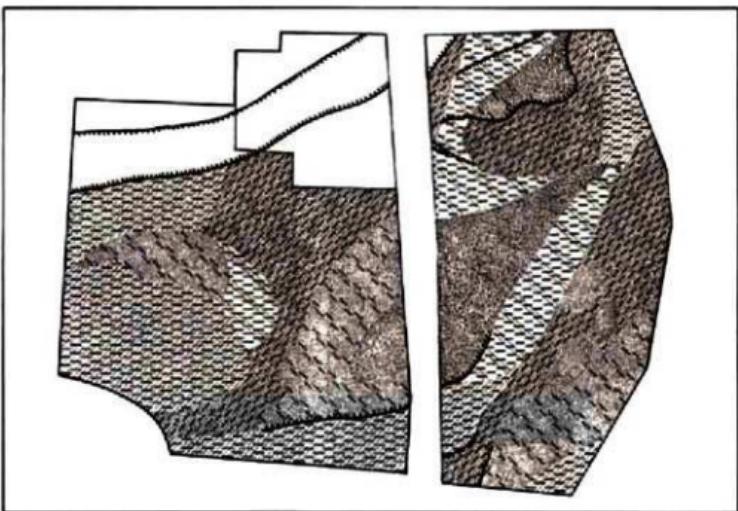
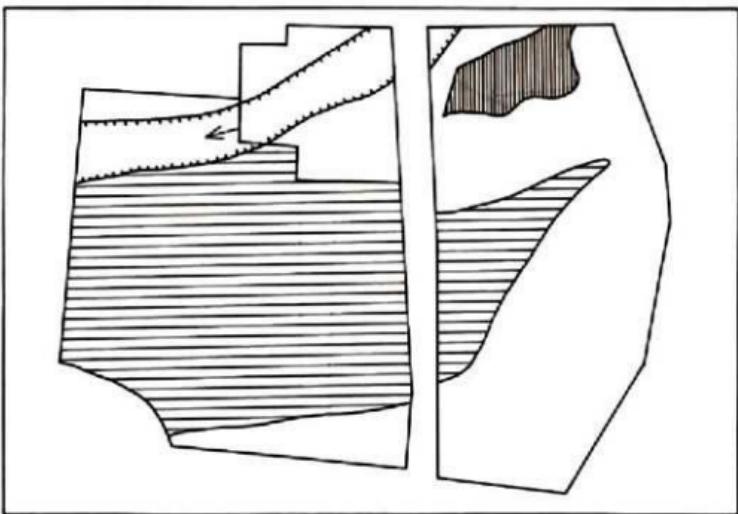
第56d図 ステージN₄



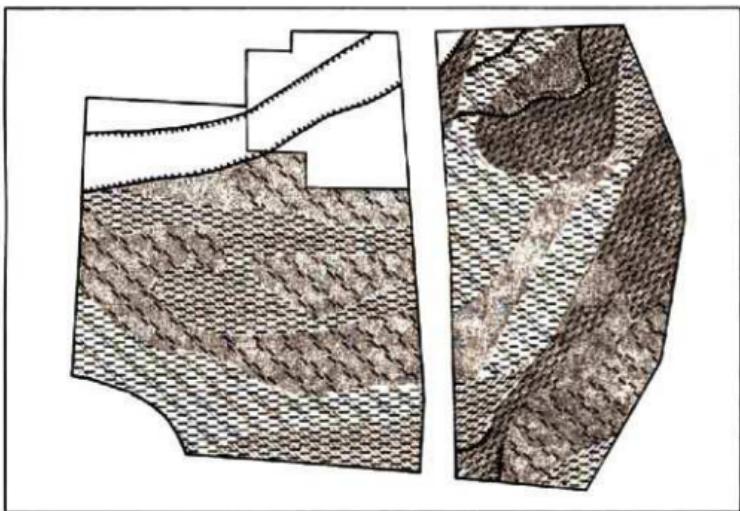
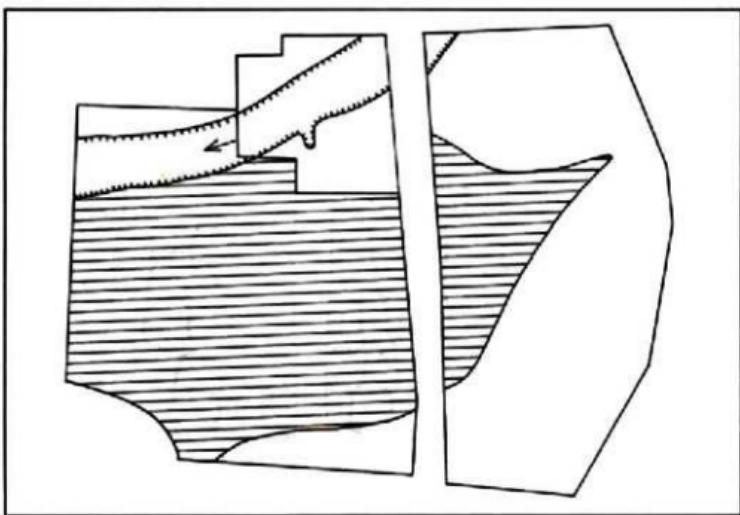
第58回 ステージIV₂



第581図 ステージN₆



第569図 ステージIV



第58回 図 ステージⅣ

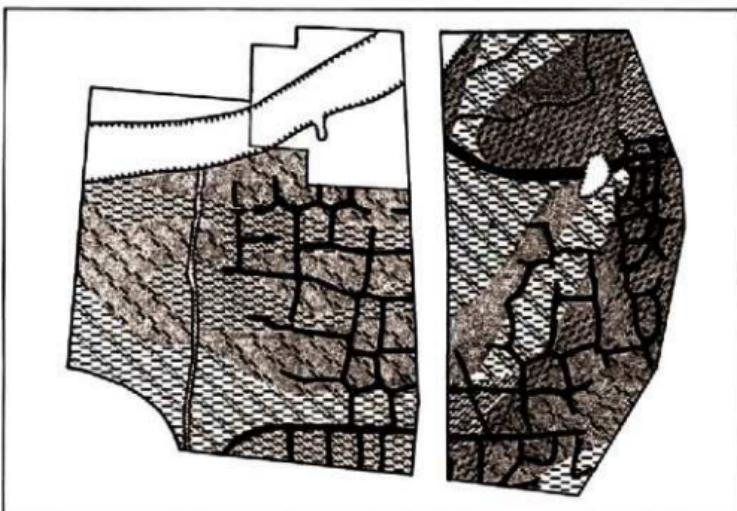


図58-1 図 ステージM。

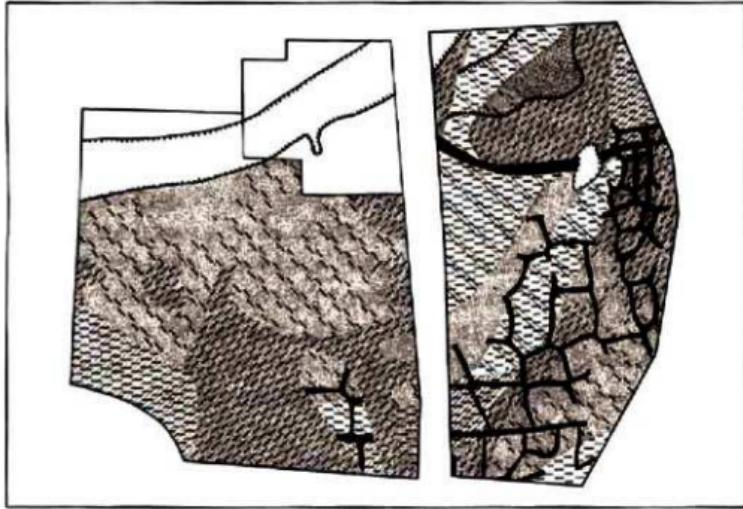
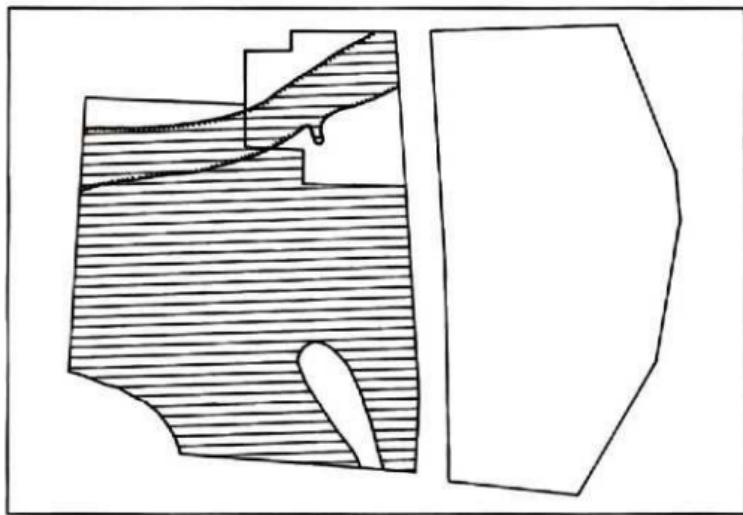
人間の足跡や耕作痕が明瞭に残されていた。

ステージM₁₁（第58-1図） 前ステージで埋積されてしまった水田が再び開田される。この水田は中層水田Ⅰに類似しているが、南側大畦畔が下流側へ延長されていることや、開発フロントをなしていた水路が消滅している点が異なっている。大畦畔の延長や水路の消滅は、開発域の拡大を意味しているものと思われる。

ステージM₁₂（第58-1図） 背区西側の最も新しく開発された水田が旧三原川の流路よりもたらされた土砂により埋没してしまった。この時、背区東側や腹区ではほとんど土砂の堆積はなく、初期の段階と比較し、堆積域がより下流側に移動していることは明白である。

ステージM₁₃（第58-2図） 発掘地点の全域を覆う黄灰色中・細砂などの堆積により、中層水田は埋積されてしまう。堆積物は中央部において最も粗粒であり、この地点を東から西へ向けて土砂の供給があったことが判る。また南部の大畦畔が障害となつたために、比較的多くの土砂がこの付近に堆積した。この堆積はすみやかにおこったのか、中層水田Ⅱにも多数の人間の足跡や農具の跡、それにサンクトラックが明瞭に残されていた。北端を流れていた三原川の流路は、この段階までには埋めつくされてしまっている。

ステージM₁₄（第58-3図） 旧海道の部分を除き全面に上層水田が開発される。三原川の旧



第581図 ステージN₁₀

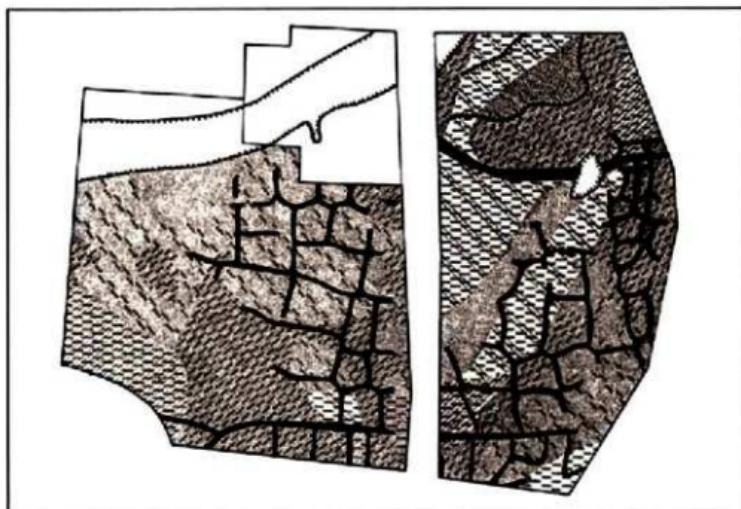


図58k 地図 ステージIV₁₁

河道の部分には人工的に水路が掘られている。畦畔は大部分が中層水田の位置を踏襲しているものの、一部では新しく畦畔が造られた。土地条件は、場所により異なっており、良い水田とそうでないものが、発掘範囲の中に存在したものと思われる。

ステージIV₁₅ 上層水田は黄灰色シルトと灰色極細砂まじりシルトによって埋積される。黄灰色シルトは埋積層の下部を構成しており、旧河道と河道沿いの自然堤防状微高地を残し全面に堆積している。この層は上層水田の構成層とは明確に異なっているために、上層水田検出の際に既層の役割をはたした。層厚は4~5cmと薄く、畦畔の多くはこの層の上に頂部を覗かせている。これに対して、上部を構成する灰色極細砂まじりシルトは、発掘範囲のすべてを覆いつぶしている。この層は南西部では粗粒になることから、これまでに堆積した地層とは異なり、南西から北東にむけて供給されたものと考えられる。つまり、今までのように北端部を流れる三原川の運搬してきた堆積物ではなく、大日川もしくは流路変更した三原川によって運ばれてきたものである。

ステージIV₁₅以降、第一次調査の際に、室町時代の遺物を含む地層によって充填されている水路が、現在の条里型土地割とはほぼ同じ向き(N40°E)に発見されている。しかし大部分の地層は、江戸時代以降の深耕のために堆積構造が乱されており、復原は不可能である。

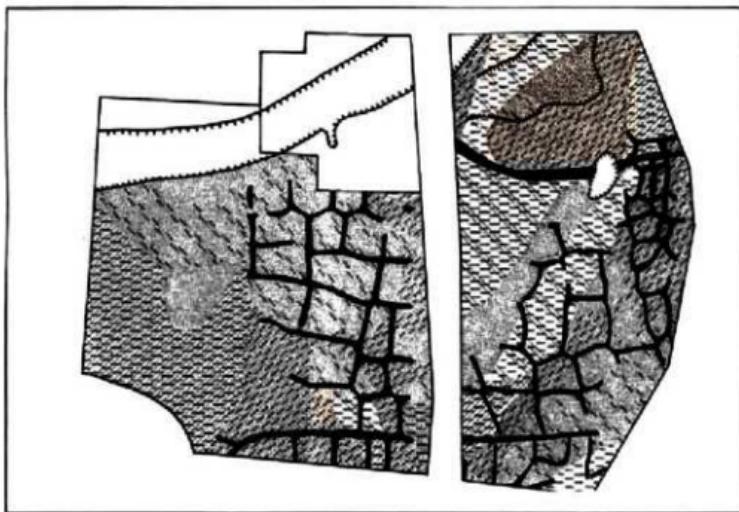
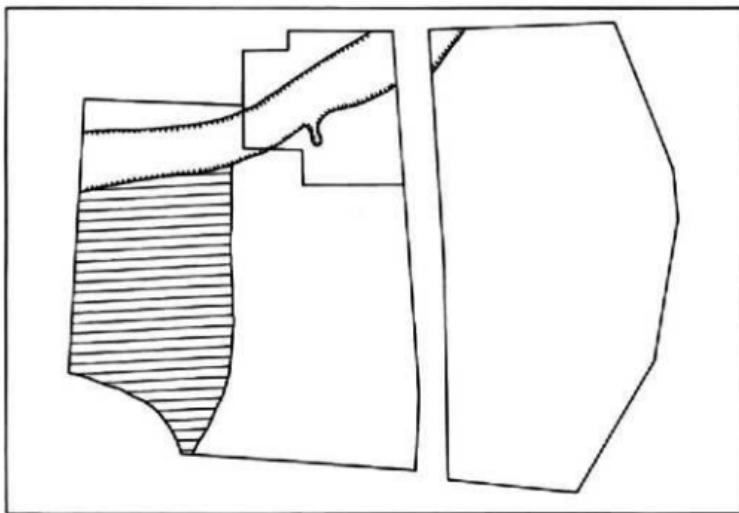
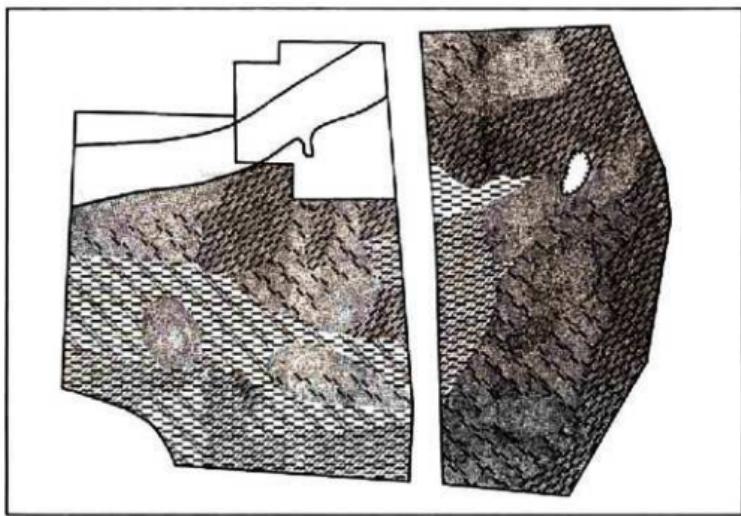
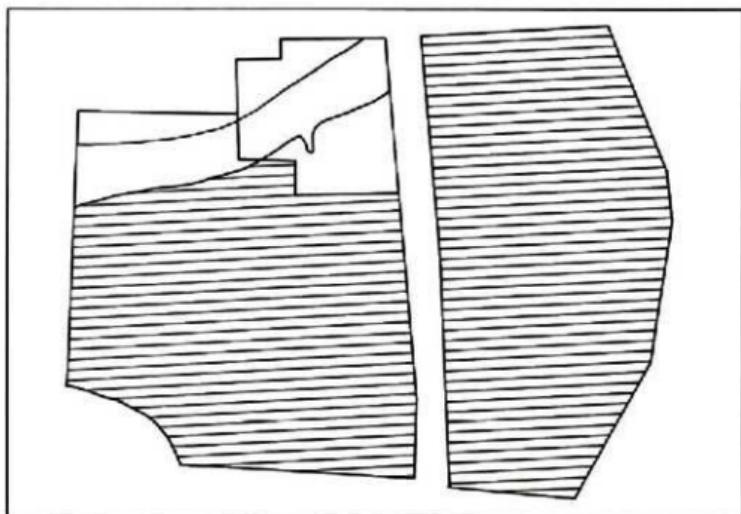


図581 地質図 ステージM₁₂



第58回 ステージN₁

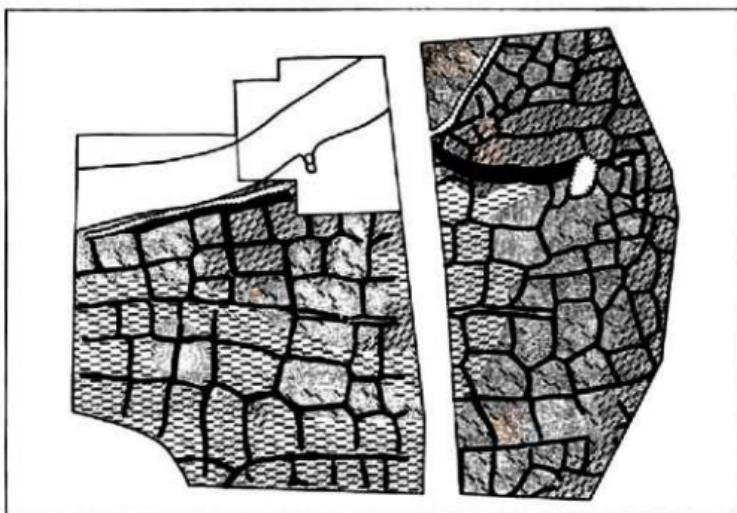


図58 n 地図 ステージN₁₄

第5節 水田の土地条件評価と水利復原

下層水田 ステージIV₅において茶灰色極細砂まじりシルトが堆積した後に、自然堤防状微高地に近い後背湿地に開発された。全体のプランは明らかになっていないものの、何本かの畦畔が検出されている。この場所は、ステージIV₃で浅い凹地が削まれ、ステージIV₄で堆積から取り残された場所であった。そのため、ステージIV₅の段階では後背湿地の中でも最も低湿な場所であった。また、水田の存在が確定であるステージIV₆でも、やはり堆積から取り残された場所であった。すなわち、開田は容易だが土地生産性の低い湿田であったと判断される。また区画ごとの土地条件の良・不良はほとんどなかったものと思われる。かなり低湿な所にもかかわらず畦畔が存在することは注目に値する。水利については明らかにできなかった。

中層水田 下層水田の營まれていた浅い凹地がほぼ埋積されてしまった後、河道に沿った微高地を除き中層水田が開発される。この水田はⅢ区においては、1時期のものとしてしか認識できないが、Ⅳ区では洪水堆積物を挟んで2時期の水田に区別できる。そこで、より古い水田を中層水田Ⅰ、新しいものを中層水田Ⅱと呼ぶことにする。なお、Ⅳ区のNEセクションより北側では中層水田Ⅰが、南側では中層水田Ⅱが面的に検出された。水田の開発された部分は中層水田Ⅰの場合でT.P.+40~100cm、中層水田ⅡではT.P.+48~100cmと低い所であり、海水の

影響が心配される。中層水田Ⅰの段階では、北東-南西方向に延びる水路が、水田の開発された所と未開墾地との境界をなしていた。しかし、この水路は次のステージで埋積されてしまい、中層水田Ⅱの段階では、下流側へと大畦畔が延長されている。このことは、河川の氾濫による土砂の堆積によって地盤が高くなつたために開発前線が海側へと前進していったことを示していると考えられる。

さて、中層水田面検出後に撮影された1/200空中写真の判読を行なったところ、Ⅲ区では第59図に示したように五つの超微地形に細分できることが判明した。それによれば、自然堤防状微高地はステージⅣ₃以降、相対的に微高地をなしてきた。後背湿地上の微高地は、ステージⅤ₆において形成されてきた微高地である。後背湿地Ⅰは、ステージⅣ₃以降、浅い凹地をなしており、後背湿地ⅢはステージⅤ₆において形成された非常に深い凹地である。後背湿地Ⅱは、後背湿地Ⅰ・Ⅲが凹地をなすために、相対的に僅かに高くなっている。

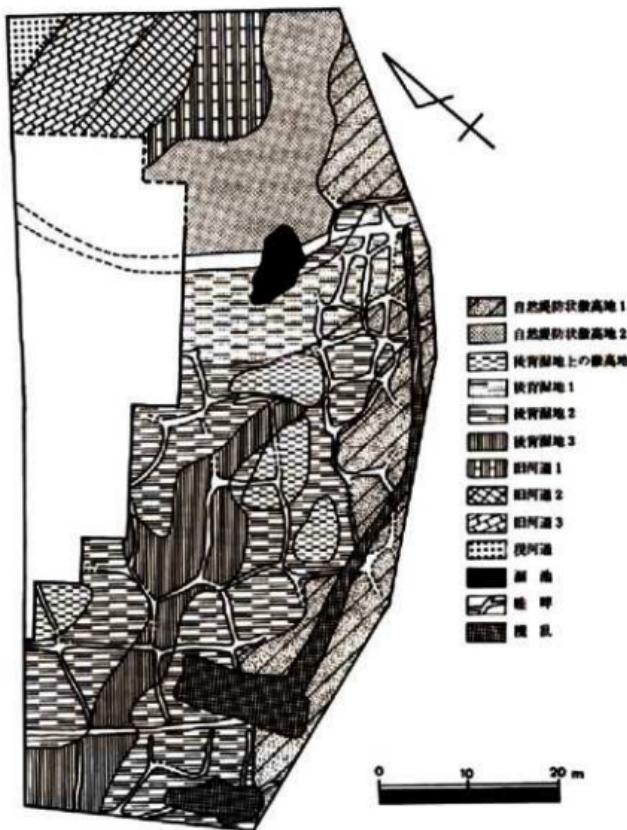
中層水田には大畦畔・小畦畔・溜池水路がある。このうち中央大畦畔は、河川沿いの自然堤防状微高地の末端にあたり、ステージⅣ₃において杭列が打たれた所にはほぼ一致する。また、溜池は自然堤防状微高地Ⅱと後背湿地Ⅰにまたがって掘られている。後背湿地Ⅰの部分は前にも述べたように、ステージⅣ₃において浅い凹地が形成されて以降、堆積から取り残されて常に凹地をなしており、自然の地形をうまく利用しているといえる。第60a・b図から判るように、この地形面は、南東から北西にむけて緩やかに傾斜している。これに対して平坦面を広く確保するために小畦畔は、等高線に沿って北東-南西方向に連続する。一筆の面積の大きさは、傾斜によって規制されており、一筆の区画内における高低差がほぼ6cm以内になるように作られている。全体的なプランとしては後に開発される上層水田に引き継がれるものの、Ⅲ区中央部付近には一筆の面積が広いものが存在する。これは、上層水田に比較しこの部分が平坦な地形をなしていたためと思われる。

水田面下20-30cmには、ステージⅣ₁で堆積した黒色シルトが存在しており、全体的に湿田をなしていた。そのため水田としての土地条件としては、自然堤防状微高地Ⅰの部分がやや良い他はほとんど差がなかったものと判断される。

水利は空中写真的判断から第61図のように復原できた。空中写真を実体視すると水口はもちろんのこと田越しで灌漑を行なった場合にも、水の取り入れた所が僅かに凹みをなしていることをを利用して復原を行なつたのである。しかし、中層水田の検出状態は上層水田ほど良好でないため復原が不可能であった所もある。第61図は、水口または田越しの痕跡がみられる水田のうち、発掘した範囲において最も上流にあたるものにⒶ-①の番号をあたえ、水利の系統を表わしたものである。溜池には主に③④⑤の水が流入していた。⑥-⑦の水は傾斜に沿って南東から北西へと直線的に流下しており、その際、他の系統のものと混合することは少ないよう見える。水口の数は少なく、ほとんど田越しで水の授受が行なわれていたようである。ただし南

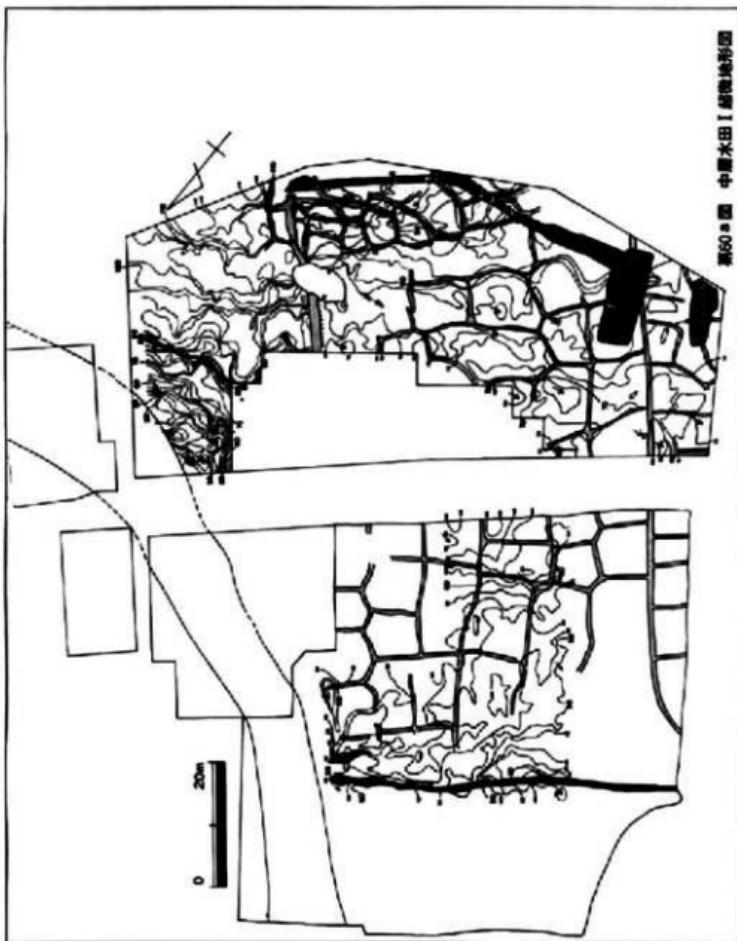
ステージ	地種	食	開発(生物活動)	時代	場所
ステージⅣ 現代	耕土 床土			現代	— — — — —
埋積期	暗灰色 シルト質細砂	埋積水田の破壊	深耕による擾乱 中畠水田埋積	江戸時代 宝町時代	三原川流域変更
開発期	灰色 灰色細砂より シルト		中畠水田? 本路 (N40°E)		
ステージ15	黄灰色シルト		上層水田埋積	古墳時代後期	三原川流域変更
ステージ14			上層水田開発 水路		
ステージ13	各種(流域内) 黄灰色中・細砂		中畠水田を全面埋積		三原川氾濫
ステージ12	黄灰色細砂質 シルト		中畠水田一部埋積		三原川氾濫
ステージ11			中畠水田開発 機		
ステージ10	黄灰色中・細砂		中畠水田上埋積	ナスビ形動 變形土器など	三原川氾濫
ステージ9			中畠水田開発 機、シガラミ水路		三原川流域 埋積進行
ステージ8	黄灰色細砂 よりシルト				三原川氾濫
ステージ7	黄灰色中砂	三原川沿いの 一部浸食	下層水田埋積		二原川氾濫
ステージ6	暗灰色シルト質 細砂		下層水田開発		三原川氾濫 大日川流域変更 後背湿地拡大
ステージ5	系統色細砂 よりシルト				
ステージ4	黄灰色中・細砂				
ステージ3		三原川沿いの 一部浸食	続列 シガラミ (最下層水田)	弥生時代後葉半— 古墳時代前期 變形土器	三原川氾濫 開拓前の水田開発 (上流域)
ステージ2	青灰色粗・中砂				開拓のはじまり 三原川の流入 安定した淡水性湿地
ステージ1	黑色シルト 灰色中砂				遠くでの氾濫
淡水性湿地期	黒色シルト 植物遺体 黑色シルト				安定した淡水性湿地
ステージⅤ 汽水性 湿地期	黒褐色シルト		ボーリング オーガニズム の墨穴		海水準 現在より低位
ステージⅥ 浅海期	青灰色細砂				海水準 現在より高位

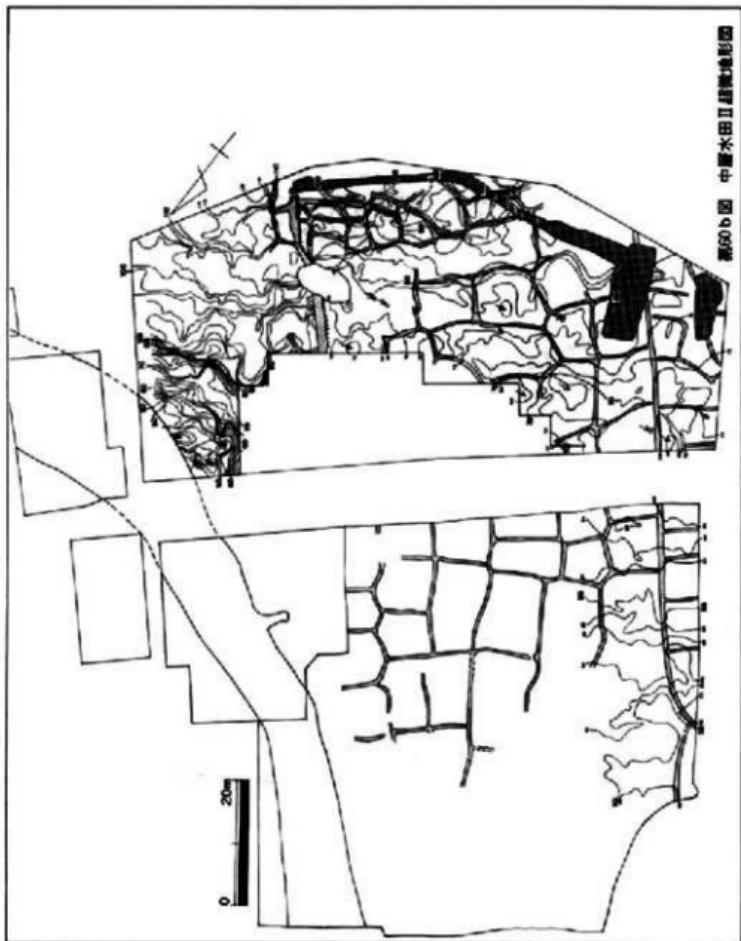
表7 環境変遷表



第59図 中層水田越後地形分類図

第60圖 中壠水田土壤地形圖





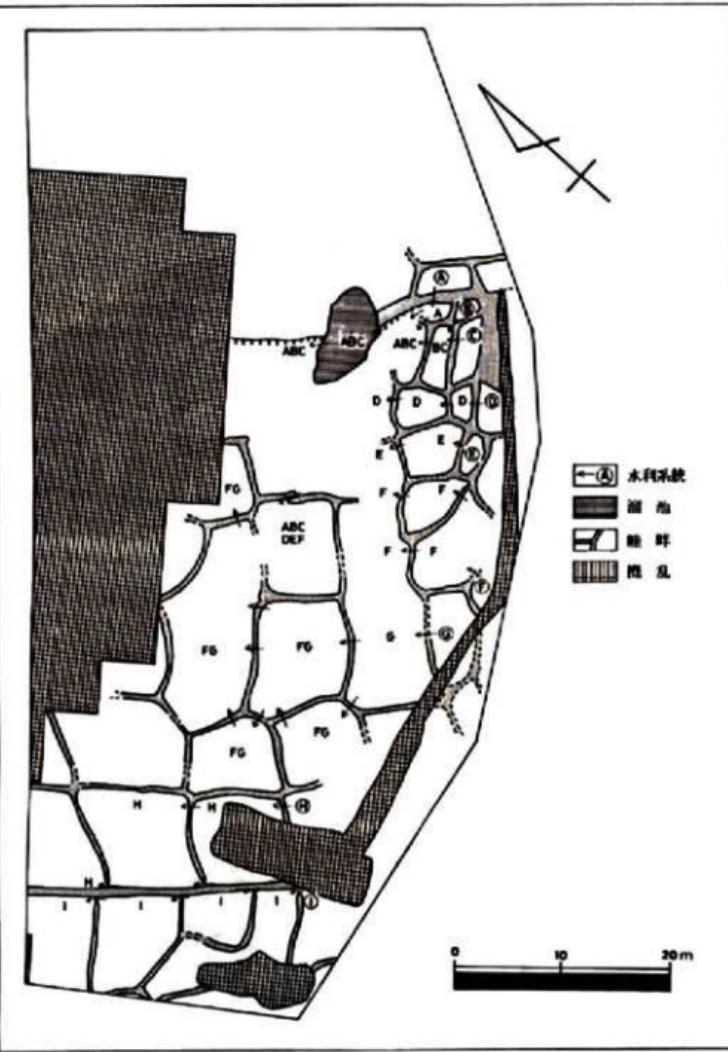
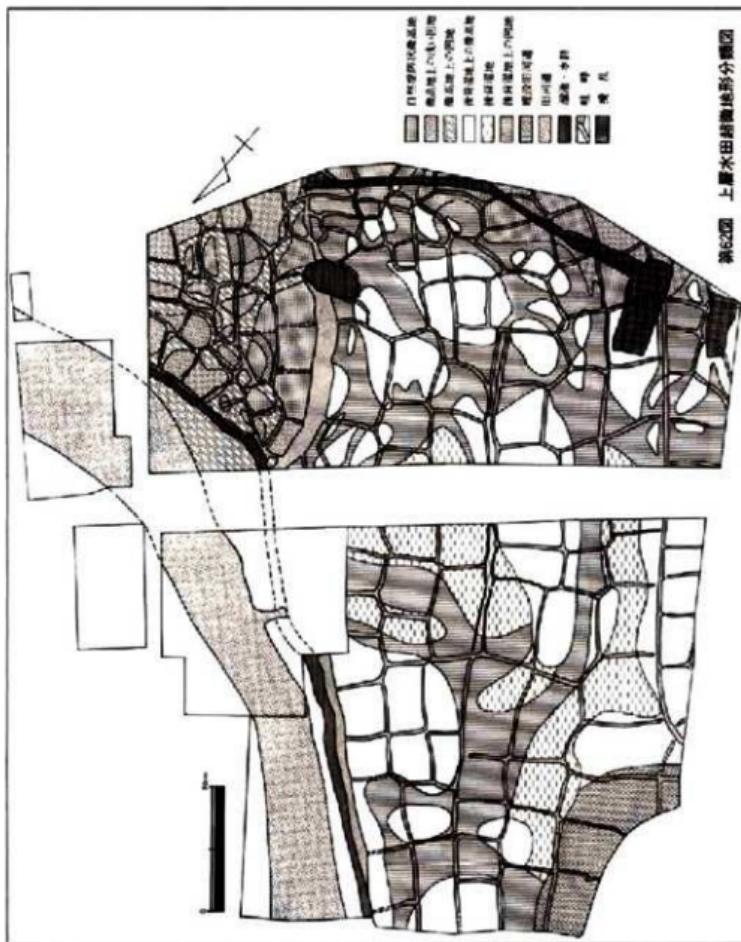
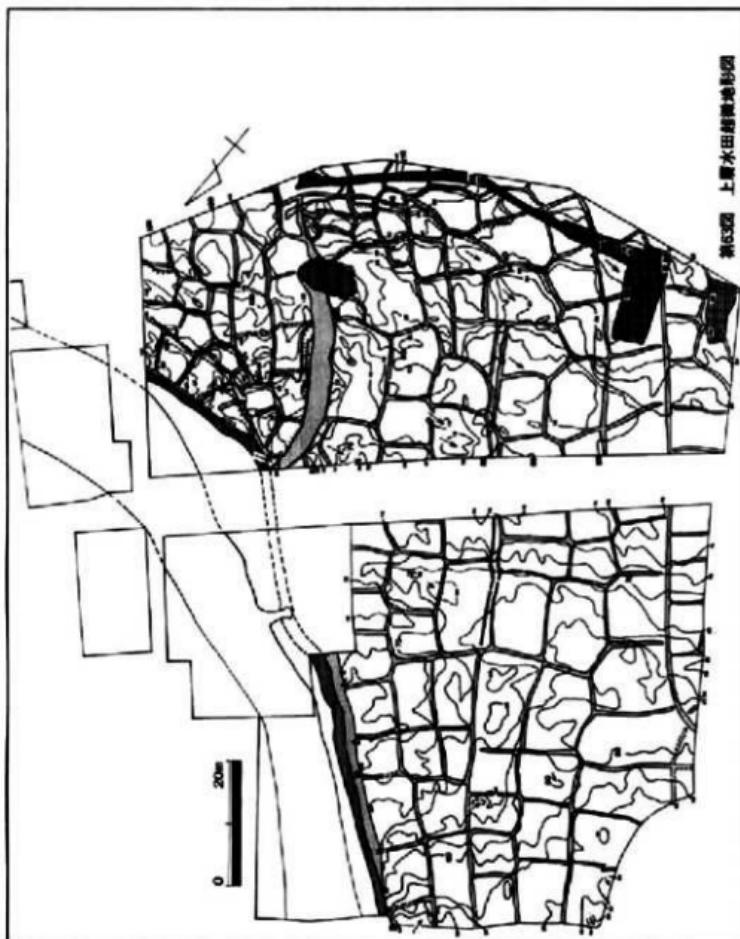


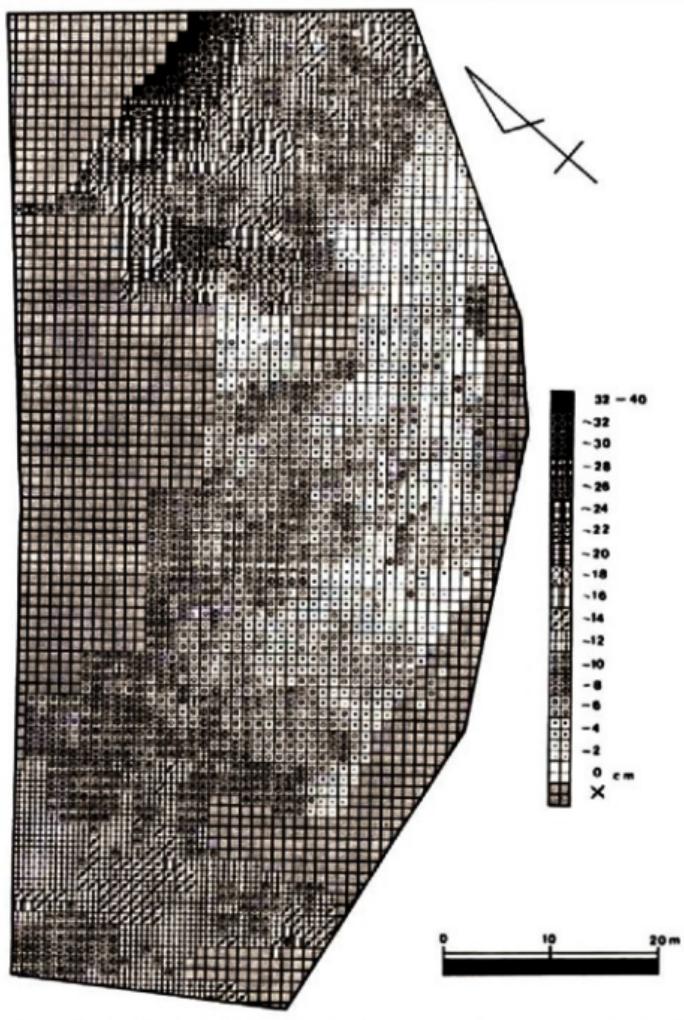
圖61圖 中層水田水利系統圖

第62图 上层水田耕作地形分幅图



第五圖 上層水田耕種地形圖





第64図 中層水田・上層水田間の堆積量

水田	調査										合計
	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	
A				7	1	4					12
B							1	1			
C						2			2		
D						1		1			
E			1		1			2			
F		1						1			
G					2			2			
H			1				1				
I		6						6			
A E				2	2			4			
E G			1	2				3			
AEG			1	2				3			
BCD					1	1					
EHG		1	2		1	3	7				
AEGH					1		1				
ABCDE						1		1			
計		15	6	10	7	6	3	47			

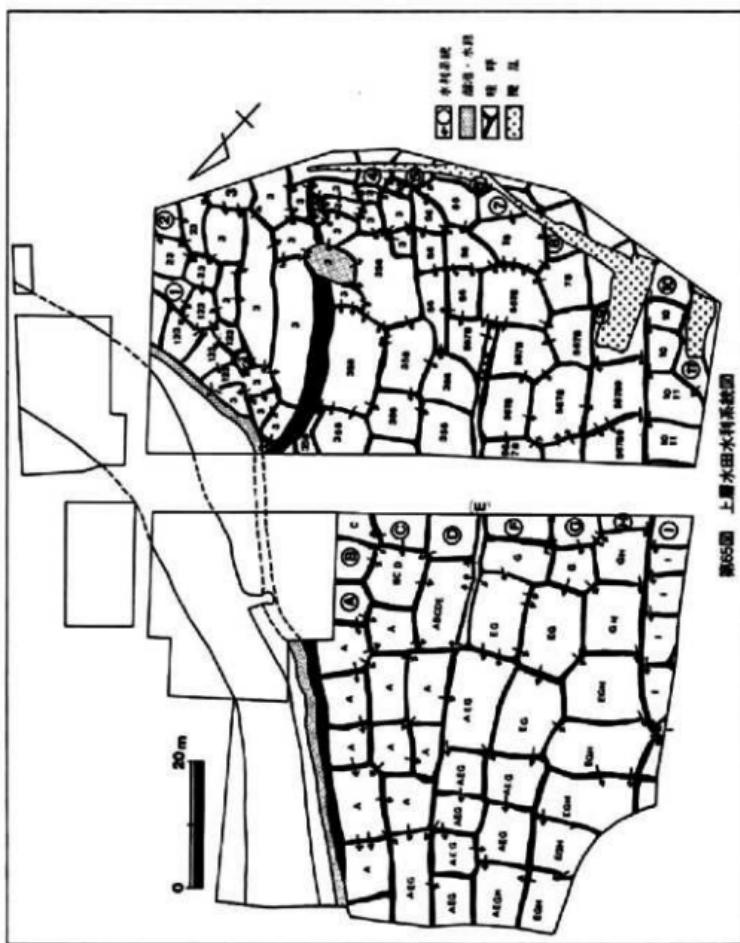
水田	調査										合計
	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	
1			1								1
2		1									1
3	8		3		2	1	3	4			21
4	1										1
5						1					1
6	1										1
7	1										1
8	1										1
9							1				1
10					1			2	3		
11							1				1
2・3	1										1
4・5								1	1		
5・6					1	3	2				6
7・8				1	1						2
10・11							1	1			2
1・2・3・4						1					5
3・5・6							3	4	1		8
5・6・7・8							2	6			8
5 6 7 8 9								2			2
合計	18	0	4	2	5	1	11	18	9	0	68

表8 上層水田水利系統別土地条件(左a・右b)

個の大畦畔に沿った水田には、すべて水口が存在していた。なお背区についてはNEセクションを抜んで異なる面を検出していたため超微地形分類および水利復原はできなかった。

上層水田 ステージⅡは中層水田Ⅰの一部が埋積されたのち、ステージⅢにおいて中層水田は、全面を東から西へ向けて供給された氾濫堆積物によって覆われた。そこに開発されたのが上層水田である。上層水田は第62図に示したように七つの超微地形にまたがり広がっている。この水田が中層水田と異なる重要な点は、後背湿地のみでなく、旧河道に沿った自然堤防状態高地の上にまで開発空間が拡大していることである。また、下流側に向かっても開拓範囲は広がっている。畦畔は中層水田の位置を踏襲している所が多い(第63図参照)。ただし、ステージⅢの氾濫堆積物が部分的に厚いⅢ区の中央部では新しい畦畔が作られている(第64図参照)。これに対して、堆積は厚くとも、比較的広範囲にそれが広がっている南側大畦畔の付近などでは、新しい畦畔が作られていない。このことは、不均等な土砂の堆積によって、一区画内の比高が大きくなりすぎた所では、新しく畦畔を設けて小さな区画にせざるを得なかつたことを示唆しているように思われる。一筆の面積は10~40m²程度のものが最も多い。水口は153ヶ所確認されているが特定の水田に集中する傾向があり、ほとんどの水田で田越溝を行なっていたものと考えられる。水口を持つ水田は自然堤防状態高地や後背湿地上の微高地といった相

圖65 上圖水田耕種圖



対的に高い位置に存在していることが多い。また、南側大畦畔に沿うほとんどの畦畔に水口があり、南側大畦畔と水利とが深い関わりにあることが考えられる。

さて、上層水田の水利系統は第65図に示した通りである。上層水田は中層水田と比較して非常に保存が良く、水田面検出後に撮影された1/200の空中写真判読により水利系統を復原することは比較的容易であった。Ⅲ区とⅣ区の間の連続性が不明なため、それぞれの地区において、それぞれの系統の最も上流にあたるものに①-⑩および⑪-⑯までの記号を与えた。これによればⅢ区において三原川の旧河道に人工的に掘られた水路は排水用であることが判る。また、溜池には自然堤防状微高地の背斜部を経て、第3系統の水しか流入しない。ⁱⁿ また、幾つかの系统的水が混り合うことはあるが、それは南側大畦畔を越えて行なわれることはない。中層水田の段階ではⅣ区において南側大畦畔に沿う水田に水口は検出できなかったが、上層水田の段階になると南側大畦畔に沿ってすべての水田に水口が開かれており、その役割は注目に値する。Ⅳ区の上層水田においてもⅢ区の第3系統同様にA系統のものが、特異性を持つことである。Ⅳ区においてはA系統に属する水田が最も多いが、この系統は、前節で述べられている橋と最も近い位置にあり、密接な関係が考えられよう。なお、当遺跡が河川の感潮域内にあることから、塩水クサビ¹²を利用した逆水灌漑が行なわれた可能性があり、旧河道に向けて逆傾斜した橋は、その施設であるかもしれない。このことは、松下まり子氏が、海水の影響を示す *Microhistridium ariakense* TAKAHASHI の化石を上層水田面から検出していることとも矛盾しない。

さて、上層水田には灌漑施設が伴っていることから、より乾田に近い状態の水田を生産性が高いものと仮定し、超微地形分類図に基づいて、一区画ごとの土地条件評価を行なった。その際、最も良い状態をAとし、その逆の場合をJとし10段階に区分した。これを水利系統ごとにまとめると表8の様になる。表8 aはⅢ区の場合、表8 bはⅣ区の場合である。ここで特徴的なことは、溜池をその系統の中に含んでいる第3系統、あるいは橋との関係が考えられるA系統に属する水田の総数が最も多く、土地条件も圧倒的に良いことが判る。このことが何を意味しているかについては、土地所有形態や耕作法等との関わりもあり、今後の慎重な検討が必要である。

おわりに

志知川沖田南遺跡の水田開発には、旧三原川の河況変化や、それによってもたらされた氾濫堆積物が大きく関わっていた。氾濫堆積物は水田を埋没させてしまうと同時に、次の開発のためには、より生産性の高い土地を提供したのである。また、ステージⅣ-Ⅴの景観変化は古墳時代前期の中でおこっており、この時期に非常にアクティブな地形形成がみられたことは、

平野の発達史を考える上で重要なことである。このアクティブな地形変化の中において、少なくとも4度の水田開発があった。そして、それは後背湿地のみの開発に始まり、自然堤防状態高地の上にまで開発空間を拡大していった。また、土砂の堆積する場所が徐々に下流側に移動するにしたがって開発フロントが下流域へと移動していった様子も明らかになった。同一地点で水田開発の空間的拡大が明らかになった初めての事例になるものと思われる。

地形形成のプロセスから考えて、埋没水田は、三原平野に広く分布すると思われるので、その範囲を明らかにすること、古墳時代前期にアクティブに地形形成がすんだ背景を究明すること、現存する条里型地割と埋没地割との関係を明らかにすることなどが今後の重要な研究課題となるであろう。

注

- 1 泥基原という用語は、従来3通りの使い方をされてきた。つまり、最も広い意味では河川の泥基のおよぶ範囲全体をさし、別の用法では、いわゆる自然堤防帯といはる用語として、そして最も狭い使い方としては、自然堤防帯のうち自然堤防でも田河道でもない部分をさむものとしてである。本稿では、広義として一番目の意味で、狭義として二番目の意味に用いる。
- 2 注1と同じ。
- 3 埋没丘層もふくめ沖積層の基底をなす地形をこのように呼ぶ。
- 4 後水期のみでなく地下水期の堆積物もふくめこのように呼ぶ。
- 5 町田洋・新井房夫（1978）南九州鬼界カルデラから噴出した広域チフラカホヤ火山灰、第四紀研究17-3
この火山灰に関するては大阪市立大学吉川周作氏と群馬大学新井房夫氏により確認されている。
- 6 前田保夫（1980）臨海平野の表層部に残る幾重海岸の記録 地球2-1
- 7 大村敬通氏、木口富士氏の御教示による
- 8 鹿野茂・鶴谷公範・宮本文子（1982）「桂浜遺跡群集からみた三原平野における定着後期の古環境の変遷」『淡路・志知川沖田南遺跡』兵庫県教育委員会 所収
- 9 1965年度～1966年度にかけて実施された雨濱道路の発掘調査で古墳時代中期墳の住居跡や墓が発見されている。ここで検出された遺構群は集落の端に位置していると考えられ。古くからの集落は東南方向にひらがっていると推定される。
- 10 藤原宏史（1982）「兵庫：志知川沖田南遺跡における古代水田跡の検索」『淡路・志知川沖田南遺跡』兵庫県教育委員会 所収
- 11 三好教夫・新井靖子（1982）「淡路島・志知川沖田南遺跡の花粉分析学的研究」『淡路・志知川沖田南遺跡』兵庫県教育委員会 所収
- 12 現在、大阪港・神戸港では満潮時にTF+70-80cmまで海水準が上昇する。また低気圧の通過に伴って約60cmの海面上昇がある。海上保安庁水路部監修（1981）『瀬戸内海潮汐表』4-9頁
- 13 113m²と132m²の水田は、それぞれ3区画に分かれていた可能性が高い。
- 14 水口は6ヶ所もつ水田が2区画ある。これらは潮汐と同様に淀水調節の役割をもっていた可能性がある。
- 15 注13で述べた水田は両方とも第3系統に属しているため、計4区画ふえる可能性が高い。
- 16 満潮時に海水が河川に沿って陸上すると比重の軽い淡水が海水の上に持ちあげられる。この現象を塩水クサビと呼び、これを利用した漁業方法を塩水漁業と言う。現在でも東南アジアの各地の河川下流域で用いられている技術である。
- 17 本書第8章 松下まり子（1987）「志知川沖田南遺跡・水田遺構の花粉分析」

第8章 志知川沖田南遺跡の 自然科学的分析の成果

- 第1節 志知川沖田南遺跡出土の壺棺内部及び壺棺包含土壤の全リン分析
——中間報告—— (昭和55年) 植田晶子
- 第2節 志知川沖田南遺跡における古代水田跡の探索 藤原宏志
- 第3節 志知川沖田南遺跡・水田遺構の花粉分析 松下まり子
- 第4節 淡路島・志知川沖田南遺跡の花粉分析学的研究 三好教夫 新井靖子
- 第5節 珪藻遺散群集からみた三原平野における完新世後期の古環境の変遷
懇野 茂 関谷公範 宮本文子

第8章第1節・第2節は
公開していません

第3節 志知川沖田南遺跡・水田遺構の花粉分析

松下まり子

(神戸大学教養部生物学教室)

1.はじめに

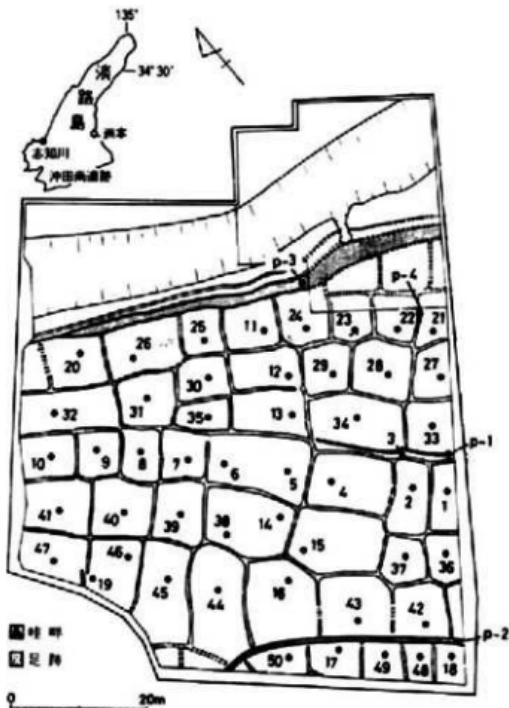
志知川沖田南遺跡は淡路島南西、三原平野の西端をほぼ南北に流れる大日川の右岸に位置する。当遺跡の水田遺構は、昭和55・56・57年度の淡路縦貫道建設に伴う発掘調査で明らかになった。^{1,2)}自然地形を巧みに利用して開拓された弥生時代後期から古墳時代前期の小区画型水田である。当遺跡においては、三好・新井(1982)³⁾によって第IV区の2ヶ所のトレンチ壁面の試料が花粉分析され、遺跡周辺地域の植生と農耕の変遷が推定されている。筆者は、昭和57年度に発掘された第IV区上層水田を面的にとらえ、水田各箇所および畦畔の花粉分析を行ない、花粉・胞子の堆積状況をみるとことにより、水田遺構の形態を復元することを試みた。さらにセクション壁面の花粉分析を行なうことにより、短期間における立地の変化を明らかにしようとした。

稿を始めるにあたり、現地での試料採取にご協力いただいた兵庫県教育委員会ならびに討議して下さった立命館大学 高橋学氏に厚くお礼を申し上げる。

2. 試料と方法

試料：昭和57年7月7日に上層水田上面の堆積物を採取した。今回分析した試料は水田の表層50cm(St. 1～50、うち畠畔1 St. 3⁴⁾)、大畦畔2(南側大畦畔 St. P-2、中央大畦畔 St. P-3)、小畦畔2(St. P-1、4)の計54地点の堆積物である(第76図)。さらに同遺構内で下層水田が確認されたのちの同年8月28日に、N16-S、N16-N、NEの3地点においてセクション断面の柱状試料を採取した(第77図)。N16-Sは谷の外に、N16-Nは谷の中に位置しており、それぞれ10層、13層に区分され、それらを試料とした。NEは下層水田の検出されなくなった地点で12層に区分し試料に供した。それぞれの土層断面は第88,89,90図に示してある。^{5,6)}

花粉分析：水離化カリウム-塩化亜鉛比重分離-アセトトリシス処理により、花粉・胞子を抽出した。グリセリン又はグリセリン・ゼリーに包埋し、光学顕微鏡で検鏡した。上層水田上面の堆積物については、読み取り数を原則として500粒以上とし、それぞれの試料について乾泥1g当たりの花粉・胞子数を換算した。花粉・胞子の出現頻度は総花粉・胞子数を基準として算出した。柱状試料については原則として木本花粉が200粒以上になるまで検鏡し、木本花粉の出現頻度については木本花粉総数を、草本花粉、シダ胞子のそれについては総花粉・胞子数を基準として計算した。



第76図 志知川沖田南通跡調査区上層水田試料採取地点

注2 土壌区分は高橋李氏による。

3. 結果と考察

1) 上層水田の形態復元

粒度と灼熱減量分

シルト以下 ($63\mu\text{m}$ 以下) 粒子の重量比および灼熱減量分 (IL) の分布を第78図、79図に示す。シルト以下粒子の比率は水田面で 43.4% (St. 42) ~ 83.9% (St. 8) であった。 $63\mu\text{m}$ 以下の粒子が 50% 以下となる粒子の比較的粗い地点は南の隅 (St. 36, 37, 42, 43, 48, 49) にみられる。一方、70% 以上となる粒子のこまかい地点は北西の一角 (St. 7 ~ 10, 20, 31, 32)

粒度分析：上層水田の 54 試料について行なった。凍結乾燥した試料 1 g を水中でよく分散し、 $63\mu\text{m}$ 標準ふるいでふるい分け、ふるい上に残った残渣をグラスファイバーフィルター GS25 で汎過、 60°C で一晩乾燥し秤量した。

灼熱減量分 (IL) の測定：上層水田の 54 試料について行なった。凍結乾燥した試料 1 g を、るつぼで 600°C 、3 時間灼熱した後、減量分を秤量した。

注1 調査区のはば中央に幅 80 ~ 100m、長さ 50m の水路状水田が検出された。電極と称されるものであり、堤壁には漏水防止用の、基本植物が埋め込まれていた。

と St. 5、11~14、16、17、19、21であった。畦畔では、P - 4 で 29.5% と低いが、P - 1 ~ 3 では 44.6 ~ 64.1% であった。灼熱減量分 (IL) は水田面では 3.0% (St. 32) ~ 5.2% (St. 8) で、量的に大きな差はない。その中で St. 7~10、14、16、19、21、27、31、38、40、44、46 で 4.0% 以上の比較的多い IL がみられる。畦畔での IL は水田面より低く P - 1 で 3.2% の他は 2.3~2.8% であった。粒度と IL の間に良い相間はみられなかった (相関係数 R = 0.61)。

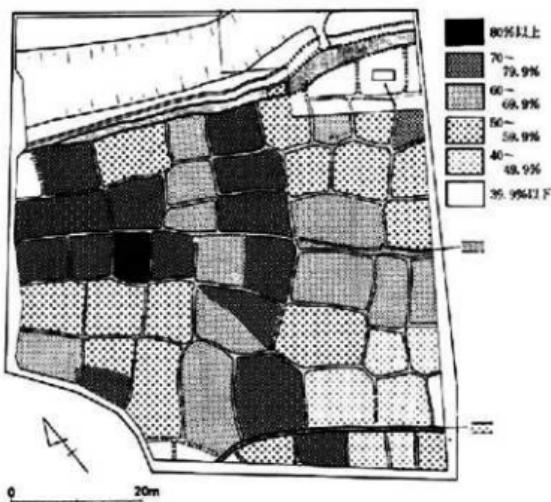
花粉・胞子数

1 g 当たりの花粉・胞子総数およびイネ科 (Gramineae)、オモダカ属 (*Sagittaria*)、ヨモギ属 (*Artemisia*)、マツ属 (*Pinus*) の花粉数の分布を第 80~84 図に示す。花粉・胞子総数 (第 80 図) は 3,660 粒 (St. 28) ~ 75,600 粒 (St. 18) であった。咲穂およびその延長上畦畔より北側で花粉・胞子数は少なく、とくに中央大畦畔に沿った St. 22~26、28 で 10,000 粒以下であった。

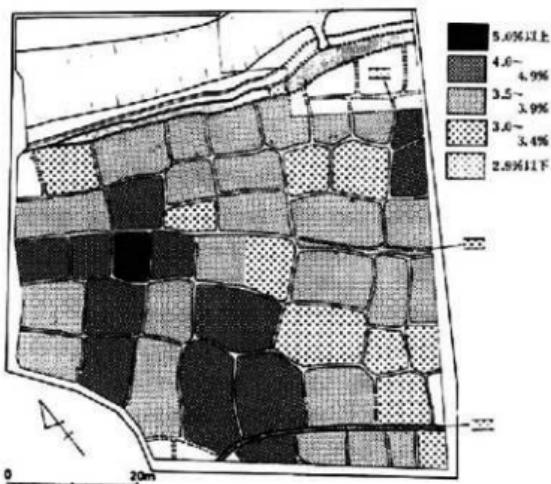
一方、南側大畦畔の両側の水田面で花粉・胞子総数は比較的多くとくに St. 16~18 で約 75,000 粒が検出された。畦畔での検出花粉・胞子数も北側の P - 3、4 で 4,375~11,600 粒と少なかった。イネ科花粉 (第 81 図) は 3,380 粒 (St. 28) ~ 35,590 粒 (St. 16) であった。花粉・胞子総数と分布の傾向はほぼ同じで、咲穂およびその延長上畦畔より北側で少なく、南側大畦畔の両側の水田面で多かった。とくに St. 23、24、28 では 380~630 粒と少なく、一方、St. 16~18 では 26,850~35,590 粒に達している。畦畔上でも同様で P - 3、4 で少なく 1,090~4,100 粒であった。オモダカ属花粉 (第 82 図) は 0 (St. 12, 15, 22, 24, 28) ~ 2,247 粒 (St. 16) であっ



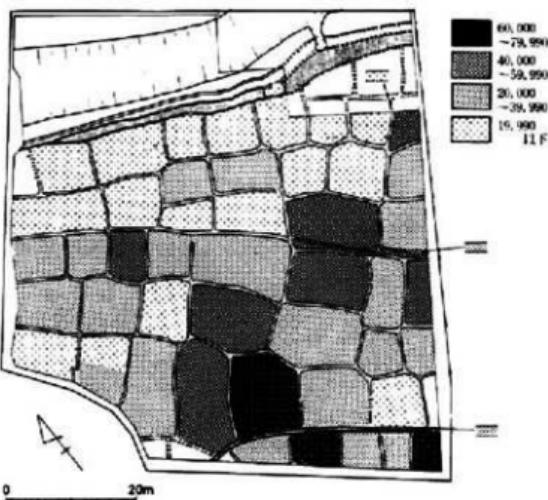
第 77 図 本知川沖田南邊跡跡区セクション壁面柱状試料採取地点



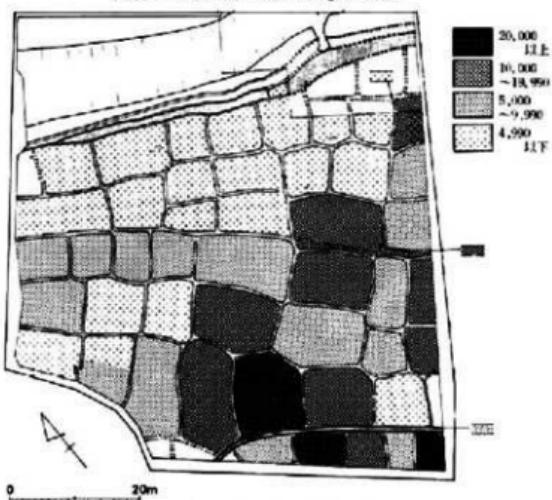
第78図 シルト以下 ($63\mu m$ 以下) 粒子の重量比の分布



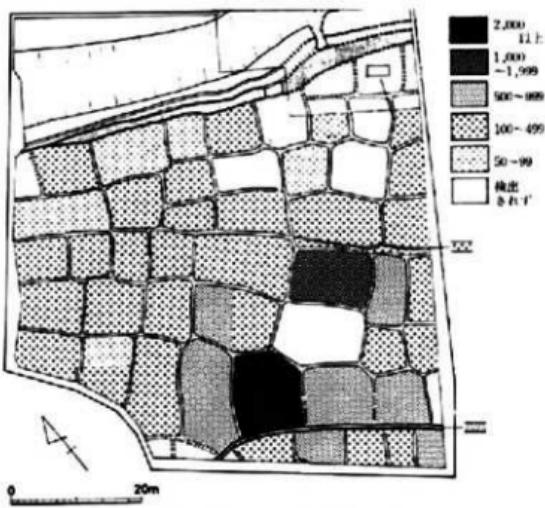
第79図 热传导率 (IL) の分布



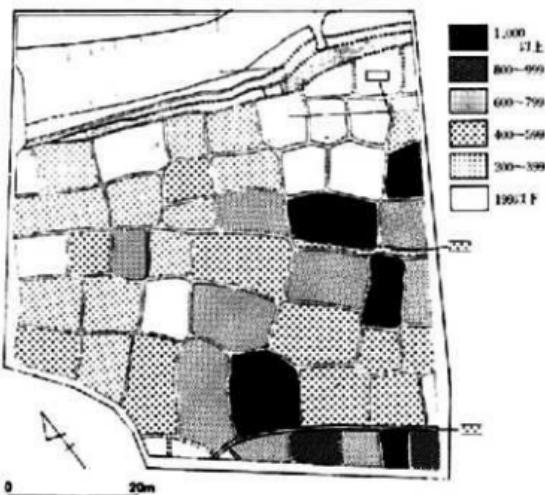
第80図 花粉・胞子総数(粒/g)の分布



第81図 イネ科花粉数(粒/g)の分布

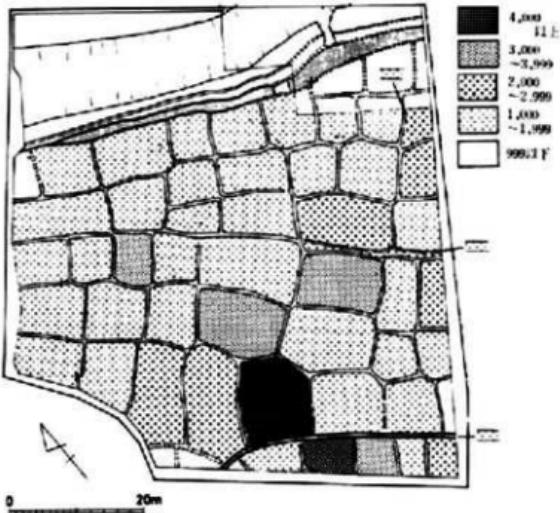


第82図 オモダカ属花粉 (粒/g) の分布



第83図 ヨモギ属花粉 (粒/g) の分布

た。オモダカ属は水田雜草の一つで、水田内や溝に生えるが、その花粉の分布は咲歎およびその延長上畦畔より北側で少なく、南側で多かった。とくに Sl. 16 では 2,247 粒を数えた。しかし隣接する Sl. 15 では検出されないといった現象もみられた。そして北側の畦畔 (P-3, 4) では検出されなかつたが、P-1, 2 では 321~650 粒であった。ヨモギ属花粉 (第 83 図) は 50 粒 (Sl. 28) ~1,440 粒 (Sl. 49) であった。ヨモギ属は荒地や低地に普通に生えるヨモギと河岸や海岸に生えるカワラヨモギが含まれるが、いずれにしてもその花粉は水田の外から主に水によって搬入されるものである。この花粉の分布も、中央大畦畔に沿った水田面で少なく南側で多くみられた。また、咲歎の両側の水田面でも多く、とくに Sl. 2, 27, 34 で 1,000~1,275 粒が検出された。畦畔でも北側 (P-3, 4) で 63~100 粒と少なく、P-1, 2 で 320~350 粒であった。マツ属花粉 (第 84 図) は 238 粒 (Sl. 28) ~5,019 粒 (Sl. 16) であった。マツ属は周辺の丘陵地に生えるアカマツと海岸近くに生えるクロマツが含まれるが、いずれも遠方から風または水によって運搬されるものである。この花粉の分布も、やはり咲歎およびその延長上畦畔より北側で少なく、南側で多い傾向がみられるが、それほど顕著ではない。畦畔上ではいずれも少なく、P-3 では検出されず、P-1, 2, 4 では 150~280 粒であった。



第 84 図 マツ属花粉 (粒/g) の分布

以上から1g当たりの花粉・胞子数は、中央大畦畔に沿った北側水田面で少なく、南側で多い傾向がみられた。なお、花粉・胞子数と63μm以下粒子の重量比およびILとの間には相関はみられなかった。

花粉・胞子組成

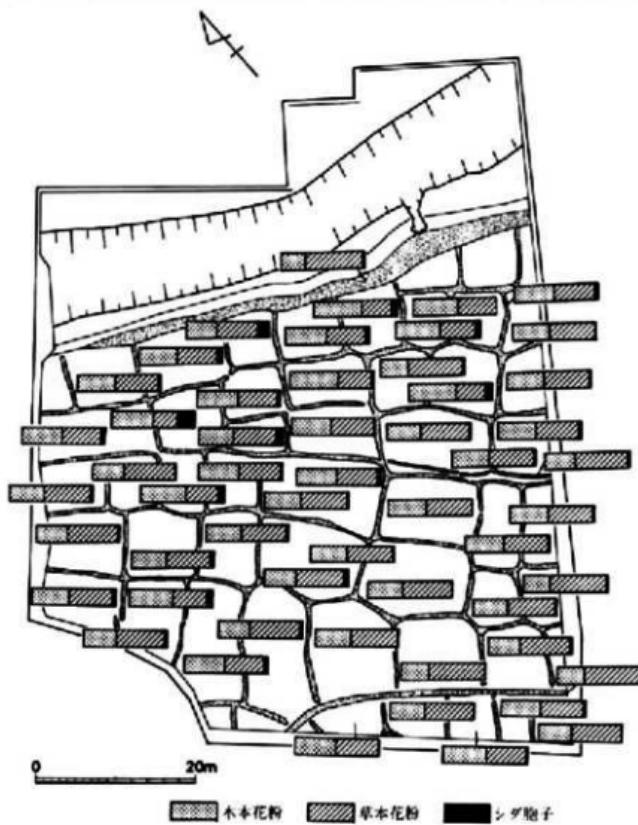
水田各箇所によって1g当たりの花粉・胞子数が異なっていたが、それぞれの花粉・胞子の比率にも差異が認められる。表10に水田50箇における主な花粉・胞子の種類の最高値、最低値、平均値を示す。種類によって検出されない地点があるが、読み取り数を増せば出現すると思われる。上層水田全域における花粉・胞子組成の特徴は、平均値でみると木本花粉25.1%と草本花粉29.7%で、それぞれが25~30%程度で出現することである。そして草本花粉のはば80%以上がイネ科である。その他に、水田に生育するオモダカ属が5箇を除いた地点から1%前後の比率で検出される。そして、ヨモギ属、カヤツリグサ科 (Cyperaceae)、セリ科 (Umbelliferae)、ナデシコ科 (Caryophyllaceae)、アカザ科 (Chenopodiaceae)、ヒユ科 (Amaranthaceae) 等が低率であるが出現する。木本花粉では、コナラ属：アカガシ亜属 (*Quercus-Cyclobalanopsis*) とクリ属-シノキ属 (*Castanea-Castanopsis*) が5~6%検出される。その他にヤマモモ属 (*Myrica*)、モチノキ属 (*Ilex*) 等を伴うことから、遺跡周辺には照葉樹林が存在していたものと推定される。針葉樹花粉ではマツ属、スギ (*Cryptomeria*) が2~3%前後、ナギ属 (*Podocarpus*)、コウヤマキ (*Sciadopitys*) も低率ながら検出される。暖帯上部から温帯に生育するモミ属 (*Abies*)、ツガ属 (*Tsuga*)、ブナ属 (*Fagus*)、カバノキ属 (*Betula*) 等もわずかではあるが検出される。しかし、ブナ属、カバノキ属は当地方で生育していた可能性は少なく、^{注3}これは西国山地、中国山地等からの飛来花粉であろう。シダ胞子 (Fern spore) の出現は2%前後であった。この花粉組成は全般的にみて三好、新井 (1982)³⁾の75~55cmの層準の分析結果とはほぼ一致する。畦畔における花粉・胞子組成も基本的には水田面のものと同様である。

表10 主な花粉・胞子の組成率の最高値、最低値と平均値 *標準偏差

	最高値	最低値	平均値		最高値	最低値	平均値
木本花粉	35.7	17.1	25.1±4.51*	コナラ亜属	2.1	—	0.7±0.52
マツ属	5.8	1.0	3.0±1.25	アカガシ亜属	9.7	—	5.1±2.36
モミ属	1.9	—	0.6±0.50	クリ-シノキ属	13.4	1.4	6.4±2.31
ツガ属	2.3	—	0.8±0.57	草本花粉	41.2	12.0	29.7±7.42
スギ	5.4	0.3	2.3±0.97	イネ科	37.6	10.2	24.9±6.96
コウヤマキ	1.4	—	0.5±0.34	オモダカ属	3.4	—	1.0±0.75
クマシテ属	1.6	—	0.5±0.42	ヨモギ属	5.2	0.6	1.8±0.87
ヤマモモ属	1.3	—	0.5±0.37	シダ胞子	9.2	0.4	2.2±1.57

第85図に木本花粉、草本花粉、シダ胞子三者間の比率の分布を示す。水田上面ではシダ胞子が0.9% (St. 43) ~ 21.5% (St. 31) と低く、木本花粉、草本花粉が残りを占める。木本花粉は31.4% (St. 36) ~ 57.1% (St. 24)、草本花粉は34.5% (St. 28) ~ 66.1% (St. 43) の範囲で各筆によって差異がみられる。畔ではとくにP-1~3で草本花粉の比率が高く、63.1~68.0%を占めている。木本花粉は28.9% (P-3) ~ 47.2% (P-4)、シダ胞子は0.7% (P-2) ~ 4.2% (P-4) であった。

次に花粉・胞子組成の特徴から水田各筆の区分を試みた(第86図)。木本花粉に対する草本



第85図 木本花粉・草本花粉・シダ胞子、三者の比率

花粉の比率 (NAP/AP 比) およびイネ科 (G)、シダ胞子 (FS) をとりあげた。木本花粉の比率が草本花粉のそれを上回る (NAP/AP 比 \leq 1.0) 地点が跡跡およびその延長上畦畔の北側、St. 11, 12, 22~24, 28, 30, 31 および St. 8, 45, 46, 49 でみられた。一方、草本花粉の比率が木本花粉のそれを上回る (NAP/AP 比 \geq 1.3) 地点が南側 St. 6, 9, 15~19, 36, 38, 42~44 と St. 29, 34 にみられた。さらに北側ではシダ胞子の比率が高い地点が多く、St. 24~26, 28, 31, 35 で 6% 以上が検出された。一方、南側ではイネ科の比率が高く、St. 15~19, 36, 38, 43, 50 で 30% 以上が検出された。畦畔 P-1~3 では NAP/AP 比が 1.79~2.35 と高く、イネ科花粉が 30% 以上を占めている。

この他、上層水田堆植物の分析結果で特徴的なこととして、内溝に棲息している藻類 (*Micryhistridium ariakensis* TAKAHASHI) の休眠胞子が 38 箬から検出されることがあげられる (第 87 図)。又、その分布には、北側水田面で検出されない箇所が多いという特徴がある。又、P

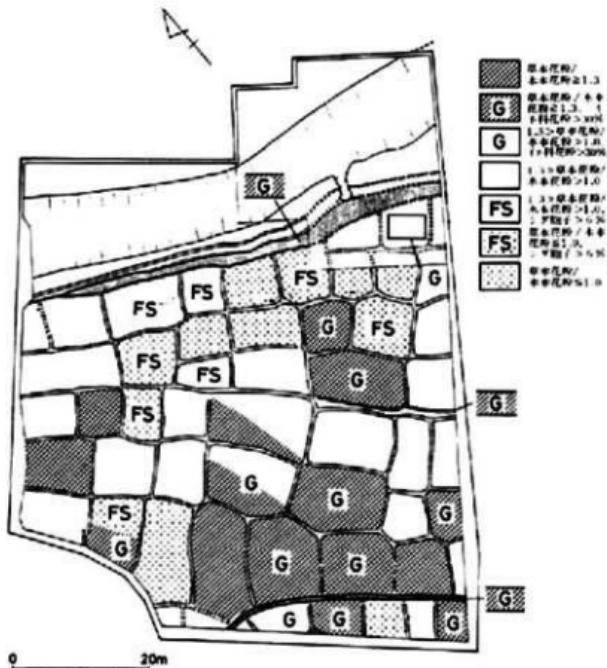
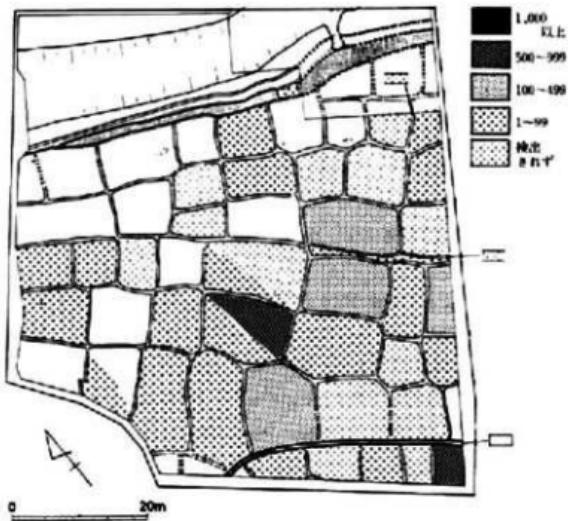


図86図 花粉・胞子組成による水田各箇所の区分



第87図 *Micryhistridium arakense* Tsuchihashi (個/g) の分布

—2を除く畦畔からも検出された。T.P. 56~75cmに位置するこの水田はかつては海水の侵入や潮風による吹き込みが比較的多くあったと推定できる。

沖田南遺跡付近は度重なる河川の氾濫によって徐々に陸化し、この中で水田が開発されていった。今回発掘された上層水田は、下層水田が河川の氾濫堆積物によって埋没された後に開発されたものと考えられている。¹¹²⁾今回分析した上層水田の堆積物はこのような河成堆積物がその基になっており、さらに水田耕作時に堆積したものである。花粉・胞子は水域において微細粒子と挙動を共にし、水の動きに影響を受けることが海域を中心に明らかにされている。⁵¹⁶⁾
¹¹¹⁾水田内における花粉・胞子の分布も水の動きによって規定される可能性が考えられる。しかし、当遺構の堆積物の粒度と有機物量 (IL) の間には良い相関がみられず、花粉・胞子との間には全く相関がみられなかった。このように齊一的に堆積する海成や湖沼成の堆積物と違って、河成堆積物や水田堆積物では堆積のしくみが複雑である。

水田遺構の南側で花粉・胞子が多く堆積し、中でもイネ科花粉の堆積する率が高い。イネ科花粉の種類は多種にわたっており、それぞれの同定はできていないが、イネをはじめ水田周辺に生育しているとみられるイネ科がほとんどと考えられ、現地性の花粉が多く堆積する区域といえる。水田雜草であるオモダカ属の比率もとくに南側大畦畔 (P-2) とそれに隣接する

St. 16, 42, 43で2.5~3.4%と他に比べて高率で出現する。一方、北側では花粉・胞子の堆積は少なく、異地性と考えられる木本花粉・シダ胞子の比率が高い。このように、蚊歎およびその延長上畔を境には北側と南側で花粉・胞子や内済性の藻類の休眠胞子の堆積状況が異なっており、この原因として次のことがあげられる。まず、南側では北側に比較して草本とくにイネ科植物の生育が良好であったと思われる。そして、標高がほぼ東から西へ低くなっていることからみて、北側と南側で水利系統が異なっていると考えられる。とくに、北側では他地域から花粉・胞子が運搬されてきた可能性が考えられる。これは洪水に伴うものとしても良いと思われる。一方、海側から運ばれた *Micryhistradium* の休眠胞子も北側では堆積しにくい地形であったと思われる。

畔の粒度はP-4で粗いが他では水田面と大差ない。しかし、有機物量(II)は水田面に比較して少なかった。花粉・胞子数は水田面と同様北側の畔で少なく、南側で多かった。花粉・胞子組成も基本的に隣接する水田面のものと同様であった。ただ、中央大畔(P-3)では隣接水田のそれとは異なり、草本とくにイネ科の比率が高かった。

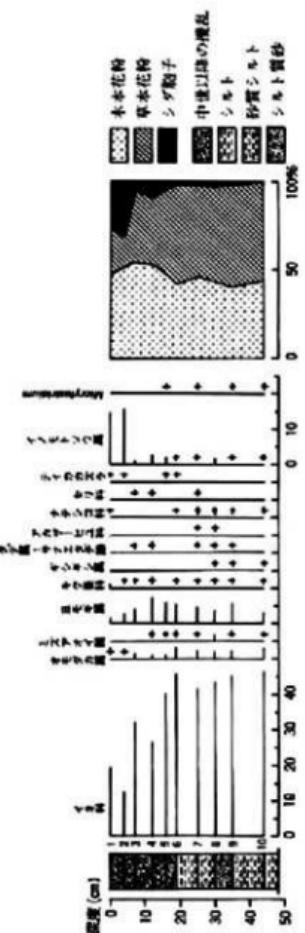
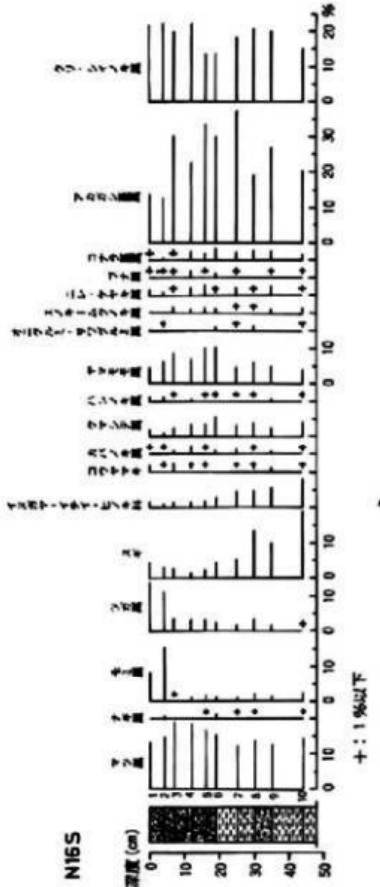
注3 神戸市立教育研究所 菊田保氏から、三坂平野のアカホヤ大山執筆(約6,300年前)からもブナ属花粉はほとんど検出されなかったという情報をいただいた。

2) 水田造構の立地

第88, 89, 90図にN16-S, N16-N, NEの花粉ダイアグラムを示す。なお、N16-Nでは2, 7層での、NEでは1, 7層での花粉含有数が少なくダイアグラムから省いてある。複数の属あるいは科をハイフンでつないでいるものは両者の同定が困難なものである。ただし、クリーシイノキ属ではシイノキ型のものが圧倒的に多い。以下に各地点での草本花粉・シダ胞子の変化を中心に、水田造構の立地について考えてみたい。

N16-S (第88図)

この地点は谷の外に位置し、上層水田St.50の南にある。花粉化石群集の変化は連続的で、1~5層は中世以前の擾乱層とされているが、3層までは比較的安定した立地と思える。7層は上層水田面、6層はそれを埋没させた黄灰色シルト層であるが花粉・胞子の組成にはその差異は認められない。イネ科花粉は第5層~10層で40%をこえて連続的に出現する。そして、3, 4層で30%に、1, 2層で20%以下に減少する。イネ属の同定ができていないため、ただちにこの数字から水田面か否かを決定することはできないが、水田雜草であるオモダカ属、ミズアオイ属 (*Momochoria*) が下層から連続して出現しており、長期間水田耕作が営まれていたと言える。3層から上位でミズアオイ属が検出されなくなり、オモダカ属も1, 2層で1%以下となる。一方、イノモソツク属 (*Pteris*) の胞子¹⁴が1, 2層で急増し15%に達する。このことから1, 2層が水田面である可能性は少ない。この他、ヨモギ属が5%前後、キク亜科

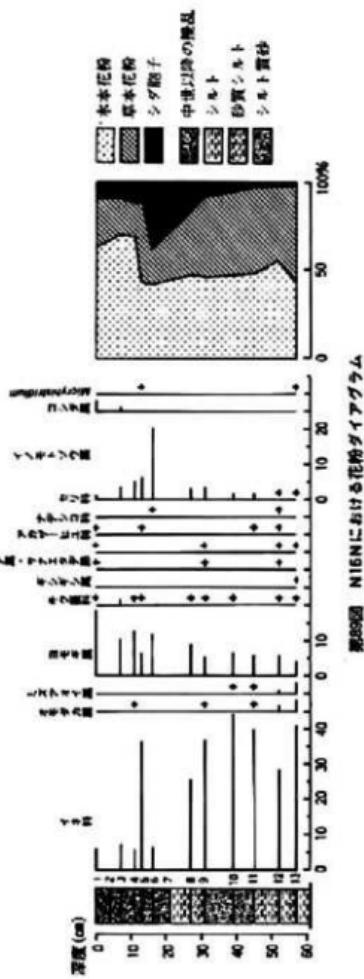
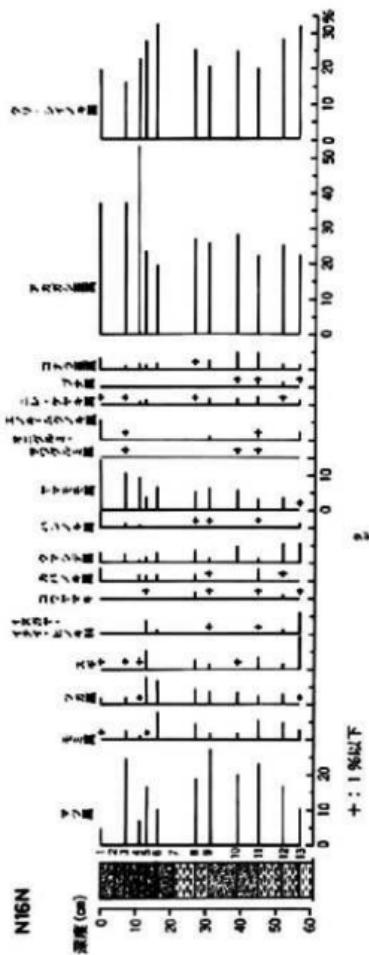


(Tubiflorae)、ナデシコ科等が1%以下で連続して出現する。ティカカズラ (*Trachelospermum*) が6層から上位で出現するのも特徴的である。そして藻類 *Micryhistridium* の休眠胞子が5層以下で検出された。木本花粉ではマツ属が15%前後、クリーイノキ属が15-20%程度で全層から検出された。アカガシ属は3-10層で20-35%で優占するが、1、2層で15%以下に急減する。最下層で約20%検出されたスキは上層にむけて漸減し5層から上位で5%以下となる。イスガヤイチイヒノキ科 (C-T-C) もスギと同様の傾向を示す。ヤマモモ属は逆に下層で5%程度であったのが漸増し、3-6層で10%程度となるが、1、2層でやや減少する。モミ属、ツガ属は1、2層で急増しそれぞれ10-15%となる。この他、コナラ属、クマシデ属 (*Carpinus*)、エノキムクノキ属 (*Celtis-Aphananthe*)、ニレーケヤキ属 (*Ulmus-Zelkova*)、ブナ属 (*Fagus*) 等の落葉広葉樹花粉や、コウヤマキ、ナギ属が連続的に出現する。1、2層でアカガシ属の急減とモミ属、ツガ属の増加が認められた。これは先に述べたイネ科およびオモダカ属、ミズアオイ属の減少、イノモトソウ属の急増時期と一致する。このことから、河川の氾濫により、周辺あるいは上流からモミ属、ツガ属、イノモトソウ属等の花粉・胞子が運び込まれ土砂と共に堆積し、そこでは水田耕作が放棄された可能性が考えられる。裸地になった土壤中の花粉の分解は早く、比較的強じんなシダ胞子が選択的に残ったことも考えられる。

注4 大阪市立自然史博物館 鹿嶋孝徳氏の御教示による。

N16-N (第89図)

この地点は谷の中に位置し、上層水田 St. 5 にある。イネ科花粉は5層および8-13層で25-40%を占める。一方、1、3、4、6層では10%以下であった。水田雜草であるオモダカ属は11-13層、ミズアオイ属は10-13層で検出されるが上層ではオモダカ属が4、9層でわずかにみられるだけである。ヨモギ属は下層から上層にむけて漸増し、1-6層で10-20%を占める。この他にキク亜科が1%以下の比率で連続的に出現しているが、その他の草本花粉はあまり検出されない。又、イノモトソウ属は6層で20%の高率で検出され5層で急減するが5%以上を占め上層にむけ漸減する。そして、コシダ属 (*Dicranopteris*) が1、3層で検出された。休眠胞子 *Micryhistridium* もわずかであるが5、13層で検出された。7層については花粉・胞子の検出数が少なく、ダイアグラムには描いていないが、6層と同様イノモトソウ属が高率である。この6、7層でイネ科花粉が急減することから、8層から下位で営まれていたと思われる水田が6、7層で洪水の影響を受け裸地化された可能性が考えられる。7層は上層水田上面をおおう黄灰色シルト層であり、この見解と一致する。1-6層は中世以降の擾乱層とされているが5層でイネ科が高率で出現するものの4層から上位では水田は放棄されたと推定できる。木本花粉ではアカガシ属が5-13層で20-30%、1-4層で40-55%に増加して優占する。これに伴ってヤマモモ属が1-4層で10-15%の高率で出現する。クリーイノキ属は15-30%の幅で増減をくり返す。マツ属はさらに5-25%の大きな幅で変化をくり返す。ブナ属



が9層から上位で検出されない他は、N16-Sとはほぼ同様の花粉組成を示しているが、各層準によって変動が激しい。水田が放棄されたと思われる1~4層ではヨモギ属、アカガシ亜属、ヤマモモ属が高率で出現し、コシダ属も検出された。又、同様に水田が営まれなかつたと思われる6、7層ではイノモトソウ属が急増するが、N16-Sで同じ挙動を示したモミ、ツガ属は比較的高率ではあるがそれほど顕著ではない。

NE (第90回)

この地点は下層の水田遺構が検出されなくなる地点であるがこの8層は上層水田のSL47にあたっている。イネ科は8~10層で30~45%、2、3、6、11、12層で20%、4、5層で10%前後検出された。オモダカ属は6~12層と3層で、ミズアオイ属は9~12層で検出された。ところが6層からイノモトソウ属が多量に検出され3層では40%に達する。他の層準でも5%前後連続してみられる。

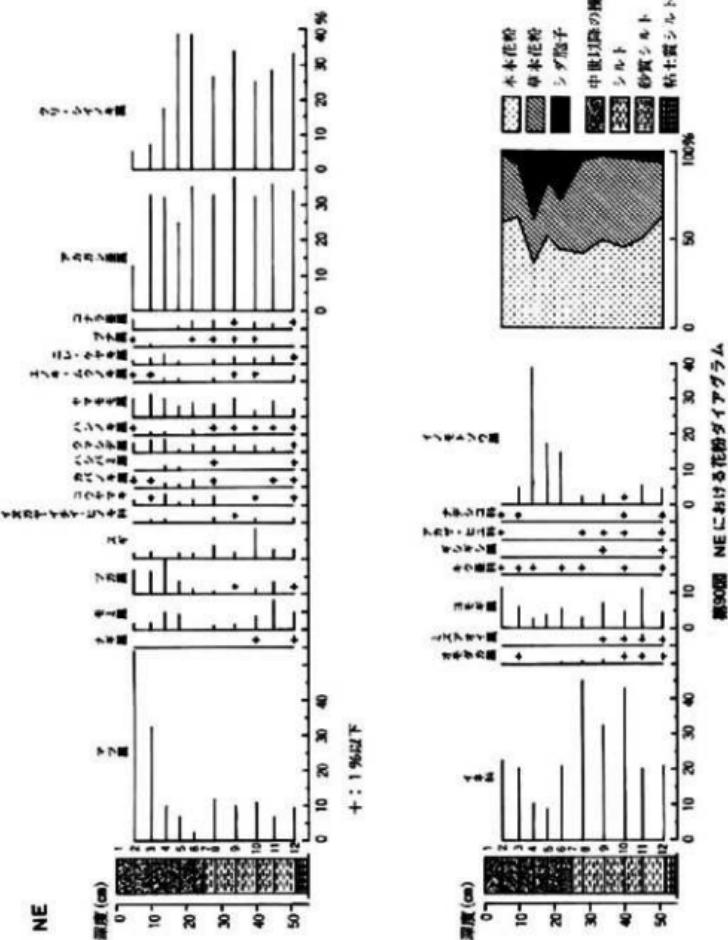
なお、7層は上層水田上面をおおう黄灰色シルト層で花粉・胞子の検出はきわめて少なくダイアグラムに示していないが、イノモトソウ属の比率が高い。これらのことから8~10層では水田が営まれていたが洪水にみまわれたのは水田耕作の可能性は少ないといえる。草本花粉ではその他ヨモギ属が5~10%、キク科、アカザーヒユ科、ナデシコ科が1%以下で検出するが、N16-Nよりさらに種類が少い。*Micryhistrinum*は検出されなかった。木本花粉ではアカガシ亜属が3~12層で25~40%の比率で安定して出現し、2層で15%以下に急減する。クリーシイノキ属も5~12層で25~40%で出現するが4層から急減し2層では5%程度となる。

一方、マツ属は12層から4層まで10%以下であったが、3層から急増し2層で50%以上となる。このマツ属の急増はNEでの大きな特徴である。ヤマモモ属は5%前後で安定して全層準から検出される。その他の木本花粉の組成はN16-S、N16-Nと同様である。1~6層は中世以降の擾乱層とされ、3層から上位で急増するマツ属花粉は二次林としてのアカマツ林の分布広大を示している。

沖田南遺跡・水田遺構の検出の鍵層となった黄灰色シルトの洪水層は広範囲に広がり、N16-N、NEでは、この層で花粉量や組成に大きな変化がみられたが、N16-Sでは認めることができなかった。N16-Nは谷の中で、やや立地が不安定で、上層水田埋積後、一度水田耕作が営まれたが再び放棄されたと思われる。NEはさらに不安定な立地で、下層水田は検出されおらず周辺に水田が存在した可能性はあるが、ここでは中位で短期間水田が営まれたのみで、河川の氾濫による上層水田埋積後、水田は放棄された。

一方、N16-Sは花粉・胞子組成からみて安定した立地で水田が営まれていたが上層で裸地化された。

遺跡周辺の植生を考える上で、N16-S地点は安定した立地であり、優れている。層準によつて多少の変化はあるが、当時、遺跡周辺には、アカガシ亜属、クリーシイノキ属（おそらくシ



イノキ属)、ヤマモモ属、ナギ属等を主体とする照葉樹林が繁茂していたと推定できる。又、マツ属の出現が連続的にみられ、当地方が海岸に近接していることから、これはアカマツとクロマツの両方が考えられる。

なお、NEでは上層でマツ属の急増がみられ、これは二次林としてのアカマツ林の分布拡大の結果と思われる。ところが、N16-S、N16-Nでは同一層準とされる上層で、マツ属の急増はみられず、この原因については不明である。また最上層(1層)は現水田耕土であるとされているが、イネ科の高率出現はみられず、このことについても検討中である。

当遺跡から検出された花粉・胞子は72種類(木本類36種類、草本類32種類、胞子類4種類)であった。以下検出された全ての花粉・胞子を木本類、草本類、胞子類に大別して示す。

木本類：マツ属(*Pinus*)、トウヒ属(*Picea*)、モミ属(*Abies*)、ツガ属(*Tsuga*)、マキ属(*Podocarpus*)、スギ(*Cryptomeria*)、イヌガヤ科—イチイ科—ヒノキ科(C-T-C)、コウヤマキ(*Sciadopitys*)、ヤマモモ属(*Myrica*)、カバノキ属(*Betula*)、ハシバミ属(*Corylus*)、クマシデ属(*Carpinus*)、ハンノキ属(*Ainus*)、クルミ属—サワグルミ属(*Juglans*-*Pterocarya*)、エノキ属—ムクノキ属(*Celtis*-*Aphnanthe*)、ニレ属—ケヤキ属(*Ulmus*-*Zelkova*)、ブナ属(*Fagus*)、コナラ属：コナラ亜属(*Quercus*:*Lepidobalanus*)、コナラ属：アカガシ亜属(*Quercus*:*Cyclobalanopsis*)、クリ属—シイノキ属(*Castanea*-*Castanopsis*)、ヤナギ属(*Salix*)、シキミ属(*Ilicium*)、キハダ属(*Phellodendron*)、サンショウ属(*Zanthoxylum*)、アカメガシワ属(*Mallotus*)、モチノキ属(*Ilex*)、カエデ属(*Acer*)、トチノキ属(*Aesculus*)、ツバキ属(*Camellia*)、グミ科(Elaeagnaceae)、ウコギ科(Araliaceae)、ツツジ科(Ericaceae)、ハイノキ属(*Symplocos*)、エゴノキ属(*Stylos*)、トネリコ属(*Fraxinus*)、イボタノキ属(*Ligustrum*)

草本類：ガマ属(*Typha*)、ヒルムシロ属(*Potamogeton*)、サジオモダカ属(*Alisma*)、オモダカ属(*Sagittaria*)、イネ科(Gramineae)、カヤツリグサ科(Cyperaceae)、ミズアオイ属(*Monochoria*)、ユリ科(Liliaceae)、ギシギシ属(*Rumex*)、ダデ属：イタドリ節(*Polygonum* sect *Reynoutria*)、タデ属：サナエタデ節(*Polygonum* sect *Persicaria*)、アカザ科—ヒユ科(Chenopodiaceae-Amaranthaceae)、ナデシコ科(Caryophyllaceae)、コウホネ属(*Nuphar*)、カラマツソウ属(*Thalictrum*)、アブラナ科(Cucurbitaceae)、マメ科(Leguminosae)、ブドウ属(*Vitis*)、ツタ属(*Parthenocissus*)、キカシグサ属(*Rotala*)、ヒシ属(*Trota*)、アカバナ科(Onagraceae)、アリノトウグサ(*Haloragis*)、セリ科(Umbelliferae)、ガガブタ属(*Nymphoides*)、ティカカズラ(*Trachelospermum*)、スイカズラ属(*Lonicera*)、オミナエシ属(*Patrinia*)、オナモミ(*Xanthium*)、ヨモギ属(*Artemisia*)、キクア科(Tubiflorae)、タンボボア科(Liguliflorae)

胞子類：コシダ属(*Dicranopteris*)、イノモトソウ属(*Plenix*)、单条溝型(Monoletete)、三条溝型(Triplete)

4.まとめ

上層水田の形態

1) 花粉・胞子の堆積状況は吐畠およびその延長上吐畠を境に南側と北側で異なっている。即ち、南側では花粉・胞子の堆積量が多く、現地性のイネ科を中心とする草本花粉の比率が高い。一方、北側では花粉・胞子の堆積量は少なく、異地性の木本花粉・シダ胞子の比率が高い。このことから両地域での水耕系統が異なっているといえる。

2) 内湾に棲息する *Micryhistridium* の休眠胞子がほぼ全域から検出されることから海水の侵入、潮風の吹き込み等の海の影響があった。

3) 吐畠の花粉・胞子の堆積状況は中央大吐畠を除いて水田面のそれと類似する。この大吐畠時は幅が広く段差が大きいことからも他の吐畠とは異なっている。

水田造構の立地

1) N16-Sは谷の外に位置し、各層の花粉・胞子組成からみて安定した立地で水田が営まれていたが上層で裸地化された。

2) N16-Nは谷の中に位置し、N16-Sに比較してやや不安定な立地で河川の氾濫による埋積期をはさみ2回の水田耕作が営まれ、上層で再び放棄された。

3) NEはN16-Nよりさらに低地に位置し、立地は不安定で、周辺に水田が存在した可能性はあるが、この地点では中位で短期間水田が営まれたのみで、河川の氾濫による埋没を受け放棄された。

周辺の森林植生

アカガシ・ヒノキ・ヤマモモ・イヌマキ等を中心とする照葉樹林が広く分布し、マツ林（アカマツ・クロマツ）もみられた。

引用文献

- 1) 兵庫県教育委員会（1980）：淡路・志知川沖田南遺跡一昭和55年度発掘調査報告一、P.14~32。
- 2) 兵庫県教育委員会（1982）：淡路・志知川沖田南遺跡II一昭和56年度発掘調査報告一、P.41~61。
- 3) 高橋学（1982）：志知川沖田南遺跡の地形環境II、淡路・志知川沖田南遺跡II一昭和56年度発掘調査概報一、P.22~39。
- 4) 三好教夫・新井靖子（1982）：淡路島・志知川沖田南遺跡（兵庫県）の花粉分析学的研究、淡路・志知川沖田南遺跡II一昭和56年度発掘調査報告一、P.14~21。
- 5) KORENEVA, E. V. (1966) : Marine palynological researches in the U. S. S. R., Mar. Geol., 4, P. 565~574.

- 6) 松下まり子 (1982) : 播磨灘表層堆積物の花粉分析—内海域における花粉・孢子の動態
—第四紀研究, 21巻, P.15-22。
- 7) MATSUSHITA, M. and SANUKIDA, S. (1986) : Studies on the Characteristic Behavior of Pollen
Grains and Spores in Lake Hamana on the Pacific Coast of Central Japan. The Quaternary
Research, 25, P.71-79.

第8章第4節・第5節は
公開していません

第9章　まとめ

- 1、志知川沖田南遺跡は、淡路島の中西部、三原郡西淡町松帆志知川に所在する、水田跡を検出した遺跡である。
- 2、水田跡以外の遺構には、弥生時代前期の壇場（18ページ参照）や中世溝（33ページ参照）がある。
- 3、水田跡は土層断面の観察では計5面確認され、実際の調査では2面検出し得た。
- 4、水田土壤を構成するのはシルトから細砂にかけての土質をもち、上層水田は氾濫堆積物である黄灰色シルトで覆われている。
- 5、上層水田は推定も含めて計141枚の小区画を検出した。その標高は0.53m～1.16mである。
- 6、上層水田は東西方向の2本の大畦畔を約50mの間隔で設け、その間を同方向の小畦畔で6等分し、更に南北方向の小畦畔で区切っている。また2本の大畦畔の中央には幅約0.5m、長さ約50mの細長い水田をつくる。
- 7、調査地区の東北部では水田が不定形を呈し乱れているが、各水田間の比高が大きい位置にあたる。1枚の水田内の比高差は5cm以下であり、それ以上になると畦畔をつくるようである。
- 8、上層水田は基本的に中・下層水田の畦畔を踏襲してつくられている。
- 9、中・下層水田は計73枚の小区画を検出した。その標高は0.52m～1.04mである。
- 10、中・下層水田面には無数の足跡が検出され、中には小畦畔を踏み抜いているものも見られたが、その規則性については見出すことができなかつた。
- 11、上層水田では畦畔が検出された調査区西端において下層水田面では畦畔が確認されなかつた。この時点において水路2以西では水田開発が行われていなかつた可能性を示す。
- 12、水田に伴う遺構として、溜池状遺構・しがらみ・橋・水路・杭列や旧河道が検出された。
- 13、志知川沖田南遺跡の水田の時期は大畦畔中から出土した土器や溜池状遺構内から出土した土器から弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけてのものと考えられる。
- 14、旧河道からは同時期の土器が多数出土し、中には讃岐糸のものも含まれている。
- 15、水田遺構の大畦畔（特に南側大畦畔）は現在の水田のものと並行関係にある。現在の水田が条里型の土地割上に乗っていることから、水田遺構の畦畔は条里型の土地割に入る可能性がある。またこの条里型の土地割は同じ三原平野の国衙推定地周辺に見られる条里型の土地割と方角を異にしている。
- 16、検出された水田に伴う聚落跡は、調査地東方の微高地（現聚落あるところ）にあると見られる。昭和60・61年にかけて調査が実施された兩流遺跡では、微高地から古墳時代前期

の集落を検出したが、志知川沖田南遺跡とはやや時期差が見られる。

17. 志知川沖田南遺跡の調査以降、兵庫県下でも各所で水田跡の調査が実施されている。それらの遺跡に共通することは、やはり氾濫堆積物によって水田が埋没していることで、調査に際しては土層断面観察による水田面・水田畔の確認が有効な手段となっている。

本章は調査員である松下・水口・別府の検討をもとに、別冊がまとめたものである。

参考のため以下に兵庫県下における畦畔を有する水田跡の調査例を掲げる。

番号	遺跡名	所在地	時期	備考
1	志知川沖田南遺跡	三原郡西淡町松帆、志知川	弥生時代後期後半 ～古墳時代前期	本書
2	雨流遺跡	三原郡三原町大根列、西淡町松帆志知川	弥生時代前期？ ～中期 ～古墳時代	昭和61・62年に長崎県教育委員会が調査
3	本庄町遺跡	神戸市東灘区本庄村	弥生時代前期	「本庄町遺跡発掘調査報告書」財団法人古代学会編昭和60年
4	本庄町遺跡	神戸市東灘区本庄村	弥生時代後期 ～古墳時代初期	昭和61年に兵庫県教育委員会が調査
5	深江北町遺跡	神戸市東灘区深江北町	奈良時代	昭和59・60年に兵庫県教育委員会が調査
6	小路大町遺跡	神戸市東灘区本山南町	13世紀中期～16世紀 16世紀後半～18世紀前半	昭和61年に兵庫県教育委員会が調査 方形の条里型
7	玉津田中遺跡	神戸市西区玉津町田中	弥生時代中期初頭 ～中期中期 ～古墳時代	昭和57年から兵庫県教育委員会が調査中 「玉津田中遺跡概報」兵庫県教育委員会 昭和59年
8	村中遺跡	三田市相生町	弥生時代中期？	昭和60・61年に長崎県教育委員会が調査
9	福田片岡遺跡	龍野市若狭町福田	12世紀代	昭和59年に兵庫県教育委員会が調査 牛耕による犁跡と思われる。

なお、調査にあたっては、下記の方々の参加を得た。

浅井多英美、伊豆彰一、太田正康、藤山光、加藤環、河合葉子、下原繁雄、津野辺静、富山直人、中屋恵子、野原宏司、二葉滋、馬屋原洋子、三宅敦子、吉川啓子、和田早芳子、成田雅俊の援助を得た。

また、地理学からは高橋一学氏には終始参加を得た。ほか、青木哲哉、馬野一徹、前葉和子の協力を得た。

写 真 図 版



第IV区 上層水田



第IV区 上層水田



第4区 上層水田



第4区 水口をもつ水田



第三区 水田の小畦畔



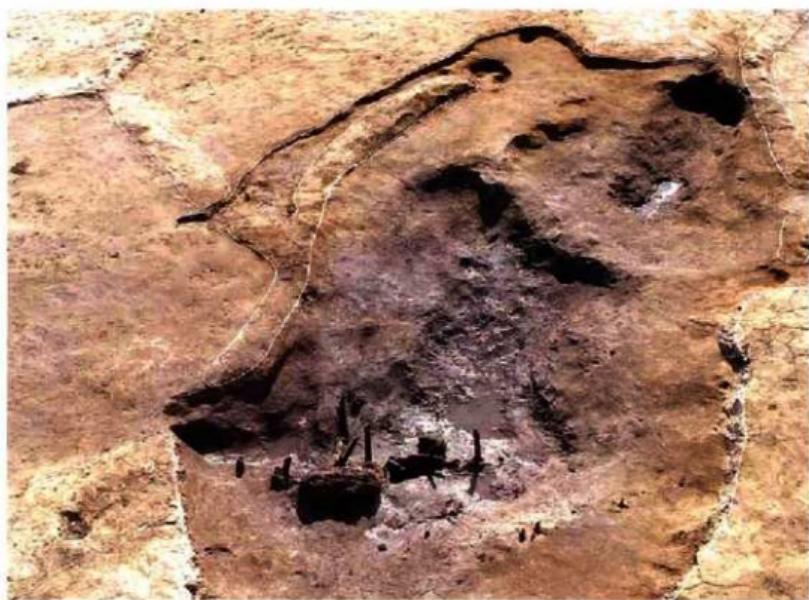
第三区 中・下層水田の小畦畔と足跡



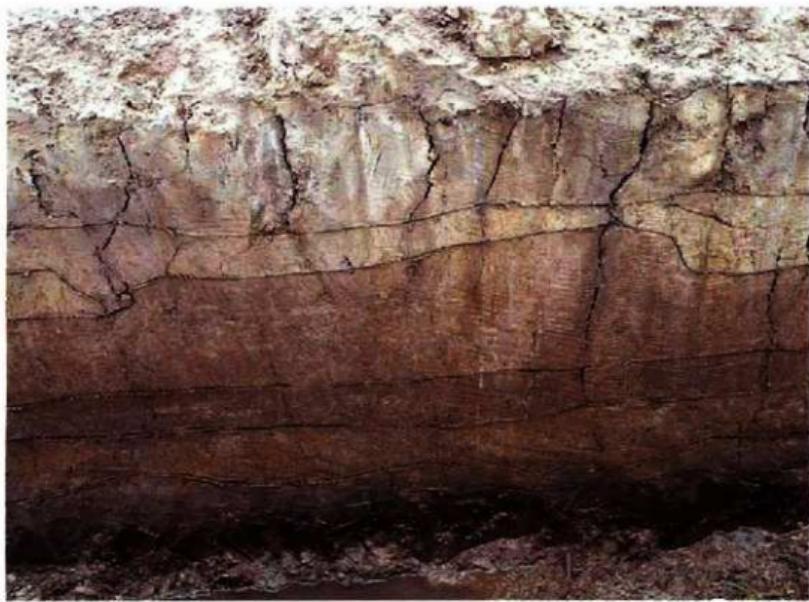
第Ⅲ区 中・下層水田足跡



第Ⅲ区 中・下層水田足跡



第四区 潜池状遺構



第四区 大粒砂土層断面

圖版一 中・下層水田全景





A地区 近景



B・C・D地区 近景



A-3 河道断面



A-23 土層断面



B-3 土層断面



B-21 土層断面



B-20 土層断面



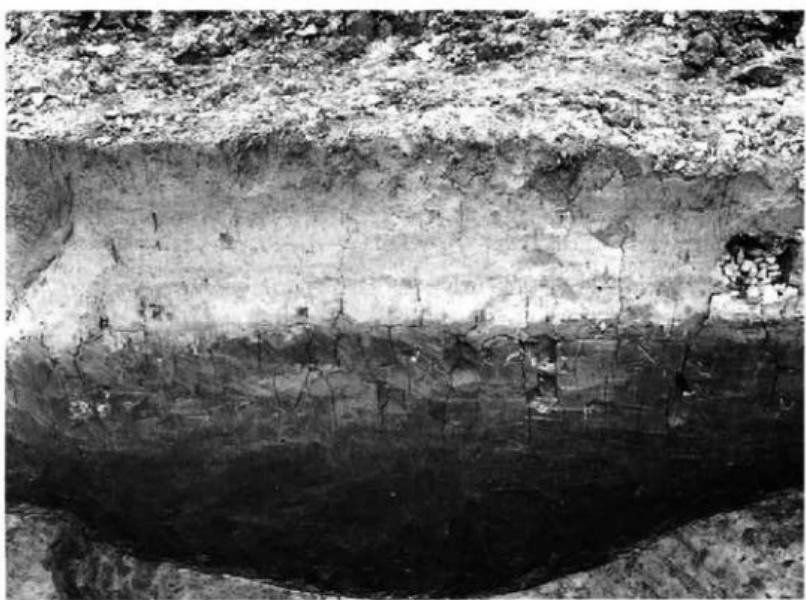
B-27 幼生時代前期 垂棺



B-14 断面



B-21 土器出土状態



C-2 土層断面



C-2 弥生時代前期 旧河道



第Ⅰ区



第Ⅱ区 中世溝



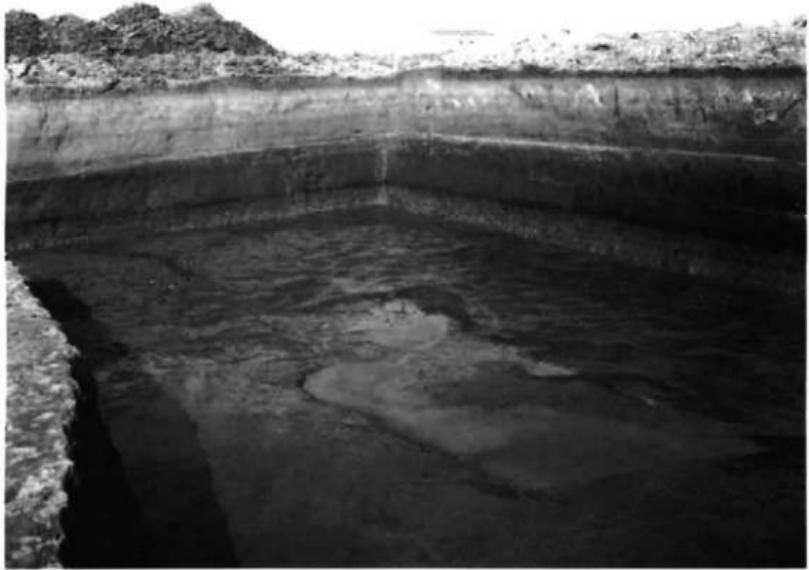
第II区 中世溝（東から）



第II区拡張区 旧河道内土器出土状況（東から）



第Ⅳ区 調査後全景（東から）



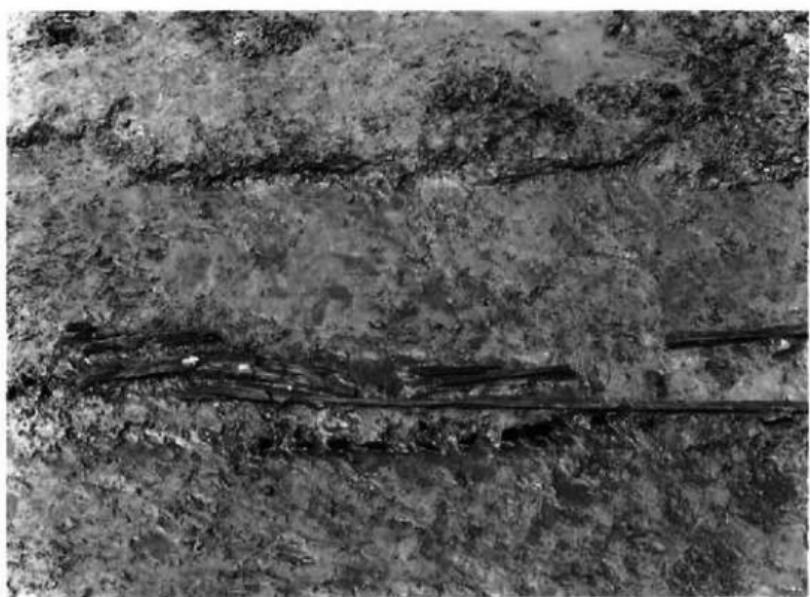
第Ⅳ区 東壁・北壁



第Ⅰ区 全景（南から）



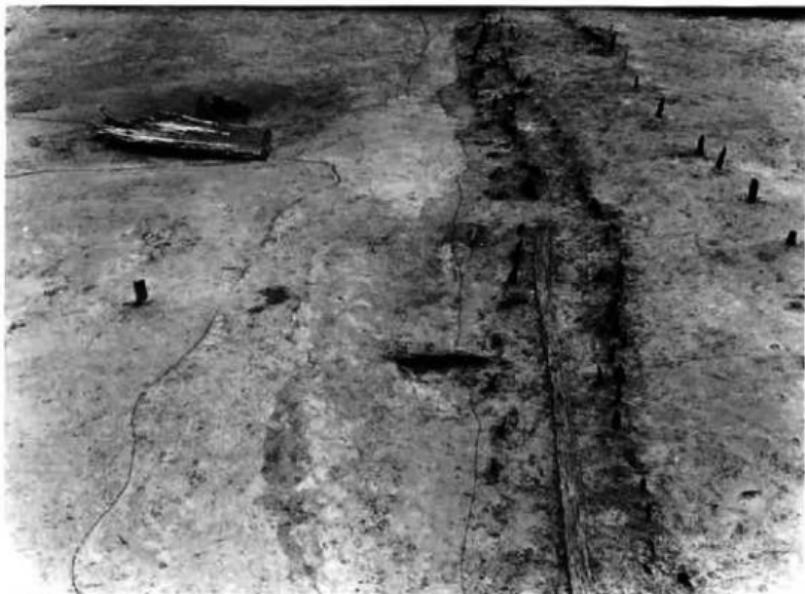
第Ⅰ区 東壁



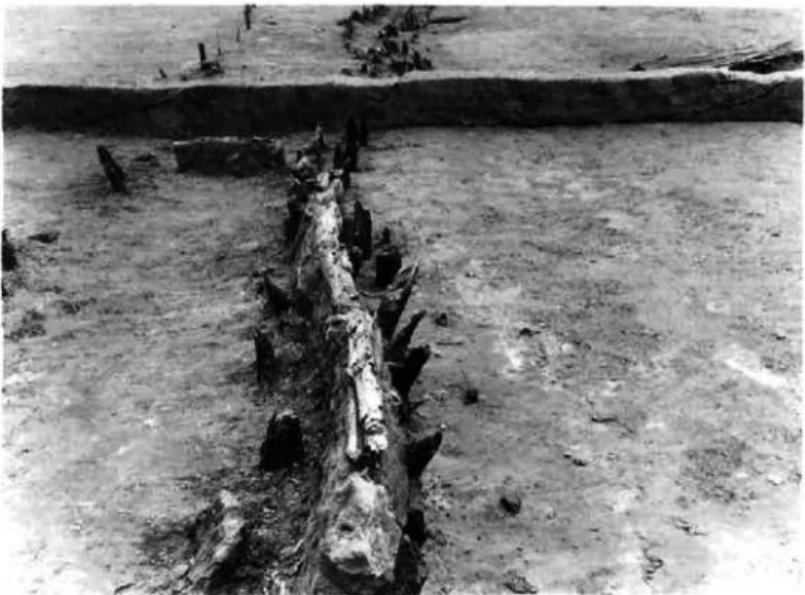
第1区 杖列出土状況



第1区 杖列出土状況（南から）



第IV区 杭列出土状況（西から）



第IV区 杭列出土状況（東から）



第四区 桁列出土状況〔西から〕



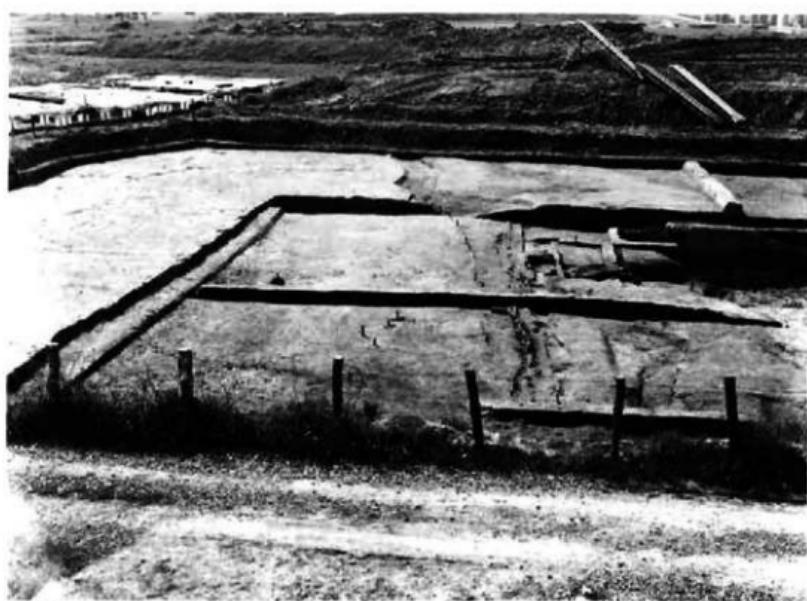
第四区 桁列出土状況〔東から〕



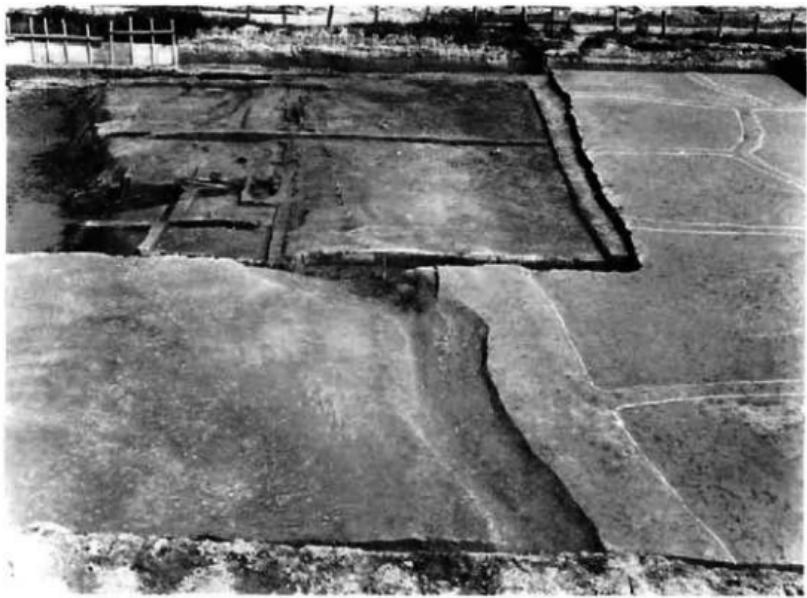
橋・杭列出土状況（北から）



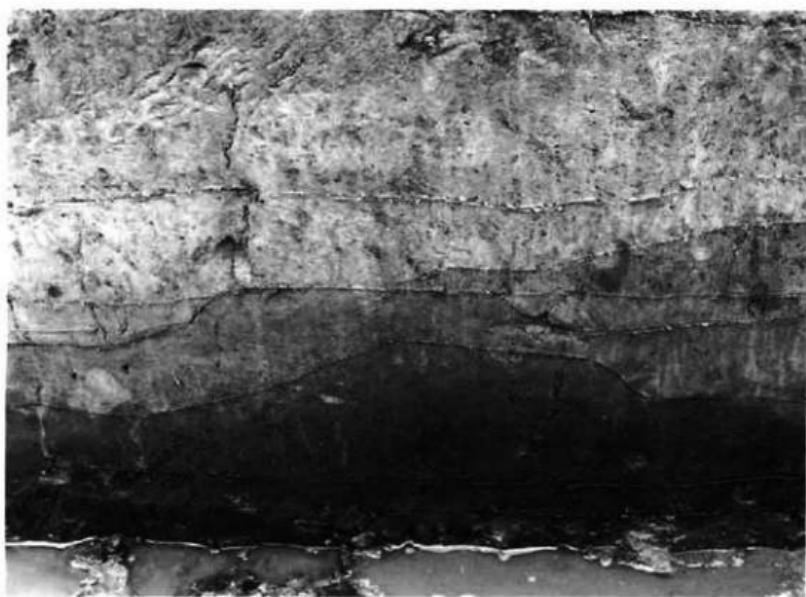
橋出土状況（南から）



第四区 全景（東から）



第四区 全景（西から）



第IV区 南侧大洼群



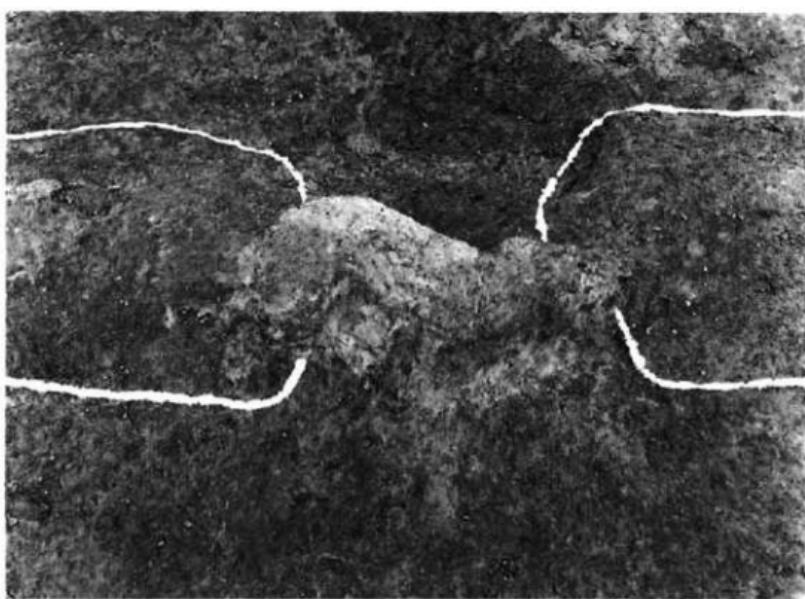
第IV区 中央大洼群



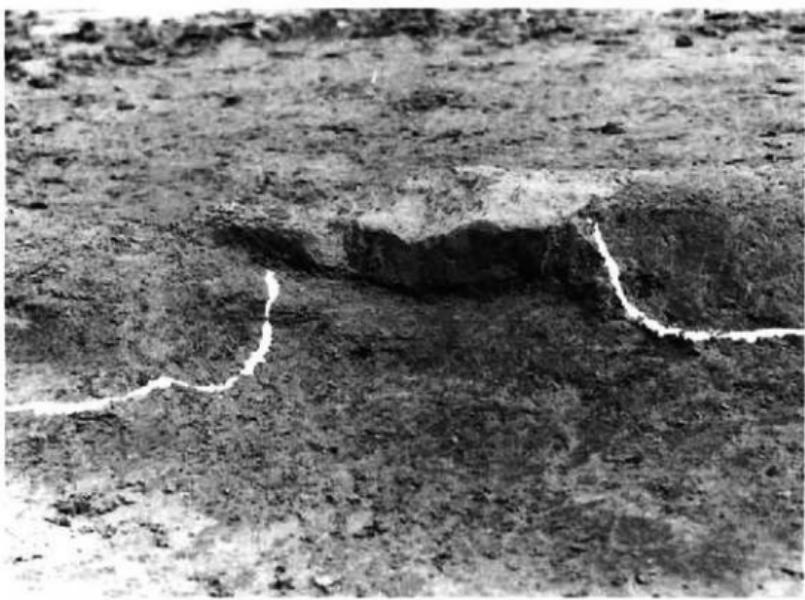
第7トレンチ（南から）



第1トレンチ（南から）



第四区 水口（西から）



第四区 水口（東から）



第三区 上層水田（東から）



第三区 上層水田（西から）



第Ⅲ区 上層水田（西から）



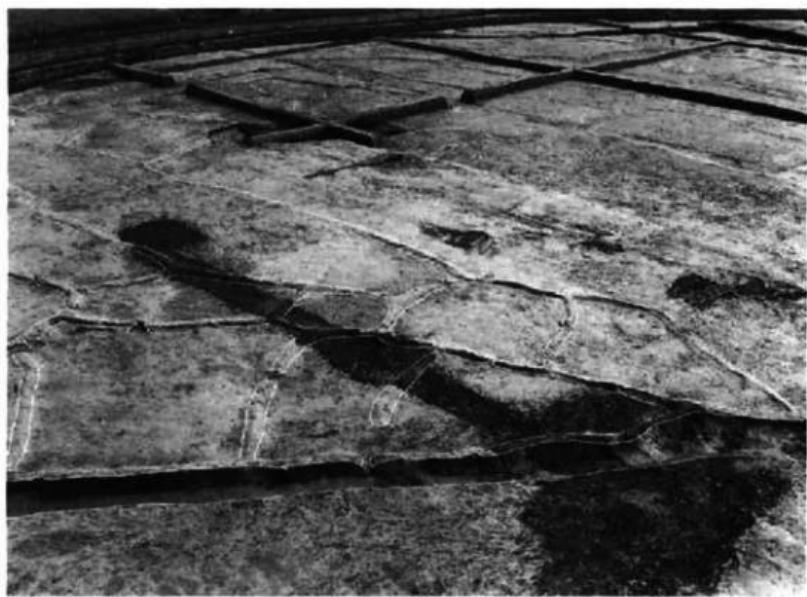
第Ⅲ区 上層水田（東から）



第三区 上層水田（南から）



第三区 上層水田（北から）



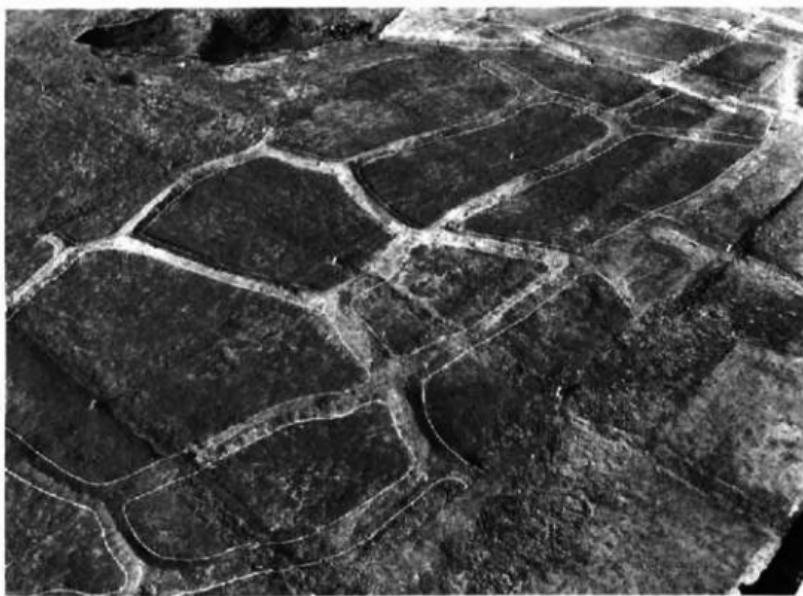
第Ⅲ区 上層水田（北から）



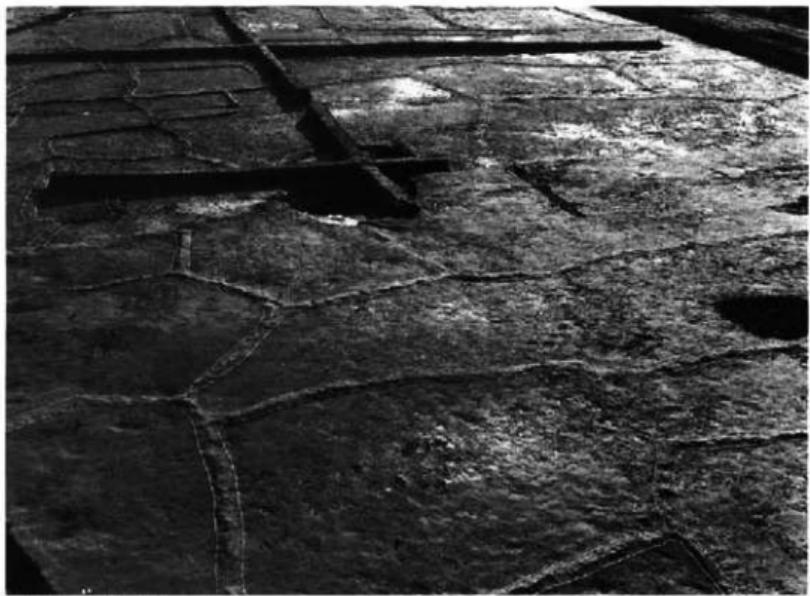
第Ⅲ区 上層水田（南から）



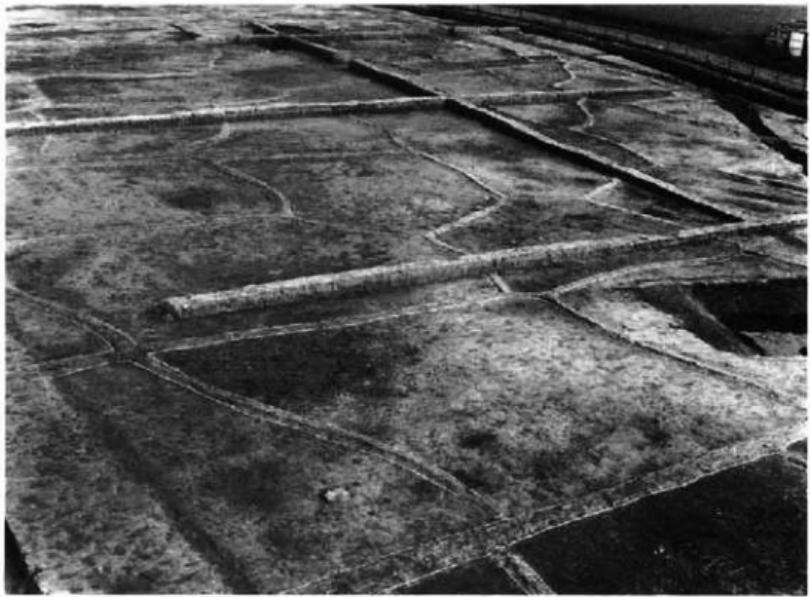
第田区 上層水田〔北から〕



第田区 上層水田〔東から〕



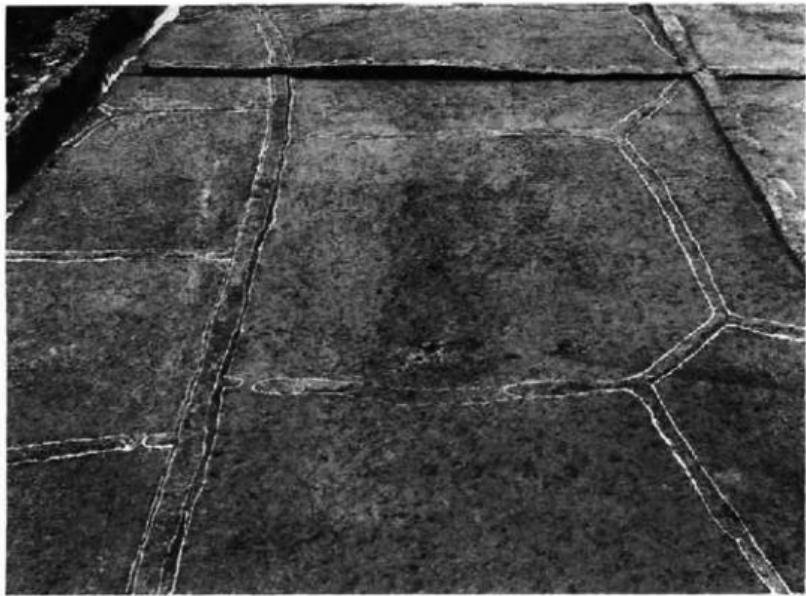
第Ⅲ区 上層水田〔北から〕



第Ⅲ区 上層水田〔南から〕



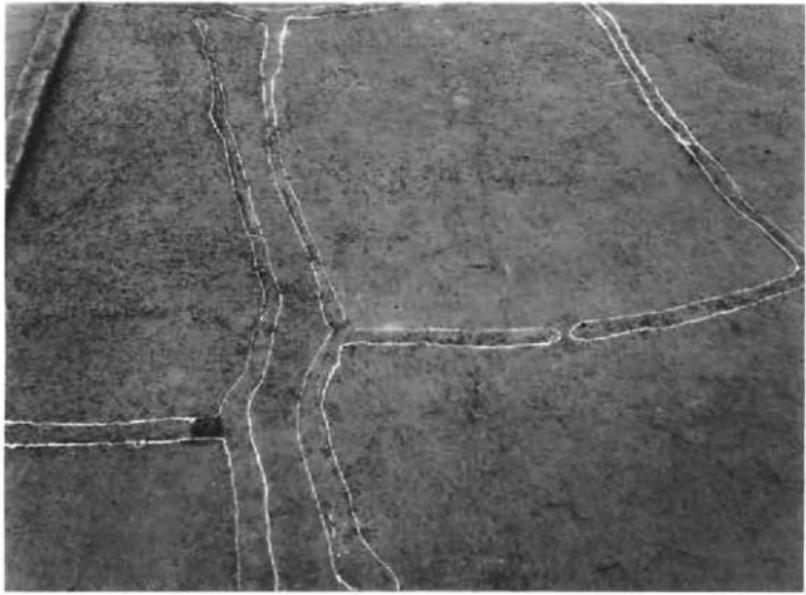
第IV区 上層水田（東から）



第IV区 上層水田（東から）



第Ⅳ区 上層水田（西から）



第Ⅳ区 上層水田（東から）



第N区 上層水田（南から）



第N区 上層水田（西から）



第Ⅳ区 上層水田（東から）



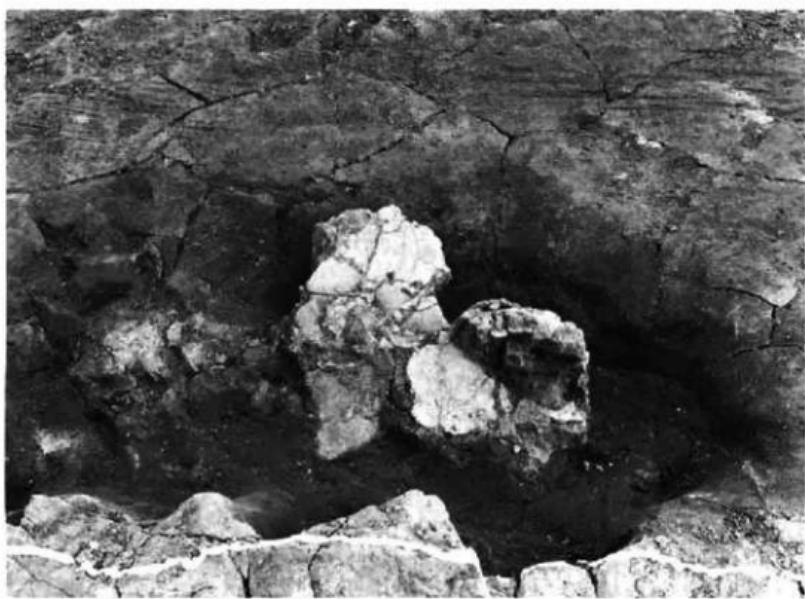
第Ⅳ区 上層水田（南から）



第Ⅲ区 上層水田（南から）



第Ⅲ区 上層水田（西から）



第三区 南側大埴輪土器出土状況（南から）



第三区 中央大埴輪土器出土状況（南から）



第三区 中・下層水田（南から）



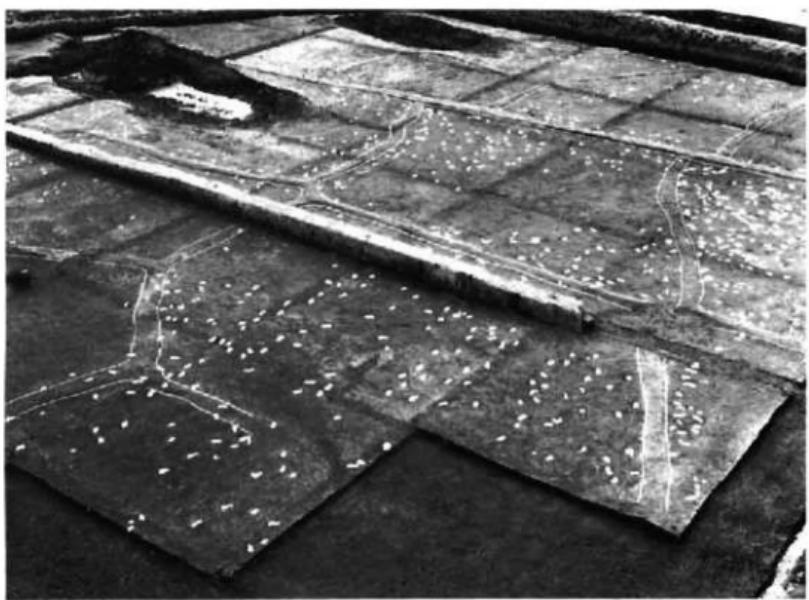
第三区 中・下層水田（北から）



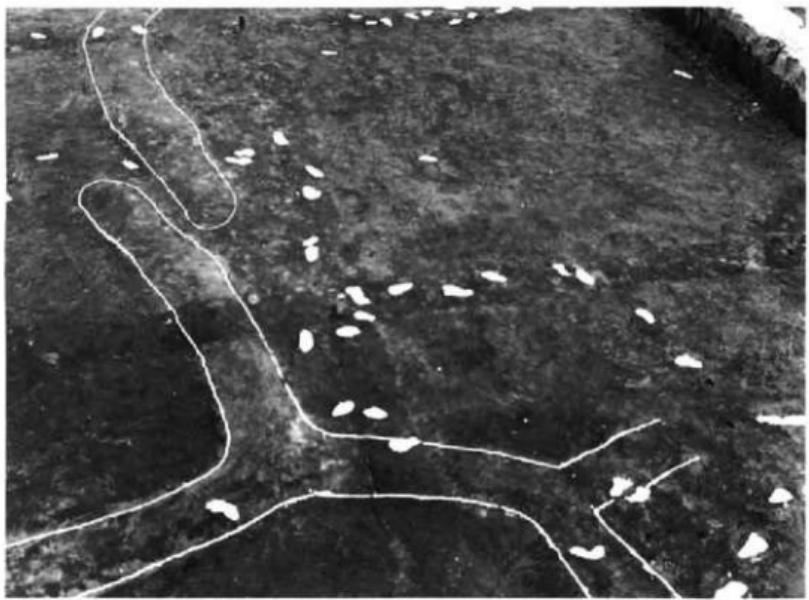
第三区 中・下層水田（西から）



第三区 中・下層水田（南から）



第三区 中・下層水田（北から）



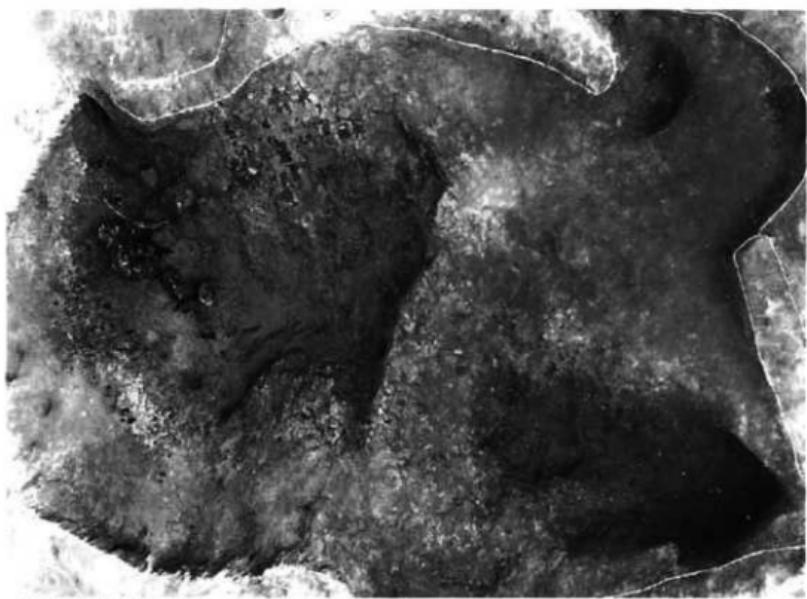
第三区 中・下層水田（西から）



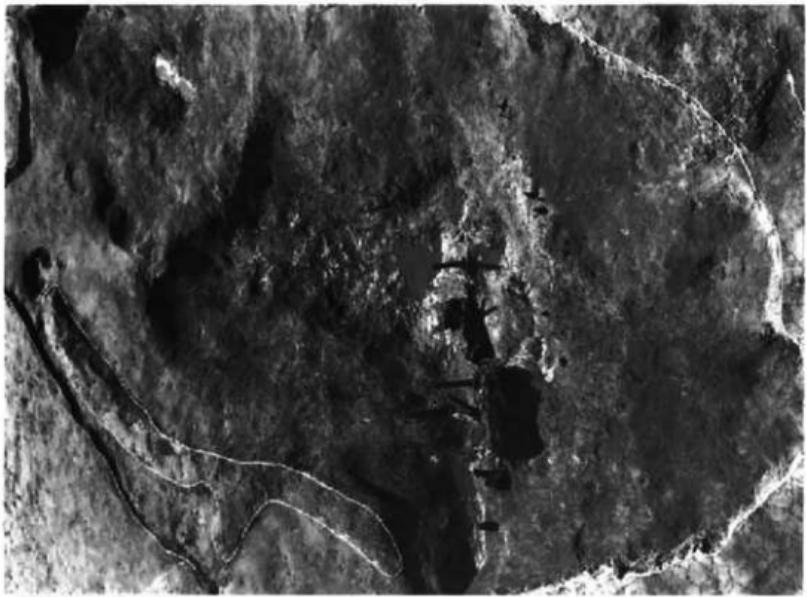
湿池状構造（北から）



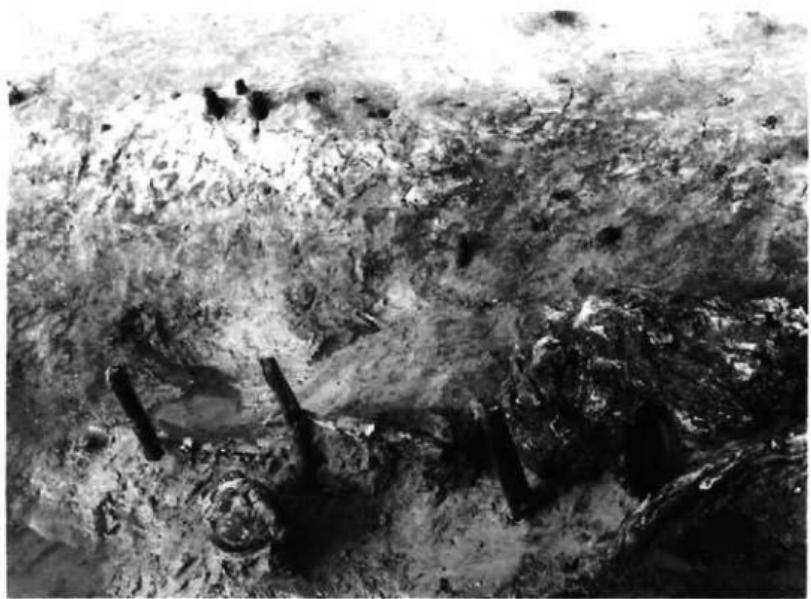
湿池状構造（東から）



溜池状遺構（南から）



溜池状遺構（北から）



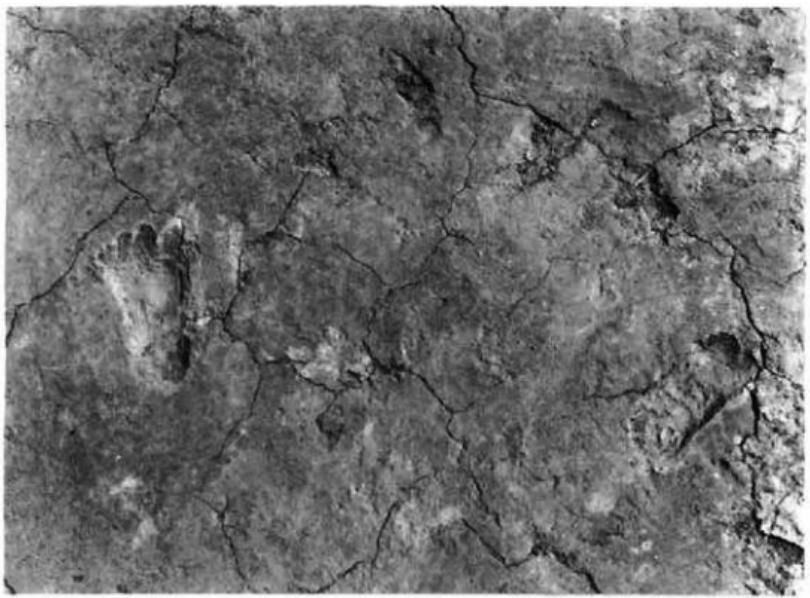
溜池状遺構（南から）



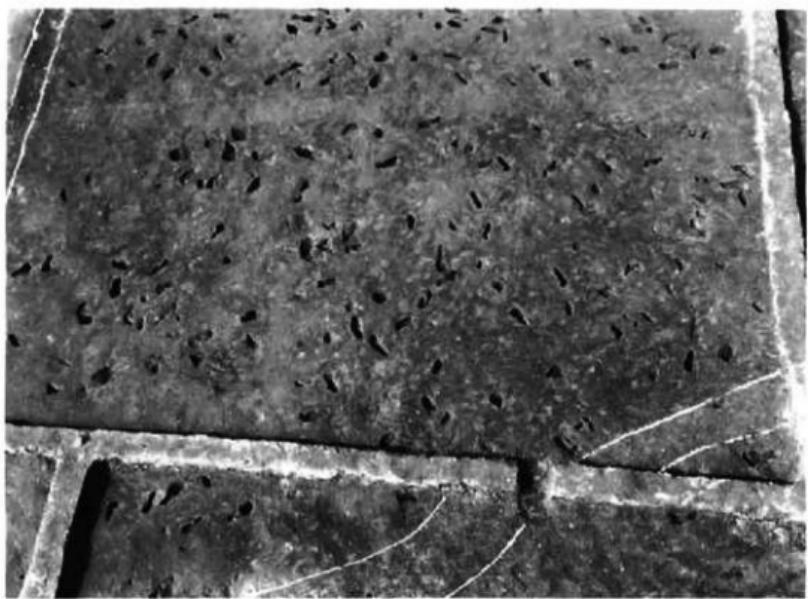
溜池状遺構（西から）



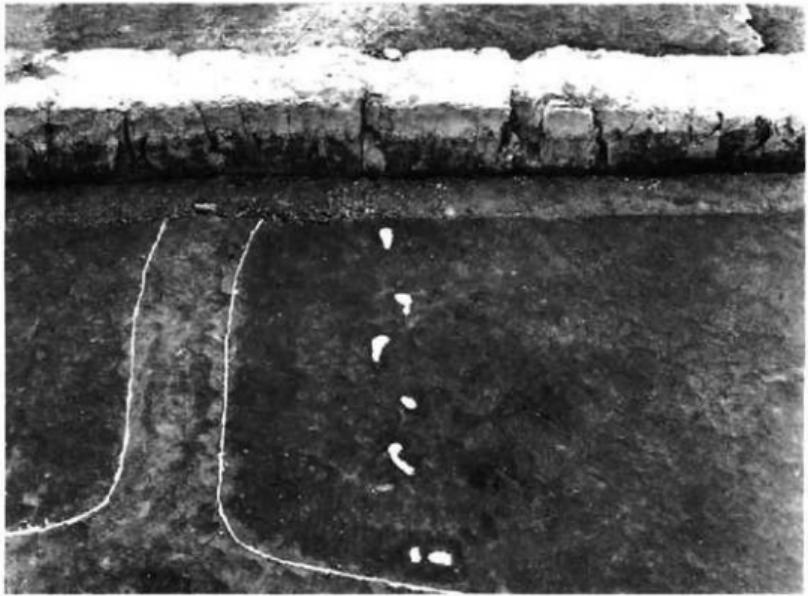
第四区 上层水田（足跡）



第四区 上层水田（足跡）



第三区 中・下層水田〔足跡〕(東から)



第四区 中・下層水田〔足跡〕(西から)



1



2

圖版四一 土器2



3



8



9



10



14



13



15



16



21



17



18



19



22



24



121



122



123



124



125



126



97



98



99



100



101



102



103



104



105



106



107



108



109



110



111



112



142



145



116



115



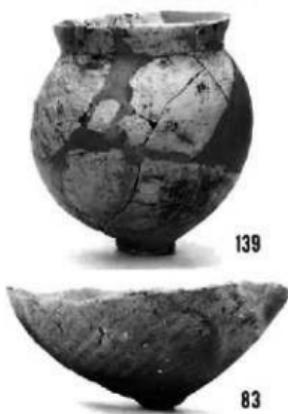
30



131



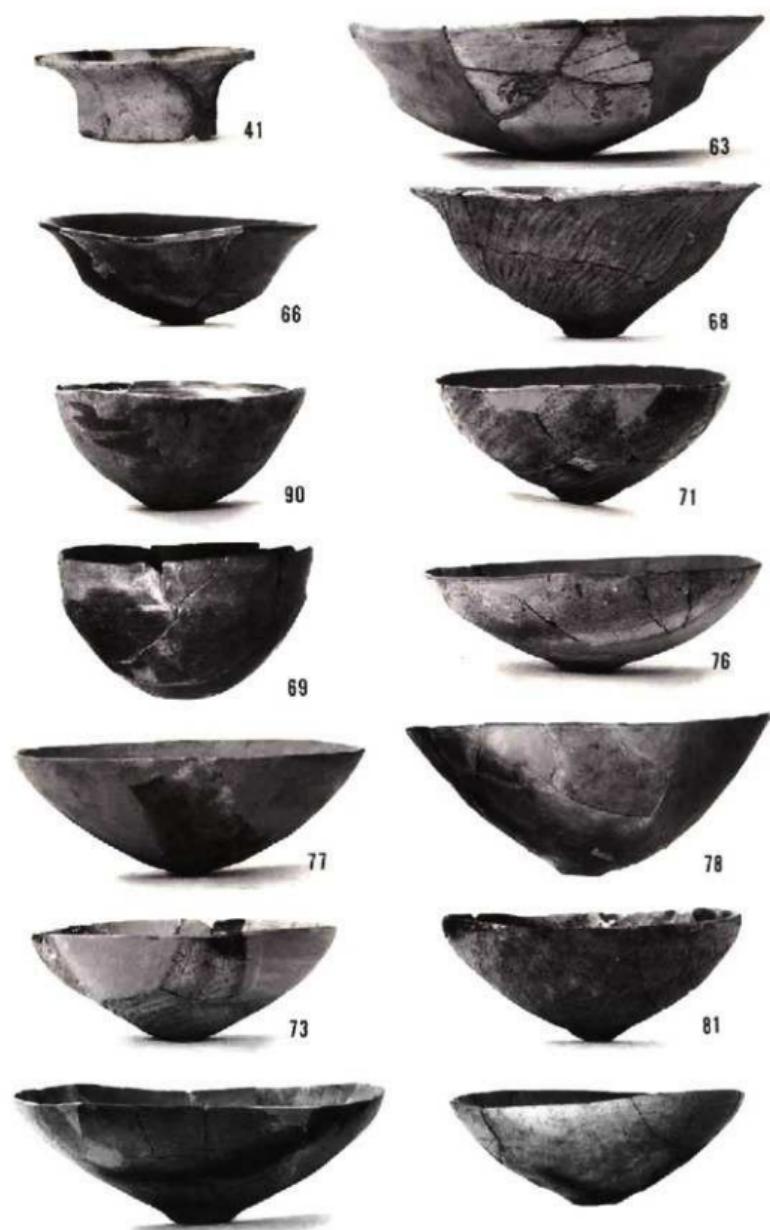
31

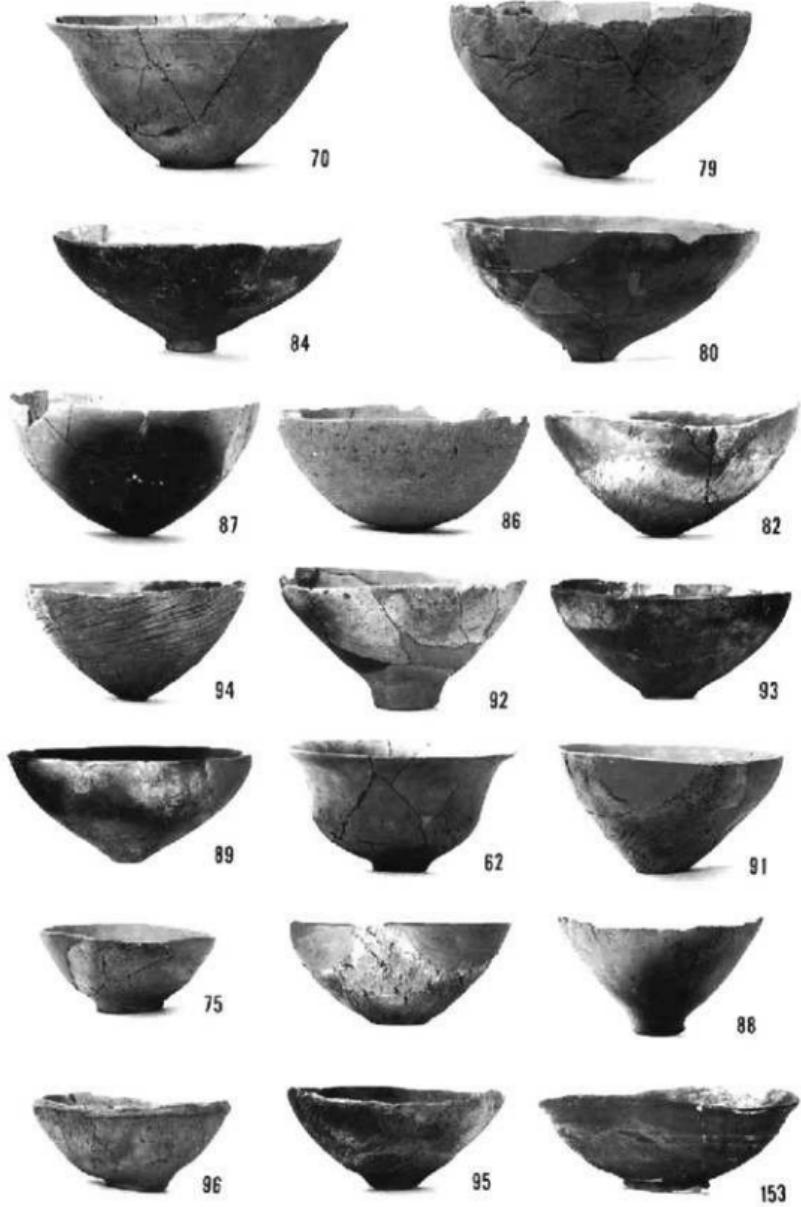


83

139







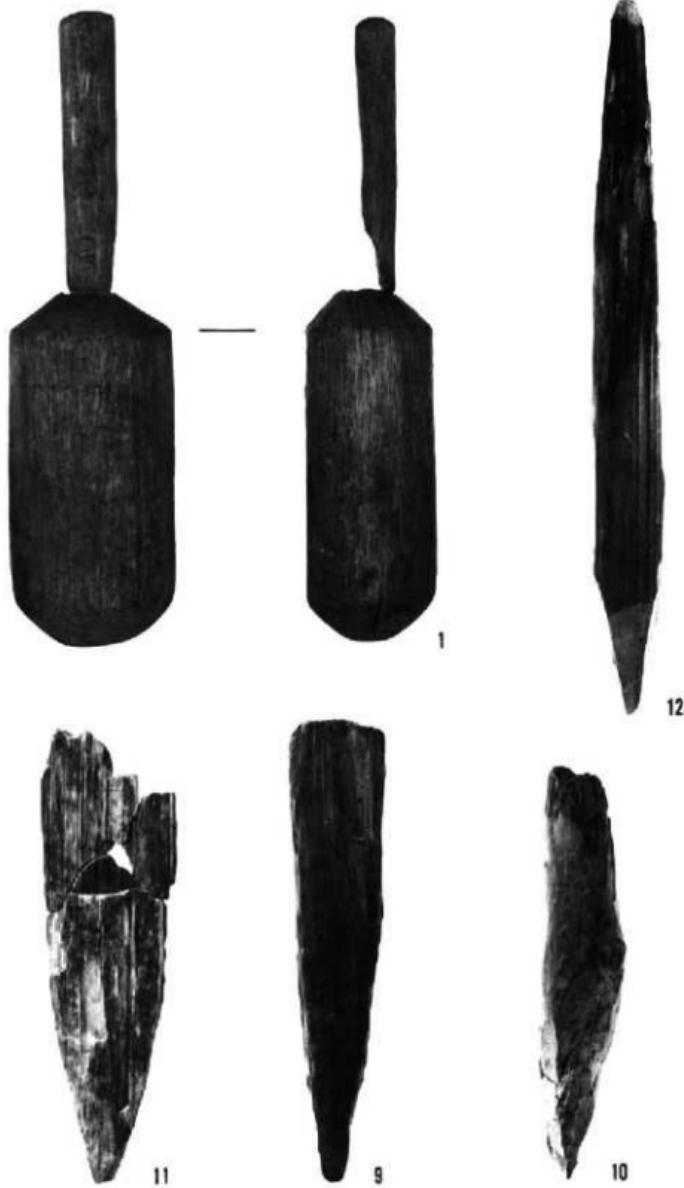


2



5

圖版五二 木器2



圖版五三 木器 3



6



3



—



7

し ち が わ お き た み な み
淡 路・志 知 川 沖 田 南 遺 蹟

兵庫県文化財調査報告 第40冊

昭和62年3月31日発行

発 行 兵 庫 県 教 育 委 員 会
神戸市中央区下山手通5丁目10-1
〒650 TEL 神戸(078) 341-7711

編 集 兵庫県教育委員会社会教育・文化財課
兵庫県埋蔵文化財調査事務所
神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5
〒652 TEL 神戸(078) 531-7011

印 刷 水 山 庄 業 株 式 会 社
神戸市长田区二番町3丁目4-1
〒653 TEL 神戸(078) 576-3164
